

まぼろしの最終講義

上野 誠



上野誠先生の還暦を祝う会

上野誠ゼミナールまほろば会

編

まぼろしの最終講義

学ぶ・教える・考える

ことば・ことば・ことば

朝倉、博多ぶらぶら

母と私と

本について

奈良、発見

自選自注年譜

記録——論文・著書・寄稿等一覧

万葉オペラ「風の森、風の饗宴」

まぼろしの最終講義

上野 誠



最終講義——。

定年退職を迎える教授が、その蘊蓄を垂れる日。

そこには、教員それぞれの美学、学識、人間性のすべてが表れる。粹でいなせに見えて下品な人もいれば、華々しくやっても上品な人もいる。それは、自画像のごときものだ。私は、あれこれと考えながら、最終講義を自己プロデュースするつもりでいたのだが……。

まぼろしの最終講義

学ぶ・教える・考える

ことば・ことば・ことば

朝倉、博多ぶらぶら

母と私と

本について

奈良、発見

自選自注年譜

記録——論文・著書・寄稿等一覧

万葉オペラ「風の森、風の饗宴」

が、しかし。二〇二一年春。

コロナ禍は収まる気配もない。
結局、最終講義はまぼろしに終
わってしまった。ところがであ
る。なんと、ゼミナールの卒業
生たちは、せっせと著作目録を
作っていたのだ。

そこで私は、紙上で最終講義
をすることとして、著作目録の
入った一書をものすることにし
た。題して、『まぼろしの最終
講義』という。

まぼろしの最終講義

『まぼろしの最終講義』刊行の辞

上野誠先生の還暦を祝う会一同
上野誠ゼミナールまぼろば会一同

今から三年前のこと。私たち奈良大学卒業生有志は、先生ご苦心の論文集『万葉文化論』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）ご出版を祝う会を催しました。じつに、ささやかな会を催したのですが、その折、先生の還暦を祝う論文集と記念講演会、さらに祝宴の計画を打ち明けました。もう、それは、先生のご性格からして、予想されていたことだったのですが、先生は即座に、

今どき、還暦の祝いなんて……。そんなものダメです。いけません。困ります。

と固辞されました。私どもは、先生のご気性をよく存じ上げておりますので、驚きませんでした。が、それから、有志で先生の著作目録稿の準備を密かに進めてまいりました。また、年譜を作る

ためのカードも作りはじめました。そうして、一昨年の忘年会の折に、

- a 先生の著作目録稿、
- b 先生の年譜目録稿、
- c 単行本未収録の著作のコピー、

を先生にお見せしました。すると先生は、突然、笑い出されて、いつものやさしいけれども、やや皮肉っぽい言い方で、

君たち、これを、俺の葬式の時に配るつもりかあ。俺を殺してどうする。若い愛人でもこれから作ろうと思ってる矢先なのに――。

と言われました。その後、先生は、a b cをため息をつきながら、十分ほど眺められていたと思います。そうして、こう言われました。

じゃあ、いつそ殺されてみるかあ……。まあ、よく集めたなあ、恥ずかしいけど、嬉しいよ。

とおっしゃいました。しかし、還暦記念論文集と講演会、祝宴については、とうとう最後まで、お許しになりませんでした。そこで、私たちは、先生のご機嫌のよい折に、令和三年（二〇二一）一月の最後の授業を、卒業生や有志が授業を勝手に聴講する、祝宴は手作りの豚汁とぜんざいの

みにするので、お許しくださいとお願ひ申し上げました。先生は、しばらくの沈黙の後、それから、俺も皆で豚汁とぜんざい作るかねえ、と同意してくださいました。ただし、還暦の記念出版については、どうしてもご許可になりませんでした。先生も、豚汁とぜんざいの祝宴を楽しみにしておられたのですが……。

ところが、事態は急変、コロナ禍の猛威は、いっこうに止む気配がありません。そんな折、世話人たちに、先生は電話でこう話されました。「豚汁とぜんざいは、コロナでダメになったが、六十歳を機に奈良大学を円満退職し、國學院大學に移籍することになったので、君たちの予稿に私が手を入れて、退職記念の本を作ろう」と話されました。そうして、

a' 著作目録

b' 自選年譜

c' 未収録のエッセイ集

から成るこの本が出版されることになったのです。先生は、電話先で世話人たちに次のように話されました。

こんな時だからこそ、「バァー」とやろうか。「まぼろしの最終講義」だからなあ……。この本で、生前葬だね。

以上が、この本の出版の経緯でございます。

本年から十年間は、東京と奈良とを往復する生活となれるとお聞きました。先生は、先生のご健康を祈念申し上げたく存じます。

最終講義と豚汁、ぜんざい、まぼろしになりましたが――。

令和三年（二〇二二）三月末日

まぼろしの最終講義 ● 目次

まぼろしの最終講義 13

学ぶ・教える・考える 31

こしかた、ゆくすえ
最初から尾籠な話ですが……

やさしいが、こわい先生
「値うち」と「おつり」と

四十年のご無沙汰
尊きもの

白川静博士と『万葉集』
試験地獄・無限地獄

古典学習今昔物語
万葉びとの生き方

我迷うゆえに、我あり
学生の学力低下などない

お粗末な抱負
大宰府政庁復原の初夢

宮中歌会始陪聴記
改元一年の「令和」

32

38

43

45

47

49

50

54

57

62

64

69

70

72

74

75

みじかすぎるうた

76

ことば・ことば・ことば 99

粹な人

見るということ

心をつなぐということ

弱さを知る

「思い入れ」と「思い込み」

100

102

104

106

108

朝倉、博多ぶらぶら 113

あまい話、せつない話

お金が阿弥陀に光ります

腰田低男氏の人生

ゼノ・ゼブロフスキー修道士のこと

スリーAの上野

教会で七五三

宴の終わる時―

114

117

120

124

128

131

132

母と私と 135

博多、母、そして『万葉集』

母の教え、一九七〇年、博多

136

137

筑紫万葉恋ひごころ
母の俳句 143 139

本について 145

忘恩の記 146

岩波『文学』休刊に寄せて 147

『臨済録』を読む 148

山上憶良の問いからの三冊 149

日本型資本主義 153

万葉学徒のフランス文学レポート 154

人生のベストテン 156

パリの豆スープ、スーダン風 157

ただ今、論争中！ 158

日本人の聖地観 160

安倍仲麻呂と王維の学力 166

禁断の読書指導 167

奈良、発見 171

奈良有情 172

大津皇子と磐余池、風景の記憶 182

正倉院と万葉集、そして今 184

谷崎潤一郎先生の柿の葉寿司談義 187

東アジアへ、オペラ発信 191

悠久の時を生きる 193

謡曲〈野守〉と奈良 196

自選自注年譜 211

記録 235

主要論文集目次・初出一覧 236

単行本未収録論文および短報一覧 254

著書・CDソフト一覧 256

翻訳された書籍・論文 260

新聞・雑誌取材インタビュー記事、座談会記録など 262

放送関係 シリーズ出演 272

新聞・雑誌・パンフレット連載記事 275

新聞・雑誌・パンフレット寄稿記事 276

原作・脚本を担当したオペラ、朗読劇の上演実績 296

万葉オペラ「風の森、風の饗宴」 原作・脚本 上野誠 301

謝辞となるあとがき 318

まぼろしの最終講義

私は、東京では偽、東京弁で講義をし、関西においては偽、関西弁で講義をしてきた。本書では、博多弁の講義にしてみた。

はじめに

あのねえ。

だいたい、最終講義なんちゅうもんはね、退職する先生がね、自分の自慢話をしてね、偉そうに、学生諸君に説教するもんだいね。ほんなこつ、くだらんもんばい。だいたいね。偉そうに言う学者ほど、ダメ学者ばい。ああたたちあ、そげな馬鹿げた最終講義により来なさったなあ。表向きはよ、自分は非才な者でとか、なんとか卑下するけれど、最後まで聞けば、自慢話になるとよ、最終講義ちゅうもんは——。馬鹿馬鹿しくもんだいなあ。だけんよ、この場で、私の女性不倫問題でも暴露したほうが、君らも楽しかるう。どげんね（笑）。

だか、そうもゆくまいたいねえ。奈良大学にゃあ、二十九年も、世話になつとるとやけんね。教授としての品性を保たねばならんけん。そんなこんなで、いろいろ考えたわけじゃあるが、こはひとつ思いつきり、自慢話でんしてくき、嫌みな嫌みな最終講義にしよう、と思うとるとよ。やからね。偉そうに話すばい。もう、ここからは、大先生のごと話すばい。

学生諸君からの「リクエスト」は、過去五十年の万葉研究を鳥瞰せよとのことであるけれど、そんな力は私に残つとるはずもなかるうが。と、と、と、ところがたい。おりやさ、二十年前に、「万葉研究の現状と研究戦略―筆者が選んだ選択肢―」（『日本文学』第四十九巻第一号、日本文学協会、二〇〇〇年）という論文を公にしとるとよ。偉そうに、書いたもんだいね。

そこで、今日は、その論文を書いてからのちの、回顧なり、展望なりを述べて、最終講義としようと思つとります。私はね、その論文で細分化する研究状況に対応しつつ、歴史学、考古学、民俗学の学知の応用をさらに加速させ、文学から文化領域へと万葉研究を広げるべきことを提案しています。つまり、研究が細かくなつて、深くなるのはよいが、広がりがないということを批判したとよ。それでは、いかんといったわけよ。まあ、威勢よくね。そして、「万葉文化論」のごときものを自らは志向したい、と言挙げしたわけたいね。偉そうに。とにかく、偉そうにね。だからよ、とにかくにも、帳尻合わせに一昨年にこの二十年の論考を拙著『万葉文化論』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）にまとめて上梓したわけだ。今、各誌の書評も出そろいつつあって、厳しい批判も受けているところたいね。

わたしやあね、残念なことに有力な研究者にはなれなかったが、この二十年間、学会の運営にも携わり、時として共同研究やシンポジウムの運営者にもなつてきたよ。ちゅうことは、万葉研究について、応分の責任がないとは、いえんよ。それなりの責任はあるたいね。だから、これから、私自身の研究の今を申し述べて、文学研究を文化研究に広げてゆく方法の是非や、その楽しさや難しさをみんなに問いたい、と思うとります。ただしね、総論ではいかんので、各論でゆきます。やっぱしね、万葉研究は各論でいかんと——。やっぱね、歌から離れたところに、万葉研究はありません。

ということはね、虫の眼を通して語る万葉研究の今ということになるたいね。

一、『万葉集』巻七の二二三〇番歌から

ちはやぶる 金の岬を 過ぎぬとも 我は忘れじ 志賀の皇神

(巻七の二二三〇)

という歌が、巻七「羈旅作」にあります。まあ、訳せば、「恐ろしい金の岬をたとえ過ぎたとしても、私はけっして忘れない。志賀の皇神のことは——」となるうたい。その本文や解釈に揺れはなかよ。「ちはやぶる」は、神に係る枕詞だけれども、ここは地名に係つとるよね。そこが、きわめて重要です。それは、その土地、ここでは「金の岬」の神が意識されているからですよ。なぜならば、地名には、その土地の神を想起させる機能もあるけんね。このあたりについてはよ、奈良大学の諸君には、国文学史Ⅰで教えたところたいね。もちろん、それとてよ文脈上、生じるものだけれども。

一方ね、この歌で、歌い手が加護を求めているのは、金の岬の神ではなく、「志賀の皇神」たいね。それにやあ、充分に注意を払うべきである、と思います。金の岬は、現在の福岡県宗像市の鐘崎たいね。対する志賀は、福岡市東区の志賀島。鐘崎には、式内織幡神社があり、志賀島には同じく式内志賀海神社があるよね。では、この二社の存在は、いつまで遡るか？ 確実に平安時代にまで遡ります。

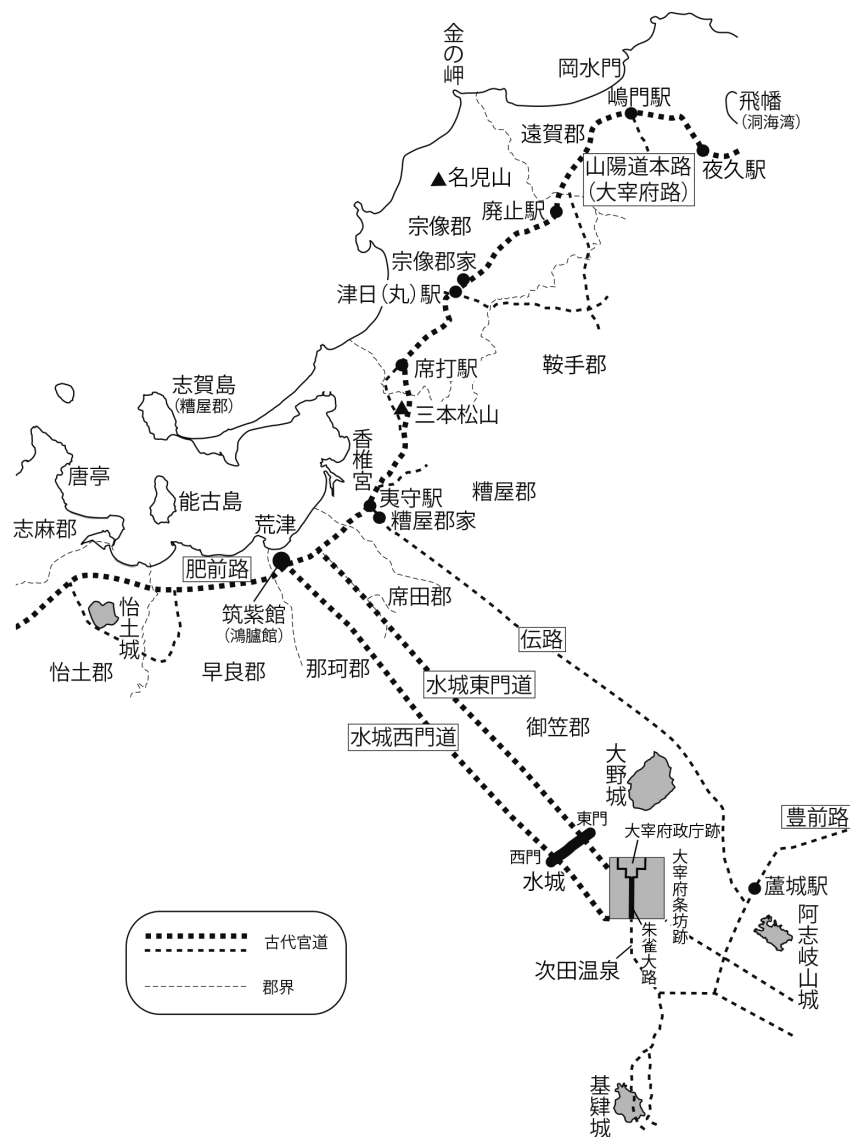


図1 大宰府・水城・筑紫館・志賀島・金の岬位置関係図（小鹿野亮先生作成）

けれども、この歌で想起されているのは、特定の神社の祭神というよりも、地名によって表象されるその土地の神くらいに考えておいた方がよい——。そう考えた方がよか。もちろん、かつて海人の統括者であった阿曇氏が斎祀する神であることも重要で、志賀の皇神の力がなくては、金の岬を通過することが不可能であると歌い手が考えていたことは間違いないね。それほどまでに、金の岬を通過する不安は大きく、それほどまでに志賀の皇神に対する敬意は深かったわけだ。そう考えることには、この歌は、わかりません。

「とも」はね、渡瀬昌忠先生の『万葉集全注』が述べているように、既定の事実を条件とする逆接表現よね。そこから「たとえ通り過ぎることができたとしても、その後においても、私は志賀の皇神のことは忘れない」という意味合いが生じてくる。つまり、自分以外の人ならば、金の岬を通過してしまえば忘れるかもしれないが、私だけは違う、と言いたいわけよ。この歌の表現者は。以上がね、解釈の基礎の基礎。ここから、ちよつとばかり難しくなるばい。

二、土地の神の支配領域

どんな土地であつてもよ、通過してしまえば通過点の一つになってしまうたいね。二つだけ例を挙げれば、

玉藻刈る 敏馬を過ぎて 夏草の 野島の崎に 船近付きぬ

(巻三の二五〇)

佐保過ぎて 奈良の手向に 置く幣は 妹を目離れず 相見しめとそ

(巻三の三〇〇)

などがあります。この二つの歌の「敏馬」と「佐保」は、通過点として表現されているだろがある。対して、歌中でとりたてて問題とされるのは「野島の崎」と「奈良」の方たいね。巻八の一四二八番歌も同じだし、『日本書紀』影媛葬送歌(九四)も同じばい。こういった表現がすでに存在していることを念頭に置いて、「過ぎぬとも」と、自らの志賀の皇神への思いの深さを表現しておることを、見逃したらいかん。

つまり、一二三〇番歌の力点は、志賀の皇神に対する思いの深さの方にあるわけだ。旅中であつて、出発地や、すでに通過した土地への愛着を歌う例としてはね、いわゆる三輪山惜別歌(巻一の二七、一八)や平城遷都途上歌(巻一の七八)などの例があるよな。前者では「三輪山」、後者では「飛鳥の里」への愛惜の念が返り見を通じて表現されているやろ。ここいらは、奈良大学で上野の講読と演習の授業を受けたもんはわかつとるはず。わからんもんは、そりゃ落第たい。

では、一二三〇番歌の表現が成り立つのはどんな時場においてなのか。次のように整理してみます。こう考えたらどうやろか。

- A 旅の準備や予餞宴、出発時の送別宴など
- B 金の岬の通過以前
- C 金の岬の通過中
- D 金の岬の通過後

一二三〇番歌の表現が成り立つのはよ、ABCの段階たいね。Dとなると成り立たん。ちなみに、博多湾の那の津からの航路を想定すると、Bの段階で志賀島を通過することとなるたいね。志賀島も一つの難所であり、難所であるがゆえに、海人の協力も必要な場所であったことは、大家たちがすでに論じ尽くしているところです。

志賀の海人と宗像の海人が舵師（船長、船員）として、北部九州の海上交通を荷っていたことは、卷十六の「筑前国の志賀の白水郎の歌」の左注に明らかたいね（三八六九）。志賀の荒雄の悲劇は、最初に舵取りとして指名を受けた宗像郡の宗形部津麻呂が、危険な対馬への食糧輸送を、お人好しの荒雄に持ち掛けたことからはじまるよね。津屋（粕屋）郡の志賀の海人と宗像郡の海人とは、時に競争、時に協力して海上交通を荷っていたんだらうと思われまふ。

こう考えてみると、宗像郡の金の岬を通過する時には、一般的には宗像郡の海人が斎祀する金の岬の神を意識するのが普通じゃあなからうか。たとえば、峠を通過する時には、その峠の神に手向けをするはずたいね（卷二十の四四〇二）。

つまり、一二三〇番歌は、「宗像の神の領域に入って金の岬を無事通れたとしても、私は志賀の皇神への感謝の念を忘れない」というように読解するべきだと思うが、諸君はどう思うね？とすれば、ABCのいずれかの段階で、歌い手は、志賀の皇神に金の岬の無事通過を祈り、宗像の海人の祀る金の岬を目指しているわけだ。しかも、沖から陸に眼を転ずると、金の岬より西は、宗像郡、東は遠賀郡となる。つまり、宗像郡すらも、通り過ぎてしまいうわけたいね。

三、解釈のわかれ目、反論と再反論

けれども、以上の私説については、当然、賛否が分かれると思う。皆のなかにも、反論したいもんが、この教室にもおろうが。この解釈を否とする側は、歌に記されていない外部の情報を解釈に持ち込むべきではない、というやろね。登場しない宗像の海人の祀る金の岬の神を解釈に注入するのは不当だ、と反論してくるはず。

が、しかし。私は、金の岬を過ぎたとしてもという表現は、金の岬の通過を支配する神が意識されないとは出てこないし、実際に「志賀の皇神」に対して「ちはやぶる金の岬」と対比表現されているのではないか、と再反論するたい——。論文を書く時は、常に反論を予想しなくてはいいかん。だから、再反論も用意しておかないかんばい。論文ちゅうもんはね、その弱点にこそ、発展の可能性があると思わな。反論者がね、弱点を突いて来たらね、よくぞこっちの策略にはまってくれた、と思って反撃せにゃいかん。論争の主戦場は、弱点部にあるとぞ。戦って、戦って、論文ば書かな。

万葉歌の外にある情報をどこまで、取り込んで研究すべきか。じつは、この問題こそ、過去五十年を生きた、万葉学徒たちの大きな争点やったとよ。テキストの内側を固め、解釈の精度を上げるべきであるとする研究者たちと、テキストの外側にある情報をできるだけ取り込んで、新たな研究の可能性を探るべきであるとする学徒たちの対立のなかで、俺たちやあ、息苦しく研究をしてきた。

対立なら、まだよかたいね。相互無視の歴史が、万葉研究の五十年ではなかったか、と上野先生は回顧します。両派は、互いに研究拠点も異なるので交流することすらせんからね。「沖縄や

中国の少数民族の祭りが、万葉研究に役立つはずがない」「テキストの外側から眼を背けては新しい方法も生まれまい——」と対立し、互いに対者を無視し続けているわけだ。しかも、そこにはかつての学生運動華やかなりしころの政治路線の対立も見え隠れする。そんなことを、まだ引きずっておる。上野の研究の本願とするところは、こういう状況の打破にあったとよ。

だからね、上野先生も主宰者のひとりであった研究会では、テキストの外側の情報をどこまで、どう取り込むのかということを常に問題にしたわけだ。その成果については、『万葉をヨム―方法論の今とこれから―』という本に集約されているから、読んでほしい（上野誠・大浦誠士・村田右富実編、上代文学会監修、笠間書院、二〇一九年）。上野先生はね、この研究会のね、討論を通して、ひとりひとりの学徒が、解釈の枠組（土俵）のようなものを提示してゆくべきだとの確信を得るに至りました。

学生諸君よ、ここよ、ここよ。ここが、今の私の万葉文化論の到達点ばい——。「方法論は、多様であれ。ただし、各自の解釈の枠組みを明確化せよ」。それが今の私の万葉研究の寄って立つところたい。

四、海の難所、鐘崎

ではよ、どこまで、テキストの外側の情報を取り込むか。それが、いちばんの問題たいね。ここから、また話が難しくなるばい。

金の岬すなわち現在の鐘崎は、海の難所たいね。なぜならば、地島と金の岬との間が狭いからです。岬の周辺は、岩礁になっており、常に座礁の危険性がある場所なわけよ。金の岬は小山と

なっており、その山を「さやかた山」といいます。海上から見ても、航行の目印とする「アテヤマ」という山たいね。一般的には、海上から「屋形」に見えるといわれている（まだ、海上からは見とらんけれどもね）。その「さやかた山」に、現在、織幡神社は鎮座している。しかも、この場所は「アナジ」という乾（北西）の悪風が吹くことで有名でした。一つ例を挙げますね。

筑紫より上りける道に、さやかた山といふ所を過ぐとてよみ侍りける

右大弁通俊

あなじ吹く瀬戸の潮あひに舟出してはやくぞ過ぐるさやかた山を

（巻第九の五三二、羈旅『後拾遺和歌集』（新日本古典文学大系）岩波書店、一九九四年）

「さやかた山」のある金の岬は、都人たちから恐れられていた地やったわけたいね。また、『源氏物語』の「夕顔」の巻では、玉鬘一行は、海路、筑紫下向したことになる。そして、金の岬を通過時には、一二三〇番歌が想起されたという設定になるとよ。その「我は忘れず」という一句が、夕顔思慕の「世ともの言ぐさ」（口ぐせ）となっていたと、物語は展開してゆく。こういった歌の転用が可能なのは、金の岬が難所として、都においても著名であり、かつ一二三〇番歌が人口に膾炙していたことを意味しているはずたいね。人口に膾炙とは、皆に知られておることです。

今日の最終講義ではね、時間の都合で、『今昔物語集』巻第十九「亀報山陰中納言恩語第二十九」や、『筑紫道記』については言及できんけども、やはり海の難所として著名な地だったことを窺わせる。ちなみにね、『今昔』の話は、亀報恩譚となっとなって、金の岬で継母に海中に

捨てられた藤原山蔭の子が、山蔭の住吉詣の際に放生してやった亀によって、救出される話となつとります。つまり、住吉の神の靈験譚になつたとよ。つまりね、鐘崎は海の難所で、常に神が意識される場所なんよ。

以上の知識は、いわば金の岬という土地に堆積した文学的言説というべきものたいね。だから、金の岬という土地の性格を考えるには有効でも、解釈に反映させるべき事項ではないと上野先生は考えます。何を歌の解釈に反映させ、何を反映させないか。そこが、解釈のわかれ目になる。難しいね。

五、鐘崎と沈鐘伝説

ではね、金の岬が、沈鐘伝説の地であるという点については、どうか。沈鐘伝説とは、河川や湖、海の底に沈んだ鐘の伝説です。その多くは、一つの怪異譚として語られ、水底の鐘が魔物となって水難をもたらすとか、鐘が鳴ると天候が急変し災難がもたらされるなどのかたちをとります。怪異譚やけん、恐い話たいね。

日本の伝説研究はね、ドイツの民俗学を手本としておりました。ドイツではね、早くに沈鐘伝説が注目されていてね、事例の収集もなされていました。だからね、すでに明治の終わりに、日本でも沈鐘伝説が注目されておったとよ。じつは、金の岬すなわち鐘崎の沈鐘伝説も著名で、貝原益軒の『筑前国統風土記』には、

織幡神社ある山の出崎を云。昔三韓より大成つき鐘を渡せしに、此海にしづめり。故

に鐘の御崎と云。鐘の所有は織幡山の良の方、五町許沖に在。今も鐘の所有いちじるく見ゆる由、里人云り。かやうのこと異国にも有。越前国敦賀郡金ヶ崎の海に、昔朝鮮より鐘を渡せしが沈て爰に在。其故に鐘か崎と云。気比の海べたに在。越前国に在は逆に成て有りといふ。

〔筑前国統風土記〕 貝原益軒著、益軒会編『益軒全集』巻之四、益軒全集刊行部、一九一〇年

拙訳

（鐘崎は）織幡神社のある山の突端のことをいった地名である。昔、（朝鮮半島の）三韓より大きな梵鐘を輸送した時に、この海に沈んでしまった。だから鐘の御崎というのである。鐘のある場所は織幡山の良（北東）の方、五町ばかりの沖にある。今も鐘がはつきりと見えると、里人はいつている。こういったこと（＝伝説）は異国にもあることである。越前国の敦賀郡金ヶ崎の海にもあつて、昔朝鮮から鐘を輸送したが沈んでしまひここに有ると伝えているのだ。そのゆえに鐘が崎というのだという。（彼の地は）気比の海辺に今も存在している。越前国にあつては、（筑前ではなく逆に）敦賀にこそ梵鐘はあるといっている。

とあるたいね。さすが、わが郷土の誉れ、益軒翁です。敦賀の「金ヶ崎」（福井県敦賀市金ヶ崎）も沈鐘の里で、本家争いがあるとも述べておる。やはりね、大学者は見渡しが広かよ。こういうところを、われわれも見習わにゃあいかん。伝説ちゅうもんは植物の種子のごとくに広がり、その土地で芽吹くものやから、類話があちらこちらで検出されるものたいね。筑前鐘崎も、その沈鐘伝説の里の一つなのです。

歴代の金持ちや権力者は、埋蔵金伝説に憑りつかれたように、鐘の引き上げに執着したのです。奔走し、死者や怪我人を出して、中止のやむなきに至った歴史が鐘崎にはあるたいね。現在、鐘崎の織幡神社の境内には、大正期に大金を投じて引き上げた釣り鐘型の巨石が飾られています。引き上げたのは、鐘ならぬ石であったわけですね。みんなも、鐘崎に巨石を見に行ったらよかよ。それも、勉強したい。とにかく、読むことと、歩くことが大切たいね。『万葉集』を勉強するもんは。歩かには、いかによ。

六、解釈判断の難しさ

上野先生がね、諸注釈を見たらね、「カネノミサキ」「カネガサキ」が、沈鐘伝説の里であることに言及した『万葉集』の注釈書はね、二つありました。上野先生の管見で二つありました。

一つはね、鹿持雅澄の『万葉集古義』（一八三九年成立）。もうひとつはね、『新編全集』（小島憲之ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 萬葉集②』小学館、一九九五年）たいね。『古義』は、同じく益軒翁の『筑前名寄』（貝原益軒著・益軒会編『益軒全集』巻之四、益軒全集刊行部、一九一〇年、一六九一年成立）を引用して沈鐘伝説を紹介して、「俗説めきたれど、金の御崎と名に負るは、げにも鐘によることなるべし」と述べておりました。他方『新編全集』は鐘崎の沈鐘伝説が海の難所であることを示す伝説であることを言及するけれども、「カネノミサキ」の「カネ」を沈鐘の「鐘」とは説いておりません。では、上野大先生はどう判断するか。沈鐘伝説を解釈にどう盛り込むか、盛り込まないか、そこが難しいところたいね。つまり、解釈のわかれ目たい。上野先生はね、「カネノミサキ」の「カネ」が沈鐘に由来する可能性はあるけれども、それは証明できないと考えます。なぜならば、か

の碩学、新村出先生も注意しているように、先に「カネノミサキ」という地名があつて、その地名が沈鐘伝説を引き寄せた可能性もあると考えるからです。おそらく、『新編全集』も、そのあたりを考慮して踏み込まなかった、と私は思います。注釈というものはね。その注釈する学者の分身のようなものです。学者の知性も判断も、注釈に表われる。

諸君、テキストの内と外をどう切り結ぶか、考察は楽しくとも、判断はじつに難しいもんだいなあ。しかし、その難しさこそが、研究の楽しさたいね。私にも、研究に対する自論ちゅうもんがある。それはね、楽しくないものは、身に付かん、という自論です。みんなね、楽しみな。研究ば。楽しみな——。苦しいけど、楽しかよ。研究は。しかも、学問ごとに、学者ごとに個性があるからおもしろいとよ。

おわりに

隣接する学問分野の成果を万葉研究に取り込むといっても、それは、たやすいことではありません。ここに、学際的研究の難しさがある、とよ。なぜならば、第一次資料の吟味をできるわけではないから、誤解や見落としなどの危険が常に伴うたいね。また、他分野の学説の新展開についても、完全にフォローできるもんじゃあない。そこが、難しいところたいなあ——。

が、しかし。それでもよ、それでもよ……。私は、国文学のなかでもっとも成熟した分野である万葉研究を基点として、文化論を展開してゆかにやあいかん、と考えとります。そうしなかつたら、国文学は井の中の蛙になる。広がりがない。それが、私の遺言です。上野先生の遺言です。万葉研究は、国文学の中でも成熟した分野であるからこそ、逆にテキストの外の情報を取り込む

でゆきやすい、と私などは考えておる。それが、私の遺言です。このおいぼれの遺言です。

以上が、虫の眼で見た「今」「ここ」「私」の万葉研究の一例でありました。以て、奈良大学二十九年のお別れの挨拶とします。ようう聞いてくれたね。ご清聴、ありがとうございます。この学園におらんかったら、私は学問できませんでした。ありがとうございます。ありがとうございます。

ほな、さいなら。あとは知らんばい。あとは野となれ、山となれ。

おりや、奈良大学ばやめるけんね。あとは知らん。

博多祝い唄でも、歌いまっしょうかつねえ……。

〈博多祝い唄ののち、三本じめ。そして、花束贈呈と続く予定だったのだが、この最終講義は、まぼろしに終わった〉

学ぶ・教える・考える

研究所に勤めれば、授業はしなくてよかった。しかし、私は授業で物事を考えてきたので、授業には気を遣ったつもりでは、ある。

※なお、本書収載の文章については、改題、加筆修正を加えている場合もある。したがって、そのままの収録ではない。

こしかた、ゆくすえ

一、研究との出逢い

今、私は、『万葉集』を研究する研究者として活動しているが……ほんとうは、歴史学者か、考古学者になりたかった。残念なことに、史学科の偏差値に届かず、受験に失敗してしまったのである。

歴史少年、考古少年であった私が出逢った本のなかで、とりわけ印象的だったのが、十四歳の時に読んだ樋口清之先生の『梅干しと日本刀』（祥伝社、一九七四年）である。この本は、日本列島に生きた人びとの歴史と、その体験を、一つの「知恵」として説いた本である。十四歳の私が、果たしてどれほど理解していたかは、わからないけれど、とにかくわくわくしながら読んだ記憶だけは残っている。日本刀の技術ってすごいんだあ、日の丸弁当って合理的な食物だったんだなあ、と思いつつ読んだ記憶がある。

その後、樋口の『万葉の女人たち』（講談社、一九七八年）、『日本木炭史（上）（下）』（講談社、一九七八年）を読んで、私は、史学科に入って勉強したいと思った。そこで、福岡に講演に来られた「樋口先生」に、逢いに行ったこともある。そのあたりについては、すでに書いたので割愛するが、大学受験は、國學院大學の文学部史学科を第一志望とした（『書淫日記』ミネルヴァ書房、二〇一三年）。が、しかし。試験に落ちてしまったのだ。

結局、紆余曲折あって、一年間の浪人生活の末に、同じ大学の文学部日本文学科に入学するこ

とができた。そこで私は、『万葉集』の民俗学的研究で著名な櫻井満先生（一九三三—一九九五）に出逢って、万葉学徒になったのである。

そんなわけで、私の『万葉集』の研究は、どこか、普通の万葉研究とは違うところがあるようだ。というか、そのどこかに、歴史学や考古学へのあこがれのようなものがある。歴史学と考古学、民俗学を応用した研究だと学界では評されている。一方で、私はこれまでに、一度ならず当代を代表する古代史学者と大論争を繰り広げてきた。それは、青春時代のコンプレックスの裏返しかもしれない。もちろん、自説の方が、僅差ながらも優位だと信じてはいるけれど、論戦に力が入ったことも事実である（『万葉文化論』ミネルヴァ書房、二〇一八年）。

しかし、今、還暦を迎えて、十九歳の時に封印したはずの歴史学、考古学への思いが、また膨らんできた。

二、歴史に対する考え方

もし、「歴史」についての本を書くチャンスが与えられるとしたら、今の私が持っているすべての力を使い切って書きたい、と思う。

では、どのように書くのか？ その時は、どのような方法で、歴史を描き出そうというのか？ 私は、四つの視点から、歴史を記述するつもりだ。

一つ目は、「今」「ここ」「私」という視点で歴史を描いてみたい、と考えている。つまり、この本は、今、ここに、私がいて、私はこう考えます、いかがでしょうか、という提示方法で歴史を描きたい、と思う。どんなことを考えたとしても、歴史を語るのは、今の自分であることは、間違いない。いや、確かなものは、それしかない——と思う。

この考え方を後押ししてくれた本がある。イヴァン・ジャブロンカ著、真野倫平訳『歴史は現代文学である―社会科学のためのマニフェスト―』（名古屋大学出版会、二〇一八年）という挑発的な本だ。ジャブロンカ（一九七三）は、いう。「歴史」を見つめるのに、歴史学も文学もない。あるのは、その「歴史」を記述しようとする、その人の今の思考しかない、と。私も、これでゆきたい。

三、鳥の眼と虫の眼で歴史を見る

二つ目の視点は、小さな歴史のひとつから、時には人類の歴史を語るという視点である。鳥の眼と虫の眼の両方を持ちつつ、大胆に歴史を記述してゆきたい、と思う。

新著には、影の主人公を設定しようと思う。それは、上野きくの（一九〇〇―一九八三）という人物だ。私の祖母である。私は、一人の明治・大正・昭和を生きた女性のとある行動から、世界史も人類史も語りたい、と思う。祖母は、現在の福岡県朝倉市郊外に生まれ、尋常小学校（当時の義務教育）、高等小学校（当時の中等教育）の教育を受けた人物である。今日でいえば、中学校二年生までの教育を受けた人物ということになる。ちなみに、上野家で高等教育を受けるようになったのは、父母の世代からだ。

私は、一九七三年から一九七九年まで、父、母とともに、このきくのおばあちゃんと同居していた。したがって、私の性格の一部は、明らかに祖母から影響を受けたものだ。そのひとりの人物の行動、心の習慣から、農耕の成り立ちや、経済の成り立ち、宗教の成り立ちについて論じてゆきたい。難しくいえば、微視的視点から歴史を俯瞰したいのである。

四、降り積もる歴史

三つ目の視点は、歴史を一つの堆積物として見る見方で歴史を語りたい、と思う。これは、通過してゆく歴史に対して対時的に用いた言葉である。縄文↓弥生↓古墳というように、歴史を時間の通過点とは見ないのである。雪が降り積もるように、歴史も降り積もるものとして見る見方である。縄文の生活体験の上層に、弥生の体験があり、さらにというように歴史を堆積物として考えたいのである。そして、その生活体験を、知恵として、私たちが継承しているという視点で、歴史を語りたいのである。

私の祖先の生活体験は、どうやら私の体に刻み込まれているようなのだ。残念なことに、私は、胴長、短足で、首も短い。そして、顔の彫りは浅い。これは、私の三万年以前の祖先が、極寒の地で活動していたかららしい。極寒の地では、手足や首が長いと、体温を奪われ易いので、胴長、短足の方が有利なのだ。顔に凹凸があると凍傷にかかりやすく不利なのだ（中橋孝博『日本人の起源―人類誕生から縄文・弥生へ―』講談社、二〇一九年）。だから、私の体型は、北方仕様になっている。

また、私の歯は、シャベル型といって、内側にやや湾曲している。これは、森で採取される堅い木の実、堅果類を食べていたからであるようだ。堅いものを噛むのには、このシャベル型の歯の方が有利なのだ。U字型の方が強度が高く、食べ物を強い力で潰すことができるのである。どうも、私の歯は、この遺伝子を受け継いでいるらしい。アフリカか、シベリアか、中国か、朝鮮半島か、それとも日本列島の縄文の森か、どこかわからないけれど、堅い木の実を齧って生活していた祖先たちの形質を受け継いでいるようなのだ。

また、私の祖先のなかには、熱帯で暮らしていた人もいたようだ。私の髪は巻き髪で、カール

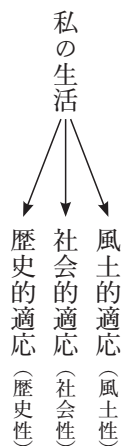
している。これは、発汗によって、体温を下げるには、都合がよいらしい。髪は、熱帯仕様なのだ。それだけではない。文化も継承している。日ごろ使っている話し言葉や文字は、生後の学習によって習得したものだ、さまざまな歴史的な体験を得て、受け継いでいるものである。このように、それぞれの時代のそれぞれの歴史的経験というものを、堆積物として、歴史を描きたい、と思う。

五、生活から考える歴史

四つ目の視点は、歴史を「生活」という側面から捉えようとする視点で歴史を語ってみたい。生活というものは、置かれた環境に対して適応してゆくものである。

私は、ネット弱者で、二十年前、勤め先の大学から再三の要請によって、ようやくパソコンを使うようになった。ところが、今、私の生活は、ネット環境がないと、その日から仕事が立ち行かなくなってしまう。

では、その生活をどう捉えるか、というと、



から見たと思う。

パソコンの技術の習得は、歴史の趨勢であり、社会への適応であり、広くいえば大学という風、

土への適応でもあろう。いつ、どうして、パソコンの使用法を習ったか、これも大切な歴史なのだ。そして、通信の革命は、明らかに私個人の生活を変えた。いや、私たちの社会を変えることとなった。そして、そのスピードは上がるばかりだ。

クリスマスとお正月をどう過ごすか。それは、すぐれて風土的問題、社会的問題、歴史的問題でもある。こういう歴史を堆積物とする見方は、生活文化のもっている地域差や特性を探る考え方である。文化人類学や民族学が研究対象とする「エートス」が、これにあたる。「エートス」とは、心の習慣のことである。また、「エートス」という考え方は、歴史的变化よりも、変化しないものを見ようとする見方でもある。つまり、文化の連続性を重んずる考え方だ。じつは、十四歳の私が、なんとなく樋口の著作に惹かれたのは、こういった視点を好んだからであろう。そして、今もそういった思考法を明らかに好んでいる。

この樋口の学問は、鳥居龍藏（一八七〇—一九五三）や、柳田國男（一八七五—一九六二）、折口信夫（一八八七—一九五三）の影響を受けているところがあり、その考え方は、文化人類学や民族学、民俗学の考え方に近い。私の『万葉集』の研究も、そういう流れを汲むものである。

一九世紀後半から二〇世紀は、民族の文化や伝統性に関心が高まった時代であった（『民族自立』が、時代のスローガンであった）。それは、国家が民族ごとに纏まろうとした時代だったからだ。つまり、言語に代表される文化を同じくする人びとごとに、国家を作ろうとした時代だったので、「エートス」の違いが強調された時代だったのである。だから、私も、その観点を受け継いでいるのである。

「歴史」を研究の対象とする学問は、多かれ少なかれ、資料的制約を受ける。私の場合、どうしても、古代の文献、古代の文献のうちでも『万葉集』を中心として、「歴史」というものを見

てしまう。歌の表現の風土性、社会性、歴史性から、生活を考え、そこから歴史を語ってみたい。もし、そういう本を書くチャンスを与えられたら、大胆に、楽しく、歴史を語ってゆきたい、と思う。

（書き下ろし）

最初から尾籠な話ですが……

昨年の四月から挨拶を頼まれると、必ず次のような言葉で締め括ることにしている。

……というわけで、この四月から奈良大学に赴任いたしました。『万葉集』を学ぶ若き学徒が奈良で職を得たのですから、もう他に言うことはありません。あとは体重を減らしてお嫁さんを探し、六十歳までに小著が出せれば……死んでも、かまいません。

もちろん、後半の部分はくだけた酒席での挨拶だが、もうこんな挨拶を何度したことだろう。しかし、これは現在の偽らざる気持ちである。なかでも、自分の研究室を持てたことは嬉しかった。この研究室で数本の拙々たる論をものしたが、それらはみな思い入れのある稿となっている。A―二〇五という研究室を工房として、拙々たるものでも少しずつ書いてゆけたらと思う、今日この頃である。著者自身の具体的な研究については『奈良大学通信 青垣』第九号（奈良大学後援会一九九三年）に書いたので、この「国文学研究室だより」には別の話題を提供し、その責めを果たそうと思う。しかしながら、これからする話はいへん尾籠なもので、果たして「新任の挨拶」

にふさわしいかどうか、著者も不安である。さらに「国文学研究室だより」の品位を貶める可能性もある。けれども、賢明なる読者におかれては、筆者の伝えたいメッセージの意のあるところを、汲んでいただきたい。

話は一九八五年の夏にさかのぼる。この年は国連の定めた国際青年年にあたり、日本では総理府が中心となりさまざまな行事が行われた。当時は中曽根政権の時代で、日本の貿易収支の黒字が大問題となっていた。政府のドル減らし政策の一つとして、代々木の青少年オリンピック・センターで「IYY 国際青年の村」という交流集会が行われたのである。それは、日本政府が約四十カ国から千人程の若者を招待し、十日間の共同生活をおして国際交流をしようという企画であった。どういうわけか、筆者は日本側のホストの一人として、一夏をつぶすことになってしまったのである。当時、わたしは小さなボランティア・グループの幽霊会員だった（正直を言えば、高尚な志があったわけではなく、そこに集まる女の子が目当てであった）。そのグループのなかから一人ないし二人をIYYに出すということになっていたが、貴重な夏休みの半分がつぶれるとあって、希望者は一人もなかったように記憶している。結局、筆者があみだくじのアタリを引いてしまったのである。しかし、情けないことに筆者は英語が大の苦手である。言葉をめぐる苦労話については、二晩しても飽きることはないが、紙数の都合もあり話を急ごう。

ここからは、話が尾籠であり、とくに食事中の読者は後で読んでいただきたい。

IYYでは、さまざまなトラブルがあったが、今となってはどれも貴重な体験となっている。そのなかでも、もともと印象に残る話をした。IYYで一番困ったのは、トイレの問題である。世界中どこでもトイレット・ペーパーを使うと考えていた日本人スタッフの考えが、甘かった。アジアやアフリカから来た若者の一部は、紙でお尻を拭くという習慣の無い人ひとであった。彼

らはスティック状のヘラで便をよく取り除き、その後は沐浴するか、水でお尻を洗うという方法を採用していたのである。一日目のオリエンテーションが終わり、夕食を済ますと宿泊棟のトイレの約三分の一が使用不能ということで、困った状態になっていた。なぜ使用不能になってしまったかというところ、割箸と紙コップで便器が詰まってしまったのである。トイレット・ペーパーを使用する習慣のない人びとは、自衛の手段として、食堂から使用済みの割箸と紙コップを調達し、割箸で便をよく取り除き、紙コップに汲んだ水でお尻を洗っていたのである。それだけなら問題はないのだが、彼らは、割箸と紙コップを便器に捨ててしまったのである。ホスト役の日本人スタッフは急ぎ集合。センターの職員と協力して、何とかトイレを使える状態にした。気が付くと、時計の針は午前二時をさしている。それから、スタッフの対策会議が持たれたのは言うまでもない。どのような解決策を採り、それらを彼らにどう伝え、協力を仰ぐか……討論は続いた。ここで一つの意見がでた。トイレではトイレット・ペーパーを使用するように、貼り紙で掲示しようというものであった。しかし、それが今回の集会の趣旨にふさわしいかという疑義もでた。議論の結果、割箸と紙コップの使用はかまわないが、それを便器に捨てないでほしいという申し合せをすることにした。そして、それぞれのトイレには大きなビニール袋を置くことにした。朝の四時近くに、近くのコンビニエンス・ストアに行き、店にあるだけのゴミ収納袋を買って、各トイレに備え付けたのである。ついで、その旨を英語に翻訳して掲示することにした。しかし、この文章の起草が難航した。われわれは、彼らの感情を害すること無く、危機を回避しなかったのである。回想しながら、文書を書いているので正確とはいいたいが、次のような日本語を英訳したと思う。

ここには、世界中からさまざまな生活習慣を持つ人間が集まっている。したがって、互いの生活習慣は尊重されるべきであるが、一つのルールが必要となる。この施設のトイレは原則として、トイレット・ペーパーを使用する人用に作られている。したがって、紙以外のものは、便器に流さないでほしい。紙以外のものは、袋を用意するので、そのなかに捨ててもらいたい。

このような文章を貼りだして、朝のミーティングでも、取り上げたのである。当然、一部の人がとは、失笑してしまった。その瞬間である。アジアから来た一人の青年が立ち上がり、何やら英語で話をはじめたのである。日本人スタッフ一同の顔面は蒼白となってしまった。通訳してもらった、次のようなことを話していたとのことである。話はよくわかったので、次のような提案をしたい。ゴミ袋の回収は自分とその仲間がやるので、任せてもらえないか。この発言を聞いて一同はほっとした。さらに彼は言う。「ノー・ペーパー」というトイレを一定数作り、そこだけに袋を置けばいい。後は自分たちでやる。さらに、アフリカの一部の国の人びとのために、仏語でも掲示を出してほしいと彼は訴えたのである。この時は、筆者も男泣きに泣いてしまった。そして、次に愕然とした。この事件を処理する自分の気持ちに、万が一にも彼らをさげすむ気持ちが無かったかと考えさせられたのである。そして、何よりも彼らの人格の高さに畏敬の念を持ったのも事実である。果たして、逆の立場で、それほどの提案を自分ができるとは、今以て思えないのである。

当時、私は大学院のマスターの二年生であった。日本人の生活・行動様式と日本文学の関係に深い関心を持った生意気な学生であったと思う。そんな自分にこの事件は、大きなショックを与えたのである。最終的には文学研究の道に進むことになったが、未だに民俗学を捨てきれないでいるのは、おそらくこの事件のためだと思っている。したがって、筆者のめざす文学研究は、広い意味での文化事象の研究の各論、個別研究でしかないと思っている。

実は日本の庶民が便所で紙を使用した歴史は、ごく新しい。東日本の一部の地域ではチューギと呼ばれる糞ペラを、ごく近年まで使用していたのである（宮本常一『絵巻物に見る 日本庶民生活誌』中公新書、一九八一年）。また、筆者の祖母である上野キクノ（一九〇〇～一九八三）は、その娘時代、田舎に嫁に行くことを極端に嫌った理由の一つとして、便所で紙の使用をせず、藁縄でお尻をきれいにする習慣があったことを筆者に話していた。何のことはない。われわれの祖母や祖父の世代まで、紙を使用することは一般的ではなかったのである。世界的規模で見した場合、紙を使用する人間の方が少数派なのである。

昨年の十一月、わが奈良大学で日本考古学協会の大会が開催されたが、文化財学科の諸先生に無理を言って、見学させていただいた。その折りのパネル発表で、古代のトイレの検出法について奈良国立文化財研究所の黒崎直さんから、お話を伺う機会があった。話は昨年発掘された藤原京のトイレの話や九州の鴻臚館こうろかんのトイレの話に及んだが、やはりこの時代も糞ペラを使用しているとのことであった。とすれば、筆者が現在、研究の対象にしている柿本人麻呂も、それを使用したに違いない。

国際青年の村で起きたこの事件は、筆者の心のなかで現在も重要な位置を占めている。そして、そこから学んだ一つの教訓がある。それは、文化を語ろうとする者は、自らが独善的になっていないか、もう一つの内なる心の目で、常にその言説を再確認すべきであるという教訓である。最終日のお別れパーティーの後、すばらしい提案してくれた彼が「紙を使用すると……痛くありませんか？」と質問してきた。その時、日本でもウォッシュ・レットと呼ばれる水で洗う方式のトイレが増えてきたという事実があることを通訳してもらった。なるほど、文化とは実に相対的なものである——と筆者は思った。

（一九九三年三月）

やさしいが、こわい先生

温厚、円満のお人柄のゆえか、桜井満先生が怒鳴るのをわたしは見ることがない。ただ、わたしが先生に初めてお会いした時には、もう四十代でいらしたから、そういう先生を見たことがないのかもしれないし、たんに運がよかったからかもしれないのだが……先生はけっして大声で人を叱るような人ではなかったように思う。けれど、わたしにとって先生は非常にこわい人だった。つまり、やさしいが、こわい先生なのである。

先生は、やさしく叱る人だった。それが、実にこわかった。かく言うわたしも、先生の前で号泣したことがある。大学院を修了した九〇年、就職に失敗したわたしは、手がつけられないほどのワルだったと思う。とにかく、職を得ている先輩の顔を見るたびに、噛みついていたい。簡単にいえば、腐っていたのである。また、体力に自信があるせいも、手も早かった。今となって考えると、先生はすべて見て見ぬふりをしていたのだと思う。そんな先生の慈悲のころをよいことに、喧嘩ばかりしていたのである。しかし、ある事件をきっかけに、先生はわたしをついに呼び出されたのだった。というより、先生にしてみれば呼び出さざるを得なかったのだらう。事態は、そこまで深刻だったのである。

呼び出しを受けた瞬間、およその察しはついていたから、冷や汗ものだった。しかし、追及されたら、開き直るつもりでもいた。夕方、研究室をおそるおそる訪ねると「どうも……。ごくろうさん」といつも通りの声が、意外にも返ってきた。先生は机に向かったまま、後向きで静かにわたしに話しはじめられた。

開口一番、いつもの口調で「最近、ぼくのところに上野くんの悪い噂を言いにくる人が多いんだよ。困ったねえ。」と口火を切られたのである。先生はつづけて、

でも、それは信じてないから安心してほしんだけどさ。ただ、もし君に反省すべき点があると思うなら、反省してほしいんだよね。だって将来君が偉くなった時にだよ、「あいつは若い時、非常勤になるのが遅れて、すねていた」なんて言われたら、はずかしいじゃないか。

上野くんもいい論文書いているから……ぼくはきつと大成すると思っているよ。それは、絶対に間違いないと思うんだがな。

とことばをつがれたと思う。先生用の大きめの湯呑を片手に、目は書類の数字を追いながら、日頃と変わらない口調であった。わたしは、その場で泣き崩れてしまったが、先生は、そのわたしを一度も見ず、後を向いたまま書類から目を離さなかった。そして、いつものように読み終えたと、いつもの通り書類を破ってごみ箱に捨てたのだった（先生は、日頃から不要の書類はご自分で破って捨てられていた）。

なぜ、あの時先生は怒鳴らなかったのだろうと、ふと思うことがある。たぶん怒鳴られていたら、猛然と反発していただろう。また、自分もそのつもりで研究室のドアをノックしていた。おそらく、先生はそこまでわたしのころを読んでいたのではなからうか。八分を誉めて二分叱ったのは、不遜だが先生の「作戦」だったのではないかと、最近思うようになった。なぜなら、論文を誉めてもらったことは、後にも先にもこの一回だけだからである。

ゆつたりと間を取り、ことばを選びながら静かに話す先生。号泣するわたしを背に、いつもの通り黙々と会議の書類を読みつづける先生。今、思い出しても「ぞっ」とする瞬間である。書類を破り捨てた先生は、「申し訳ないけど、井の頭線が混むといやだから、お先に失礼するよ」と、

これまたいつもと同じせりふで、研究室をあとにされたのだった。ただ、この日に限ってはいっしょに渋谷の駅まで歩こうとは言ってくださらなかったのを覚えている。

今となつては、その真意を確かめるすべもないが、先生が後を向いて話をはじめられたのは、わたしが号泣することを予見してのことだったのではないかとさえ思う。

テレビや映画のように、翌日から心を入れなおしてとはいかなかったが、以来先生のあの一言がいつも胸にあったのは事実である。喧嘩をしていた先輩たちとは、元通りとはいかないまでも、話ができるようになった（もちろん、研究上の毒舌はご寛恕を乞うしかないが――）。たぶん、あの時はあの叱り方しか、わたしをよい方向にもってゆく方法はなかったかもしれない。今、勉強を続けているのは、あの時のことばがあったからである。先生の叱り方によっては、研究を放棄して別の道を歩んでいただろう。

学生を叱ることの難しさを実感することとなった現在、やさしいが、こわいことばを思い出すとともに、あの日の先生の後ろ姿が脳裏によみがえる。

（一九九七年三月）

「値うち」と「おつり」と

大学院を終わって、奈良大学に赴任した春のこと。大先輩の故・上田正昭先生のところにございさつに行くと、

よく来てくれたね。これから、たけのこごはんでも食べに行きましょう。

と言って、長岡京市のたけのこ料理の店に連れて行って下さった。たけのこのさしみ、たけのこの煮物、天ぷら、ぬた。驚いたのは、グラタンなどなど、もう半年はたけのこは食べたくなかったほどだ。最後のたけのこごはんのころには、もう満腹だったが、帰り際には、おみやげにたけのこの佃煮をもらった。もう、呆れるしかない。

それから、上田先生と会うたびに、先生は、「あの時のたけのこは、自分でいうのもなんだけど、おいしかったねえ」と言われた。

その上田先生から、こんなことを言われたことがある。

上野君、あれだけたけのこを食べると、忘れられんだろう。そうしたらね、おごったか
いもあるというものだ。つまり、思い出に残るから、安いもんさね。

つまり、贈った物や食べた物が語り草となれば、お金を払った「値うち」もある、ということなのである。

その上田先生に頼まれて、祇園のお茶屋に勘定の支払いに行ったことが多々あった。いわば、支払いの「おつかい」である。先生から頼まれた通りに、女将に白い封筒を差し出すと、上がってゆきなさいということになって、お酒が出る。帰り際に、酒代を払おうとすると、女将は、い
え「おつり」ですと言う。というのは、上田先生が渡した封筒の中には、やや多めにお金が入っていて、その分はおつかいをした人の、役得になっているのだ。つまり、おつかいした人の酒代も入っているのである。これが、昔の関西流だ。

そういうことを二、三度するうちに、女将とも顔なじみとなる。すると、次のようなことをよく言われた。

上野の若先生も、早よう立派におなりになって、自腹で、祇園に足をお運び下さい。早よ

せんと、この店なくなりまっせ……。

つまり、「おつかい」と「おつり」を通して、人と人とを結ぶのである。私はある時、上田先生に、銀行振込みの方が安くありませんか、と聞いたことがある。すると先生は、

そんな「愛想」ないことしたらいかん。人と人との縁が切れるやないか。

と言われた。ただ、縁を繋いでもらっても、私の経済力では、祇園に行けない。残念無念――。

四十年のご無沙汰

一通の葉書に、驚愕したことがあった。「久しぶりですね。貴兄が『現代思想』に書いた論文を読みました。お会いしてゆつくり、お話したいです」と書いてある。

差出人を見ると、なんと母校の阪本是丸教授ではないか。卒業して、四十年近く経って、こんな葉書をいただくとは、驚きだ。その先生には、学部生時代に、いろいろとお世話になったのだが、卒業以来、四十年のご無沙汰続きで、こちらから、年賀状の一通も差し上げたことがなかったのだ。失礼千万にも、ほどがある。しかも、これは、呼び出しである。不良学生が、職員室に呼び出されたのと同じではないか。最初に私の口から出た言葉は――。

コワー、ヤベー。

であった。先生は、私が学部生のころ、まだ専任講師だったと思うが、眼光が鋭く、恐い人であった。蘇ったのは、卒業論文や修士論文の口頭試問の悪夢である。一つ答えるごとに、論の破綻が

明らかに、しまいいには自分の論がドミノ式に崩れてゆくという、あれだー。

私は、丁寧な手紙を書いて、首を洗って上京し、出頭することにした。朝から水一杯も喉を通らない。もちろん、参考文献をキャリーケースに詰め込めるだけ詰め込んで、想定問答集を作って、その時を待った。いよいよ、四十年ぶりの参上、拝眉である。とにかく、研究室のドアが重い。入室しても、私は、「はあー」としか、声が出ない……。先生の最初の一声は、こうだった。

この論文は、前の本と違って、ずいぶん突っ込んで、書かれましたね。

しどろもどろに、一つ一つの質問に答えつつ、結局、午後一時から日付が変わるころまで、半日話すことになった。休憩や食事を挟んだが、後半戦になると、私も少しはリラックスできた、と思う。先生は、私の論の方向性は認めつつも、史料の読みの甘さを指摘された。その助言の一つ一つが、自分の勉強不足を露呈することになるから、もう心がボロボロなのだ。

が、しかし。十二時間近い口頭試問が終わるころには、不思議な幸福感に満ち溢れていた、と思う。その幸福感の正体は何かといえば、助言によって、史料の読みが変わって、より真実に近づけたという、不思議な幸福感なのである。逆上がりのコツを教えてもらい、逆上がりが出来そうになった時の気分かもしれない。そうして、安心した帰り際のこと、先生は、ふと一つの史料を私に示された。「上野君、これも、読んで？」と。私が、ふたたび奈落の底に落ちたのはいうまでもない。

尊きもの

今の還暦なんて、青年後期の入り口だと思うが……。私についていえば、還暦近くなって、涙もろくなった。テレビを見ていても、すぐにめそめそと泣いてしまう。「なんだろう、この感覚は——」と思う。一つ言えることは、論理的思考ができなくなってきたのではなからうか。ものを考える力が落ちてくると、情に支配されやすくなって、怒りっぽくなったり、泣きたくなったりするのだ。一応、これでも教育者なんだから、論理的思考を心掛けてはいるのだが、ものごとを考え続ける知の体力のようなものが、低下しているのだろう。

ことに最近ダメなのが、花だ。蕾も、散花もよいのだが、満開の花に弱い。梅や萩はまだよいが、桜が満開だと、それを凝視できない。命のかぎり、こんなに一生懸命花が咲いてくれていると思うと、涙が込み上げてしまう。命、この尊きもの。若かりしころは、花見だ花見だと言って、一升瓶を持って、高歌放吟していた私なのに——、である。

もう一つ、ダメなものがある。新幹線の清掃だ。清掃クルーが、リーダーの統率のもの、誰も乗っていない車両に向かって全員黙礼。ひとりひとりが車両に入る時には、全員の黙礼とは別に、今度は個々人で黙礼をしているではないか。クルーは、孤塁を守るように、定められた仕事を一心不乱にこなしてゆく。できて当たり前、誰からも褒められないプロの仕事だ。その動きに、無駄の一つもないのが眩しい。私にも気迫が伝わってくる。一遇の照らす心が、ここにはあるのだ。そして、すべて終了したことを、一つ一つ指差し確認するクルーたち。彼らは、ひとりひとり、誰もいない車両に黙礼をして、去ってゆく。その凜とした姿を見ると、もういけない。これ以上

に、尊きものはない――。

私は、思わず、掌を合わせたくなる。日本の新幹線の制御システムは世界一だといわれるけれども、あれほどの過密ダイヤでも遅れが出ないのは、あの清掃クルーのお蔭なのだ、と思う。世の中は、こういう人びとによって支えられているのだ。私も、一介の古典屋教員として生活している。が、しかし。あれほどの気迫を持って仕事をしているか、と問われると情けない次第である。満開の桜と新幹線の清掃クルー。これは、ダメだ。

（以上の三本は二〇二〇年五月から連載中の文章の一部）

白川静博士と『万葉集』

努力しても報われない人が多い世の中。私は、果報者だ。第十二回白川静記念東洋文字文化賞を受賞することができた。漢字研究に革命をもたらした碩学、白川静博士（一九一〇―二〇〇六）を記念して作られた賞である。受賞を自分で言いふらすほど下品なことないが、むやみに卑下する気分にもなれない。考えてみれば、私の『万葉集』研究も四十年近くになるわけで、それなりのプライドもあるからだ。

私なりに、白川博士の漢字研究について考えてみると、それは漢字の成り立ちに秘められた古代人の思考や生活文化を明らかにする点に特色がある、といえる。つまり、漢字を作った人、書いた人のことを考える漢字研究なのである。私たちは、日ごろ、文字を伝達の道具としてしか見ていない。だから、その道具を生み出した人間について考えることなど、ほとんどない。白川博

士は、漢字の成り立ちこそが、文化そのものであり、まさしく東洋の文化遺産だと考えたのであった。

道具や手段とのみ思えば、愛情など湧こうはずもない。しかし、愛情がなくては、ほんとうのことなどわかりはしない。甲骨文字や金石文の漢字の一つ一つを手で書き写して、文字の向こうにある人間の思考を考える。愛情がなくては、できない仕事だ。奈良大学の国文学科にも、印刷室がある。ところが、利用する学生たちは、散らかすばかり。そこで、輪番で、掃除をしてもらうことにした。するとどうだろう。今や、ゴミ一つ落ちていない。なぜならば、学生たちが、掃除する人のことを考えはじめたからだ。そして、掃除の大変さを知った学生たちは、大学全体の掃除をして下さる清掃スタッフの方々にも、会釈するようになっていった。それこそ、場所に対する愛情が生まれた瞬間である。たぶん、この間、私のようなヘボ教授の講義を一千回聞くより、質の高い教育が行なわれたのではないか。

漢字は、東洋の過去と現在を繋ぐ文化なのだ。その文化を愛することなしに、私たちは過去の英知を受け継ぐことなどできるはずもない。博士の著作に触れるにつけて、私はそう思ってきた。今、研究対象となるものを深く愛するべきだなどと言おうものなら、こんな陰口を言われるだろう。研究の客観性が保証されないではないか、と。また、漢字を愛することによって見えてくるものがあるぞ、などと言おうものなら、文化ナショナリズムの徒とか、偏狭な民族主義者と言われるかもしれない。しかし、ことは、それほど単純ではない。人を愛せば、その人について知りたくなる。よく知れば、その人の良さもわかる。私などは、そう考えている。

白川博士は苦学の人であり、清貧の人であった。六十歳までは基礎固めと、その主たる著作は六十代以降になされている。昼分と夜分の二つのお弁当を持って、朝から研究室に籠り、休憩時

間には運動不足解消と縄跳び。夏はステテコ一枚で勉強、という人であった。その博士が学問の道に入ったきっかけは、『万葉集』にあったという。博士は、万葉歌の内に秘められた古代人の思考法に関心を寄せ、中国詩の原点となる『詩経』との比較研究を最初に志したのだそう。ところが、そのためには、まず漢字について学ぶ必要がある。そこから、漢字研究に入ってしまったというのである。博士の万葉研究は『初期万葉論』（中央公論社、一九七九年）、『後期万葉論』（中央公論社、一九九五年）の二点に結実する。しかし、研究の細分化が進んでしまった今、この二著を省みる万葉学者はいない。私などから見ても、危いと思われるところが少なからずある。しかし、今の万葉学者に耳の痛いことも言っている。まるでパズルのように言葉の組合せだけを見ていても、大きなものは見えてこない、という批判である。木を見て森を見ずなのである（もちろん、自分の責任は私にもある）。

白川博士の警鐘の言葉は、戦後のすべての人文科学研究に当てはまるのではないか。「たしかに、詳しくはなかった。では、それで上野君はどう考えるのかい」と聞かれると、私などもドギマギしてしまう。つまり、歌を構成する句、句を構成する単語、単語を表す文字についてはよく研究されている。しかし、文字の向こうにある人間を誰も見つめようとはしないのである。それで、ほんとうに、万葉がわかるのか――。そう言われてしまうと、返す言葉もない。

男がいて、女がいた。男は新羅の国へと旅立たねばならない。難波津、瀬戸内海の津々浦々、そして筑紫、杵岐、対馬へと続く船旅。命の保証などない旅だ。女は、男に歌いかけた。

アナタが行く

海辺の宿で

もしも霧が立ったなら……

ワタシが都で立ち嘆いている

息だと思つて――

ワタシのことを思い出して

（『万葉集』巻十五の三五〇八拙訳）

寒い時は、口から白い息が出る。それが集まって霧になるというのだ。私が、若き日に心引かれた歌だ。時に、高校二年生。原文を示すと「君之由久 海邊乃夜杼尔 奇里多多婆 安我多知奈氣久 伊伎等之理麻勢」となる。これを書き下し文にすると「君が行く 海辺の宿に 霧立たば 我が立ち嘆く 息と知りませ」となる。七世紀と八世紀を生きた万葉びとたちは、消えてしまふはずの歌を何とかして、書き残そうとした。そこで利用したのが、漢字である。漢字の音だけを借り、意味を考慮の外に置いて、一字一音で日本語を書き残そうとしたのである。これが、いわゆる万葉仮名である。外来の文字である漢字によって、日ごろ、自分たちが使っている日本語を残す。漢文では、微妙なニュアンスが伝わらないからである。いわば言葉の肌ざわりのようなものが伝わらないのである。

消えゆく声を残す。文字によって残された歌を読めば、歌を詠んだ人の思いを知ることが出来る。高校二年生だった私は切ない思いで、この歌を読んだ。そして、両親には悪かったが、家業を継がずに、文学部に進学した。言葉から思考へ。思考から人間を見つめる。その言葉を伝える

礎となるのが、文字なのだ。

もし、白川博士が、この文章を読んでくれたなら、次のように言うだろう。「上野さん、そこまでなら通りいっぺんの解釈ですよ。なぜ、古代人がね、息というものに対してね。そういう深い思いを持ったのか。息をするということは生きることでしょ。この息という漢字のね。もともとのかたちはね……」と。受賞に浮かれてばかりはいられない。勉強しなくっちゃあ。

(二〇一八年七月)

試験地獄・無限地獄

三十一歳になった年から、私は試験から解放された。試験をされる方から、する方に回った。つまり、教員となり、上がったのだ。しかし、最近、試験する方もたいへんなのだ。

とある大学では、たとえ一秒でも不公平が生じないように、必ず秒単位で試験時間を計るようにとの示達が出ているほどである。つまり、受講生が百名を超えるような場合、複数の教室で試験が行われるのだが、教室間で実施方法や時間に差が出ないように、最大限の注意を払うことが求められているのだ。とはいっても、数秒の誤差は生じてしまう。そこで、一計が案じられた。試験監督者とタイムキーパーを分け、必ず、教壇に並び立って、タイムキーパーが合図をすると、監督者が「解答はじめ」と号令を出すという方法を取るようにとの指示が出たのである。うまいことを考えたものだ。

ところがである。ある時、タイムキーパーの時計が狂っていたことがあって、大問題となった。

そこで、その大学では、号令者とタイムキーパーが適切に時間を守っているかをチェックする「試験運用管理者」なる役を設けることとなった。マニュアルには、こうあるそうだ。「試験開始五分前に、号令者とタイムキーパーは教壇に並び立ち、二人の後ろに運用管理者が控え、適切に試験が行われているかチェックするように」と。なるほど、これなら、絶対にうまくゆくはずである。

ところがである。それでも、うまくゆかなかった。運用管理者が、インフルエンザにかかったことがあったからだ。まさか、インフルエンザを患った人を試験監督にはできない。その翌年からは、号令者とタイムキーパー、運用管理者は、試験当日の朝に、体調のチェックリストを試験実施本部に提出することになった。現在、病気ではないか？ 前日の十八時以降に飲酒をしたか？ また、服用している薬の名前がわかれば記入する欄もあるとか。そして、チェック欄の最後には、こうあるそう。試験の前日八時間以上の睡眠が確保できましたか？ いやはや、試験をする方もたいへんなのだ。集められた体調チェックリストは、試験開始の二時間前に点検され、不適切と判断された教員は、交代となる。すると、交代要員の控室が必要となると。さて、この控室なのだが、インフルエンザ等の感染を防ぐため、試験実施本部と五十メートル以上離れた場所に設置するようにとマニュアルに書いてあるという。しかも、試験実施本部の人間とは、原則として直接会わずに学内電話を使用することが義務付けられているのだ。つまり、われわれ教員の考え方が土台、間違っていたのだ。試験を受ける権利というものは、学生の側の権利だから、試験実施本部は、その権利を充分に保証するために、最善の努力をすることが課せられているのである。このことを忘れてはならない――。

ところがである。一年前、そのとある大学の友人が試験実施細則を守らなかったという落ち度で、試験実施本部長名で厳重注意の通告を受けた。私は、さっそく友人のために一席設けること

にした。やつは、いい男。慰めてやらねば……。ことの次第は、こうだった。この男は、学生の間に親切居士といわれる御仁。篤学の士でもある。かの親切居士めは、試験終了直後に、ひとりの学生が、氏名の記入を忘れていることに気付いたのであった。それでは、せっかく試験を受けても徒労に帰すではないか。そこで、本人に対して、名前を書くように注意をしたのだという。ところが、翌日、ネット上でその行為が大問題となった。試験は複数の教室で同時に行われている。特定の教室だけで、教員が氏名の未記入に気付いた学生だけに注意を与えた場合、特定の学生だけに利益が誘導されたというのだ。うむ。では、氏名を未記入の学生を発見した場合、どうすればよいのか――。聞けば、その時は、教室の学生全員に対して、記入漏れがないか、連呼し、未記入者を無くすようにせよ、とのマニュアルがあるそうだ。そうかあ、個別に注意してはいけないのだ。そこで、私は、自分の勤務する大学にも同じマニュアルがないか、急いで調べてみた。幸い、そんなマニュアルはない。よかったあ。とはいえ、そのマニュアルは、道理に適合している。守るのが当然である。半年前のテストで、私は、氏名を記入するのを忘れていた学生を発見した。私は、教壇に立ち、「まだ、氏名記入をしていない人がいます」と二度、注意喚起をした。学生たちは、自分の答案を確認、ホッとした表情。よかった。

ところがである。未記入の学生は、私の注意喚起などに耳を傾けてはくれない。私は意を決して、「もう一度言います。まだ……」と三度目の連呼。しかし、それでもまだ……。なにー。よし、四度目の正直だ。「まだ……います」。どうだ。ところが、まったく気付く気配すらないではないか。学生たちは、くすくすと笑いはじめる始末。もうこうなったらしょうがない。私は、本人の横までゆき、「まだあー」と大声を出した。しかし、一喝しても、まだ。困った。今度は、本人の目を見ながら、「まだあー」と大喝。ようやく気付いてくれたのであった。学生君いわく、書

いたと思い込んでました、と。

以上は、すべてフィクションです。大学の試験制度を揶揄する気持ちなど、鴻毛ありません。

(二〇一四年六月)

古典学習今昔物語

とある酒席で、歌人の永田和宏さんから、

上野先生、歌を作らない人が、ほんとうに歌を理解できるとお思いですか？

と質問されたことがある。私は「あのう……」「そのお……」と言うばかりで、質問に答えられなかった。同様の質問を俳人の坪内稔典さんからも受けた。

国文学者って、創作するのはタブーなんですか、創作すると研究がダメになるんですか？

私は、「いやあ、そんなことは……」を繰り返すばかりで、返す言葉もなかった。なんと、なさけないことだ。私には、まがりなりにも『古典不要論への反撃!』書評劇場』（笠間書院、二〇一五年）という著書があり、〈研究〉〈創作〉〈評論〉を一手に担った折口信夫の本も書いた男なのだ（『折口信夫的思考―越境する民俗学者―』青土社、二〇一八年）。一言ぐらい、反論なり、意見開陳なりすればよいのに、どうすることもできないのだ。それらの本を書いた時の大言壮語はどこへいった、と我ながら情けない。そこで、お二人の質問には答えられないものの、今の古典学の来歴について考えてみたい。

江戸時代までの古典学習は、古典を学ぶ必要のある人、ないしは古典を学びたいと思う人が行

なうものであった。簡単にいえば、古典学習は、知識人のものだったのである。

では、どのように学習されていたのだろうか。基本的には、先生に付くか、塾に入り、そこでまず「句読師」と呼ばれる指導者から、句切りを学んで素読し、その後に、師から講義してもらうのが一般であった。そして、師の講義の後に、師に対して疑問点を問う「問答」や、自分の意見を師や塾生に対して開陳して、互いに批判し合う「会読」が行なわれるのが普通であった。だから、形骸化していても、一応、論語学而篇第一の「学びて、時にこれを思ふ」というかたちになっていた。その学習到達目標は何であったかという点、師や塾の力なしで自分で古典を読解できる力を養うことと、古典に擬した漢文、和文、和歌を自分で作れるようになることであった。だから、今日でいう〈創作〉も〈評論〉も学んでいたのである。

こういった塾では、もちろん、「束脩」といわれるお礼が発生するので、江戸時代には、プロの古典教師が生まれ、塾が永続できるようないわばビジネスモデルが確立されてゆくことになる。これは、一つの古典の家元制度でもあったから、塾の代表者は、実子か養子が継承することが多かったのである。この古典の家元制度は、明治時代まで続く。本居派の後継者である本居豊穎（二八四—一九一三）、平田派の後継者の平田延胤（二八二—一八七二）などが、その最後の家元たちということが出来るだろう。こういったシステムに養成された明治期の文学者をひとり挙げるとすれば、樋口一葉（一八七二—一九一六）であろう。一葉に文を書く力を与えたのは、近代学校ではなく塾なのである。

明治時代は、文明開化の時代であったから、近代の学校のなかに、日本語、中国語の古典を学ぶところなど存在し得るはずもなかった。「古典」といえば、「西洋の古典」だったのである。その反動が起きるのは、ようやく明治十五年（一八八二）以降である。東京大学古典講習科や、皇典

講究所の設置によって、近代学校における古典学習がはじまってゆくことになるのである。この近代学校における古典教育のパイオニアこそ、芳賀矢一（一八六七—一九二七）という人物であった。したがって、近代国文学の成立とその教育システムには、芳賀の思想が色濃く反映されている。芳賀は、ドイツの古典研究を範としたから、近代国文学の遠祖は、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（一七六七—一八三五）や、アウグスト・ベック（一七八五—一八六七）といっても過言ではない。芳賀たちがめざしたのは、よき日本国民を作るための国文学の構築であった。簡単にいうとそれは、近代国家が美德と定めた伝統を古典から学ぶことであり、フンボルトやベックがよきドイツ国民を作るために古典教育をしたのと相似形であることは間違いない。しかし、初期の国文学には、塾時代の雰囲気も残っており、高野辰之（一八七六—一九四七）にみられるように、彼らは創作者でもあった。

では、古典学習に、決定的な影響を与えることとなったのは、何だろうか。それは、「受験古典」の誕生である。大学や師範学校に「国語」「国文」の講座が出来て、中等学校で国語の授業がはじまり、「国語」と「漢文」の試験がはじまると、古典学習はその中心が、

① 初見の文章を早く正確に読む

② ①の目的を達成するために、語彙と文法学習を行なう

ことに力点が置かれることになる。今日の古典教育者のなかには、この「受験古典」を蛇蠍のごとくに言う人もいるが、古典教師の多くが、この「受験古典」によって生活していることを思えば、これを無碍に否定することは、天に向かって唾を吐くことになってしまふ、と思う。 magari なりにも、私も含めた古典教師の生活を支えているのは「受験古典」なのである。私は、「受験古典」の成立を明治末から大正期と考えている。重要なことは、この「受験古典」には、〈創作〉や〈評

論〉がないということだ。

一方、大学や師範学校の教師となるためには、論文や著書が必要となってくる。すると実証を旨とする論文を競争者より先に書くことが求められるようになるのはいうまでもない。つまり、学界は、実証主義の権化であるから、とにかく細分化された議論のなかで、「小さな発見」ばかりを追い求める論文が、就職のために大量生産されることになってゆくのである。すべてが「さまつ」なのだ（もちろん、自己批判の気持ちには込めている）。かくして、〈研究〉〈創作〉〈評論〉は分断され、互いの交流すらもなくなっている。第一、書く雑誌媒体すらも違うので、〈研究者〉〈創作者〉〈評論家〉は、別々の言語空間に住む住人といえるだろう。

ここからは、夢想を述べる。私の未来教室だ。最初の二大家の質問に対する答えにもならないが、述べてみたい。

おい、皆、今朝思いついたんだが、これから一年間は、教科書を使った授業はやめることにした。幸い、今日は天気がいいから、皆弁当を持って、外に出ろ。校庭の梅の木のもとで花見だ。酒も用意してやる。学級委員長。三万円渡すから、酒買って来い。天を日傘に、大地を敷物にして、一杯やろうじゃないか。

一応、国語の授業だからなあ……。よっしゃあ、皆、へっほこでもよいから歌を作れよ。クラスの三十二名全員だぞ。この一カ月は、その歌の批評をしあって、それから皆で三十二首の歌に序文を付けるんだ。それも、漢文でな。その手本にはなあ、かの昔の書の大家、王羲之^{おうぎし}大先生の「蘭亭の序」というものがあるから、図書館で見っておけ。

校庭には、今、生まれた蝶がおるかもしれんし、空には北に帰ってゆく雁が飛んでいるかもしれない。そういうのをどう表現するかだな。ただなあ、序文を書き終わるまで、『万

葉集』の巻五は読むなよ。授業のネタバレしてもおもしろくなるからなあ。序文が書き終わったら、そのあと、俺がゆるゆると講義してやるさあ。大学の講義要項シラバスのことなんて、ほっとけ。あんなもんは、屁のつっぱりにもならん！ 上野のシラバスのページには、あつかんべーとでも上から書いておけ。そんなもん知らん。あとは野となれ、山となれだあ……。

と、ここまで書いたところで夢から覚めた。果たして、夢の続きは、どうなるかあ……。永田先生、坪内先生、この答えではダメですよねえ……。

近代の古典学習と、前近代の古典学習が決定的に違う点は、古典を学びたい人がしていた学習が、受験のための学習になったことであろう。そして、そのなかで、〈研究〉〈創作〉〈評論〉が分断されていたのである。こう考えると、古典の学習というものは、塾で行なわれるべきものかもしれない、と思う。が、しかし。近代学校で育った国語教師たちのなかにも、その「受験古典」を糸口にして、古典世界に学生を導き入れようと偉大なる語り手になった人びともいた。「声に出して歌わなきゃあ、『万葉集』なんてわからない。歌われた現地にゆかなければ、歌なんかわからない。さあ、歌いましょう。歩きましょう」と説いた犬養孝（一九〇七―一九九八）。まるで、平安時代の女房が語り出したかと思うような口調で、ふんわりと『源氏物語』を語る村山リウ（一九〇三―一九九四）。二人とも、学界では、蛇蠍のごとくに言われたが、私は二人を尊敬している。いや、手本としている。少なくとも、教え子たちの一部は、古典の良質な読者になっていったのだから。

古典は、その師の語りのなかに再生するものである。今、古典教師に求められるのは、その語りの力を磨くことしかないのではないか。熱く楽しく語る以外に、古典学習再興の道はない。

今、私はそう思っているのだが――。

(二〇一九年八月)

万葉びとの生き方

この世でね 楽しく生きたらね……

あの世では 虫になっても鳥になっても 俺はかまわんさ

踊らにゃそんな

生きとし生ける者は――

ついには死を迎える

ならばならば この世にいる間は……

楽しく生きなきゃー ソン！

すべての束縛から逃れて自由に生きたい、と思うことがある。しかし、そうもゆかない。明日からの生活は、いったいどうするのだ。人が守るべき礼教によって生きる生き方を礼教主義という。これに対して、礼教に抗って生きる生き方を反礼教主義という。

この反礼教主義が、もっとも顕著に認められるのは、中国六朝期(三三―五八九)の知識人たちの言動においてである。その代表格が、後に竹林の七賢人といわれる世捨て人たちである。また、

七賢人の生き方に深く共鳴し、自然体の生き方を希求した詩人・陶淵明^{とうえんめい}も、今日的な言い方をすれば、反礼教主義の旗手だったといえよう。彼らは、超俗的な生き方をめざし、世を捨て、隠世して、酒と書を愛して生きる生き方を選んだのである。

『世説新語』という書物には、竹林の七賢人のひとり、劉伶^{りゅうれい}の伝が収載されている。彼は、「酒徳頌」という文章で、礼教を声高に説くエセ紳士を痛罵し、酒の徳をひたすら説いている。礼教を説くエセ紳士を完膚なきまでに叩く文章は痛快ですらある。その劉伶の逸話を一つ示しておく。

劉伶は、いつも粗末な荷物運搬用の一輪車に乗り、一壺の酒を携えて、後ろには、鋤を荷った付き人を随行させていた。そして、付き人にこう言ったのだった。「俺が死んだなら、すぐ穴を掘って埋めろ」と。彼は、肉体を土や木のごとくに思い、気ままな暮らして一生を過ごしたのであった。劉伶は、自らの肉体を土や木のように考え、自分が死んだなら、葬儀など無駄なことをせずに、すぐに穴を掘って埋めろ、と常に指示していたのである。これは、一つの反礼教主義の帰結であるということもできる。一種の葬儀不要論でもある。しかし、果たして、劉伶の命令は、実行されたのだろうか。それは、わからない。なぜなら、生前に死んだらすぐに埋めろと命令できても、自分が死んでしまえば、自分の葬儀を取り仕切ることなどできないからである。

この劉伶の生き方にあこがれた人物が日本にもいた。かの万葉歌人・大伴旅人である。彼は「讃酒歌十三首」という劉伶へのオマージュともいべき作品を残している。十三首のうちの二首をここに示しておこう。

この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫に鳥にも 我はなりなむ
生ける者 遂にも死ぬる ものにあれば この世にある間は 楽しくをあらな

『万葉集』巻三の三四八、三四九

である。その釈義は、冒頭に示しておいた。来世、そんなもんは知らんさ、この世で楽しく生きられたら、来世で虫に生まれ変わっても、鳥に生まれ変わったって知るもんか。とにかく、この世に生きている間が大切なんだから、楽しく生きなきゃソンだろうという、現世肯定の反礼教主義である。

私は、この生き方に憧れるけれど、残念ながら実践する勇気がない――。

(二〇一八年十一月)

我迷うゆえに、我あり――

歌とは、文字で作られたスナップ写真である、と思う。

数年前、私はドイツに旅をした。マインツに、ハイデルベルク……私は百四十枚もの写真を撮った。しかし、ああつ、なんと、帰りの空港へ向かうタクシーの中にカメラを忘れてきてしまったのだ。もう、後の祭りだ。意気消沈。ある友人はこういう。「思い出が残るから、それでよいではありませんか」と。私は答える、「写真があれば、もっと思ひ出は鮮明に蘇る」。ある人はこう

言う。「また、行けばいいじゃないですか」と。「いや、一期一会ですから」と私は答える。なんとぐさめられても、喪失感はない、どうすることもできない。まるで、自分の記憶の一部が失われたかのような気持ちとなった。

たぶん、よしんばカメラを持ち帰ったとしても、ほとんど写真を見返すことなどないだろう。でも、あの写真をもう一度見られないうちにと、無性にいとoshいのである。はっきりいって、どうせ下手な素人写真だ。よいか、すばらしいから、失ったのが惜しいのではない。存在そのものに意味があるのだと思う。それが、かけがえのなさというものだ。つまり、写真は、私がある思いを持ってドイツの街を巡った証なのだと思う。それは、人が生きるということそのものではないのか。万葉びとは、文字で自らの思いを後世に伝えようとした。

ここに、ひとりの男がいる。その名を山上憶良(やまのうえのよしか)という。大宝元年(七〇二)第七次遣唐使に任命された男、時に四十二歳。いわば、遅咲きの出世だ。和銅七年(七一四)正月五十五歳で正六位下から従五位下となり、ようやく貴族の一員となった憶良。霊龜五年(七一六)四月五十七歳で伯耆国守となるも、この頃よりリュウマチと考えられる病に苦しんでいる。人生、ままならぬものだ。神龜三年(七二六)頃、筑前国守として筑紫に赴任、神龜五年春頃に大宰帥大伴旅人を迎えている。時に六十七歳。筑紫に文芸の花を咲かせたのも、この男であった。その憶良が筑前国守の任を離れて帰郷したのは、天平三年(七三一)頃のこと。その後、天平五年(七三三)ころ死亡したと考えられている。以上が、憶良の人生のあらましだ。

その憶良の作として、もっとも有名なのが、この歌である。

銀も
金も玉も

なにせむに

優れる宝

子に及かめやも

（『万葉集』巻五の八〇三）

仮に訳文をつけると、

銀も

金も玉も

それがいったい何になるというのか――

子に勝る宝など

あろうはずも無し！

となろうか。

子を思う親の愛

『万葉集』で、もつとも有名な歌の一つで、親の子を思う愛を語る時に、常に引用される歌である。しかし、忘れてはならないのは、これが長歌に付いている反歌であり、その長歌には序文が付いているということだ。したがって、当該の短歌体一首を味わう前に、序文と長歌を見ておく必要

がある。まずは、序文から。

子等を思ふ歌一首〔并せて序〕

釈迦如来、金口に正しく説きたまはく、「衆生を等しく思ふこと、羅睺羅のごとし」と。また説きたまはく、「愛する子に過ぎたりといふことなし」と。至極の大聖すらに、なほし子を愛したまふ心あり。況や、世間の蒼生、誰か子を愛せざらめや。

憶良は、釈迦が「金口」すなわち、お釈迦様に具わったとされてる金色の口から出た言葉を引用している。それは、衆生すなわち民衆を平等に思うことは、羅睺羅のようだというのである。羅睺羅は、お釈迦様が在俗時にもうけた子供の名である。つまり、自分が民衆を思う心は、自らの子である羅睺羅を思う心となんら変わりが無いということである。それほどの思いで、民を愛しているというのである。さらに、お釈迦様がいうことには、「愛するということでは、子供に及ぶものはない」と。仏教でいう「愛」は、執着や耽溺の対象となるものであり、迷いの根源となるものである。お釈迦様のごとき「大聖」すら、子に心を奪われ、執着し、迷いの心が生まれるのに、まして、世の中の「蒼生」すら、子に心を奪われ、執着し、迷いの心が生まれないといっているのである。つまり、子供への執着から逃れられる人など、この世にはいないのだと序では説かれているのである。結句の「誰か子を愛せざらめや」は、「誰か子を愛さない人はいないだろうか」の意だが、ここでいう愛は人を迷いの道に追いやる根源だから、罪悪そのもののなのである。子を愛し、家族を愛する心情は、一つの欲であり、自己と他者の救済を標榜する仏法とは相容れないのである。ために、仏教者としての信念を貫くには「出家」をしなくて

はならないのである。そして、続く長歌には、

瓜^{うりは}食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲^{おも}はゆ いくより 来^{きた}りしものそ
まなかひに もとなかかりて 安眠^{やすみ}しなさぬ

(巻五の八〇二)

とある。「瓜を食べると子の子のことが思い出される。栗を食べれば、まして偲ばれる。どこからやって来たものなのか、眼の前にむやみやたらにちらついて、私の安眠をさまたげるものは」という意味である。瓜と栗は、子供が好むものであり、それを口にすれば、自然と子供のことが思われるというのであろう。

信仰中心主義か、人間中心主義か

このように見てゆくと、憶良が学んだ仏教の教えは、愛を迷いの根源とし、その最大のものこそ子供への愛情だと説くものであった。ところが、憶良は、そういう迷いというものを人が脱しきるのは不可能だ。第一、お釈迦様でさえ、子供への愛は断ち切れないのだからと説く。つまり、人の人たるところは迷うというところにあり、その迷いから人が解放され得るものではないというのが憶良の立場である。信仰を中心に考えれば、子は迷いの対象であり、家も妻子も捨て去るべき対象だが、人の人たるもの、そうはいかない。子への愛を断ち切ることなど人間のできることではないというのである。これは、一つの人間中心主義といえよう。信仰中心主義では、教義に殉じることが第一であり、仏教においては迷いの根源を絶つことが求められる。人間中心主義

では、人の幸福の方が教義に優先する。とすれば、人はずっと迷いの中にあるということになる。それでもよいのだというのが、憶良の思想なのである。

憶良という男ほど、仏教に造詣の深い人物はいない。と同時に、彼は常に人を愛するということを考えていた。つまり、憶良の人生観は、人生は迷いの中にあり、それでよいのだという考え方である。迷うのはあたりまえだ。お釈迦様でも迷うのだから、という論法である。私は、そこに憶良の思想の真骨頂を見るし、「子等を思ふ歌」を書いた憶良の思想を看取する。

我迷うゆえに、我あり

それが、憶良の主張なのである。

(二〇一二年七月)

学生の学力低下などない

若者の学力低下を訴える教員が多くなった。私は、そういう「てあい」に出会々と、こう言うことにしている。

若者の学力低下、そんなの何の問題でもありませんよ。教員の学力低下の方の問題に比べれば……。

私は、言いたい。教員が学生の学力低下を嘆いてどうする。その教育をしているのは、誰なのか？それに、若者の学力は、ずっと上昇しつづけていると私は考えている。年寄りの学力が、低下しているのだ。海外で仕事をするために、どうしてもスマホに切り換えなくてはならなくなった。

そこで、ショッピングに行くと、私には、まったく話がわからない。すると、店員さんは、申し訳ありませんが、若い人といっしょにご来店していただけませんか……とのこと。そこで、学生二人を連れてショッピングに行くと、あれよあれよという間に、自分にあつた機種を選ばれ、機能設定も。それに、学生の説明も、じつにうまい。

そんなことは、スマホの使い方であつて、学力とは関係ないという人もいるだろう。でも、考えてもみるがよい。この現代社会を、よりよく生きるためには、スマホを上手く使うことが必要ではないのか。それも学力ではないのか？

とあるボランティア活動で、お汁粉を三百食作ることになった。彼らはどうしたか。お汁粉の作り方を、まず調べ、次に一番安い食材を過不足なく買い、ガスコンロや調理器具も、すべてを揃え、四日後に三百食のお汁粉を作った。残飯ゼロ。餅入りで、一食三十二円也〔光熱費は入らないが、十名のボランティアの交通費は上乘せしている〕。ボランティア確保、調理法の学習、食材の入手、レンタル、すべてネット上で行なつたのだ。この国の若者は、優秀だ――。

（二〇一六年九月から連載中の文章の一部）

お粗末な抱負

「抱負」というほど高邁なことではないが、年頭にあたり、気にしていることはある。年の初めに何とも冴えない話だが、ご寛恕を乞う。

今年、五十歳になる。研究歴や教育歴が長くなると、どうしても原稿依頼や講演依頼が増えて

くる。それに、大学や学会に運営にも、それなりの責任を果してゆかなくてはならない。ただ、青年期には、そういう活動ができることを目指して、一応の学者修行を渋谷の地で積んだのだから、喜ばしいことではある。恥ずかしながら、わがモットーは、全力投球だから、それなりに努力は惜しんではないつもりなのだが、多くの依頼に応えることで、一つ一つの仕事のクオリティーが落ちてはいないか、気になりはじめた。なんとか、それを保っているのは、奈良大学のわが研究室のスタッフの力だと思う。おかげで、昨年は、第七回角川財団学芸賞を受賞することができたし、オペラ「遣唐使」の原作と脚本を書き上げることができた。また、國學院大學夏季古典講座にも出講できたし、なんと國學院栃木学園の中高生二〇〇〇名の前で話をすることもできた。今年は、オペラの再演も予定されているし、小説のオフアも来ているから、いい仕事をしたいと思っている。

ただ、華やかな仕事ばかりに心を奪われてしまうと本業の研究が疎かになる。ここは、気持ちの切り替えが難しいところだ。研究を怠けると、こわい院友の諸先輩からのお説教が待っている。近年、歌木簡と呼ばれる仮名書きで歌を記した木簡があいついで出土し、考古学・文献史学・国語国文学の精鋭たちが、研究にしのぎを削っている。それは、このタイプの木簡が、『万葉集』に定着する以前の、古代社会におけるいわば歌の生態のごときものを考える手掛かりとなるからである。わたしも、この一年で数本の論文をものしたのだが、その解釈をめぐる大阪市立大学の榮原永遠男教授（日本木簡学会代表）と激しい論争になっている。昨夏、國學院大學で開催された上代文学会・古事記学会の合同大会では、手厳しい批判を受けた（母校なのでばつが悪いこと限りなし）。その上、榮原教授の新稿では、なんと七頁にわたって批判を受けた。何としても、一矢を報いねばならぬのだが……。

（二〇一〇年一月）

大宰府政庁復原の初夢

こんな初夢を見た。

時は令和十年二月八日のことである。福岡県、太宰府市の大宰府政庁跡が復原された。四王寺山の緑を背景に、朱色の柱に天平の甍が並び立ち、大宰帥・大伴旅人に扮した福岡県知事と、山上憶良に扮した太宰府市長が TeeP カットをすると、古式豊かに雅楽が奏される。唐の音楽も奏されれば、高句麗の音楽も奏される。いやいや、ベトナムの楽も奏された。林邑^{りんぎ}だ。中国、韓国、ベトナムの大使たちが、異口同音に蘇った天平の甍、大宰府政庁に歓声を上げているではないか。聞けば、毎日ここでは天平の宴が催されるという。日本の観光客ばかりでなく、東アジアからやって来た観光客も楽しめるように、各国の古代の雅楽が、ここでは毎日見られるのである。もちろん、レストランもある。古代食を復元したさまざまなメニューを見るだけでも楽しい。一日、三万人の観光客が押し寄せ、大伴旅人もその疲れを癒した二日市温泉には、新しいホテルが五軒もオープンしたという。

博多での一泊は、食と都市観光の一泊だ。そして、太宰府と二日市での一泊は、古代を学ぶ旅である。そのあとは、阿蘇に行くもよし、別府に行くもよし、長崎に行くもよし、九州の各観光地に人びとは足を運ぶ。太宰府は、古代の国際都市であり、その古代の国際性に立脚した新しい観光都市として、いま、生まれ変わったのである。と、いうところで、夢から覚めた。

果てしない夢と言うかもしれないが、奈良県奈良市の平城宮跡では、すでに朱雀門と大極殿の復原がなされ、新しい観光スポットになっている。じつは、十二世紀までの日本の古代国家は、

大和と山背^{やましろ}の都を中心として、東西に延びる二つの軸を持っていた。東の軸は、宮城県多賀城市まで延びていた。多賀城は日本という国家の東の拠点だ。これに対して、西の軸は、大宰府まで延びる。大宰府は、九州を統括する官庁であるとともに、大陸文化の玄関口であった。つまり、律令国家は、大和、山背を中心として、東の多賀城、西の大宰府を拠点とする国家だったのである。なんとといっても、政治文化の交流の拠点は、鴻臚館^{こうろかん}（福岡市中央区）と大宰府だった。多賀城も、平城京も、大宰府も、広くいえば、首里城も、中国の洛陽・長安をモデルとする古代の東アジアの都のひとつである。新羅の月城も、そのひとつで、古代の東アジアは、〈漢字〉〈儒教〉〈律令〉〈仏教〉のネットワークによって形成された文化圏なのである。わかりやすいえば、箸で食事をする人びとは、その東アジア古代文化圏の末裔だと考えてよい。

平城京の遺跡の活用のために、平城京は国営公園となり、その後、大きな発展を遂げた。このあたりのことについては、優秀な官僚の皆さんたちに、知恵を出してほしいところだ。費用は、クラウドファンディングで、五十億を集めればよい。そうだ。雅楽の舞人は、留学生たちに頼もう。

さてさて、私は何をすればよいか。中国語と韓国語で、『万葉集』が解説できるようにしておかねば——。観光ボランティアとして。

（二〇二〇年一月）

宮中歌会始陪聴記

今でも、あの日のことは、夢ではなかったのか、と半信半疑でいる。えもいわれぬ衣擦れの音がして、両陛下と皇族方の姿が見えると、そこは別世界となった。そして、朗々と響き渡る声―。あれは、夢ではなかったのか？

光栄なことに、本年一月十六日に宮中正殿松の間で行なわれた歌会始の儀のご招待を受けた。歌会始には、陪聴者という制度があつて、歌会始に参内できるのである。「陪」とは付き従うということであるから、「陪聴」といえば、付き従つて聴くということになる。

昨年は、御代替わりの年であり、改元が行なわれた。新元号「令和」は、『万葉集』巻五の梅花宴序を出典とするもので、われわれすべての万葉学徒は、その元号のもととなった文章の解説をあちらこちらで求められた。そんな折も折、陪聴者選ばれたのだから、冥界にいる両親や師も喜んでゐる、と思う。

意外なことだと思われるかもしれないけれど、宮中の歌会始には、司会者というものがない。不敬な言い方となつてしまふかもしれないが、その空間には、歌を作った人、歌を読み上げる披露者、そしてその歌を聴く人しかないのだ。披露とは、定められた作法に従つて、詩歌を披露することをいう。つまり、その場にいるすべての人びとが、その披露に耳を澄ます空間。それが宮中歌会始の儀なのである。宮中に寄せられた多くの歌から選ばれた歌、そして天皇陛下をはじめとする皇族方の歌々が、次々に披露されてゆく、ただ、それだけの空間であつた。

歌は、人と人を結び付ける大切なコミュニケーションの道具である。心と心を通わすために、

人類は何万年も前から歌を歌つてきた。そして、ここ日本では、天皇と国民は、歌を通して千年以上も前から交流しているのである。だから、私は、奈良大学で、歌は歌うものだと言ふ学生たちに教えてゐる。宮中歌会始とは、歌以外には何もない空間だつた。何もないほうがよいのだ。天皇と国民と歌だけがあればよいのだ。

夢うつつのうちに、陪聴の記をここに記す。

(二〇二〇年一月)

改元一年の「令和」

なんという一年だろう。台風は家々を飲み込み、コロナウィルスは、私たちから平和な時間を奪ひ去つた。でも、私たちは、生き抜いてゆかねばならないのだ。一年を振り返つて、つくづくそう思う。「令和」は、『万葉集』巻五、梅花宴序の良き字、二字から採用されている。「初春令月、気淑風和」の二字である。「令」は美しきこと、「和」は風がなごむように、平穏であることを表している。しかし、日本列島は天災にみまわれ、隣国との外交関係も、日々厳しさを増している。けつして、私たちは、美しく心とむ時代を生きているわけではないのだ。

じつは、梅花宴序の時代も、けつして恵まれた時代ではなかった。飢饉が起ると疫病が流行り、飢饉と疫病が交互にやつてきた時代だつた。隣国・新羅との外交関係も最悪だつた。「天下泰平」の時代ではなかったのだ。しかし、この時代に二つの至宝が生まれている。天平彫刻と『万葉集』だ。この二つは、世界の宝物だ。

苦難の時代に、祖先は世界の至宝を作ったのだ。だから、私は希望を捨てない。もともと元号とは、来るべき未来を祝福するものだからだ。元号は、当然、その時代が始まる前に命名される。それは、生まれ来る子供の名前と同じだ。親は、その子供の人生を祝福して、そうあってほしいという願いを込めて名前を付ける。令子さんが美しい人生を歩めるか、和夫君が平和な人生を歩めるか、そんなことは誰にもわからない。だから、名前も元号も、願いのかたちなのだ。願っても、意味がないという人もいるかもしれないが、願いがなければ、叶いもしない。

九州・大宰府ゆかりの「令和」は、私たちに大切なことを教えてくれた。九州が大和と並ぶ万葉のふるさとであること。もう一つは、大宰府政庁こそ文化の中心であって、寺社や学校も出来たということを知らしめたことである。

今、私たちは困難の時代を生きている。願いをかたちにするのは祈りであり、願っても叶うことは稀だが、願わなければ叶わない。だから、私は心から令和の時代がやってくることを願っている――。

(二〇二〇年五月)

みじかすぎるうた

一、五十年前に……

これから記すことは、記憶を辿って書くことなので、不正確であるかもしれない。が、しかし。

記憶というものも、心の中では真実であると思うので、そのまま記すこととする。おこがましいことだが、「小説」のようなつもりで読んでもらっても、かまわない。

私は、福岡県の現・朝倉市生まれだが、育ったのは福岡市だ。ために、博多育ちと紹介されることも多い。話は、中学に入学した年である。だから、昭和四十七年(一九七二)の話ということになる。

当時、福岡市内の中学校では、光村図書出版の「国語」の教科書が採用されていた。それがである。中学に入学した四月の教材が、いきなりフランス文学のジュール・ルナール(一八六四―一九一〇)の『博物誌』(一八九六年)だったのである。取り上げられたのは、得体のしれない短文が、脈絡もなく並んでいるだけのもので、まったく解説がなかった。引用だが、もちろん、これも記憶で書く。

- ・ 蛇、長すぎる。
- ・ よごれた百合の花ほどきたならしいものはない。
- ・ 枝が小鳥を見送っている。

そんな短文がずらずらと並んでいるだけのもので、教える方も手探りで、生徒はぼかんとしていた、と思う。教師も、生徒も、メジャーでないフランスの文学者など知るはずもない。北口という若い先生だったと思うが、中学一年生の私から見ても、その授業に苦勞されていたことを覚えている。

北口先生は、生徒に意見を求めるのだが、「蛇は長いです」とか「花は綺麗ですが、よごれた

ら綺麗じゃないです」とか、答えるしかない。私も、今なら北口先生と同じ戦法を取って、一応、これを詩とみなすとして、詩の言葉は、多様に解釈できるので、決めつけてはいけない。だから、自由に意見を言いなさい。どれもが、正解です、と言うかもしれない（しかし、この戦法はあまり取りたくない）。そうやって、生徒の意見を自由に掬い上げようとするだろう。

が、しかし、である。前後の文脈もないし、ルナルなんて、教師も生徒も知らないから、意見が出ないのはあたりまえだ。

なんでも、よかなら。どんな意見でも、よかなら、テストの時は、なんば書いても丸たいねえ。全員、百点になるとね。

そこで、私たちは、塾の先生に教科書を見せた。すると、塾の先生は、一見するなり、「こんなものは、教材として、不適切です。しかも、中学校に入ったばかりの生徒に、国語の授業というものは、こういうものだという誤解を植え付けます。よくないですねえ」と切り捨てたのを、今も思い出す。

では、上野家は、どうだったか？ 父は、「おふらんすたいねえ。誠、よかもんば、習ろうとるたいねえ」と笑っていた。母親は、「自由、自由といつても、それは嘘ばい。先生には決められた答えのあるとよ。それば、よく聞いてテストば書きんしゃい」と言う。今から考えると、母がいちばん大人だった、と思う。

二、いきなり、ジュール・ルナル

いきなり中一の四月に、フランス文学のジュール・ルナル。しかも、短文。生徒も教師も大混乱。生徒も、うむー。教師も、うむー。

よく、生徒に教師の考え方を強制するのはよくないという意見を吐く御仁もいるが、それは誤りである。それぞれの国家や地域には、それぞれの思想や信条というものがあって、学校はその定められた設置基準によって運営されている。だから、教室には、制限された自由しかないのである。「国家」「地域」「教室」「教師」「生徒」という関係性のなかで、われわれは生きているのであって、教室だけに無制限の自由があるわけではない。唯一、あるとすれば、その関係性のなかで、許容される自由に対して、個々人がその責任の範囲で、どういう態度で臨むのか、ということだけなのである。有史以来、制限のない自由など存在したことはないのだ。あるのは、強制と反発の歴史だけである。

私も、三十年以上、詩の授業をしてきたわけであるが、今は、こう考えるに至った。教師は、できるだけ自分の考えを学生に押し付け、べきである。「こうなんだ。こう考えなくてはならないのだ——」と声高に言うべきだと思っている。

詩というものは、いかなるようにも解釈できるんだ。それぞれが、それぞれの感性で解釈したらいいのさあ。

たまに、生徒にそんな幻想をいまだに語る教師がいるのを見ると、あからさまには忠告しないが、心の中で、怒りを含んだ冷笑をしている。ここで表向きにはいえない心中をさらけ出すと、

そういう考え方は、戦前の軍国主義的教育に対して、反発するかたちで強調されてきた考え方だと思えますけど、われわれ教員も生徒も、時代の軛くびきのなかで、制限された自由のなかでしか生きてゆけないんですよ。誰も、自由になんか、解釈できません。

私は、そう思っている。

閑話休題。それにしても、わが中一の教室は、大混乱していた。先生は、「蛇、長すぎる」に対して、

トカゲやカエルの大きさと長さを説明して、比べて長いだろうと説明し、「長すぎる」とは、蛇という動物の特徴と、それを見た時の驚きの言葉なんだよ、ともっていったような気がする。つまり、そう授業展開して、なんとか授業を終わらせようとしていたのだろう。その上で、蛇という動物の不気味さが、ここに表れているというように、まとめたかったのであろう。教師生活をしている私にも、その苦労はわかる。北口先生、あの時はお疲れ様でした。

北口先生の説明を聞いて、クラスの優等生で、美人のT子さんが、こう発言した。
 だったら、ムカデも長すぎます。

すると、教室は、「フランスにムカデはおらんとやなかとね」「蛇も子供やったら、トカゲと同じくらいの長さやろが……」「いいや、書いた人が、長いといったら、長かとよ。やから、蛇は長いと決めな、話にならんばい」と収拾がつかなくなってしまうたのである。

三、蛇喰い女

「蛇、長すぎる」。このジュール・ルナールの『博物誌』の一文をどう教材として、料理するか、教師の腕の見せ所だ。逆に生徒が「あたりまえだ」と言ったら、どう対応するのか。これも、難題。昭和四十七年（一九七二）春の福岡市立筑紫ヶ丘中学校の教室は、ますます混沌としてきた。というのは、ある生徒が、突然、「放生会」の話をしはじめたからである。博多宮崎宮の秋祭り（はちまきぐう）が、「放生会」である。しかし、これを博多っ子は「ほうじようや」と読む。「放生会」には、日本全国から見世物小屋がやって来る。そのなかに、このころ「蛇喰い女」という怪し気な出し物をする小屋があった。私も見たことがあるが、生きたマムシを手づかみにして、皮をその場で剥いで、ムシヤムシヤと食べるだけの芸なのだが、その口上がすごかった。呼び込みは、少女という触れ

込みであつたが、実際にやっていたのは三十代の女性だったと思う。

めぐるめぐる因果はめぐる。見てやって下さい。見るのが功德でございます。とにかく、見てやって下さい。憐れな姿を――。

もちろん、このあとも覚えているが、書きたくない。というか、書けない。書いてしまうと、今の人権基準に照らして、問題があるからだ。前世の罪のために、具体的には言えないけれど、蛇を食べなければいけない身体となったというようなことを言っていた。五十年前とはいえ、今考えると、これは容認できる人権水準ではなかった、と思う。

話を、混乱の教室に戻す。「蛇、長すぎる」という短文に対して、この蛇喰い女の話を出した時は、さすがの北口先生も、慌てていた。先生は、「長いことと、食べることは違うよね」と言っ、なんとか、その場は収まったような気がする。というか、生徒たちも、北口先生に同情したのだ。

「蛇、長すぎる」から、蛇の不気味さが話題となった。ここまでは、よい展開だったと思うけれど、あとの「蛇喰い女」がよくなかったのだ。しかし、生徒の好奇心は、そんなことはお構いなしだ。不気味さ繋がりで、「蛇喰い女」までいってしまったのだが、これは授業での話題としては、まったくもって不適切である。今、私が授業をやったとしても、この展開はまずいと思う。

自由にイメージを広げてよいと言っても、教室とて、前述したように、一つの社会なので、自ずと制限というものはあるのであって、話題も選ばれるのである。逆に言えば、教室というところは、そういう社会の掟を、社会から隔離されたところで練習する場所なのだ。

時代によって許容度は異なるが、性や死に関わるタブーのなかで、権力との距離の取り方をそれぞれが慮って、われわれは生きているのである。そのタブーや権力との距離の取り方を学ぶこ

とが、社会性を身につけるといふことなのである。
それにしてもだ。とんでもない教材だった、と思う。

四、不評きわまりない教材

十二歳の四月の授業で、文脈なしに、ジュール・ルナールの短文を教える。とんでもない教材で中学校の授業がはじまったものだ。その謎にせまるチャンスが、ついにやってきた。

かれこれ十年前だと思うが、この教科書を作った光村図書出版の仕事を引き受けた。内容は、インタビュールとグラビアであった。私は、この機会に、あのいきなりルナールの謎を聞きたかったので、雑誌『飛ぶ教室』の編集者に、訊ねてみた。編集者は、たいへん困った顔をして、

ではあ、会社で聞いてみます……。

と言ってくれた。数日後、元氣のない声で電話がかかってきた。

そのころの教科書の担当者たちは、すべて退職しておりまして、もう一人も残っていないですよ。すみません。

という話だった。しかし、私は、どうしても、あのわけわからん教材を十二歳のわれわれにぶつけた理由を、知りたいのである。私は、なおも、調べてくれるように頼み込んだ。すると、二週間後、今度は、申し訳なさそうな声で、こんな答えが返ってきた。

先生のいうルナールの短文は、あまりにも不評で、すぐにほかの教材に切り替えられたそうです。当時は、フランス文学大好きな名物編集者がいたようで、その人が、無理に入れたそうですが、結局、数年しか続かなかったそうです。それ以上は、わかりません。すみません。

なるほど。そうだったのかあ……と私は思った。「蛇、長すぎる」の授業がなされていたのは、ほんの数年間だったのか。それにしても、どんな編集者だったのか、知りたい……。しかし、結局、その編集者の名前すらわからなかった。わかったのは、会社内で語り伝えられるほどの不評教材であったということだ。

ここまで読んでくれた読者の方々には、私がなぜ、中一の体験を書いているのか、もうお分かりのはずだ。

文脈なしに、短い文を読むという作業が、いかに困難なことかを考えるためである。「歌集」の場合、こんなことによく迷う。並べられている前の歌と、後ろの歌は、果たしてどんな関係にあるのか、いやなんの関係もないのか。これは、難しい問題なのだ。

いくつかのケースが想定されよう。

A 一連の流れのなかで、作られている場合（連作）↓関係あり

B たまたま編集の都合で隣り合わせになっただけである場合（編集上の都合）↓関係なし
ところが、Bの場合、

B' 隣の歌どうしは関係がないから、無関係の歌として読むべきである。

B'' 隣の歌どうしは無関係だが、偶然だとしても、読者が関係づけて読んでもよいはずだ。

じつは、『万葉集』の巻十や巻十一を読む場合、ここが難しいのである。もちろん、現代の歌集でも同じだ。

五、蛇↓長すぎる↓不気味

ルナールの短文を、中学一年生の「国語」の授業で鑑賞する。この時に、

蛇↓長すぎる↓不気味

というイメージ展開を、教師側は求め、そこにフランス語と日本語という言葉の壁を越えて、作り手と読み手の共同体のようなものを作ろうとしたのであった。これは、詩の授業の定石だ。しかし、そうは問屋が卸さない。

蛇↓長すぎる↓不気味↓放生会↓蛇喰い女

ここまで生徒の連想が進んだところで、教師側は、強制介入して、話題をストップさせたのである。もし、今、私が大学で、しかもゼミナール形式の授業でやるなら、ほんの少しだけだが、展開させることができるだろう。こんな具合だ。

皆さん、食文化というものには、当然、地域差というものがありませんよね。日本では、蛇を食べるという食習慣は無いので、当然ゲテモノ喰いということになってしまっています。しかも、それを観客の前で、蛇の皮を剥いて、生で食べるとなると、観客にきわめて大きなインパクトを与えることになりますね。

こう説明した上で、私は、見世物小屋どうしの競争ということを導き出そうとするだろうし、祭りという祝祭空間においては、日常世界では、普段許容されないことが許容されるということを導き出したいところだ。しかし、そううまくはゆくまい。仮に、ここまで授業展開できたこととして、夢の授業の話を前に進めよう。

見世物小屋どうしは、当然、競争しているよね。すると、どうしても、過激な出し物で、人を集めなくてはならなくなる。この小屋は、日本ではおどろおどろしい、蛇の生食を見せて呼び物にしたわけだね。お祭りというものにはね、日常空間とは異なる生活ルールが適用されることもあるんだ。暴力性に関するタブーも一時的にはあるが、許容

されることもある。しかし、それとて無制限ではないから、祭りでも、暴力行為で検挙されることもあるよなあ。過度な裸の露出で逮捕されることもあるよね。

こう展開したいところである。そして、祭りと性開放、暴力の具体的な事例について話をすることになる。

さて、問題は、ここからである。どうやってルナールの「蛇、長すぎる」に戻るかだ。やはり、難しい。無理やりにこう戻ったらどうだろう。

蛇喰い女↓不気味↓不気味なものを食べる↓長さもその不気味さの構成要素の一つ↓だれもが感じていることをあっけなく短文にしてしまうおもしろさがここにある

こう展開したらどうだろう。「皆が思っていることを飾り気ない短文でいうところに、おもしろみがあるのじゃないかね」と。

六、知識だけが大切なのか？

教室で、前後の文脈抜きに「蛇、長すぎる」について語り合う。なんとシュールな授業だ。そんな授業が、五十年前には行なわれていたのだ。ひよっとすると、世界の最先端の詩の授業だったかも。逆にこう考えたらどうだろうか。前後の文脈から切り離された一文が、語られてゆくことによって、一つの文脈を獲得してゆく過程を楽しませる授業であった、と。

ジュール・ルナールの『博物誌』（一八九六年、Histoires naturelles）は、さまざまな事物についてルナールが語った短文集で、いわば短文の動物園、短文の博物館と考えてよい。われわれは、その不思議さを味わうのみであるのだが、それは、『博物誌』を一冊読み通してみても話なのであって、一文だけを取り出して、語りあうことなど、ルナール本人も予想だにしていなかったことである。

う。ちなみに、蛇の前を見ると、

蛭蚓みみず

こいつはまた精いつばい伸びをして、長々と寝そべつてゐる——上出来の卵饅頭のやうに。

やまかがし

いつたい誰の腹から轉がり出たのだ、この腹痛は？

(ジュール・ルナール、岸田國士訳『博物誌』白水社、一九三九年)

こんな具合なのだ。ここから「蛇、長すぎる」だけを取り出して、皆で自由に語り合ひましようと言つても、土台無理な話ではないか。

ところが、同じようなことを、日本の教育現場では、よくやっているのだ。一つは、中高の「古典和歌」。万葉、古今、新古今の代表歌を並べておいて、授業するというもの。たいがいはどう展開するかというと、教師の側では、和歌史を展開して、その代表歌を取り上げるといふ体で授業をしてゆくのである。つまり、和歌の歴史を学びましようね。その代表歌を見てゆきましようね、という展開である。一つの方法だろう。しかし、かといって、中途半端に、文学史の知識を注入して解釈すると、ミス・リードすることも多い。

もう一つは、近・現代短歌で、正岡子規からはじまって、土屋文明、俵万智まで一つ一つを鑑賞してゆく授業である。ただし、こちらは、地力のない教師だと、歌人の略歴と無理やり代表歌を結び付けて、解釈をしてゆくことになる。第一、前後の脈絡のない一首を個々に解釈してゆく

という授業は、たいそう退屈なものである。

「フィガロの結婚」は、フランス革命前夜のフランス社会のことがわかれば、楽しく観劇できるが、それも一つの鑑賞法なのであって、知識によつて、型にあてはめられた作品解釈が導き出されるだけではないのか——。また、それでモーツァルトの音楽を理解したことになるのか。

とある無知な音楽家は、バッハを二十世紀の存命中の作曲家だと思ひ込んでいたらしいが、その演奏は見事なものであったという。それで、いいのだ。

七、解釈の強制こそ大切である

誤解を恐れずにいうと、教室においては、教師は独裁者でよいと思う。

歌というものは、どのようにでも解釈できますというのは、無責任きわまりない態度だ。解釈の枠組みを示して、その枠組を意識させつつ、はつきりと正解を述べるのがよい。独裁者は、独裁者らしく振舞うべきで、自信たっぷり語るべきである。

大切なのは、教えられた側が、反発できる環境をどう確保してやるかなのだ。強制して、反発を招くかたちで話を進めるのが、よいはずだ。強制された解釈に、反発が出るということは、新しい解釈が生まれる契機になるからである。ただし、人間は感情の動物だから、なかなか難しい。師・賀茂真淵と、弟子・本居宣長も、その感情を乗り越えるのに苦労していた。

一方、知識を得る楽しみというものもある。「蛇、長すぎる」なんて、どうしてそんな文が書かれたのか——。知るチャンスを四十年を経て得たからである。五年か、六年ほど前だったと思うが、そのチャンスは、大阪は天王寺、それも場末の飲み屋で突然訪れた。居酒屋の主人が、おもしろい人が、今、客として来ているから、上野先生に紹介します、と言うのである。見ると、

その人は、不貞腐れた顔で、ちびちびとひとり酒していた。どこか、近づきたい印象はあったが、それでいて人を寄せつけないというほどでもなかった。もじもじしながら、私が名刺を差し出すと。

知ってますよ。万葉の上野先生でしょ。

じつは、私はこの手の言葉に弱い。名譽欲があるからだ。もちろん、私とて大人だから、すぐにこう返した。

ファーブル昆虫記の翻訳で有名な奥本大三郎先生とお会いできるなんて、おフランスにあこがれている私としては、光栄です。

たまたま同じ雑誌に連載していたこともあって、楽しい時間を過ごすことができた。もちろん、こんな千載一遇のチャンス逃してはいけない。すかさず、質問しなくては……。

じつは、中一の春に、ジュール・ルナールの短文で「国語」の授業がはじまりましたね。なんで、あんなものからはじまったのか、わからないんですよ……。

すると、奥本先生は、それはおもしろい。でも、そんなもんで、「国語」の授業になりましたかあ、とお笑いになった。私は、もちろん、みんな困っていました、と答えた。そして、奥本先生は、私にこう言い放ったのである。

ルナールの短文はね。それまでのフランス詩文に対する反発、反逆なんです。西洋の詩は、いろいろな規則があるでしょ。それを破ろうとしたんです。その時に参考としたのが、日本の短歌と俳句のフランス語訳ですよ。あの短文は、日本の短歌、俳句の真似なんです。

「ええつ、ほんとですかあー」と、私は声を上げた。

八、なんと、短歌・俳句の真似！

中一の春、いきなりルナールの短文ではじまった「国語」の授業。その短文は、日本の短歌・俳句の真似だったのだ。

おつ、奥本先生——。ということは、ルナールの短文は、日本の短歌・俳句を真似したもので、そつ、それを私たちは翻訳で読んだんです。そんなものをよくぞまあ、教材にしてくれたもんですね。

私の驚きが、奥本先生に伝わると、奥本先生も楽しそうに話してくれる。

日本人って、口先ではいろいろ言いますけど、やはり日本好きなんです。だからジャポニズムの影響を受けた印象派の絵大好きでしょ。この手の話、日本人大好きですよ。陶磁器、浮世絵が大人気だったことは有名なんですが、短歌や俳句も訳されてもてはやされていた。だから、ルナールも、短歌、俳句の仏訳を読んで、その簡潔さに惹かれたのじゃないかね。

上野さん、フランス料理って、一皿一皿出てくるでしょ、あれもね。日本の懐石料理の真似なんです。それに、綺麗なあの盛り付けね。あれも、懐石料理の真似だなあ。なんでも、おフランスが一番というのも、幻想じゃないかなあ。でも、日本人のジャポニズムに対する関心の高さも、いびつな国粹主義だと思うけどなあ。

奥本先生は、私にこう話してくれた。フランスの詩文には多くの決まりごとがあり、ルナールは、それを打破しようとした。そんな時に、日本の短歌や俳句を見て、その簡潔さと自由にあこがれ

て、短文を書いたというのだ。

が、しかしである。日本の短歌や俳句というものは、そんなに自由だったかあ？ 私は、すぐに、奥本先生に、こう返した。

短歌や俳句は、使用できる歌語も限られているし、季語の制約などもあって、自由じゃないですよ。漢詩だって、韻を踏まなきゃいけないしー。自由じゃない。

奥本先生は、大きく頷かれて、「どこにも青い鳥はいないんですねえ……」と言われたのを、今でも、昨日のことにように覚えている。

近代における短歌・俳句の歴史は、いわば「革新運動史」である。「堂上和歌」といわれる宮廷中心の歌をどう「国民」のものとするか。伝統を踏まえつつ、その時々々の生活実感をどう短い詩に盛り込むか。その場合、どこまでを作者の自由として許容するのか。その許容範囲の設定をめぐって、歌壇も俳壇も、争ったのである。

縛りを解こう、解こうとするほど、逆に、それが強いこだわりとなって縛りになる。世界一自由で短い詩は、世界一縛りの大きい詩であるということを忘れてはならない。ここに、この国の詩に纏わる「幸」と「不幸」があるのである。表と裏に。

九、おい、責任者出てこい！

何ということだ。

ルナールの短文は、短歌と俳句の真似なのだ。では、それを知って、ルナールのジャポニズムを知って、中学生になった子供たちに、この短文を読ませたのか。それにしても、なぜいきなり、おフランスなのか。私は、この教科書の編集者に会ってみたい。しかし、たぶん全員物故者だろう。

そこで、まず、ルナールの日本趣味を知って、この教材を冒頭に据えたという前提で考えてみよう。その場合、編集者は途轍もない大きな愉楽を味わったに違いない。教室での大混乱を想定した上で、じつはこれって、ジャポニズムの結果なんだよなあ、とほくそ笑んでいたはずだ。かの芸術の国、おフランス。そのおフランスの文学にも、わが日本の短詩系文学の伝統が影響を与えていたのです。中学生になった皆さん、日本を見くびってはいけません。諸君——、ここから、「国語」の学習をはじめたまえ！ と言いたかったのであろうか。

次に、ルナールの短文に、日本の短歌、俳句の影響があったことを知らずに教材にしてしまったバージョンで。えっへん。これからは、国際感覚というものが、日本人にも、求められる。「国語」の授業といえども、日本だけに閉じこもってはいけない。世界に眼を開くために、私たちはあえて、外国文学の翻訳から教材を採り、最初に載せたのだよ。そのうち、この教科書では、魯迅やヘルマンヘッセの翻訳も扱うが、とにかく国粹主義はいかん。そういう戦前からの国粹主義的国文学とその影響を受けたところの「国語」の固定観念を打破するつもりで、中学生となった君たちに、ルナールの短文を学んでもらうことにした。

この前説にも後説にも、それぞれ大きな欠陥がある。ジャポニズムと知った説では、ではなぜその種明かしをしなかったのか。それが、問題だ。ジャポニズムの影響を知らなかった説に立つと、国際感覚を身に付けさせるのなら、なぜこんなに特異な変則的な実験文学のようなものを、最初にもってきたのか。奇妙奇天烈ではないか？

われら、博多の悪ガキ中学生は、「蛇、長すぎる」から放生会で見た「蛇喰い女」の話題でもちきりになった。それは、誰も予想できなかった展開であった。しかも、その話題は、不適切な話題として封印されたのである。

不適切だったが、結果論としていえば、短い言葉から、予想もできなかったイメージが展開されたこと自身に意味があったかもしれない。ならば、こんな詩の授業は、いかがか？ここに、スプーンを用意する。スプーンに塩と唐辛子を混ぜたもの、塩と砂糖を混ぜたものを盛り付ける。せいのうが、ハイで、それを二人が同時に口に含む。いつ吐き出してもよいが、吐き出す前に、単語を五つ書く。それを繋げて詩を作れ、という授業だ。

「蛇、長すぎる」↓「蛇喰い女」は、思いもよらぬイメージの展開で、言葉が新しいイメージを引き出したといえなくもない。でも、そこまでシュールな授業など、誰も望まないだろう。

十、詩を支える文脈

「蛇、長すぎる」という一文を詩として、詩の授業をする。そんなことできるのだろうか。私は、この授業について、さんざん批判をしてきた。でも、その私が、この授業の担当者になったとしよう。つまり、五十年前の北口先生の役割を、今、自分が担うとすれば、どういった授業をするのか——。私が答える番だ。ここまできて、逃げるわけにもいくまい。

私なら、授業の冒頭にこう話し出すと思う。

詩の授業というものは、難しいよね。「蛇、長すぎる」という短文でも、詩といえば詩だし、難しいよなあ。考えなくてはいけないのは、詩というものを支えているのは、つながりなんだよ。いわば「かん・けい・せい」（関係性）。

私は、ここで「つながり」「関係性」と言ったが、高校生以上なら「文脈」という言葉を使いたいが、したがって、中学生になら、「文脈」ということについて、こう説明することにするか。

あのね。「つながり」すなわち「関係性」だよね。ちよつと難しい言葉だと「文脈」とい

うことになるかね。脈って、一つの流れだよね。「一二三」なら次は、「四」だよね。「二四六」なら次は「八」だよね。つまり、「つながり」「関係性」「文脈」でものを見ないとにも見えてこないんだよ。ところがだよ。私たちに与えられているのは、「蛇、長すぎる」だけだよ。はて、どうしよう？

ここが、この授業の前半の山場である。なんとかして、「では、前後の文脈を皆で考えよう」と、つなげたいのだが、そうは問屋が卸してくれないだろう。教室という場所には魔物が住んでいる。「二期一会」という名の魔物だ。紙上授業だから、うまくいった体でここは話を進めよう。

「蛇、長すぎる」という言葉が、どんな時に、口について出るか、皆で考えてみないか。つまりね。

「文脈」がないから、自分たちで「文脈」を作って、補おうというわけさ。

つまり、生徒に前後の文脈を考えさせたいわけである。いやあ、こう書くのは容易いが、うまくゆくことなんて、あり得ないのではないか。まあいい、続けよう。紙上授業だ。

きりん、高すぎる。

これを、どうしても生徒の口から出させたいのである。「ヒョウ、速すぎる」でもいい。「くじゃく、きれいすぎる」でもいい。動物シリーズなら、

蛇、長すぎる。麒麟、高すぎる。豹、速すぎる。

と出れば、万々歳だ。そうしてゆくうちに、詩は詩を取り巻く環境によって、文脈が補われていることに気づいてほしいのだが——。

十一、夢の授業

副題の「夢の授業」といっても、夢について語る授業のことではない。「夢のように、私の思

いどおりに展開する授業」である。独裁政権下の国会のようなものをイメージすればよい。ここまで読めば、読者はすでに「夢」についての「文脈」を意識しはじめているわけだ。「蛇、長すぎる」の「文脈」を読者の側が補ったらどうなるか。私は、夢の授業について、すでに語り始めている。「文脈」を補うことこそ、創造力の源であるということを、中学生たちに、なんとか教えたのである。恥ずかしいが、こんな詩を作ったらどうだろう。

蛇、長すぎる。

秋の夜、長すぎる。

君との夜、短かすぎる。

読者のなかに、「あほかあ」という人もいるだろうし、中学生がそんな授業を受け入れるはずもないという人もいるだろう。私も、そう思う。しかし、ここは、紙上の夢の授業なので、ご容赦を——。この詩の力点は、当然、三行目にあるはずである。いわば、「オチ」ということになる。実際には、中学生の側から、こんな詩が出てくることもないだろう。では、教える私が、突然、思いついたかのように、黒板に板書するのか。それも、あまりにも強引な授業展開である。

ダメだ。いくら「夢の授業」でも、ダメだ。しかし、ここは、強引に書き進めてゆく。このどうしようもない詩を、改作しよう。

蛇、長すぎる。

長すぎる、秋の夜もある。

でも、あなたとの夜は短かすぎる——。

とでもしようか。そのうえで、私は、こう種明かしを、中学生にする。

ごめんなあ。じつは、この詩はね。本歌といってね。元歌があるんや。ちょっと話は難

しくなるけど、「本歌取り」といって、本歌を元歌として、新しく歌を作ることがあるんだ。その元歌はね。

秋の夜を

長しと言へど

積つもりにし

恋をこひ尽くせば

短みじかりけり

(『万葉集』巻十の二三〇三)

という歌なんだ。秋は夜長だろう。でもね。つもりにつもったあなたへの恋心、その恋心を尽くすには、短かすぎる、ということだね。

ここまで展開すると、詩というものが、誘発的なものであり、できあがった詩同士が、互いの文脈を支えあっていることに気づいてくれるはずである。詩の文脈というものは、詩の内側にも外側にもあることをわかってもらいたい。以上が、結論なのだが、今、この原稿を捨てたくなった。恥ずかしくて。

十二、種明かし

五十年前の福岡市立筑紫ヶ丘中学校の国語の授業から、夢想が夢想を呼び込み、賢明な読者を、あちらこちらへと引きずりまわしてしまったことについては、重ね重ねお詫びを申し上げたいと

思う。

しかし、そこは、人間の悪い、私のことである。その裏には、ほのぼのとしているように見せかけて、激烈な現代短歌批判があることを、もう賢明なる読者は気づいているはずだ。

現代短歌は、一つのコンクール短歌である。つまり、基本的に、一首完結主義である。だから、文脈を外になるべく求めない構造設計となっている場合が多い。

が、しかし、である。本来、短詩系文学というものは、その詩を核として、イメージを広げてゆくものである（連歌がその典型だ）。だから、古典和歌というものは、似た歌すなわち「類歌」のお花畑になっている。その似た歌々が、個別の歌を支えあって、文脈を形成しているのであって、けっして、一首で完結するものではなかったのだ。それを意図的に行なえば、本歌取りになるだけの話なのである。つまり、現代短歌は、もっと外に、その文脈を広げてもいいと思う。有名歌の類語を作ってやろうくらいの気持ちが必要なのではないか。

さらに、話を大きくする。それは、現代芸術全体を覆う病についての話である。基本的に、十八世紀までの芸術は、発注者がいて、芸術家がそれを受注して、作品が生まれていた。教会に飾るなら、まず飾る場所によって大きさが決まり、発注者の注文通りに、時にはその期待を上回る作品を納品するものだったのだ。だから、求められるキリスト像、マリア像が次々に造られたのである。教会と宮廷のための芸術である。それらは、互いに似ているが、それでいて少しずつ違っていた。じつは、日本の芸術も同じだったのである。柿本人麻呂は、持統天皇を讃え、山部赤人は聖武天皇を讃えるために、和歌を詠んだ。したがって、そこには、おのずと類型性があった、カタがある。そのカタを踏襲することが、歌を詠むということだったのである。そのカタのなかで、天皇の寵を競ったのである。カタのなかでの熱い戦いこそ、和歌の神髄なのである。だ

から、皆よく似ているのだ。

ところが、カタを提供していた宮廷や教会が力を失うと、ブルジョアや庶民が芸術を支えるようになる。つまり、大口発注者がなくなり、小口発注者に変わるのである。すると、そこに求められるのは、カタではなく個性となる。芸術は個性の発露となる。私にいわせれば、ラファエロもダヴィンチも似たものだと思うが、印象派以降は、互いの個性の戦いとなり、モネを見ればモネとわかり、ルノアールを見ればルノアールとわかる絵を描くようになる。

現代短歌は、文脈を外に求めず、個性の戦いをしているように、私には見える。つまり、常に新しさを求めて、現代短歌は漂流しているのではないか――。

個性は大切だが、私には、個性の戦いに少々疲れているように見えるのだが。はて？

(二〇一九年十二月～二〇二〇年十一月)

ことば・ことば・ことば

古い言葉を学ぶこと、自らの言葉を磨くこと、そして分かりやすい言葉で、それを発信すること。そう心がけてはいるのだが……。

粹な人

「粹」ということを説明するのは、難しいものです。「粹」というのは、その振る舞いや言葉の美しさをいう言葉です。私なりにいわせてもらうと、心に余裕があつて、さわやかな言葉遣いや、振る舞いができる人は粹な人です。

この話は、宮崎県の稲用博美元副知事から、直接聞いた話です。とある放送会社の社長さんは、お客さんが来るとわかると、必ず、一階の玄関に出て、そのお客さんを待つのだそうです。お客さんは、社長さんおん自らが、玄関にまで降りて待っているのを見て、恐縮するのだそうです。ですから、必ず、お客さんは、

申し訳ありません。私などを出迎えていただく必要はありませんのに、申し訳ありません。困ります。そんなことをされては。

と言うそうです。すると、その社長さんは、

いやいや申し訳ないです。わざわざ出迎えに来たわけではないんですよ。たまたまお見送りがありまして、今しがたお客さんが帰ったところに、あなたが来られただけなのですから。

と言うのだそうです。ところがです。お客さんが何回、その社長さんを訪ねても、その社長さんは、玄関にいますのだそうです。そこで聞くと、「いやあ、今しがた帰ったお客さんがいまして、お見送りしたばかりなんですよ。わざわざでなくて、ごめんなさい——」と言うのだそうです。つまり、わざわざお出迎えをしたということになると、相手に気を遣わせるので、いわば嘘をついて

いるんですね。これが、大人の気遣いであり、粹というもののなのです。礼儀として、相手を出迎えるのは当然だ。だから、待っていました、と思わせないので。なかなか、ここまでできる人はいません。

もう一つ、粹な話を。これも、大人の話ですが、よく味わってみて下さい。私には、よく行く銀座のお寿司屋さんがあります。その女将さんは、もう八十歳ということですが、着物姿も凛として、白い割烹着がよく似合う、すてきな方です。とある夏のこと。私が汗をかけて、店に入つて来ると、店の人が、「まいど。ありがたい」と元気よく声をかけてくれました。すると、すぐに女将さんがおしぼりを持って来てくれて、こう言ってくれました。

上野先生は、お酒を召し上がらないでございますよね。だったら。お茶は熱いのと冷たいのと、どちらにされますか。

私は、熱いお茶でもよかったのですが、喉が渴いていたので、冷たいお茶を頼みました。そのあとの言葉が、じつにかっこいいのです。

上野先生は、高貴なご身分のお方でいらつしゃいましょう。

私は、いったい何を言われたのか、見当もつきません。どうして、冷たいお茶を頼んだら高貴な人になるかなんて、皆目わかりません。私が、キツネに抓まれたような顔をしていると、

殿中、松の廊下は、長ござんすからね。ですから、高貴なお方にお茶が運ばれて来る時には、冷めちまっている。だから、高貴な方は、猫舌で、熱いお茶なんぞ、召し上がらないでございます。

解説しますね。江戸城には、松の廊下という長い長い廊下がありました。偉い人がお茶を頼んでも、その廊下を通る間に冷めてしまう。だから、偉い人は、熱いお茶を飲んだことがない。そ

いう意味です。私は、思わず膝を打ちました。そして、こう言いました。

その通り、冷たい茶を所望いたす。持って参れ。

すると、女将さんは、「へーい！ 殿さま！」と冷たいお茶を持って来てくれました。

見るということ

私は、福岡県で育ちました。両親は、幼稚園児の私をツタンカーメン展という古代エジプトの展覧会に連れて行ってくれたり、さまざまな絵画展にも連れて行ってくれました。また、家族で、音楽会にもよく行ったものです。

さて、パウル・クレー（一八七九—一九四〇）という有名な画家がいます。近代抽象画の巨匠です。ところが、抽象画というものは、何が描いてあるかわからない。いっしょにパウル・クレー展を見に行った父は、私にこう言いました。「これなら誠のらくがきの方がうまいんじゃないかあ」。たしかに見ると、ほんとにらくがきそのものです。父は、もちろん冗談で言ったのですが、私はほんとうにパウル・クレーより絵がうまいと思いました。なんということをいうんだ。クレーの絵は、数千万円から億するものもあるんだ。そんな絵と子どものらくがきが、いっしょのはずがないじゃないか、と思う人が多いと思います。

では、絵の価値というものは誰が決めるのでしょうか。それは、間違いなく人間です。しかも、絵を見るのは一人一人ですよ。他人の眼を借りて、絵を見るなどということはできませんよ。

とすれば、絵の価値というものは、一人の人間が、一人の人間として決めるべきなのです。だから、ある人が、パウル・クレーの絵より、俺のらくがきの方がうまいと決めれば、それで絵の価値というものは決まるものなのです。人は知らず知らずのうちに、決められた価値観で、ものごとを見てしまうという悪い癖があるのです。これを「先入観」といいます。よく絵の展覧会に行くと、有名な画家の有名な絵には、たくさんの人ばかりができています。有名な絵ならよいのでしょうか。だとすれば、その人は、ほんとうにその絵を見ていないということになりますね。あなたが、その展覧会に行って、よいなあ、すばらしいなあと思った絵がよい絵なのです。先入観でものを見る人は、何も見ていないのと同じです。

戦前に、有名な歌舞伎役者が、パリのルーブル美術館に行きました。案内人は、ギリシャ彫刻の傑作、ミロのヴィーナスの前に連れて行って、これが傑作だ。これが傑作だと、まくしたてました。すると、この歌舞伎役者さんは、こう言いました。

いくらルーブルだ、ルーブルだといったって、こりゃいけませんねえ。だって、壊れて
いるじゃありませんか。壊れているんじゃ、たいしたもんじゃない。

もうわかっている人もいると思いますが、ミロのヴィーナスは、作品のすべてが残っているわけではなく、一部失われたところがあります。この役者さんは、壊れたものは、壊れたものだ。だから、よくないといったのです。いやいや、芸術品というものは、そこにあるものがすばらしければ、壊れていようがいまいが、それでよいはずだ。まして、ミロのヴィーナスについて、そんなことをいうのは、教養がないからだという人がいるかもしれません。でも、いろいろな見方があってよいはずですよ。

数年前、神戸に有名なゴッホ（一八五三—一八九〇）の自画像がやって来ました。私は、その絵の

前に立って、五歩右に寄ったり、五歩左に寄ったりして、奇妙な動きをする人を見ました。すると、その男の人は、こう言いました。

いや、よーけ塗つとるやないけ。ずいぶん絵の具、使うとるね。絵の具代、かかった絵やね。俺ペンキ屋やから、ようわかるんや。

その場にいた人は、失笑していましたが、私は虚心坦懐に絵を見ている人だと思いました。そうです。値段が高いからとか、国宝だからといって絵を見ている人は、何も見ていないのと同じなのです。

心をつなぐということ

私の教え子で、宮城県気仙沼出身の女子学生がいました。あの東日本大震災で甚大な被害を受けた街です。ちょうど、三年生で、帰省している最中に、彼女は被災したので、大学側は慌てました。私も、慌てました、私たちは何度も電話をしたのですが、まったく繋がりません。三日目のこと、ようやく電話が繋がって、ほっとしました。彼女は、早口で、次のように言いました。

ありがとうございます。私とその家族は無事です。今、電話が繋がりましたが、電話が繋がらない人がたくさんいます。ですから、これで電話を切ります。奈良大学に帰るのは、少し遅れます。申し訳ありません。

こう言って、彼女はすぐに電話を切りました。私は、彼女の偉さを知りました。自分たちが長く

話していると困る人たちもいる。だから、これで電話を切りますと言ったからです。五月の中葉過ぎに、彼女はようやく、キャンパスに戻って来ました。彼女は、私たちに、こう話してくれました。

いろいろなお手伝いをしましたが、三月後半になると、だいぶ落ち着いてきました。

そこで、高校の同級生と話合って、こんなことをはじめたのです。何のお役にも立てないんですけど、津波があったのは三月でしょ。高校に入学が決まっていた子たちは、もう制服を買っていたんですね。ところが、津波で流された人も多かったんです。考えてみたら、私たち卒業生の家には、制服がまだあるでしょ。思い出に一着くらいは、とっておくものです。その制服を借り集めて、全部サイズを書いて、避難所の一室に用意したんです。そして、制服がない人は、貸し出しますって。入学式の時に、制服がないというのは、可愛そうじゃないですか。それに、被災者の方々は、中途半端に同情されるのは、いやなんですよ。あの人は、制服がないのは、可愛そうだなあ、というようにね。だから、制服のレンタル屋みたいなことをしました。お金は、タダなんですけど。でも、しまっていた制服が役に立ったといっって、貸した方が、喜んでくれたんですよ。役に立つ嬉しさというものも、あるんですよ。

恥ずかしい話ですが、彼女の方が、私などより、ずっと大人だし、立派だと思いました。だから、私は、彼女のような人間になりたいと思いました。人には、人それぞれに、プライドというものがあります。尊厳というものがあります。被災者に衣服を与えればよい。食事を与えればよい。住むところを与えればよいというものではないのです。相手を思いやる心というものがなくてはならないということを、彼女から学んだのです。ボランティア、ボランティアというけれ

ども、その場に行って、自分で感じて、自分にできることがないか、探すということが大切なのでしょう。心と心というものを、どう繋いで、それを力としてゆくのかということを、私は学んだのです。はて、どっちが学生か教師か？

その話を聞いていた落語研究会の部員たちが、彼女が働いた気仙沼の地区に、出前の寄席をすることにしました。彼女は、すぐに貼り紙を大学構内に出しました。「寝袋を持っている人は、貸して下さい。気仙沼で使います」すると、三十以上の寝袋が三日で集まりました。彼女は、こう言いました。もちろん、行けば布団は貸してくれますよ。でも、ボランティアに行った私たちが、被災者の方々にお世話してもらうことになるケースが多いんですよ、と。

日本も捨てたもんじゃない。

弱さを知る

強くなりなさい。がんばりなさい。後ろを見てはなりません。前進あるのみ。私も、中学生や高校生の時、そう教わってきました。ですから、弱さを知るなんていうことは、必要のないことだと思っている人も、多いことでしょう。強くなることは大切です。がんばることも大切です。でも、人は時として、自らの弱さを知ること大切です。

大学には、ゼミナールというものがあります。これは、教授という指導者のもとに、研究を進

めてゆくグループのことを言います。Yさんは、虫が大好きです。ところがOさんは、虫が大嫌いで、大の苦手です。ですから、研究室に虫が入ってくると、大騒ぎになります。じつは、かくいう上野先生も、虫が苦手です。ですから、虫が研究室にやってくると、Yさんに頼んで、捕まえてもらい、外に放ちます。ところが、ある時、Yさんの苦手なものがあることに気付きました。Yさんは、高いところが大嫌いで、高層ビルのエレベーターに乗ると顔面蒼白となり、足はがくがく……という感じです。ところが、私とOさんは、平気のへいぎです。つまり、自分にも、他人にも、弱い点があるということですね。

自分にも弱いところがあるのだから、他人にも弱いところがあるだろう。だから、他人が困っていることがあれば、手助けしてやろう。そう思うべきなのです。自分は強いんだ。何でもできるんだ。そう思っている人がいたら、ほんとうに、そうかなあ、と思ってみて下さい。ほんとうに弱いところは、ありませんか。人は、自分の弱さを知ってこそ、他人にも優しくなれるのです。

織田信長（一五三四―一五八二）という武将は、自らの才覚によって、新しい時代を作りました。しかし、京都に入って、安心していたのか、あまり護衛をつけずに本能寺に泊まってしまいました。そして明智光秀（一五二八頃―一五八二）に殺されてしまいました。豊臣秀吉（一五三七―一五九八）は、その持ち前の明るい性格で、人々の心をついて、天下を統一しましたが、無理に無理を重ね、朝鮮に出兵し、多くの人びとに悲しみを与えました。私がいいたいのは、こういうことです。どんなにすぐれた人でも、愚かなところはあ、ということ。おそらく、自分が優れていると思った瞬間に、人はその愚かさを忘れてしまうのです。自分の弱いところ、自分の愚かなところを知る人のことを賢者といいます。つまり、かしこい人です。

自分にも弱いところがある。自分にも愚かなところがあるとわかっている人は、他人にも優し

くなれます。自分も人の力を借りなければ生きてはゆけぬと思っていれば、他人が困っている時には、自然と手を貸すものなのです。

食べ過ぎで、おなかをこわして苦しんでいる友達を笑うことは簡単ですが、自分にもそんな経験はないか、考えてみるべきです。勉強がよくできる人は、自分の力でほかの人の成績も上がるようにしてあげるべきです。

世の中というものは、競争で多くのことが決まってゆきます。進学先も、就職も決まってゆきます。ところが、実際には、協力し合ってやって成し遂げる仕事の方が、だんぜん多いのです。と、ここまで書いたところで、こんなことは、私などより皆さんの方が、よくわかっていると思います。若い人の方が、ボランティアなどの経験をもっているからです。あの東日本大震災の時も、多くの若い人たちが、活動しましたよね。日本の社会は、競争ばかりしている社会から、協力しあう社会にならなければならないということを、いちばんよく知っているのは、むしろ若い人たちかもしれません。

(以上の四本は、二〇一六年四月〜二〇一八年三月に連載の文章の一部)

「思い入れ」と「思い込み」

座談に学ぶ

私の生まれは、旧甘木市。現在の朝倉市です。育ちは福岡市南区高宮。呉服町の洋品店のどら

息子なので、福岡の話は尽きません。福岡大学附属大濠高校の生徒であった私は、今でも「筑女」や「福女」と聞けば、胸が締め付けられるのです。だから、博多での酒宴は、楽しく、そして時にせつないものとなります。

今春もまた、酒宴と座談の機会を得ました。まあ、例によってとりとめのない話をしていたのですが、何かをきっかけに、「作問」の話となりました。相良浩文先生と、清水和弘先生が、問題を作る難しさを説かれると、私も思うところがあったので、身を乗り出して話を聞いてしまいました。その折のこと、佐々木英治先生が、自分の作った問題には、作問者それぞれに「思い入れ」もあるから、作成会議で批判されるのは嫌なものだが、それを受け入れる心がなくては、良い問題を作ることはできない、と述べられたのが印象的でした。清水先生は、執念のようなものが必要だとも言われました。たしかに、そうです。が、しかし。清水先生は、加えて、良い問題を作るためには、互いが忌憚なく批判することも必要だと、また念を押されました。

私は、相良、清水、佐々木の三人の大先輩の話を聞きながら、どんなに「思い入れ」があっても「思い込み」はあるものだなと、膝を打ったのでした。そして、こんな昔話を思い出しました。以下は、東京での修行時代のことです。

「思い込み」は大家でも

我が国の国語学、国文学界の権威で、いくたの学者を育て上げ、その学閥の総帥である某先生。その大先生が、ご講演。当時、駆け出しの学徒であった私が、襟を正して、拝聴したのはいうまでもありません。ところがです。大先生は、

そういう説は、まさしく「けんきようふえ」でありまして、認められません。あきらか

に誤りであります。

快気炎を上げているではありませんか。この言葉を聞いた瞬間に、私たちは、一瞬、互いの顔を見合わせました。そして、わが耳を疑いました。「けんきようふえ」、それは「牽強付会」すなわち「けんきようふかい」ではないのか。つまり、自分に都合のよいように、道理に合わないことをこじつけることではないのか、と。しかし、先生は、この道の権威者です。誰も聞かなかったことにして、その時はやり過ぎたと思います。けれど、我々、若手一同は懇親会で、陰口をさざんざん言って、その二次会では、腹の中の笑いの虫がおさまりませんでした。

いやー。まさに「牽強ふえ」だ。あの大先生は、辞書の編纂もしているから、その辞書には、「ふえ」ってふりがな振ってあるんだろーねえ。

もう、言いたい放題です。日ごろ、頭を押さえられていた若手一同は、溜飲を下げたのでした。もちろん、「牽強付会」は「けんきようふかい」なのです。話は、これだけでは終わりません。

その翌日のこと、私は学生たちにテストをすることになっていました。私は、時間が来たので、机の上にある参考書は、鞆の中に直して下さい。問題用紙を配布しますのです。

と言ったところ、東京の学生たちは、苦笑するばかり。たまりかねた学生のひとりが、「直す」って、「しまう」ことですかあ？

じつは、モノを仕舞う（収納）ことを、西日本の諸地域では「直す」というのです。元の位置に戻すということです。「しまった。俺が言ったのは、方言だったのか」と翌日気がついた時には、顔から火が出そうになりました。しかし、それだけでは、この話は終わりません。さらに、そのまた翌日のことです。自分の書いた文章について、読者から質問の手紙が届きました。

上野先生は「こういう文章を読むとへきへきする」と書いておられますが、それは漢字

で書けば「辟易」ですから、「へきえき」の誤りだと思えます。

その通りです。私は、自分の書いた文章に「へきへき」しました。「辟易」すなわち、尻込みするということです。これで、国文学者の私のプライドは、ずたずたに引き裂かれたのです。

何が大切か――

二十年前の出来事から学んだことが、二つあります。一つは、幾万の言葉を使って生活しているわれわれは、時に誤った言葉を覚えている場合もあるということです。それを指摘し、笑うことはたやすいことですが、むしろ正しい言葉も、誤った言葉も含めて存在している環境のなかで、私たちは暮しているのだ、ということを知っておく必要があるのです。もちろん、それは、大学者先生も。

（二〇一五年六月）

朝倉、博多ぶらぶら

朝倉は、わが父祖の地であり、博多で育った。母の介護を七年間したので、五十代にして私の博多弁には磨きがかかった、と思う。

あまい話、せつない話

小学三年生のころだったと思うが、柱に縛りつけられたことがある。といっても、児童虐待ではない。私は、博多育ちだ。祖父母、父母が営んでいた洋品店は、昭和五十年代にあえなく自主廃業とあいなったものの、昭和四十年代までは、それなりに繁盛していた。卸業だったので、店には、多くの店員さんもいた。

話は、四十五年も前のことだ。当時は、賄いや、掃除洗濯をするお手伝いさんが、三人いた。彼女たちは、住み込みで、入れ替り立ち替り、長崎県対馬のある村からやって来た。中学校卒業式の翌日、制服姿で博多に連れられて来るのだ。そして、翌日から、働き出すのだった。このおねいちゃんたちは、二十二、三歳までには、ほとんどがお嫁さんになって、店を辞めてゆくのを常とした。何を隠そう、私は、このおねいちゃんたちに、お世話になって大きくなった。小学校の二年生まで、お風呂にも入れてもらっていた。今から考えてみると、信じられない低賃金で、二十四時間勤務していたのではないか、と思う。私には、大好きなおねいちゃん(第一位)、好きなおねいちゃん(第二位)、そうでもないおねいちゃん(第三位)の三人が常にいた。夜は、ほとんど、このおねいちゃんたちの屋根裏部屋で寝ていたと思う。あの狭い部屋で、お話を聞きながら、寝るのがよいのだ。狭いから、よいのだ。狭いから、楽しいのだ。

そのおねいちゃんたちが、藪入りすると、必ずおみやげに持ってきてくれるお菓子があつた。「かすまき」というお菓子だ。簡単にいうと、カステラ生地で、黒餡を包み込んだ菓子である。つまり、カステラ卷だ。もちろん、博多の菓子屋でも売られていたのだが、対馬のそれは、手作りで

味がまったく異なっていた。まず、餡が手作りで、生っぽくて、あずきの風味がたまらないのである。博多の店で売られている「かすまき」は、大量生産で日保ちがするように作られているから、乾燥してパサパサしている。対する対馬のものは、カステラもしつとりしている。それに、なにより大ぶりなのだ。

ある日、近所のいたずらっ子が、私が屋根裏部屋で寝ていることを嗅ぎつけて、学級会で、「上野くんなあ、おなこの部屋で寝るとばい。女中部屋で寝るとばい」と公言したのだ。私は、とつさに、それは嘘だと大声でいった。もちろん、嘘ではないのだが……。その日から、私は、おねいちゃんたちの部屋で寝ることができなくなってしまったのだ。もちろん、両親のもとで寝るのだが、それでも、なんだかさびしい。たまらなく、さびしかった。その日を境に、私は、おねいちゃんたちと、あまり口をきかないように努めた。あるいは、性の目覚めの時が近づいたのだろうか。あの日を境に、おねいちゃんたちを女として意識しはじめたのだ。

それから、数カ月後、私は、私の秘密を暴露した、あの憎いやつめと言い争いになった。私は、につきそやつが、おいしそうに食べている「かすまき」を指して、対馬の「かすまき」がいかにおいしいかを力説したのだった。言わなきゃよいのに……。お前は知らないだろうが、天と地の違いだ、と。すると、だったら、俺のところに持って来い。食べてみて、対馬の「カスマキ」の方がおいしかったら、謝ってやる、というのだ。売り言葉に買い言葉。私は、おう買ってきてやる、といってしまったのだ。さて、どうしたら手に入るのだろう。対馬まで買いにはゆけない。

私は、泣きながら、大好きなおねいちゃんに、「対馬のカスマキがなかったら、おりや学校いかなばい」と訴えた。しかし、あいにく、このおねいちゃんは、藪入りを取ったばかりだ。私は、「くやしああー、くやしああー」と泣いたと思う。そして、母親の財布からくすねたお金を渡したの

であった。すると、このおねいちゃんは、港に行き、対馬から二日おきに干物を運んで来るおっちゃんに、お金を渡して、買ってきてもらおうとしたのだ。今から考えると不思議な話だが、島との間で連絡を取りたい人や、ちょっとした品物のやり取りをしたい人は、船着き場に行って、干物屋のおっちゃんのような知人を待ち伏せして、頼みごとをしていたのである。もちろん、必ず知人に逢えらるゝとは、限らないのだが、半日も船着き場にいれば、たいがい知った人に会うので、金品を預けたりすることができたのである。彼女はお金を渡して、買ってきてもらい、それを私に渡そうとしたのだ。

ところがだ。ボクと彼女にとっては、それは大金。しかも、干物の運び人のおっちゃんが、二日後、突然、店にやって来て、母に事情を話して、「かすまき」を渡してしまったのだ。

いきなり私は、床柱に縛り付けられた。母は、私に、お手伝いさんにとって、それがどれほどの大金だと思っているのか。お手伝いさんは、仕事でお前の世話をしているのだから、お前が命令を出すとは何事か。商人というものは、見栄をはってはならぬ、と絞られた。

後方で、大好きなおねいちゃんも泣いている。「かんにんして下さい。私が悪かです」と言いがた。ただ、幸いなことに、母親は、私がお金をくすねたことには、気がついていないようだ。母親は、大好きなおねいちゃんに、かすまき代を渡すと、店員さんを全員呼んで、お茶を入れて、「かすまき」を皆で食べた。私は、床柱に縛り付けられていたから、食べることはできなかった。でも、しばらくすると、やはりおいしい「かすまき」のあるせいか、場が和んできた。「まこと坊っちゃんのお蔭で、今日はかすまき食べられるとよ。ああ、うれしかあ……」と喜んでいるではないか。

さて、最後に、謎解きを。私は母の財布の金をくすねて、大好きなおねいちゃんに渡していた

のに、なぜ、母は気付かなかったのか？　じつは、大好きなおねいちゃんは、私が母の財布から金を抜き取ったと直感して、同額のお金を、こっそり母の財布に戻していたのであった。これは、大好きなおねいちゃんのお嫁入りの日に聞かされた話である。「まこちゃん、金ば盗んだら、警察につかまるとよ。もうしたらいかんばい」

これも今は昔、あまくせつない話である。

(二〇一六年五月)

お金が阿弥陀に光ります

当年、五十五歳とあいなった。まだまだ、若造なのだが、今日は、昔話がしたくてしょうがない。私は、博多育ちで、零細な洋品店の次男坊だった。結局、自己廃業の憂き目にあうのだが、昭和四十年代までは、家業もそれなりに繁盛していた。だから、祖父や父は、それなりに遊んでいた。あとからわかったことだが、祖父と父が遊んでいることは、子ども心にも、これまたそれなりにわかっていた。

四十年前も前の博多の商家では、盆暮れの二期払いが普通で、盆と暮れには、掛け取りの芸者衆のおねいさまがたが大挙してやって来た。当時の商家には、それぞれに畳にしている料亭や券番（置屋）があつて、盆と暮れには、祖父や父が払い切れなくなってしまった飲み代、花代の掛け取りにやって来たのである。ようするに、節句払いの借金取りがやって来るのだ。しかし、そのおねいさまがたは、表向きは、絶対に掛け取りに来たと言わないのだ。あくまでも、盆暮れの

ご挨拶にやって来ることになっているのだ。では、このおねいさまがたを、どう祖母と母は迎え討ったのか？ あにはからんや、寿司や鰻を取って、大歓待するのだ。つまり、こんな時に、洗顔をやるようでは、博多の商家の女将である「ごりよんさん」の名が廃るのだ。だから、あえて大金を使って大歓待するのだ。もちろん、店は開店休業となり、店員さんもさあ一杯ということになり、大宴会とあいなるのであった。博多の女たちは、男たちの遊興費の未払い金を気前よく払って、その甲斐性を男たちに見せつけるのである。女の意地であろう。男たちにしてみればかなしだ。一方、それは、浮気防止策でもあった。花街の人たちと、ツーカーになってしまいうけだから。

さて、ここからは、高等、高尚な話。表向きは、盆暮れのご挨拶であるから、料亭の女将も、芸者衆も、未払い金があるなどと、口が裂けても言わない。ところがである。祖母と母は、うちの宿六は、ああたたちに、借金ばしとろうが……早う砂糖代ば教えてくれんね。払うけんくさ——。

とけしかける。すると、

いや、それは奥様たちには言われんとすよ。企業秘密ですけん。教えられんとです。と返される（もちろん、儀礼的にだが、ここは心理戦）。

うちらが、商売できとるのも、あんたたちが客ば接待してくれるけんよ。砂糖代ば、言いんしゃい。未払いになつとろうが……。

こんな問答が長々と続き、どうしようもなく口を割られたという体で、しぶしぶ未払い金が告げられて、その金額に御祝儀をつけて、渡すのである。かの掛け取り軍団たるおねいさまたちが家にやって来るとわかると、祖父と父は、突然の急用のため、外出するのを常としていた。

さて、ここでいう「砂糖代」とは、何なのであろうか。それは、隠語で、遊興費のことを指すのである。近時、近世史の泰斗に教えてもらったことなのだが、幕末まで砂糖は貴重品であったから、長崎などでは、現金代わりに砂糖でももの売り買いがなされることもあったそうなのである。考えてみると、かつては、中元と歳暮に、よく砂糖を送ったものだ。花や鯛をかたどった砂糖も、かつてはあった。砂糖はお金のようなものだったのだ。

唐人が、長崎では遊興費を砂糖で払うこともあったという話も聞いた。おそらく、甘いものに払う代金ということで、博多あたりでは、遊興費のことを砂糖代といていたのであろう。

さて、いよいよおねいさまたちの大宴会もお開きとなる。すると、祖母と母は、未入金を熨斗袋に入れて、玄関先で渡すのである。しかし、この時には、もう一つ熨斗袋を渡すことになっていた。それは、今日やって来た芸者衆への「花代」であった。芸者衆は、本日は暮れのご挨拶にやって来たのですからと、受取ろうとはしないが、祖母がなかば強引に、相手の襟元にねじ込んでしまうのである。そこは、女の戦いだ。これが、わが家の毎年の年中行事、いや、年中騒動なのであった。

掛け取り軍団との大宴会が終わって、一時間ほどすると、急用が終わって、祖父と父は、店に帰ってくるのだが、祖母と母から、絞られるのはいうまでもない。

ああー、今年の砂糖代にや、どうしてあげん高かとね……

父は、「いやー、砂糖が値上がりしとるけんくさ」と言うのが精一杯だった、と思う。

さて、思い起してみると、辞去する際の芸者衆のご挨拶の言葉が忘れられない。

旦那さん、ならびにごりよんさんのお蔭で、なんとか年が越せます。いただいた砂糖代が阿弥陀に光って見えます。ありがとうございました。見捨てんといて下さい。

ここでいう「阿弥陀に」とは、阿弥陀の仏像の後背の光明のことである。そうか。つまり、ありがたいお金でございますということを言って、感謝の気持ちを伝えていたのである。砂糖代が、光って見えるというのかあ、と五十五になって、ようやく気付いた次第である。意味がわかると同時に、その言葉の味わいを知ることができた。今では、誰も使わない死語なのだが――。

(二〇一五年十月)

腰田低男氏の人生

私は、この方面では、世界一の学者だと思っている。もちろん、残念だが研究のことではない。腰の低さでは、世界一だと思うのである。私には、学界で通用しているニックネームがある。人呼んで「こしだひくおし」という。かれこれ、二十年前からだろうか、こういった名誉ある称号で呼ばれるようになったのは？

それは以下のような理由による。私は、名刺を手交する時に、必ず次のようなことを言うからだ。というか、人から言われて、確かにそう言っている、と認識した。

光栄です。今日、こうやって、お出逢いのご縁を賜りましたので、今後とも、御鼻眞にお願い申し上げます。お見限りなく、お手助け下さい。

これを横で聞いていた悪友が、「こひいき」なんて、死語だぞお、と笑ったのである。しかし、私は、初対面のご挨拶と名刺交換は、そういうもんだと思っているし、また、今でもそうやっている。これをおもしろおかしくマネする悪友がまたいて、ついたあだ名が「腰田低男氏」なので

ある。

私の家は、零細な衣料商だったので、店先で子供のころから、名刺交換を見ていて、それが習性になっていったのだ。母は店先で、こう言っていた。

こげなはきだめみたいな店に、ようきんしゃったなあ。光栄の至り、いや「至り」やなか、いたりきたりですばい。お出逢いさせていただきましたからには、これも悪縁と思うて、毎度御鼻眞にお願いします。お見限りなく、お手助け下さい。

そして、必ず名刺交換した相手には、礼状を出していた。だから、そうするもんだと思っていたのである。先年、歌舞伎役者の中村彦太郎さんと名刺交換した折のこと、「先生のご挨拶は、少し前の役者、いや役者じゃなくて、役者の奥さんの挨拶に似ています」と言われたことがあった。はあはあーん、言われてみると、そうだ。思い当たる「ふし」がある。子供のころ、家の近くの大博劇場という芝居小屋や市民会館に、歌舞伎が来ると、よく歌舞伎役者の奥さんが、店にご挨拶に来られた。その奥さんを連れて来るのは大概、呉服屋さんの、これまた奥さんである。博多では、大店の女将のことを「ごりよんさん」という。その歌舞伎役者の奥さんのご挨拶の折には、必ずご招待の切符を持って来るのである。

〇〇丈も、お蔭で十日後には、ご当地、初お目栄となります。本来なら、本人がご挨拶に來なくてはならないところですが……。

ご招待券一枚と、役者さんの手ぬぐいなどの手土産があったような気がする。その和服の着こなし、挨拶の見事さといったらない。だから、父も母も、「これをご縁に」「御鼻眞に」と言うのだ。それが、私に文化財のように伝わっていたのである。

そうして母も、名刺交換して、父も、歌舞伎役者の奥さんと呉服屋のごりよんさんを見送るの

であるが……。どうしたわけか、父も、母も、浮かぬ顔である。二人は、「しょうがないかねえ。五枚かなあ、十枚かなあ」と言うのである。当代を代表する役者の奥さんがご来店とあらば、招待券一枚は、ありがたくいただくとして、五枚、十枚は、切符を買わねばなるまい、ということなのである。私は、子供ながらに、こうやって経済というものは回るものだ、いわば「英才教育」を受けていたのである（もちろん、当時はわからなかったが）。浮かぬ顔の父は、またこう言った。

切符だけならよかたい。こりゃ、帯留めの一つも買わないかとやないかあ？

父と母は、もう先を読んでいるのである。だいたい、いつも同じストーリー展開となった。まず、切符をその時々に応じて、呉服屋さんに電話で注文するのである。すると、呉服屋さんが、注文席数の切符を持ってわが店にやって来る。店先で話しているうちに、呉服屋さんは、次のようなことを言う。

奥様は、前にお買いになった大島（つむぎ）があるので、あれをお召しになったらよかですばい――

すると母は、

この際、帯留めだけでも、新しいとば、買いまっしょうかね。

と返す。ならばといって持って来るのが、連れて来た歌舞伎役者の奥さんと同じ帯留めなのである。こうやって、呉服屋さんは、「ご商売」をしていたのである。けれど、帯留めだけで終わるのなら、まだよいのだ。ここは、博多だ。話は帯留めから、帯になり……。こうやって、商談は進んでゆくのである。わが店の従業員たちは、ここで歌舞伎のチケットをもらえと心中ほくそ笑むのを常としていた。

では、父の方はどうかといえ、こちらも大変なのだ。呉服屋のご主人が、歌舞伎役者を招い

ての初日、千秋楽のお祝いの会をするからである。もちろんこちらも、呉服屋さんのご招待だが、役者衆には、ご祝儀を出すことになるから、大変なのだ。もう、察しが付くと思うが、このビジネスモデルは、大相撲も同じなのである。私は、尊敬申し上げるお父上さま、お母上さまから、よくこんな訓戒を授けられた。

誠、よう見とくんしゃい。タダほど高かもんはなかとぞ。芝居の切符の代金も、飲み代も皆、帯代に上乘せたい。それが、小商人というもんばい――。

結局、高い高い帯留めと帯を買わされて、劇場に行くのだが、劇場の入り口には、かの歌舞伎役者の奥さんが待っている。その奥さんは、お袋の着物を誉めまくるのである。ここも、商売のミソだ。私たちは、一枚の招待券から、高い買い物をした（させられた）のであるが、歌舞伎役者の奥さんから誉められた着物という思い出をもらうのである。モノではなく、コトを買うコト消費なのだ。

母は、病床について、着物を着られない身体になっても、何度も何度も、高い買い物となった帯の話をしていた。「あの歌舞伎役者の先代の奥さんが、お世辞やろうけど誉めてくれてね」と。父は父で、歌舞伎役者と同席した宴会のことをずっと後まで語っていた。つまり、あの帯代には、思い出の代金も上乘せされていたのだ。

けれども、話は、まだ終わらない。その歌舞伎役者の奥さんと呉服屋さんから、温泉旅行に誘われたのである。しかし、こちらは、父母も、丁寧にかつきつぱりと断っていた。母は、

うちらが、付き合えるのは、せいぜいこまでばい。いっしょに旅行に行ったら、家を売らにゃいかん。何、買わされるか、わからんけんねえ。

と言っていた。つまり、付き合いというものにも、「分相応」というものがあるというのである。

では、わが家が呉服屋さんに完敗していたか、というところではなかった。呉服屋さんの娘さんの洋装の小物は、わが上野合名株式会社から納品されていたのだ。

とにかく、相手さまに頭を下げる。そうすれば、必ず良いことがある。そうやって、私は博多小商人の英才教育を受けてきたのである。私は、出版社の人と名刺交換する時には、必ずこう言うことにしている。

御贔屓にして下さいね。偉い先生が、欠稿になって、原稿に困ったら、お電話一本下さいね。

原稿は一字から一万字まで承りますので、ご用命下さい。即日、出しますので。一字から、はい喜んで……。

ここに、腰田低男の本領があるのだ。私の人生の中では、悔しいことも多かったが、それでも、辞を低くして、人を喜ばせることにかけては、世界一だという自負がある。ある時、母は、こんなことを私に言った。

いくら頭を下げて、下げすぎることはなかばい。血が下がりすぎて死ぬことはなかばいね。それに、タダやろが、頭下げても。

無能な私が、ここまでやってこれたのも、腰田低男の教えがあるからだ。

(二〇二〇年七月)

ゼノ・ゼブロフスキー修道士のこと

私は九州、福岡県の生まれだ。それも、洋品店の次男坊。生まれたのは朝倉市だが、二つ店舗

があった関係で、中学校までは、朝倉市と福岡市の店を行き来しながら育った。大阪言葉では「もうかりまっか」「ぼちぼちでんなあー」だが、私の家では違う。

「どけんですなあ? (ご商売の方は、どうですか?)」と言われると、良い時も、悪い時も、必ずこう言っていた。

「それがくさ、どげんもどげんもなりません。首を括ろうにも、縄を買うお金があるまつせんたい! (それが、どうにもならないくらい売り上げが落ち込んでいるんですよ。どうすることも、こうすることもできません。首を括ろうにも、縄を買うお金がなくて困っています)」

これくらいのは、平気で言うのだ。「ぼちぼち」なんて言ったら、こう言われてしまう。

「ぼちぼちなら、よかたい。わたしや、今日は金ば借りに来たどばい (ぼちぼちならよいですね。

私は、今日はお金を借りに来たんですよ)」

まあ、私と話した人ならわかると思うが、こういったテンポ感のようなものは、私にもある。三つ子の魂百までだ。

家は臨済宗の東福寺派の檀家だが、幼稚園はカトリック系であった。博多の人は、そんなことは気にしない。時たま、ポーランド人の修道士がやって来た。つるつばげに、白髪のおじいちゃんだった。子ども心にも警戒心というものはあるが、眼がやさしいから、私たちは、すぐに「抱っこしてえ」と皆駆け寄っていった。このおじいちゃん修道士は、午後になると、当時は「バタ屋さん」と呼ばれていた廃品回収の人を連れて、町内を回るのが常としていた。私たちは、おじいちゃんの廃品回収があるのを心待ちにしていた。というのは、アメをくれるからだ。まず、玄関先に来ると、「ごあいさつー」と言って、つかつかと座敷に上がって来る。そして、仏壇の前に行つて、チーンとやる。カトリックの修道士でも、仏壇にごあいさつはするのだ。

子どもたちは、おじいちゃんが来ると、お手伝いと称して、おじいちゃんについて回る。だから、二軒目には、二人。三軒目には三人となって……それからというもの子どもたちがぞろぞろとついて廃品回収をしてゆくことになる。ポーランド人のおじいちゃんとバタ屋さん、そして子どもたちの大行列が出来るのだ。今でも、目に浮かぶ。舗装もされていない道路を、リヤカーを先頭に意気揚々と歩く姿を。それに、お金持ちの家に行くと、おやつが出るから、私などはうれしくて、うれしくてしょうがなかった。この廃品回収で得た金を慈善事業に使っていたのだ。

ただし、町内には、この大行列を快く思わない人たちもいた。第一、うるさいことこの上ない。それに、子どもたちがお手伝いと称して家に上がり込んで、遊ぶので、よく粗相をするのだ。調度品を壊したり、庭の花を取ったりと。それに、慈善事業とはいえ、廃品回収を子どもたちが手伝うのを飲ばない人もいたと思う。そのあたりのことは、子ども心ながら感じていた。もう年配の読者ならお分かりのことと思うが、当時は「バタ屋さん」という職業に対する偏見がまだ残っていたのだ。だから、皆がこの廃品回収を飲んでいたわけではないのだ。今思うと、せつない気持ちになる。

ところで、思い起してみると、このポーランド人の修道士は、おそろしく日本語が下手だった気がする。だから、必ずシスターが横についていた。カタコトの日本語では、意味が伝わらないところを通訳のように話してくれるのだ。話す言葉といたら、

「あなた恥かくと、マリアさま飲む」

くらいのももの。だから、カタコトの日本語すらおぼつかないのだ。いったい「あなた恥かくと、マリアさま飲む」とはどういう意味なのだろう？ 今、考えてみると、「私について廃品を町内から集めてまわると、あなたは恥をかくことになるかもしれないが、それはマリアさまが飲むこ

とだ」ということだろうか。なぜ、このフレーズを鮮明に覚えているかというと、私たちはみんな真似をしていたからである。

そんな廃品回収も、私が小学校二、三年の時にはなくなっただと思う。もう一つ覚えていることがある。私たちは、このおじいちゃんのことを「ブラブラさん」と呼んでいた。ベルトのかわりに、白いロープのようなものを腰に巻いて、前でブラブラさせていたからである。

最近、あの「あなた恥かくと、マリアさま飲む」の白髪のおじいちゃんのが気にかかるようになって、調べはじめた。ただし、名前がわからない。それは、「ブラブラさん」としか呼んでいなかったからだ。

調べてみて、一人だけ該当しそうな人物がいる。長崎の聖母の騎士社のゼノ・ゼプロフスキー修道士（一八九一―一九八二）だ。ただし、一九六四―六八年ころに、ほんとうに福岡で活動していたのか、確証がない。

ゼノ修道士は、後年、アウシュビッツのkolbe神父として知られるマキシミアノ・kolbe聖者（一八九四―一九四二）とともに、一九三〇年に長崎にやって来た修道士だ。彼は、第一次世界大戦で分断されたポーランドで育っている。故国がドイツとロシアに引き裂かれたこの時代、彼は充分な教育を受けることができなかったようだ。さまざまな職を転々としたあと、kolbe神父の下で修道士となり、長崎にやって来た。kolbe神父が帰国した後も、もちまへの明るさとバイタリティーで、kolbe神父が設立した長崎聖母の騎士社で活動が続けた修道士である。

ゼノ修道士は、戦乱を故国・ポーランドで体験していたので、自ら被爆者ながら、戦争孤児の救済活動では八面六臂の活躍をすることになってゆく。彼はポーランド語を母国語として、長崎にやって来た。そして、布教のなかで日本語を学んだようだが、体系的な日本語学習をした形跡

はない。するとあれは、ポーランドなまりの長崎弁だったのかあと思ってみたりもする。写真を見ると、似ているように思うが、まだゼノさんだという確証はない——。私にとってあの人は、稀に来る人、マレビトであった。はるか五十年前の。

※この文章を読んだ方たちから、連絡があり、ゼノさんであったことは、間違いないだろうとのことでした。

(二〇一八年五月)

スリーAの上野

数年前のこと、私は故郷に錦を飾ることができた。

わが故郷、福岡県朝倉市の図書館で、講演をすることが出来たからである。朝倉は、わが祖父の地だ。その朝倉での講演である。いやが上にも、気持ちちは上がる。講演の第一声は、こうであった。

上野ストアアの馬鹿息子が帰って来ましたばあーい。

祖父が営んでいた商店が、上野ストアアで、その馬鹿タレ息子が帰って来ましたよ、というご挨拶である。年配の人は、わが上野ストアアを知っているから、それなりに受けたと思う。

「上野ストアア」という屋号は、一九六〇年代に、わが家が使っていた屋号だが、実態は小さな洋品店であった。この屋号は、いわれがある。それまでは、その小さな洋品店を「上野デパート」と称していたのだ。しかし、それは祖父が、ほんとうのデパートというものを知らなかったからこそ使えた屋号なのであった。周囲から、

こげな小さか店ばね、デパートって言ったら、笑わるるよ。

こんな小さな店をデパートと言ったら、笑われますよ、と言われてようやくストアアとしたのである。

祖父、上野縁助^{えんすけ}は、高等小学校卒ながら、商才があつて、一九三〇年代から五〇年代にかけて、財をなした。チェーン店とまではゆかないが、洋品店としては成功したといわれている。が、しかし。婿養子となった父は、大学出だったが商才がなく、祖父が晩年に作った借金の返済を、店舗縮小と土地売却で切り抜けただけの人だった（おやじさん、ゴメン）。つまり、上野ストアアは一九七〇年代後半には、商店としてたちゆかなくなり、自主廃業したのである。その三代目、ドラ息子^{どらこ}が、私ということになる。そして、わが母は、能天気な家つき娘で、その晩年、地元では知られた俳人であったから、福岡に帰ると、まだ、母の弟子たちがいるのである。そんなわけで、福岡を離れて四十年経った今も、地元では「上野ストアアの馬鹿息子」で通るのである。福岡で講演をすると、楽屋に、珍客が来ることがある。大概は、祖父の艶聞、戦中、戦後のドサクサに、軍用物資を横流しした話などなど、ありがたくない話が、じつに多い。

しかし、祖父の縁助を悪くいうわけにはゆかない。私は大学と大学院等で十二年間、学費を払ってもらったが、その学費は、祖父の残した財によるものだからだ。

では、わが上野デパート、上野ストアアのマークは何であったか？ それは二つあった。ひとつは、菱型のなかに、Aと入っているもの。もう一つは、菱型のなかに横並びでAAと入っているものである。スリーAだ。どうも、このマークは同時並行で使っていたようなのである。中学生の時に、菱型にAのマークのいわれを祖父に聞いたことがある。祖父は、胸を張って、こう答えた。

そげなこつも、わからんかあ。そりや、上野縁助のAたい。別に悪意があったわけではないが、私は笑いころげてしまった。

おじいちゃん、そりや違うばい。エンスケならEやろうが。Aじゃなかとよ。

祖父は、沈黙。しかし、考えてみれば、AはA評価のAであり、Eよりもよかったかもしれない。それから、祖父が死んだあと、私は祖母に、あのスリーAの由来を聞いた。祖母は、真顔で、しかも自慢げに、こう言ったのである。

あんたも、よう知っときんしゃい。その意味はね。

なかなか、いわくありげな語り出しである。

その意味は、上野のエンスケが、エエもんを、エリすぐって売っております、という意味たいね。エンスケのA、エエもんのA、エリすぐりのAたいね。よう覚えときんしゃい——。

私は、またもや、笑いころげてしまった。

しかし、今は反省している。常識や教養がある者が、常識や教養のない者を笑うのは簡単だ。しかし、そんな教養がなんだ、と思う。祖父は、わが家の家紋である三階菱の菱型マークを背負って、商いをした。そして、その菱型の真ん中に、自分のイニシャルを入れて堂々と商売をしたのである。

私は、論文を書いたり、研究発表をしたり、講演をしたりするのも、一つの納品だと思っている。良い納品なら、次の仕事が来る。私の講演を楽しいと思った人が、次の仕事をくれるかもしれない。そう思って仕事をしている。

私を貫く精神は、小商人の精神だ。エエもんを、エリすぐりでお届けします——。毎度ありいー。

(二〇一八年八月)

教会で七五三

私の郷里は、福岡だ。現在の朝倉市に生まれ、福岡市で育った。売れない洋品店の次男坊である。それほどの旧家ではないが、家には仏壇と神棚があり、かまど神さまもいた。祖父は、地元の神社の役員を長くした後、菩提寺の総代も務めている。祖母と祖父には、分担があつて、祖父がお寺の役をしている時には、祖母は神社の役員をしていた、と思う。つまり、祖父は、神社もお寺も総代。祖母は、敬神婦人会と仏教婦人会の役員をしていたのだ。

じつは、この不思議な神仏のコスタリカ方式は、父と母に受け継がれていた。それだけなら、まだいい。子供たちがカトリックの幼稚園に通っている間は、父と母は教会での奉仕もしていた。子供たちの卒園後も、未洗礼者ではあったが、十年ほどはカトリック教会の奉仕をしていたと思う。その上、暮には必ず、盲僧さんに来てもらつて、「かまど祓い」をしてもらっていたのだ。

中学のころだったか、不思議に思つて、家族に聞いたことがあった。その答えは、こうだった。うちとこの街は、みんなそうばい——。

皆、そうやっているということだ。

こんな原稿を書くとき笑われるかもしれないが、父母の代まで、何の疑問も持たずに、大祓詞を唱え、観音経を唱え、ミサにも出ていたのだ。

「信心」という言葉がある。この「信心」という言葉は、「信仰」とは違う。「信心」といった場合には、その神仏がどんな神さまか、仏さまか、問われないのである。だから、「信心深い人」は、どんな神さま、仏さまにも、「信心深い」のである。悪くいえば、節操がない(家族は、悪う言うて、

悪かばってん。祖父母、父母は、信仰者などという崇高な人ではなく、単に信心深い人だったと思う。そんな父母の提案で、カトリック教会で、七五三をやることになった。千歳飴の入った袋に、十字架とマリアさまを配したデザインを発案したのは、父か母かのどちらかだったと思う。いや、母だ。だから、兄、姉、私の三人は、神社と教会で、それぞれ七五三のお参りをして、二つの千歳飴をもらって喜んでいた。

先日、地元の朝倉市に里帰りして、講演をさせてもらった折のこと、驚いたことがあった。もちろん代替わりはしておられたが、千歳飴の飴屋さんが、講演会場に来られていたのだ。そこで、教会での七五三の話になったのだが、なんと。今でも、教会での七五三は続いているそうだ。そして、飴屋さんは、今でも教会に千歳飴を納品しているというのだ。わが郷里、恐るべし――。

(二〇二〇年五月から連載中の文章の一部)

宴の終わる時――

当年、とって五十四歳。十九歳までは福岡で育った。それから東京十二年、奈良二十三年とあなかった。わが輩は、未熟者の万葉学徒である。

県立高校にみごとに落ちた私は、福岡大学附属大濠高校に入学する。成績は中の下だったが、日本史や古典が好きだった。中学生のころから、考古学の岡崎敬先生や、郷土史家の筑紫豊先生の講演会にはよく行ったし、一族のおっちゃん、おばちゃんは、皆ホトトギス派の俳人だったから、まあ門前の小僧だったわけだ。

私の万葉研究は、民俗学派の流れを汲むもので、生活と心情を結ぶ回路のようなものを見つけ出すことを志向する研究を行ってきた。美学論的研究が、あまりにも哲学的になり過ぎるのに対して、私は、いかなる文学も、生活との回路があるからこそ現実味、すなわちリアリティーがあると考え。だから、私は、民俗学や歴史学、考古学を応用した研究をモットーとしているのである。

古代社会において、宴は基本的には朝まで続くものであった。宴を中座するのは、主人を軽んずることに繋がるので、許されないことであった。だから、宴に招かれた者は、必ず朝まで飲みたいですと歌うのである。『日本書紀』崇神天皇条を見ると、臣下は天皇に対して、こう歌っている。しかも、宴が終わった後にもかかわらずである。拙訳を掲げると、

うまさけ三輪のご社殿 このご社殿で

朝戸あきとを開く時になつたら外に出て行きたいものだ

「この三輪のご社殿の門を」でございます(朝まで 夜とおし酒盛りをしたいのでございます)

これに対して天皇は、「うまさけ三輪のご社殿 このご社殿で夜とおし酒盛りをした後に 朝門を押開いて出てゆくがよい この三輪のご社殿の門をね(さあ だから朝まで大いに飲んでよいのだぞ)」と応えている。宴が終わった後も、まだ飲みたいですと歌うのが、礼儀なのである。なぜならば、それは、宴を催した主人を讃えることに繋がるからだ。

一方、お偉いさんが長居すると、若い者は、伸び伸びと酒が飲めない。そこで、一座の高位者や長老は、早引けするのも「ならわし」だ。しかし、早引けには、細心の注意が必要だ。なにせ、マナー違反なのだから。大宰府の宴席でのこと、山上憶良はこう歌ったのであった(『万葉集』)。また、拙訳を示しておこう。

憶良のような者は もう失礼致しましょう

家では子どもが泣いておりますし その子の母も……

私を恋しがって待つていることでしょうか

時に憶良は七十歳。乳飲み子がいるとは考えにくい。道化師の笑いだ。こう歌って、中座するのだ。

ああ、今、思い出す。宴たけなわで歌われる博多祝い唄を……。この祝い唄で一旦、中締めとなり、帰りたい人は帰り、飲み足りない人は残って、飲み直すのだ。やっぱくさ、おら博多育ちやけん。こげんこつ、思うとたい——（ヤハリ、私ハ博多育チダカラ、コンナコトヲ思ウノダロウ）。

（二〇一四年七月）

母と私と

私のエッセイには、学術物、博多物、母物が
あり、母物のエッセイをこの章にまとめること
にした。母が生きていれば、何と言うだろう。

博多、母、そして『万葉集』

インタビューで、よく先生はなぜ万葉学者を目指されたのですか、と聞かれることがある。実は、わたしは歴史学科志望だったから、高校時代には国文学を学ぼうなどと思ったことはなかった。まして、『万葉集』なんか、学ぼうなどという気はさらさらなかった。残念なことに、歴史学科の試験に落ちたのである。そこで、いちばん歴史学と近い、国文学の分野を探したのである。わたしが進んだ大学は、幸いにも歴史学や民俗学を国文学とともに、教育の柱にしていた大学であったから、おおむねわたしの望みは満足せられたことになる。『日本書紀』も『万葉集』も、ともに人間の記録であるから、大差はない。今となっては、『万葉集』のほうが、楽しいと思っている。

母・上野繁子は、雑誌『ホトトギス』の同人だが、写生句よりも心情句を得意とする俳人である。その縁で俳誌にエッセイの寄稿を求められることもあるが、俳句を発表したことはない。一族郎党には大した俳人はいないが、皆地方の俳壇の選者級なので、「なして、マコちゃんな、俳句ばしなさん、と。おかあしやまの跡目ば継がないかんとくさ」と、冠婚葬祭の宴の度にいわれる。それがいやで、宴を辞したことすらある。育った博多というところは、俳句に関してはそういう土地柄なのである。松山ほどではないにしても。

わたしが、小学館から『小さな恋の万葉集』という本を出し、その訳調の目新しさが話題になったことがあったが、とある評論家が著者は俳人であると紹介した。が、しかし、これは誤り。抗議すると、訳調が俳句的で、てっきりそう思い込んでしまったとのことであった。ただ、ひよっ

とすると、彼は母のことを知っていたのかもしれない。次に会ったときには、問い詰めてみよう。さらに勘ぐると、ひそかにわたしに俳句を創作させたいと考えている母の陰謀かもしれない。わたしは、俳句は作りません。絶対に。母上様。

その『小さな恋の万葉集』では、

恋といへば 薄きことなり 然れども 我は忘れじ 恋ひは死ぬとも

(作者未詳 卷十二の二九三九)

を、

口に出して言っしまえば

「恋」なんてうすっぺらな言葉だよ……

でもね、アタイはね、忘れないよ、アンタのこと。

たとえ、恋に狂って、死んじまったとしてもね――

と訳した。この訳は、「教養はなくても、自らの思いを正確に伝えようとした女のまごころの声として」訳してみたのだが、珍しく母が誉めた訳文であった。母は、わたしの洒落な訳文やエッセイを好むが、碎けすぎを心配していると側聞する。

(二〇〇七年五月)

母の教え、一九七〇年、博多

数年前、九十五歳の母が大往生を遂げた。私は、博多育ち、零細な洋品店の次男坊だ。父と兄

が早逝した関係で、最期の七年間は、母と暮らした。そんな私的な話に読者をつき合わせるのには申し訳ないが……。この話は、一つの商家の知恵として、聞いてほしい。しかも、話は、五十年も昔の話だ。

博多の街では、毎年十一月に大相撲が開かれる。九州場所だ。わが洋品店の近くの神社も、とある相撲部屋の宿舎になっていた。お相撲さんたちがやって来ると、街は急に華やぐ。暮れの博多の風物詩だ。街の人びとは、博多名物の水炊きや、アラという魚の料理で、お相撲さんたちをもてなす。博多人は客をもてなす天才なので、博多は「相撲取りの天国」といわれていた。

さて、ここで問題のわが母だ。母親は、早朝に神社の稽古場に行き、そこで掃除をしている若い衆に、隠れてそつと足袋を渡す。足袋といっても、とてつもなく奴の大きな足袋だ。ほんとうは、若い衆は足袋は禁止なのだが、やはり冬の朝は寒い。ほどなく、若い衆は親方から大目玉をくらってしまふ。この足袋は、誰からもらったのか、と。二、三日もすると、親方が店にやって来て、「若いもんは足袋は禁止ですが、いただいた足袋は大切に使用してもらいます。ありがとうございました」と当然お礼の言葉がある。さすが、日本の国技、さすが親方。

ここまですが母の商売の仕掛けの第一ラウンド。母は毎日、天気図とにらめっこして、寒波の到来をひたすら待つ。寒波がやって来るとさあ大変、大きな足袋はないか、大きな足袋はないかと、お相撲さんは足袋を街中で探しまわるが、どこにもそんな大きな奴の足袋はない。すると、決まってしまうのだ。

あつ、そうだ。上野の奥さんの店には、大きな足袋があるかもしれんぞ……。

わが家は、お相撲さんでにぎわうことになる。さて、ここからが、母の腕の見せどころ。来店したお相撲さんに、一足はプレゼントするのだ。「出世したら、百倍返しばい！」と。これが、

母の商法の第二ラウンド。

すると、ひっきりなしに、お相撲さんがやって来ることになる。それにつられて通行人も店にどんどんと入って来る。そのなかに、子連れなどがあると、母はこう言うのだ。

お相撲さんに抱かれた子どもは、風邪ひかんとよ。ああた、子どもば抱いてやりんしゃい。

また、こんなことも言う。

このおじいちゃんの肩を揉んでやりんしゃい。あんたたち、肩揉みはうまかろうがあ。

つまり、お相撲さんに客へのサービスをさせるのだ。それも、厭味もなく。すると、子どもを抱いてもらったり、肩を揉んでもらった客は、店で何かを買って帰らなくてはならなくなってしまうのだ。

母はいつもこう言っていた。人に頼んで関取を店に呼んだら百万円はかかる。でも、この方法なら、足袋代だけだ。こうも言った。お相撲さんにも、客にも、店にも……よい、三方よし！
今、私は、母のあの小粋な客さばきのことを思い出している。

(二〇一七年八月)

筑紫万葉恋ひころ

たとえ、学者として一流であったとしても、学者は一流の文筆家ではない。筆一本で食ってゆけないのだから、文筆ということについていえば、二流ないし素人なのだ。私は常にこのことを念頭において、もの書きをしている。

『筑紫万葉恋ひごろ』は、西日本新聞の連載を一冊にまとめた本であるが、私は五十回の連載をひと冬で書き上げて、五十回分一括して渡した。このやり方は、二流の文筆家である私の連載の流儀だ。皆、そう言うところ驚くが、私とすればあたりまえだのクランクである。

二流には二流の、素人には、素人のやり方というものがあるはずなのだ。原稿を書きながら、読者の反応を見つつ、仕上げてゆくなどということは玄人の仕事のやり方なのである。すべてを書き上げて、全体を調整しないと、素人、二流は、必ず失敗する。

こういういわば一括納品の流儀は、母や祖母から受け継いだ博多小商人の流儀である。わが家は、零細な洋品店だった。私は洋品店の次男坊なのだ。客から注文を受けると絶対に納期を守って、一括納品する。こう書くところ格好よいけれど、中小企業は、納期を守らないと次の注文が来ないのだ。また、納品予定日より早く納品準備ができれば、注文先の都合のよい日に納品できる。だから、子ども時分から、早いことは最大のサービスだと教えられてきた。

若い時は、原稿を書きたくても、書くチャンスが与えられなかった。そんな時に、突然、執筆の依頼が来るがあった。大先生が、途中で執筆を降りたのだ。すると、大先生が半年かけて書く原稿を、若先生は一カ月で仕上げなければならぬことに。しかし、これは若先生にとって大きなチャンスだ。グレードが高い名門の雑誌にピンチヒッターで書く。いわば、代役をステツプとするわけである。

『筑紫万葉恋ひごろ』執筆中に、母からこんなことを言われた。超一流は、原稿が遅れても次の原稿依頼が来る。たとえ、原稿が書けなくても、次の仕事がある。一流は、メ切に間に合わない次の原稿依頼は来ない。なるほど。さらに、母はこう言うのだ。二流はメ切の前に、原稿を提出しないと次の仕事は来ない、と。私はここまで母の話を聞いて、せつなくなった。こうし

ないと、二流の洋品店は生き残れないのだ。祖父も、父母も、そうやって、注文を受けてきたのであろう。人さまより、よいものを早く安く納品しないと、次の仕事は来ないのだ。

そもそも、二流の店には、価格の決定権などともよらない。発注者の言い値なのだ。ここでも母の次の金言が光る。

値段などというものは、客が決めるもんだが、こちらがいつしようけんめいやっていたら、客は無茶な値を付けたらない。客が、うちの店が潰れたら困ると思うくらいの仕事をしないためだ。

日本の中小企業というものは、こういった環境の中で、生き抜いてきたのだ、と思う。また、それを苦とせず、楽しむくらいでないと生きてゆけないのだ。

私は『筑紫万葉恋ひごろ』のなかで、

生ける者^{ひと}
 遂にも死ぬる^{つひ}
 ものにあれば
 この世にある間は^ま
 楽しくをあらな

（大伴旅人 卷三の三四九）

を、「生きとし生ける者は…… いずれは死ぬもの だから だからこの世にある間は 楽しく

生きなきゃあ ソン」と訳した。そして、『踊るアホウに見るアホウ、同じアホなら、踊らにや、ソンソン』というのは、一種の享楽主義だが、今生きて目の前にあることを最優先すべきだという生の哲学を語る言葉でもある」と書いた。全力投球でも、にこにここと、苦を楽しんでこそという生の哲学だ。

が、しかし。かつては繁盛していた洋品店も、昭和四十年代には、人さまに迷惑はかけなかったものの、あえなく自主廃業。時代の波に乗り遅れたのである。お蔭で、兄も私も、洋品店を継ぐことはできなかった。そして、ゆえあって私は万葉学者として、今、活動している。でも、私の心のどこかに、二流の小商人の感覚というものがある。連載はすべて書き上げて、メ切り先に入稿する。そうすれば、次の原稿依頼が来るかもしれないではないか。そもそも、大学の研究室というものは、ある面では個人商店なのだ。商店主は私で、仕事を手伝ってくれる学生は店員さんだ。

二百名近い学生が、ほぼ三日間缶詰状態で『古事記』を読むスクーリングというものがある。奈良大学通信制学部の名物授業の「神話伝承論」である。全国からやって来る学生さんは、十代から八十代までと幅広い。やって来た学生さんのお世話は、上野誠研究室のゼミ生の仕事だ。テストもあれば、遠足もあるし、おやつも出さなくてはならない。もちろん、私もわかり易い授業を心がけてはいるのだが、スクーリング生ひとりひとりにお世話をするのは、ゼミ生だ。戦争で大学進学のを機会を逃した人もいて、八十歳にして晴れて大学生になった人もいる。とにかく、満足して帰ってもらいたいのである。小商人の私は、まずは、お世話役のゼミ生の笑顔が大切だと考える。客商売の基本は、やはり笑顔。「はい、喜んで」と笑顔で注文を受け、全力投球で納品。これしかない。

話は、最後に母の話に戻る。私は、母にこう言った。俺は二流だから、原稿は必ずメ切前に出してるよ、と。しかし、母は私にこう言うのだ。お前はまだ三流だ、と。当然、血相を変えて私は聞いた。では、三流はどうしたらよいのか、と。すると母は笑いながらこう言ったのだ。出版社に行って、玄関先の掃除でもしていたら、次の仕事が来るかもよ、と。私は絶句して、失神した。

(二〇一七年十月)

母の俳句

実母にも句集がある(上野繁子『句集 日々新たなる』天満書房、一九九七年)。その句集は、家族の歩みを俳句に託した「私小説」のように句が配列されている。息子が母親の句集を批評するものもおこがましいが、この人の持味は、生活感ある句にスパイスのようにきかされたエスプリだと思いつつ、読了した。

もちろん、筆者もスナップ写真の人影のごとくに登場していて、思わず笑ってしまった。

わが殻を破りたき日のセーター赤

着るものは、すべて母親が買っていた中学生の頃。ちょっと「色気」が出てきて、自分の見立てでセーターを買った日のことを思い出した。セーターは、その後肥^{ふと}って着ることができなくな

り、捨てられてしまったが、この句は残って句集に収載された。なんだ、おふくろさんよ、そんな句作ってたの……と苦笑した。

反対に、うるさい読者となるであろう筆者を憚^{はばか}って、収載しなかった句もあるようである。偏差値社会に苦しんで、やっと東京の私大に滑り込んだ私は、福岡から上京した。そんなある日、とある新聞の俳句の欄が目にとまったのである。

一流に少し外れて入学す

なかなかいい句だなあ……と思いつつ、うどんをすすっていたのだが、思わず吹き出してしまった。作者のところを見ると「福岡 上野繁子」とあったのである。

そういえば、第一志望の高校に不合格になった日の母の「迷言」を思い出した。「学食（学生食堂）もないような高校に入学しなくてよかった。弁当が大変だ」と。

さすが、わが母である。

（一九九八年十二月）

本について

疲れるので、できれば読書はしたくない。けれど、読書と旅がなければ、私の人生は味のない料理のようなものだった、と思う。やはり、私は書淫だ。

忘恩の記

およそ、プロの万葉学者なら、座右の書とする二著がある。一つは、佐佐木信綱他『校本万葉集』。もう一つが、沢瀉久孝『万葉集注釈』である。両方を合わせると三十冊を超す。多くの場合、大学院に入ってから、購入することになる。

今を去る三十五年前。私は一浪の末、ようやく國學院大學の日本文学科に入学することができた。合格を日本史の上村紘一郎先生に知らせると、家に来なさいとのこと。もちろん、大宴会。帰り際に、『校本万葉集』を渡された。その翌日、国語の相良浩文先生のお宅に行くと、これまた大宴会。帰り際に『万葉集注釈』を渡された。当時は古書しかなく、二著で合計三十万円はした。今から考えて見ると、なんとも不思議だ。両先生は、互いに相談して、私にこの本を与えたのか？ それとも、偶然なのか。たしかに、私はなんとなくではあるが、そのころ万葉学者になりたいと思っていた。しかし、それは、なんとなくだ。

この三十五年間というものの、私は、ほぼ毎日、この二書を利用しているが、考えてみれば、お礼をしていない。また、両先生ともお忘れのようだ。ならば、ほっておくか——。私が卒業した福岡大学附属大濠高校は、こんな高校でした。

(二〇一五年十二月)

岩波『文学』休刊に寄せて

私は、九州の母親に電話を掛けた。「お母さん。たった一行やけど、雑誌『国文学』の学界時評で、自分の書いた論文が誉められたよ。書店で買って読んでみて……」と。話は、三十年も前のことだ。雑誌『国文学』というのは、当時、学燈社が発行していた雑誌のことである。「学界時評」というのは、季節ごとに出る論文の批評文のことで、国文学の重鎮が担当していた。駆け出しの研究者は、まず自分の論文が批評の対象になったことを喜んだし、誉められれば、たった一行でも小躍りした。当時は、もう一つ『国文学』という雑誌があつて、こちらは至文堂が発行していた。しかし、一番重きをなしていたのは、岩波書店発行の『文学』であつた。若い研究者は、この三つの雑誌から、原稿依頼が来ると、有頂天になったものだ。

駆け出しの研究者は、まず学会で評価を得て、その学会が発行する雑誌に論文が掲載されることを目指す。それは、己の研究が新見として認められたことを示すからである。ここは、一つの難関だ。そうして、その分野で認められて、岩波の『文学』をはじめとする雑誌に執筆できたのである。岩波の『文学』と二つの『国文学』という雑誌は、国文学という学問の最先端の知を、社会に広く発信するという役割を荷っていたのであつた。学会が発行する学会誌を読むのは研究者だけで、一般の書店で売られることもない。だから、その最先端の知と社会を、三つの雑誌が繋いでいたのである。しかし、まず二つの『国文学』が休刊となった。そして、今回『文学』も休刊となるという。国文学科や日本文学科の相次ぐ縮小や廃止。読書離れ。それらを嘆くことはたやすい。けれども、おこがましいことだが、私とて、国文学の研究者の端くれなのだから、責

任ある当事者のひとりだ。反省も、覚悟も語らねばなるまい。

戦後の国文学は実証を重んじ、一貫して緻密な研究を重ねてきた。それは、それでよい。しかし、その緻密な研究から得られた知識をもとに、今を語るべきではなかったかと、私は深く反省している。今、ここで、「地域にも、家族にも、本人にとつてもよい老人ホームとは、どういう老人ホームか」と、真剣に論じられているとしよう。そんな折に、日本で生まれた詩や物語において、老いや死はどのように描かれ、そこからわかることは……などと私が話し出したら、どうなるか。嘲笑されるのがオチだろう。しかし、今日からの私は、もう、そういった嘲笑を恐れたいはしない。私はこう言うだろう。どうやったら幸福になれるかを考える前に、何が幸福かを先に考える必要はありませんか、と。だから、私の話も聞いて下さいと発言しよう、と思う。

(二〇一六年四月)

『臨濟録』を読む

二十代のころ、勧められて『臨濟録』(二二〇年刊)を読んだ。チンプンカンプン。最近ちよつとしたきっかけて読み返してみても、少しはわかるような気がした。もちろん、気がしただけである。神を崇拜すれば、神にとらわれることになる。仏を崇拜すれば、仏にとらわれることになる。つまり、とらわれない生き方を追求するということを根源的に説いているわけだ。しかし、そんな生き方が、ほんとうにできるかといえば、それはあり得ない。人は、何かにとらわれてしか、生きてゆけないのではないか——。ということは、禅というのは、宗教のファンタジーなのでは

ないか。つまり、あり得ないがゆえに、存在する物語だ。ポルノは、大人の童話だとか、ファンタジーだといった作家がいたが、それと同じだ。ところで、とらわれない生き方ほど、すばらしいものはないと同時に、とめどなく墮落する生き方もない。なぜならば、めざすべき手本などあつてはならないのだから。聖人と山賊が同居だ。

そんなことを思いつつ、味読していて、心にせまる一節があつた。

熱心に法を説く師に対して、とある弟子がこう聞くところだ。

ところで、祖仏さま、つまり法の根源となる人はどこにいらっしゃるのですかあ？

すると、師はこう答えた。

いや、この場にいるおまえこそが、祖仏だよ。

つまり、自分自身が祖仏でなくてどうするというのだ。人の教えを頼るようではだめだということであり、主人公は常に自分であるべきだというのだ。まさに、ファンタジーではないか？

追伸。あの「スーダラ節」の植木等の父・徹誠は、僧侶だった。ある時、子どもだった等に、こんなことを言った。ご本尊といつても木だ。そんなもん拜んでどうする。おそらく、徹誠は『臨濟録』を読んでいたに違いない。

(二〇一六年九月から連載中の文章の一部)

山上憶良の問いからの三冊

仏教においては、愛は否定されるべき存在である。出家者は、書いて字のごとく、家を出て、

僧の共同体に属することが求められるので、妻子を捨てなくてはならない。では、出家者にもっとも大きな迷妄を与えるものは何かといえば、それは、子供への愛とされている。釈迦の入滅の物語は、さまざまに伝えられているが、釈迦は自らの死を悟った後に、こう言ったと諸經典に書かれている。私なりに、セリフ仕立てにしてみよう。

私には、出家前にもうけた子、羅睺羅らごらがいる。私は、わが子羅睺羅を愛するように、民を愛した。だから、皆の者よ、すべての民を平等に愛するのが、出家者の役割であるのだから、この点を怠るな――。

つまり、出家をしているのだから、実子と他の民との差はもうないのだといっているのである。ところが、万葉歌人・山上憶良やまのうえのおくらは、それを意図的に誤解して、「そうか、お釈迦さんだって、自分の子がいとおしかったんだ。だから、子供を捨てることなんて、できないよね」と歌ったのである。

子ども等を思う歌一首〔と序〕

釈迦如来が、正しく金口にて説きたまうことには、「衆生を平等に思うことは、わが子である羅睺羅を思うのと変わるところがない」と。また、お説きになることには、「愛欲の迷いについていえば、子に優るものはない――」と。釈迦のような究極の大聖人でさえ、やはり子に愛着する心があったのである。まして、人の人たるもの、よるべなき草のごとき民においては、誰が、子を愛さずにいられようか。

瓜を食べるとね

子らのことが思い出されてしまう

栗を食べるとね

なおさら偲しのばれる

どこからやって来たのか

眼の前に

むやみやたらにちらついてね

私を眠ねらせないのは――

反歌

銀も

金も玉も

それがいったい何になるというのか――

子に勝る宝など

あろうはずも無し！（拙訳）

子等を思ふ歌一首〔并せて序〕

釈迦如来、金口に正しく説きたまはく、「衆生を等しく思ふこと、羅睺羅のごとし」と。また説きたまはく、「愛するは子に過ぎたりといふことなし」と。至極の大聖すらに、なほし子を愛したまふ心あり。況や、世間の蒼生せいじやう、誰か子を愛せざらめや。

瓜食うりはめば 子こども思おもはゆ 栗食くりはめば まして偲しのはゆ いづくより 来きたりしものそ まなかひに もとなかかりて 安眠やすみしなさぬ

反歌
銀も 金も玉も なにせむに 優れる宝 子に及かめやも

(巻五の八〇二、八〇三)

つまり、憶良は釈迦の教えを否定したのだ。

ところで、時代は下って、平安時代の後期に成立した『今昔物語集』では、釈迦の入滅に近いことを知った子の羅睺羅は、父のもとから逃げ出してしまおうという話になっている。父である釈迦が待っていると知った羅睺羅が、号泣しつつ、父のもとに進み出ると、釈迦は、羅睺羅は私の子であるから、十方の仏たちよ、わが子を憐れんでやってくれというのだ。

これでは、羅睺羅も釈迦も、出家者としては失格である。やはり、実子はいとおしいというのだから。

私は、この憶良の問い掛けを理解するために、次の三冊を推薦したい、と思う。

①「巻五の八〇二、八〇三」小島憲之ほか校注・訳『萬葉集』(2)(新編日本古典文学全集)小学館、一九九五年

②「巻第三 仏、入涅槃給時、遇羅睺羅語第三十」今野達校注『今昔物語集 一』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九九年)

③石井公成『東アジア仏教史』岩波書店、二〇一九年

(二〇二〇年一月)

日本型資本主義

この夏、目が覚めるような二つの本に出逢えた。一つは施光恒『本当に日本人は流されやすいのか』(角川新書)、もう一つは寺西重郎『日本型資本主義』(中公新書)だ。前者は、政治学からの鋭い日本資本主義文化論。後者は、経済学からの重厚な日本資本主義文化論である。二つの好著には、まるで同一の筆者が書いたかのような共通点がある。西欧には西欧の歴史を背負った資本主義があるように、日本には日本の歴史を背負った資本主義があると主張している点だ。私たちが私たちであるのは、私たちが経験した歴史があるからだ。もちろん、私たちにも、長所と短所がある。しかし、過去を全否定しても、得るものはないのではないか。なぜなら、過去を全否定することは、存在そのものを否定することだからである。

『古事記』を見るがよい。吐瀉物も、大小便も神となる。神も天皇も、過ちを犯す。『万葉集』を読むがよい。天皇も貴族も庶民も、恋愛と歌については平等だ。むしろ、歌と恋愛は、身分を越えるものであった。だから、天皇も貴族も、名もなき乙女からやり込められる。あらゆるものが、神仏に転生する日本では、互いが互いを尊重するのが建前だ。だから、富を独占することを極端に嫌悪する。ところが、一神教では、神の意思によるものなら、富は独占できる。しかし、神の意思に従って、多額の寄附も行なわれる。日本に寄附金文化が根付かないのは、もともと富の集中が避けられているからだ。日本人の寄附は皆で少しづつ、それも横並びが原則なのも、そのためだ。

一方で、組織の利益が優先されるこの社会では、労働時間が長くなりやすく、談合が生まれや

すい。皆が残業している時に、ひとりだけ帰るなんて、自分が自分を許せない。しかも、労働は商品ではなく、自己の人格そのものだから、自分が自分に重庄をかけて仕事をしてしまう。そして、談合は、助け合い精神の恥部だ。

しかし、焦ることなどないのだ。グローバル・スタンダードといっても、過去を否定してすべてを変えれば、うまくゆくというものでもなからう。私たちは長い長い歴史の中で生きている。長短は、一味なのだから——。おてんとうさまが見ている。それでいいのだ。

(二〇一八年九月)

万葉学徒のフランス文学レポート

とある対談で、フランス文学の野崎歓先生と話すごうできた。無礼千万かつ、恥ずかしげもない言い方だが、国文学、それも「王道」ともいふべき『万葉集』などをやっている、フランス文学者の先生と話す機会などめったにない。その折のこと。といっても、対談後の酒席のことだったと思うが、私はこう聞いてみた。もし、フランス文学の今、最先端を知ろうと思えば、どの小説を読めばよいでしょうか、と。すると野崎先生は、自分の訳書なので、薦めにくいですが、と断りつつ、ミシェル・ウエルベックの『地図と領土』を薦めてくれた(野崎歓訳、筑摩書房、二〇一三年)。古代に対して現代。東洋、日本に対して、西洋、フランス。私としては、ちょっと気取って読みはじめた。

この物語の主人公は、インテリなのだが、うまく世渡り出来ず、世の中とのいわば不調和のなかで生きている男である。ところがだ。ある時に、自らが手がけていたアート作品が、世の注目を浴びて、絶世のロシア人美女ともセックス出来ることに。しかし、その頂点のなかで、男は言い知れぬ寂しさを味わうことになってしまふ。私の言葉でいえば、「無常観」だ。不確実な時代においては、成功も失敗も不確実である。確実なのは自死のみ。父親の自死、安楽死が語られている理由も、ここにあるような気がする。努力すれば、報われる。希望と愛を語ることは、美しい。そういう価値観なんてクソ食らえという話なのだが、それが一つの文明論をベースとして語られているところが、ウエルベックのウエルベックたるところだろう。権力とその権力を支えるシステム、システムの背後にある思想。しかし、そんなものは、次々に流転するものなのだといいたいのであろう。

次に私は、『プラットフォーム』を読んだ(中村佳子訳、河出書房新社、二〇一五年)。こちらは、まったく満足が得られない自らの性生活を、文明のシステムの問題として考える男の話だ。そして、ユーラシア大陸をまたぐ巨大な性産業の創業に成功した男の話だ。すべては、順調。人びとは性の悦びを知り、会社も大いに発展してゆくのだが、テロがすべてを無に……。死者の出たテロの後も、その後淡々と接客する性産業従事者の描写も、私からいわせると「無常」というほかはない。ウエルベックの小説の主人公は、いつも社会の不満分子である。しかし、主人公たちはデモでその不満が解消できるとも考えない。文明とか社会システムの問題として、それを変えようとする点に共通点がある。と、ここまで書いたところで紙数が尽きた。

野崎先生、このフランス文学のレポートは何点ですかあ？

(二〇一九年七月)

『週刊現代』の取材に答えた人生のベストテン

『週刊現代』第62巻第33号、2020年11月28日、講談社

①『高橋是清自伝』（上・下巻）
高橋是清著／中公文庫

高橋是清が若いころに髪型を真ん中分けにしていた写真を見つけてから、私の髪型もまたずっと真ん中分けです。是清のやんちゃが大好きだ。

②『日本文学啓蒙』（折口信夫全集23）
折口信夫著／中央公論社③

いわゆる逆さ日本文学史。日本文学を一つの総体として見る視点があります。折口らしい著作です。

③『明治大正史 世相篇』
柳田國男著 加藤秀俊解説／講談社学術文庫④

本当に身近な、日常的に触れるものから歴史を考えるという姿勢は柳田國男が生み出したもので、その功績は大きいと思います。

④『ふおん・しいほるとの娘』（上・下巻）
吉村昭著／新潮文庫

最初に読んだ吉村作品は、大津事件の一部始終を描いた『ニコライ遭難』でした。吉村の文体にはしびれます。

⑤『忘れられた日本人』
宮本常一著／岩波文庫

この本を読めば、ものの考え方が近代になって大きく変化したことがよくわか

ります。

⑥『聖と俗 宗教的なるものの本質について』
ミルチャ・エリ阿德著、風間

敏夫訳／法政大学出版局

聖なるものと、その対極にある俗なる世界との対比によって、宗教的人間のあり方を問う本です。巨大な宗教史。

⑦『死と歴史 西欧中世から現代へ』
フィリップ・アリエス著、伊

藤晃、成瀬駒男訳／みすず書房⑧

医療が発達していなかった12世紀から現在までの、死のイメージの変容を分析する本です。

⑧『無心ということ』
鈴木大拙著／角川ソフィア

文庫

鈴木大拙は英語でいくつもの本を執筆し、仏教文化を海外に広く知らしめた人で、知の巨人です。

⑨『巴里物語』

松尾邦之助著／社会評論社
本作の影響で、私自身何回もパリを訪れました。パリは歴史の重みが息づく街です。⑩『新版 においの歴史 嗅覚と社会的想像力』
アラン・コルバン著、山田登世子、鹿島茂訳／藤原書店
鉄や金といった物質ではなく、形に残らないものの歴史を探求するその姿勢が凄いです。とにかく、カッコいい――。

③＝入手は古書のみ

パリの豆スープ、スーダン風

ここ数年、パリ熱に浮かれています。松尾邦之助という戦前のパリに住みついた風来坊、美馬徳之助というパリで色の道を修行した男の著作に親しんだからだ。オペラの脚本を書いたということもあり、この五年は、とにかくパリなのだ。パリが恋しい。だから、今は、鹿島茂先生や野崎歓先生の本ばかり読んでいます。

私の常宿は、交通至便な某地区の安ホテルだ。その由来を書きたい、と思う。四年前のこと、ネットで見ていて、びっくりするほど安い。パリ通の友人に、その地区の話をすると、突然、私に、そこはダメだ。それも、絶対にという。要は、アフリカ系の住民が多いところで、治安が悪く、そんなところの安ホテルなんて、危険だというのだ。しかし、頑固な私は、当然、ホテルを変えなかった。

到着してみると、百キロはあると思しき、中年の黒人の女性がぼつんとフロントにいますのみ。ネット予約だから、バウチャーを渡すと、彼女は、フランス語オンリーということで、埒が明かない。すると、通りに出て、英語のわかる人にバウチャーを読んでもらうことに。そんなこんなで、チェックインに一時半がかった。室に落ち着いて、外に出るともう、三時半だ。夜の十時に、観光して室に戻ると……冷えた豆の煮込みスープが置いてあるではないか。たどたどしい英語の書き置きがあり、「おわび」とのこと。

これには、参った。客の留守中に室に入って、スープを置くなんて。私はいろいろ考えた末に、スープは捨ててしまった。というのは、旅先でお腹を壊したくなかったからだ。申し訳ない。そ

れからというもの、なぜか妙に気に入って、そのホテルが常宿となった。今なら食べれると思う。そして、今、ホテルはどうなっているだろう。たまに、ネットで見ると、営業はしているようだ。私は、彼女のことを思い出して、この稿を書いている。あのスープの味や、いかに。元気でいてほしい。

(二〇一六年三月)

ただ今、論争中！

これまでの人生で顔面蒼白になったことが二回ある。一つは、高校生の時、スキーマのリフトで宙吊り、しかも逆さ吊りになった時。もう一回は、この分野の研究の最高の論文集といわれる、『万葉集研究』の第三十六集が届いた時のことだ(稿書房、二〇一六年)。京都大学大学院の吉川真司氏の「法会と歌木簡―神雄寺跡出土歌木簡の再検討―」という論文を見て、手が震えだした。なんと、ほぼ二十頁に渡って、上野学説が批判されているではないか。じつは、この論文集には、私も大作の論文を書いていたので、気分は上々で読みはじめたのだが。もう私は、これで学者生命も終わったか、と思った。

しばらくして、電話やメールで励ましの言葉が届いたが、言葉が出ない。しどろもどろだ。うーん、まいった。同じ本のなかに、自分の論文と、自分の学説を否定する論文が入っているとは。しかも、相手が悪すぎる。日本古代史の第一人者だ。さらに、不幸は重なる。母親が危篤だ。でも、母の危篤の慌ただしさで、多少救われた面もあった。結局、母親の葬儀を済ませて、気がつ

いてみれば、年も暮れとなっていた。

そんな時、いちばんの頼りになるのは旧友だ。愛知学院大学の非常勤講師の脊古真哉さんから、こんな電話をもらった。くよくよせずに、吉川真司さんに一度会ってはどうかと言うのである。私は意を決して、筆を取った。速達で出すと、翌日には丁寧なメールが届いた。私もお会いしたいとおっしゃいました、とのこと。私が京都大学まで行きますと返事を出すと、いや奈良大学にまで来て下さるということ。というわけで、お会いすることができた。

定刻の五分前に、ノックの音が聞こえてきた。あっ、お見えだと立ち上がったら、つまづいてしまった。吉川氏は、開口一番こう言った。

歴史学は、批判する時には、厳しく批判しますので、驚かれたでしょう。たまたま、同じ本になりましたね。

との謙虚で、さわやかな言辞に、私は救われた。なんだ、こんな人だったのか、よかったあ……と思ったのである。

まず、吉川氏は、上野論文の読解に誤りがないかと、聞かれた。じつは、論争といっても、相手の論旨を誤解している場合だって多いのだ。それを一つ一つ確認されたのである。発表された吉川論文は、驚くほど正確に上野の学説を読み込んでおり、誤読などないのだ。私は、その真摯な態度に、崇高なものすら感じた。

論旨の確認が終わると、互いに参照した文献で、入手していないものを点検した。そして、互いにコピーを交換した。だから、私も吉川氏から、コピーをいただいたのである。なおかつ、日本古代史の、ある研究グループが進めている研究の成果について、ご教示いただいた。私も、いくつかの国文学の研究の成果について話したが、吉川氏から受けた学恩の方がはるかに大きいと

思う。こうして二時間、私は吉川氏と話し合った。私は、別れ際にこう述べた。

いつになるか、わかりませんが、必ず反論を書きます。ここまで、よくしていただきましたので。

すると吉川氏はこう述べた。

私も、再反論が出て、考え直すべき点があれば考え直しますので。

吉川氏という人は、なんとという紳士なのだと思いますが、私はお見送りをした。

ちなみに、ちくま新書として刊行された拙著、『万葉集から古代を読みとく』第四章「木簡に書かれた歌」は、吉川氏から批判されている「馬場南遺跡出土木簡憶説―ヤマトウタを歌うこと―」（『國學院雑誌』第百十卷第十一号所収、二〇〇九年、國學院大學）という論文をわかりやすく書き直したものである。

※なお、その後、吉川氏への再反論は、「秋萩木簡と仏前唱歌と―吉川真司氏の批判に答える―」（『萬葉』第二百二十四号、二〇一七年、萬葉学会）として刊行した。はて、この論争は、どのように展開するのだろうか。はて。

（二〇一七年六月）

日本人の聖地観

ほんの少しでも宗教学を学んだ人には、釈迦に説法なのだが、多神教とは、多くの神がいます宗教というよりも、とめどなく神が生まれ続ける宗教といった方がわかりやすい。人も山川草木

も、神であるわけだから、神々が満ち溢れるのが、多神教世界なのである。つまり、あらゆる事物が神となる性質、仏となる性質をもっているのである。それは、事物が必ず供えている神性と仏性によるものと理解されてきた。一方、生まれ出ずる神々は、自然淘汰されるので、とめどなく神が生まれ、またたくまに神が消えてゆくのが、多神教社会ということになる。ということは、いかなる土地も、聖地になり得ることになる。こういう社会で大切なのは、神仏に対する知識や教義などではない。その場を尊いと思う感性そのものであるといえよう。また、尊いと思った瞬間に、いかなる土地も聖地となるのである。日本人にとっての巡礼とは、そういう神仏たちを路傍に発見することにあつた、と思う。旅先で神性を感じ取ったところが、その人にとっての聖地なのである（上野誠『日本人にとって聖なるものとは何か―神と自然の古代学―』中央公論新社、二〇一五年）。

三輪山に登拝してみるのがよい。あちらこちらに、お供えや、注連縄がある。いや、ひしめき合っているという表現の方が正確かもしれない。聴けば、登拝者ひとりひとりに、自分の祈りの場所というものがあるらしい。つまり、聖地のなかに、自分だけの聖地を作ろうとしているのである。家には家の神があり、村には村の神があり、個人には個人の神がいるのである。そして、聖地もまたそれぞれにあるのだ。大切なのは、そこでどう感じたか、ということなのだから、日本列島中に、聖地が満ち溢れることになる。一方、その聖地についても、優勝劣敗の自然淘汰が起こって、一大聖地ができてゆくのである。伊勢、高野山、恐山、各地の地獄などなど。聖地も競争なのだ。聖地も、また格付けされてゆくのである。

では、日本人はどのような場所を、好んで聖地としたのであろうか。それは、縷々述べたように、自分自身の感性で聖地と実感できたところなのであった。つまり、理屈ではないのである。西行（一一八一―一九〇）に、こんな歌がある。

太神宮御祭日よめるとあり

何事のおはしますをば しらねども かたじけなさに 涙こぼるる

〔新編国歌大観第三巻 私歌集編1 家集〕角川書店、一九八五年）

この歌は、『西行法師家集』の板本のみに見える三首のうちの一首で、西行の歌というより、西行の歌として、伝わっていた歌とみる方がよいだろう。伊勢の太神宮に詣で、どのような神さまがいて、どのようなお祭が行われているのか、私などにはわからないけれども、そのありがたさに、ただただ涙があふれるのみ、という歌である。

当該歌について、自らが拝む神仏の名も知らぬのは、信仰の名に値しないと、この歌の示す心の持ちようを厳しく批判している宗教家もいる。しかし、私は、そのような批判は当たっていないと思う。そういう批判こそ、近代合理主義の悪しき産物ではないのか？ 尊いと思うものを、それぞれが尊いと感じればよい、というのが日本型の宗教ではないのか？ その地に立つて、神恩、仏恩を感じれば、それでよい、というのが、日本型の宗教なのである。極言すれば、経典も教理も、一切いらないのである。ご本尊についても、ご祭神についても、知らなくてよいのである。西行は、この地が伊勢であって、尊い神が祀られていることは知っていたことだろう。しかし、それはあくまでも知識のレベルであって、この地にやって来て、その尊さをはじめて実感したのである。自らが、実感することによって、はじめて伊勢は西行自身の聖地になったとみるべきなのである。つまり、知識よりも、自らの感覚の方を信ずるという認識が、この歌には示されている、といえるだろう。

『万葉集』にも、こんな歌がある。

古の事は知らぬを 我見ても 久しくなりぬ 天の香具山

（巻七の一〇九六）

「いにしえのことなど知らないが……そんな私が見はじめてから、時間は久しく過ぎ去った——天の香具山」という歌である。香具山は神話の舞台であり、古い歴史を持った山である。しかし、私は、その神話や歴史を知らない。そんな私でも、悠久の歴史は感じ取れる、というのだ。では、作者は、なぜ感慨にふけっているのだろうか。それは、長い歴史に比べてみれば、自分が香具山を見た時間などほんの一瞬に過ぎない。しかし、私は、香具山を見はじめてからの時間を今は長く感じてしまっている、という点に感動しているのである。「久しくなりぬ」には、そういう個人の感慨を読み取ることができるのである。歴史とは、本来、知識のはずなのだが、知識がなくてもわかるというのだ。つまり、知識より、感ずることの方が、大切だというのだ。日本型の宗教は、どこまでいっても、個人の実感に由来するのである。

とめどなく生まれ、消えてゆく神々。その小さき神々の存在を感じ取ることを重視する姿勢にこそ、日本的な宗教の感性があると思う。

掃除、洗濯や、調理のような日常の仕事に心血を注ぐ生き方は、小さき神々を生活のなかに発見しようとする精神から生まれてくるものなのである。日本型の宗教における「行」とは、その多くは、掃除や洗濯、時には調理なのである。僧侶や神職の養成課程で重要視されるのはまず掃除。そして調理だ。加えれば、早寝、早起きか。それは、好ましい日常生活でしかない。取り立

てて、宗教的生活というわけではない。そういう一見瑣末とも思える修行に対して、入門者が不平を述べれば、いったいどうなるだろうか。多くの場合、次のように説教されるであろう。日常の作務や神明奉仕ができない者に、何ができるのか。まず大切なのは、掃除と調理、洗濯である、と。神仏は細部に宿りたまうとともに、日常の行動にも宿りたまうのである。それが「行」なのだ。日本の宗教者は、学の人ではなく、いわば行の人なのである。いくら学問ができて、行をともなわなければ尊敬されないのである。

私がこんなことを考えたのには、わけがある。とある留学生と話していた時のことだ。彼は、新幹線車両の掃除の様子を見て、何かに取り憑かれたように一心不乱に働く姿は、まるで宗教者の祈りに似ていると私に話してくれた。細かく号車ごとに分担が定められ、時間内に塵一つ残さずに掃除がなされてゆく、あの新幹線の掃除の場面だ。定められたムダのない動作、そして真剣な眼差し。留学生の話を聞いてからというもの、かの新幹線の掃除の場は、清掃員のひとりひとりにとっては、神仏の宿る聖地になっているのではないかと、私には思えてきた。あの祈るような眼差しは、いったいどこから来るのであろうか。

昨秋、私は、あの新幹線の清掃員の祈るような眼差しの秘密を解く鍵を手に入れることができた。寺西重郎『経済行動と宗教―日本経済システムの誕生―』という本を読んだからである（勤草書房、二〇一五年、初版二〇一四年）。寺西は、モノ作りに心血を注ぐ日本型の経済システムの核にあるものを、「世俗的な求道主義」ととらえて、次のように議論を展開している。

難行や複雑な教義理解によらず、あるがままに人は仏になるのだという天台本覚思想が広がるとともに、日本仏教は難行、苦行の仏教から易行（やさしい行）の仏教に変化した。そこから、むしろ日々の生活をよりよいものに磨きあげる世俗的な求道精神が生まれたというのである。この

考え方は、平安期から鎌倉期の思想上の変化をとらえてのことである。法然や親鸞の鎌倉新仏教は、自ら易行化することによって、民衆のなかに入るとともに、生活そのものを「行」とする求道精神が広がったと寺西は説くのである。こういった世俗的求道主義においては、茶筌職人は、よい茶筌を作ることこそが修行であり、鍛冶職人は、よい鋏を作ることこそが修行なのである。では、その技を評価する人は誰かといえば、消費者ということになる。つまり、お客様は神さまなのであり、神の喜びたもうモノを作ること、心血を注ぐ倫理観が生まれたというのである。ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義精神』（一九〇五年）の日本版だ。ロバート・ベラーが『徳川時代の宗教』（池田昭訳、一九九六年、岩波書店）で指摘したことをさらに遡らせて、中世に起源を求める労作である。

金や名誉のためのモノ作りではなく、求道のためのモノ作りの起源を、中世における仏教の易行化と、世俗的な求道主義の浸透に求める卓論といえよう。

私は、寺西の本を読んで、天台本覚思想を始発点とした仏教の易行化、さらには世俗的求道主義の普及を可能にしたものは何だったのか、と自分なりに考えてみた。私は、あらゆるものが神格化され、あらゆる場所が聖地となる宗教風土があればこそ、そういった精神が生まれた、と考えるに至った。ひたすら掃除の技を磨き、秒単位で働く清掃員の眼差しを見ると、あの新幹線の車両も、時に聖地になるのだ、と思ったのであった。つまり、日本人にとっての聖地とは、ひとりひとりが生活の中に見出すものなのである。

以上が、今、私が考える日本人の聖地観である。まことに、雑駁な議論ではあるが、読者諸賢のご教示を仰ぎたい。

安倍仲麻呂と王維の学力

日本から唐への留学生でありながら、英進を続け、唐の國務大臣にまでなった人物がいる。安倍仲麻呂である。同時代の人物でいえば、杜甫や李白が、望んでも得られるはずもないほどの高位高官であった。安倍仲麻呂とほぼ同じレベルといえ、王維であったが、王維は、一度失脚している。対して仲麻呂は、一度も失脚していない。

その仲麻呂も、玄宗皇帝の許可も下り、七五三年にいよいよ日本に帰ることになった。玄宗臨席のもと盛大な送別宴が行われたのだが、その折りに、王維も、送別の詩を贈ったのであった。その詩には、長大な序文がついているのだが、じつはそのよい注釈がない。しかし、仲麻呂が唐の宮廷内において、どのように思われていたかを知る唯一の資料である。困った私は、『遣唐使安倍仲麻呂の夢』を書くために、自分で注釈する必要に迫られた（二〇一三年、KADOKAWA／角川学芸出版）。しかし、これは学力のいる仕事だ。とにかく難しい。

まず、手に入れたのは、現代中国の研究書の注釈二つだが、これは内容がほとんど同じで、清朝乾隆帝時代の碩学、趙殿成の注をそのまま書き写しただけであった。日本にも、一つ注釈書はあったが、これも、同じで、趙殿成の注を書き写したのみ。ということは、誰も清朝の注釈書を越えていないということなのである。ただ、昔の学者は偉かった。ちゃんと、自分の学力は、清朝の学者にはるかに及ばないので、そのまま書き写す、と書いてある。

では、私はどうか。ほとんど丸映したが、コンピュータ検索があるので、少しは新見を入れることができた。また、その新見をもとに、解釈の訂正もした。しかし、それはコンピュータの力

で、私の力ではない。トホホ。

（二〇一六年九月から連載中の文章の一部）

禁断の読書指導

やはり、自分は九州人だと感じることもある。東北の料理を食べると、塩辛いと感じてしまうし、京料理を食べると味が薄いと感じてしまう。九州の料理を食べると味が濃いと感じるが、どこかほっとする。塩辛いわけではない。とにかく濃いのだ。これが、福岡に十九年、東京に十二年、奈良に二十六年住んだ私の料理の印象だ。甘い麦味噌に、甘い田舎醤油。だから濃厚なのだと思う。それは、そのまま母が作っていた味噌汁の味だし、がめ煮の味だ。がめ煮とは、関西でいう煮しめだが、ようするに鶏肉と芋類の煮付けだ。博多の郷土料理・水炊きのスープも、九州のラーメンのスープも、基本的には煮詰めた味なのである。

印象評に、印象評を重ね合わせて、どうということもない話を一つ。九州人の人間関係は、とにかく濃い。あれれ、新年会の二次会に予定していた店が、うかつにも定休日。あわてた幹事は、電話を入れた。横で聞いていて、吃驚仰天したことがある。

今、上野先生はくさ、二次会に連れて行こうとしたとやけど、店が定休日たいね。五人くらいやけん。これから、行くばい。

それは、自宅にかけた電話であった。タクシーで、突然、家を訪問なんていうことはあ、とは思ったが、それが「あり」なのだ。そういえば、子供のころ、家には必ず蟹の缶詰が買い置きし

であったことを思い出した。蟹缶のような高価な缶詰がこの世の中に存在するのは、急な来客のためだと子供心に思っていたものだ。

さて、恐縮しながら家に上がり込むと、すでに酒の用意がされている。すると、客のひとりが、つかつかと台所へ行き、冷蔵庫を開けて、つまみになりそうなものを持って来る。博多の小商人のせがれだった私の記憶がだんだんと蘇ってきたぞ。あったあった昔はそんなことが、と——。ここまでなら、まだよい。客のひとりが、夜中の二時に、そうめんが食べたいと言いつつ、すると奥さんは、

去年の中元の残りがありますけん。しまっしょかねえ。

冬の宴会のシメに、冷やそうめんというわがままを言うのだ。もう、私の小さな心臓は張り裂けんばかりで、そうめんを食べて、タクシーを呼んでもらい辞去したのはいうまでもない。が、しかし。帰るのがまた大変。なぜ帰る、どうして帰るとご主人、奥さん、娘さんまで通せんぼして帰らせてくれないのだ。聞けば、残った四人は、朝風呂に呼ばれて帰ったとか。しかも、四人とも奥さんとは初対面というのだから、すごい。そんなことをしたら、わが家なら即離婚だろう。もちろん、このご主人さまは、奥さまから、客が帰ったあとさんざん絞られたとは聞いたが、それでもすごいもんだと思う。

ここからが、本題。「エマニュエル夫人」(一九七四年)という映画が流行ったのをご存じだろうか。南の国で、奔放に性を楽しむ夫人の物語だ。純朴な中学生だった私も、見たくしょうがなかった。そこで定期考査が終わった翌日に、こっそりと中州の映画館に行くと、同級生の悪ガキ三人組と出会ってしまった。翌日には、全校中に、噂といっても真実なのだが、広まってしまった。しょんぼりとひとりで、野間というところにあった黒門書店に寄り道すると、もう書店のおやじさん

も知っていた。「エマニュエル、見たとげなね」と。いやあー、穴があったら入りたい。しかし、次におやじさんはこう言った。

エマニュエル夫人もよかよ。ばってん、もつともつとよかとのあるとぞ。

私はドキッとした。私は固唾を飲んで耳を傾けた。

ギヨーム・アポリネールって、知つとるね。ボードレールと並ぶフランスの大詩人たいね。

なんだ文学の話かと思つて、がつくりしたのだが、そのあとがよかった。

このアポリネールが、若かったときにこそつと書いたエロ小説が角川文庫から出たつたいねえ。そういうもんなら、同じエロでも、文学の勉強たい。買わんなあ……。

その時、買ったのが、『一万一千本の鞭』と『若きドン・ジュアンの冒険』である。たまげた読書指導である。私が活字にエロスを感じた瞬間だ。その後、私は歴史学に興味を惹かれながらも、なんとなく文学、それも『万葉集』に辿り着いた。まさか、その原点が、アポリネールのエロ小説というのはできすぎた話だが、とりあえず、そういうことにしておこう。ちなみに、とある座談会でフランス文学者の野崎歓先生にお聞きしたところ、一九七〇年代までこれらの本は、フランス本国では、発禁だったとか。

黒門書店のおやじさんが、それまでに私が買っていた本を知っていたのは、いうまでもない。富島健夫の小説を買っていたのを知つていて、それなら、こういうもんを読まなきゃいかんということで、アポリネールの読書指導とあいなったわけである。おやじさんいわく、富島よりは、舟橋聖一。舟橋よりは、丹羽文雄がいいぞとのアドバイスを受けた。この文章を書くにあたり、パリの東墓地のアポリネールのお墓詣りをしてきた。そして、

極東の日本という国、その博多の地に生まれ、『万葉集』という古典を勉強している一学

徒でございます。お蔭をもちまして、なんとか、研究者として飯を喰っています。以後、お見知りおき下さいまし。

と挨拶してきた。

考えてみれば、とんでもない読書指導である。何よりもすごいのは、ずかずかと人の心に入ってゆく人間関係の作り方である。これが、九州人気質なのだ。良くも悪くも互いの生活や心の中に入ってゆくのである。硬い自我の防波堤を作る東北の人、入っていきそうに見えて他人の干渉を許さない京都の人、それに対して、つきあいをはじめてまだ日が浅いにもかかわらず、ずかずかと踏み込んでゆく九州人。とにかく、九州人の人づきあいは濃いのだ。

さて、最後は、料理の話に戻る。九州人はウスターソースが好きだ。天ぷらにも、ソースをかけて食べることもある。カレーにも好みでソース。それはまだよい。皿うどん、チャンポンにもと、とにかく、九州人は濃い味が好きなのだ。続いて男女関係についても書こうと思ったが、紙数が尽きた。残念。

(二〇一九年五月)

奈良、発見

『万葉集』は、奈良の文学なので、奈良について語るとは、すべて『万葉集』と結びついている。奈良がなければ、今の私はない。

奈良有情

一、土塀の美学、西の京あたり

内緒の話。こんな作文を学生が書くなら、私は最高点をつける。

ある崩れかけた土塀に、私は歴史を感じました。私には、いつ誰が、どのようにこの土塀を作ったか、見当もつかないけれど、そこに土塀が今もあること、そしてその前に今、自分が立っていることに感激しました。

では、かの亀井勝一郎（一九〇七—一九六六）は、この土塀の美について、何と書いているか。

大和古寺の土塀や奈良近郊の民家の築地は、そうあざやかなものではなく、赤土のまじった、古びた地味な感じのことが多い。よくみると繊細な技巧の跡がうかがわれる。そしてくずれたままにしてあるところに、古都の余香が、あるいは古都のたしなみともいふべきものが感ぜられる。

（亀井勝一郎『大和古寺風物誌 他一編』旺文社、一九八〇年、初版一九六八年、初出一九四三年）とある。「古都の余香」「古都のたしなみ」とあるではないか。文章は、西の京あたりの光景なのだが、奈良公園にもある。しかし、かつては、奈良盆地のどの集落にもあった風景であった。その崩れた土塀の生活臭が、まさに大和の美だった、と私は思う。

二、薬師寺金堂本尊薬師如来

少し、大仰な話をしたい。「日本的知性」というものがあるとするとするなら、それはどんなものか。たぶん、古くは「和魂漢才」。明治以降なら、「和魂洋才」だ。外来文化に学んでこそ、自らの文化が磨かれ、その力も発揮できるという考え方だ。日本の哲学者は、大学ではデカルト、カント、ショーペンハウエルを教えたが、休みになると奈良と京都で観仏三昧。それが、日本的知性なのだと思う。そういう哲学者のひとりに、和辻哲郎（一八八九—一九六〇）がいた。

その和辻の『古寺巡礼』に、薬師寺のご本尊を讃えた一文がある。

とにかくこの像を凝視してほしい。あの真黒なみずみずした色沢だけでも人を引きつけて離さないものである。しかもその色沢がそれだけとして働いているのではない。その色沢を持つ面の驚くべく巧妙な造り方が、実は色沢を生かしているのである。そうしてその造り方には、銅という金属の性質に対する十二分の理解が織り込まれている。

（和辻哲郎『初版 古寺巡礼』筑摩書房、二〇一二年、初出一九一九年）

金属で肉体美を表現するためには、まず金属の性質をよく知らなくてはならないというのだ。そのあたりを和辻は、「永遠に不滅なものの硬さと冷たさを持ちながらも触るれば暖か握りしめれば弾力のありそうな、あの奇妙な肌」という。なるほど、あのお薬師さんの肌の質感こそ、匠の美なのかもしれない。

三、春日の原始林

奈良のすばらしさはどこにあるか？ 私は、県庁所在地の駅から歩いて二十分で、原始林があることだと答えることにしている。春日の原始林とは何ぞや。それは、神と人とが守りたもうた森と山である。都を造り、都市を維持するためには、多量の木材が必要なのだが、原始林のまま

残したのだ。だから、遣唐使たちは、あの御蓋山の月を心に焼きつけて、唐土に旅立っていったのである。

さて、この春日山と御蓋山を西から眺めると、鳥が翼を広げて、こちらに向ってやって来るように見える。これこそ、「羽易はがひの山」と万葉びとが称した故郷の景なのであった。

春日かすがなる 羽易はがひの山ゆ 佐保さほの内うちへ 鳴き行ゆくなるは 誰呼たれよこ子鳥こどり

〔万葉集〕卷十の一八二七

訳すと、「春日にある、あの大鳥が翼を広げたように見える羽易の山。その羽易の山から佐保のあたりへと鳴きながら飛んでゆく鳥がいる。それは誰を呼ぶ声なのか、その名も呼子鳥よ」となるうか。ならば、どこから見るといちばんよく、大鳥が翼を広げているように見えるのか？ 高畑町や東大寺の転害門よりすこし西に行くと、まさに大鳥が翼を広げているように見える。

ちなみに、「羽易の山」の「はがひ」も、「はがいじめ」の「はがい」も同じで、大鳥が翼を広げた姿をいう言葉である。

四、唐招提寺の円柱

亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』に「円柱と翼」と題された一文がある。唐招提寺についての文章の一節である。

わが古寺の円柱はいうまでもなく木造であるから、光を反射することは少ない。むしろ光を吸収して、柔らかくその木目のあいだに湛たえるといったほうがいいようだ。月光の

下でながめたならば、いったん吸いこんだ光がかすかににじみ出るといったふうに輝いているのではなからうか。

（亀井勝一郎『大和古寺風物誌 他一編』旺文社、一九八〇年、初版一九六八年、初出一九四三年）

と書いている。そして、亀井は、「元来、柱というものは人がもたれかかるものである。もたれかかるために柱を建てるわけではないが、自然にそうなるのは我々の日常経験するところである」という。この亀井の一文を読めば、誰しもが、唐招提寺の円柱に寄りかかりたくなるのではないか。とすれば、円柱にもたれかかりたいと思わせるところにこそ、匠の美があるのだと私は思う。触れてはならないが、触れてみたいと思わせる匠の技というものがあるのだ。そういう意味でいえば、美とは危険なものだ。その美を妬む心も起こるし、独占したいと思う心も芽生える。そして、あの円柱に触れたくなるのだから。

五、奈良の鹿

学生たちと山辺の道を歩いて、とある農家の庭先で、スイカをご馳走になっていた時のこと。なんと、鹿が疾走して行くではないか。奈良公園の鹿がやって来たと思ったが……。野生の鹿だった。春日の神の使い、いや春日の神そのものとして鹿を保護してきた結果、奈良公園の鹿は世界で唯一、人に懐いている。これは、世界の奇跡なのである。神と人と鹿の、世にも不思議な共生がそこにあるのだ。

さて、私の万葉ゼミナールには、厳しい試験がある。この試験に合格しないと、どんなに成績がよくても卒業できない。試験の内容は、鹿の鳴き声のものまねである。私は言う。

諸君。いやしくも奈良で万葉を学ぶ者が、鹿の鳴き声を聴いたことがないとは、何事か。

そんな不勉強な学生は、断じて卒業などせんぞ——。

この厳しい卒業試験で、一声も発しない学生がいた。私が詰問すると、ただ一言。

夕されば 小倉の山に 伏す鹿し 今夜は鳴かず 寝ねにけらしも

（『万葉集』巻九の一六六四）

と言うではないか。今日は寝ているので、聞こえませんかということらしい。はて、採点はどうしたのか？

六、中宮寺半跏思惟菩薩

三年前、欧州のとある空港で、ロスト・バゲッジになった。それも、旅行初日だ。空港職員が、ゆつくりと私の眼を見ながら、一つ一つ丁寧に説明してくれた。私が拙い英語で、礼を述べようとする、彼女はそれを制した。あのぶっきらぼうとも思える表情を今も私は忘れない。

亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』に、こんな記述がある。中宮寺の半跏思惟菩薩を見た亀井は、慈悲とは微妙なものだという。

菩薩は一切衆生をあわれみ救わねばならぬ。だがこの自意識が実に危険なのだ。もし慈悲と救いをあからさまに意識し、おまえたちをあわれみ導いてやるぞといった思いが微塵でもあったならばどうか。表情はたちまち誇示的になるか説教的になるか、さもくば媚態と化すであろう。

（亀井勝一郎『大和古寺風物誌 他一編』旺文社、一九八〇年、初版一九六八年、初出一九四三年）

助けた側が、相手の感謝の念を肯定的に受け取ると、たちまちにして、それは上から目線となるというのである。その微妙なあわいを亀井はとらえているのだ。

そういえば、思惟菩薩の表情は、どこかそっけない。「オーケー、オーケー。ノー・プロブレム」と言ったあの空港職員の眼を、私は、今、思い出している。

七、聖林寺十一面観音

『徒然草』の一節に、こんな章段がある。八歳の兼好が父にこう聞く。人が仏になるというのなら、人はどのようにして仏になるのか、と。すると父親は、それは仏の教えによるのだと答える。では、その仏とやらには、誰が教えたのかと兼好。それも、仏の教えによって仏になったのだと父。ならば、最初、第一の仏は、どうやって人が仏になったのか——。ここで、父は切れた。こんなことを長々と書いたのは、わけがある。聖林寺の十一面観音について、次の文章があるからだ。

きれの長い、半ば閉じられた眼、厚ぼったい瞼、ふくよかな唇、鋭くない鼻、——総て我々が見慣れた形相の理想化であって、異国人らしいあとも認められなければ、また超人を現す特殊な相好があるわけでもない。しかし我々はそこに神々しい威厳と、人間のものならぬ美しさを感じる。薄く開かれた瞼の間からのぞくのは、人間の心と運命とを見とおす観自在の眼である。

（和辻哲郎『初版 古寺巡礼』筑摩書房、二〇一二年、初出一九一九年）

この仏像は、人を写しているのか？ それとも、人ならぬ仏の相を写しているのか？ 人として理想の身体。そこに感じる精神性。が、しかし。ならば、人は、仏像をなぜ崇拜の対象にするのか？ こんなこと、三流の万葉学徒がわかるはずもない……。

八、香具山の稜線

香具山には、こんな神話がある。

伊与の郡

郡家ゆ東北のかたに天山あり。天山と名くる由は倭に天の加具山あり。天ゆ天降りし時二に分かれて、片端は倭の国に天降りき。片端はこの土に天降りき。因りて天山と謂ふ、本なり。

（前田家本『釈日本紀』巻七「天香山」条）

山が降ってきた時に、途中で割れて、一つは伊予の天山となり、一つは香具山となったという話である。だから、畝傍山と耳成山、香具山のうち、香具山だけに「天の」という修飾句が付くのである。「天の」だけではなく、「天降りつく」という修飾句もある（『万葉集』巻三の二五七）。

そんな香具山の歌のなかに、こんな歌もある。「古の事は知らぬを我見ても久しくなりぬ 天の香具山」（『万葉集』巻七の二〇九六）という歌だ。昔の歴史のことなんて知らないが、俺さまが見ても奥ゆかしく感じられる、と歌っているのである。感じることもの方が大切なのだ。知識よりも。

九、東大寺大仏

美術史家にして歌人、歌人にして書家。文人・会津八一（一八八一—一九五六）の歌碑が、東大寺の大仏殿の前に建っている。

東大寺にて

おほらかに もろて の ゆび を ひらかせて おほき ほとけ は あまたらし
たり

である。おおらかに、両手の指をお開きになって、大仏さまは満ち満ちているという歌である。「あまたらしたり」を漢字仮名交じりで書くと「天足したり」となる。この言葉は、『万葉集』にも、登場する。生命力が天空に充滿していることをいう言葉だ。八一は、『自註鹿鳴集』（新潮社、一九七九年、初版一九六九年、初出一九五三年）で、「あまたらし・盧舎那仏即ち大仏は、宇宙に遍満すとも、或は宇宙と大きさを同うすともいふべし」と述べている。つまり、この大仏は宇宙そのものであると述べているのである。全宇宙の理法を説く、『華嚴經』の思想、そのシンボルである「るしやなだいぶつ」は、宇宙のシンボルなのである。

片手ではなく両手。握り拳ではなく、手を開いて、宇宙そのものを体現する大仏。それは、まさに衆生を救う姿なのである。

聖武天皇は、世界のどこにもない巨大な金銅仏を造ることによって、人の心をひとつにしようとした。それは、宗教の力ではなく、人の力を示すものなのだ。あの大仏は、人の力の偉大さを示しているのだと思う。宇宙のシンボルも、人の造りたもうたものなのだ。

十、浄瑠璃寺の春

四十八歳で死んだ文学者・堀辰雄（二九〇四—一九五三）の最後のまとまった著作が、『大和路・信濃路』である。妻と連れ立った戦争中の奈良旅行記だ。二人は、「ようやく」というより、「偶然」

に浄瑠璃寺に辿り着く。着いてみると、阿彌陀堂を案内したのは、寺僧ではなく、十六、七の娘だった。仏像を見てまわる夫を残して、少女と妻は、裏庭を眺めながら話していたのではないか。

「ずるぶん大きな柿の木ね。」妻の聲がする。

「ほんまにええ柿の木やろ。」少女の返事はいかにも得意さうだ。

「何本あるのかしら？ 一本、二本、三本……」

「みんなで七本だす。七本ですが、澤山に成りまつせ。九くたいじ體寺の柿やいうてな、それを目あてに、人はんが大ぜいハイキングに来やります。あてが一人で腕もいで上げるのだすがなあ、そのときのせはしい事やつたらおまへんなあ。」

「さうお。その時分、柿を食べにきたいわね。」

（堀辰雄「浄瑠璃寺の春」『堀辰雄全集』第三巻、筑摩書房、一九九六年、初版一九七七年、初出一九四三年）
なんとたわいもない会話。おいおい、仏像と浄土庭園はどうなつたと突っ込みを入れたくなるところだ。しかし、そう読んでは台無しだ。あの仏像と庭園に接してこそ、はじめてこんな平安な気分で少女と会話ができたと考えなくてはならないのだ、と思う。

十一、月光のなかの三月堂

先日、和辻哲郎の『古寺巡礼』（筑摩書房、二〇一二年、初出一九一九年）を読んで、はっとしたことがあった。次の一文である。

後世に現われた東大寺の勢力は「僧兵」に代表せられる。この偉大な伽藍が焼き払われたのも、要するにこの勢力が自ら招いた当然の結果に過ぎまい。何故なにゆえこの大学が大学として開展を続けなかったのか。何故そこに精神的事業の力強い伝統が生きて行かなかつ

たのか。

とある。何と厳しい歴史への眼差しだろう。平和の宗教であるべき仏教。その根本道場でさえも、墮落を免れ得なかったというのだ。そして、和辻は、こうも述べている。『僧兵』を研究した知人の結論が、そぞろに心に浮かんて来る、——『日本人は墮落し易い』と。なんと厳しい評価なのだろう。その東大寺は、今は、人びとの安らぎの場になっている。和辻は月光に照らされる三月堂の美を、「その間に壁の白色が、澄み切った明あきかさで、寂然せきぜんと、沈黙ひびきの響を響かせていた。これこそ芸術である。魂を清める芸術である」と述べている。

和辻のいう「沈黙の響」とは、何か？ もの言わぬものの声ということか。知識や権威は、人の眼を曇らせるものである。それも墮落を免れ得ぬとは、恐ろしい呪文のような言葉だ。あるいは予言か？ 美とは、発見するものなのだ。

十二、御蓋山のこと

天あまの原はらふりさけ見れば春日かすがなる御蓋みかさの山にいでし月かも

（『古今和歌集』巻九の四〇六）

天空を振り仰いで見ると、春日にある御蓋の山に出ていた月が思い起こされる、と訳すことができる。春日野からおにぎり型に見えるのが御蓋山だ。その後ろにあるのが、春日山。だから、春日にある御蓋山と歌うのだ。

ちよつと、ここでややこしい話をする。春日山の北にある若草山が三段になっていることから、若草山のことをいつのころからか「三笠山」と呼ぶようになった歴史がある。だから、「ミカサヤマ」が二つあって、ややこしいのである。そこで、地元の人々は、若草山のことを「サン（三）カサ（笠）

ヤマ」、御蓋山を「オン（御）カサ（蓋）ヤマ」という。もちろん、この文章で話題にしているのは、御蓋山の方である。この御蓋山に出た月こそ、かの阿倍仲麻呂が遠く唐土から奈良の地を想起した山なのであった。

話はがらりと変わる。「月が出た出た月が出た。三池炭鉱の上に出た」という炭坑節を思い出してほしい。じつは、それぞれの地域にはその地域の代表となる土地がある。福岡県の三池なら、やはり炭鉱なのだ。

では、平城京で生活した人びとは、どこから出る月を愛でたのか。それは、平城京の東にある御蓋山の月だったのである。

（二〇一五年六月～九月）

大津皇子と磐余池、風景の記憶

失脚と刑死、大津皇子

かつて、政局の剣が峰に立った小泉純一郎首相は、こういった。「今は、失脚しても、殺されるということはありませんか」と。朱鳥元年（六八六）十月二日、天武天皇の第三皇子である大津皇子は、謀反の疑いで逮捕。その翌日に処刑された。『日本書紀』は「賜死」と記すが、これは処刑に代わって自決が許されたという意味ではない。齢二十四。その大津皇子が死に際して詠んだ歌が、『万葉集』に伝わっている。

大津皇子、死を被りし時に、磐余の池の堤にして涙を流して作らす歌一首
 百伝ふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ
 右、藤原宮の朱鳥元年の冬十月

（巻三の四一六）

仮に「自らは、磐余の池に鳴いている鴨を今日のみ見て、死んでゆくのか」と訳をつけておこう。この磐余の池の堤とも考えられる遺構が、橿原市教育委員会によって発掘された（同市、東池尻町）。もちろん、異論もあり、今後の調査を待たねばならないが、現時点で万葉研究の立場から、歌の見方について述べておくことは、あながち無意味なことでも、あるまい。

では、なぜ死に際して、磐余の池が詠まれたのだろうか。まず、第一には、護送中に通過した可能性や邸宅から近かったことが考えられる。しかし、歌の中の地名には、歌中で果たす役割といるものがあると見なくてはならない。なぜならば、地名を詠み込めば、その地名から連鎖的にイメージが広がってゆくからである。「永田町↓国会↓政治」「浅草↓浅草寺↓仲見世↓人情味」のように。

とすれば、磐余池から、当時の人びとが想起したことは何か？「ああ、天の香具山の北麓のあの大きな池だね」と想起でき、しかも歴代天皇（大王）の宮に隣接している池だと想起できたはずである。つまり、誰もが知っている有名で大きな池で、かつ古い由緒のある池ということだ。

堤の上で考えたこと

過日、榎原市教育委員会の平岩欣太さんから、堤の上を案内してもらった。長く伸びる四つの丘は、かつては池の中の島であり、一歩歩けば一歩ごとに、重なり具合が異なっており、見える島影は変化してゆく。そして、その島影から時折、天の香具山の頂が望める。池あり、島あり、想像するに船も浮かんでいて、水鳥もいたことだろう。おそらく、そういう風景が、万葉時代の人びとの脳裏には想起されていたはずなのである。つまり、磐余の池には飛鳥の都に住む多くの人が共に有、された水辺の景の、いわば集合的「記憶」のようなものがあつたのではないか。じつは、この歌については、大津皇子が実際に作つたという『万葉集』の伝えを重視する研究者たちと、大津皇子の物語が語り伝えられるなかで、後の時代に作られたと考える研究者たちとがいる。後者の説に従って歌劇と考えれば、主人公、絶唱のアリアだ。ただ、どちらにしても、次のことは、確実にいえるであろう。磐余池の堤は、悲劇の皇子絶唱の舞台として、これに勝る舞台はなかったのではないか――。

(二〇一二年一月)

正倉院と万葉集、そして今

どんなに遠い国の出来事であつたとしても、どんなに遠い昔の出来事であつたとしても、「今」と「自分」に繋がっていると思う瞬間がある。

天平宝字二(七五八)年の正月。大伴家持は多忙を極めていた。彼は右弁官という要職にあり、大蔵省の事務を取り仕切っていたからである。が、一方。正月には、さまざまな宮廷行事が行われ、それに伴う宴会が次々と行われる。その宴では、天皇から詩歌を奏上せよとの勅が、いつ出るかも知れぬ。ために、勅に備えて、予め歌の準備しておく必要があつた。いくら即興詠といつても、天皇臨席の満座で恥をさらしたくない。この年の正月三日は、はじめて巡って来る子の日で、初子の宴が宮中の内裏で行われる予定である。もし、勅が出れば、家持は自作を披露する必要がある。ために、彼は予め歌の草稿を準備していた。

初春の 初子の今日の 玉箒 手に取るからに 揺らく玉の緒

(巻二十の四四九三)

家持は、この日、玉箒たまはらきというものが、参集者に天皇から下賜されるので、玉箒を歌つた歌を奏上しようと準備をしていたのである。玉箒とは、蚕室から繭玉を集めるために用いられる箒のことであり、それを模った縁起物のことをいう。箒にたくさんのお繭玉がくっついてくれば……多くの絹糸ができる。この行事は、時の内相・藤原仲麻呂が、中国の古い儀式を日本の宮廷行事に取り入れたものであつた。家持は、ゆらゆらと揺れる「玉の緒」すなわち、繭玉を模ったガラス玉を詠んで、今年も豊かな年になりますように、と歌おうと準備していたのである。この天平宝字二年の子の日の宴の玉箒が、同じく子の日の行事で使用された鋤とともに正倉院に伝来しているのである。鋤は、豊かな秋の稔をもたらすものである。まさに、農耕と養蚕の新年の縁起物である。

財を集める筈といえ、東京の読者なら西の市の熊手を思い出す人がいるかもしれない。また、大阪の読者なら、「商売繁盛、笹持って来い」のえびすさん（正月十日）の福笹を思い出すだろう。つまり、これらの行事は富の到来を想起させる縁起物を授かる行事なのである。あの派手に飾り立てられた縁起物は、玉簪の末裔といえよう。だから、玉簪を見る時は、わずかに残っているガラス玉を見逃してほしくないのである。それが、揺らく玉の緒で、来るべき新年の富の象徴だからだ。

一方、唐で流行していた風習に、色絹や金箔を切り抜いて、人や花の形を作って飾る行事があった。こちらは、毎年正月七日（入日といわれる）の行事であった。このパッチワークの飾り物は、贈答品でもあり、そこには新年を寿ぐ佳句が書き入れられていた。東京の「皇室の名宝展」で展示された人勝残欠雑張は、天平宝字元（七五七）年に奉献され二枚を一枚に張り合わせたものである。こちらは、佳句を書いて互いに贈り合うというものでいえば、年賀状の源流といえなくもない。ちなみに、家持は多忙のため、結局子の日の宴に出席することはできなかった。したがって、準備していた歌は、披露されずに、家持の手元に未発表のまま残っていたのである。その歌が、後に万葉集に収められたのであった。正倉院と万葉集と今とは、そんな奇縁で結ばれているのである。

（二〇〇九年十月）

谷崎潤一郎先生の柿の葉寿司談義

薬師寺の塔に、ひとひらの雲の舞う大和路の秋。気候も良くなったということで、正倉院展に合わせて、先週末、谷崎潤一郎先生を奈良にお招きすることができた。勤務先の奈良大学国文学科では、学生たちに、講演もしていただいた。大学としても、名誉なことであったと思う。ただ、学生たちのなかには、かの大谷崎を知らぬ者もいて、落胆した。谷崎より、又吉の方が有名なのだ。私は、もちろん京都駅まで谷崎先生をお迎えに行った。谷崎先生は、ゆうゆうと下車され、「やはり、新幹線は早いですね」とひと言。すると、同行の新潮社の柴田美穂さんが、「今日のお昼は、柿の葉寿司。しかも、必ず鮭にしてください」と私に耳打ちを。これには、まいった。というのは、谷崎先生来訪ということで、すでに松花堂弁当を特注していたからである（名前は伏せるが、京都の料亭の料理長に泣きついて作ってもらっていたのだ）。

私は、何事も無かったかのように、鮭の柿の葉寿司を売店で買い求めて、近鉄特急のなかで差し出したのだが……。先生は、柚子がない、と言って、急に不機嫌になられてしまった。

「柿の葉寿司を食べる時は、柚子を搾らなきゃ」と、先生は言う。しかし、関西に住んでこのかた三十年になる私は、関西人がそんな食べ方をしているのを、一度たりとも見たことがない。私は、「そりゃあ谷崎流ですよ。柚子なんかありません」と突っぱねたが、それでも先生は、「柚子がないとは」とおっしゃる。ところが、大和西大寺に到着した頃までには、十七個もの柿の葉寿司を召し上がっていた。老人快食、恐るべしである。

大和西大寺の駅から、大学にお連れ申しあげたけれど、まだ機嫌は直っていないご様子。いよ

いよ、大講堂で、千人の学生を前に、講演が始まる。ほっと、ひと息。が、しかし。私は、閉口してしまった。「奈良大学の上野誠教授は、私の『陰翳禮讃』も読んでおらぬ。第一、食べ物に対する執着心がない。そんな者に、文学を語る資格がありますか。いやしくも、国文学科の教授ですぞ」と壇上で、私をこき下ろすのである。そして、先生は、堰を切ったように、柿の葉寿司の作り方を、学生たちに講釈しはじめたのであった。

大先生曰く、「米一升につきだな、酒一合の割合で、メシを炊くのだよ。酒はなあ、釜が噴いてきたときに、さっと入れるのだよ。この頃合いが難しい。柿の葉寿司も、男と女の仲も、すべては頃合いだ。頃合いがわからん奴は、何をやってもダメだ。メシをよおしく蒸らしたら、今度は、完全にメシが冷めるまで待たねばならぬ。ここで待てない奴も、ダメだな。待てない者は、ダメだ。メシが冷え切るのを待って、手に塩をつけて、固く握らにゃあ、ならん。この時に、少しでも水気があつてはならんぞ。塩ばかりで握るのが秘訣だ。素人は、すぐに濡れ手で握ろうとするから失敗する」と。

最初は、大谷崎の講演ということで、嬉々として話を聴いていた学生たちも、なにやら不思議そうに大先生を見はじめた。それも、そのはずである。

先生は、少し咳き込んだ後、「ここで、鮭の荒巻を薄く切り、それをメシの上に乘せて、その上から柿の葉の表を内側に巻いてゆき、包み込むんだ。君たち、ここで気を抜いてはいかん。柿の葉も鮭も、あらかじめ乾いた布巾で充分に水気を拭き取っておくんだ。そういう細かいところで、出来栄えに差ができるのだからね」と、蘊蓄を垂れる。すると、心なしか大先生の機嫌は、良くなったように見えた。「柿の葉で包んだらなあ、寿司桶でも飯櫃でもいいから、小口から隙間のないように寿司を詰めて、押し蓋を置いて、漬物石ほどの重しを乗せるんだな。夜漬けたら、

翌朝には食べることができる。好みにもよるが、私は、一日目の味が、最もおいしく感ぜられる。味は落ちて、二、三日は食べられるぞ。さてさて、食べる直前に、蓼の葉で酢を振りかけねばならん。蓼が無けりゃ、柚子で、柚子がなけりゃ、かぼすで食べるのがよい。レモンがよいと言う人もいるが、それは邪道だ。じゃあ、なぜこの柿の葉寿司がうまいのか。君たちにはわかるまいよ。上野教授にも、わからんはずだ。鮭の脂と塩気とが、いい塩梅に染み込んで、荒巻鮭が、あたかも生身のように柔らかくなってゆくのだからなあ。もちろん、東京の握り寿司もいけれど、この味も格別だ。今年の夏なんかね、こればかり食べて暮していたようなもんさ——」

学生たちは、いつになったら小説の話になるのだろうと、キョトンとしている。大先生は、知ってか知らぬか、悦に入って話し込んでいる。いやあ、困った。

話は、まだまだ続く。「それにつけても、こんな荒巻鮭の食べ方もあったのか、と私は感心したのであります。物資に乏しい山里の人々の大発明であります。都会人は、田舎の人よりも、自分たちの味覚の方が優っていると考えているようですが、田舎の方が、味覚がよほどたしかで、われわれの想像の及ばない贅沢をしているのであります。したがって、老人は、都会に見切りをつけて田舎に隠棲するのもいいでしょう。ただしね、田舎の町も、年々変わっていくから、おちおちとしていられませぬけれど。これは、都会人が田舎のよいところを横取りしているように、私には見えるんですよ。諸君、メシを完全に冷ますことを忘れてはならん。手も柿の葉も桶も、よく乾ききった布巾で水気を拭き去っておく。これが秘訣です。まあ、いいだろうでは、よいものは望めません。これにて、本日の国文学科の特別講義を終えたいと思います。以上」

大先生が意気揚々と降壇したのはよいけれど、後に残された私と学生たちは、キツネにつままれたままだった。

ほとんどの読者は、種明かししなくてもわかると思うが、これは、谷崎の『陰翳禮讃』の柿の葉寿司の蘊蓄部分を、講演にしてフィクションにした拙文である（『谷崎潤一郎全集』第二十巻、中央公論社、一九六八年。初出『経済往来』一九三三年十二月号～一九三四年一月号所収）。

私は、最初に、日本家屋から導き出される日本文化論である『陰翳禮讃』に、柿の葉寿司の蘊蓄が、長々と入っていることに違和感を覚えたし、今もその違和感は、払拭できていない。ただ、『陰翳禮讃』の主題は、隠れた美の発見にあり、あの日本家屋の陰翳の深みを知らずして、どうしても日本に生きてゆく価値があるうか——、という問いかけであった、と私は思う。

ならばなぜ、柿の葉寿司か？ 私は、谷崎が、山里の暮らしのなかで編み出された工夫に、称賛の辞を惜しみなく送っていることに注意を払いたい。限られた条件のなかで、その美を最大に引き出してこそ、人生を楽しむことができるのだというのが、谷崎の『陰翳禮讃』の教えなのだと思う。

と、ここまで書いたところで、『芸術新潮』の副編集長高山れおなさんから、柿の葉寿司の老舗「平宗」のご主人に、谷崎のレシピで、柿の葉寿司を作ってもらおうじゃないかとの提案があった。ご主人の平井宗助さんと料理長苦心の『陰翳禮讃』レシピの柿の葉寿司が、研究室に届けられたのである。われわれは、かの大谷崎の、かの『陰翳禮讃』の、と期待に期待して一夜を明かし、翌日、蓼酢をかけて食べたのだが……。

素朴といえば素朴、うま味がないといえばうま味がない。えつ、これが……という味だった（平井さん、ごめんなさい）。今の酢飯の柿の葉寿司を知っている私たちには、あまり美味しくは感じられないのである。

荒巻鮭は、東日本の文化であり、ここは谷崎に柿の葉寿司の作り方を教えた人の工夫なのか、谷崎自身の工夫なのか、よくわからない。それと、もう一つ注意しておくべきことがある。谷崎の製法は、これを発酵させて、熟れ寿司を作る製法なので、酢飯に具をのせないものである。だとしたら、奈良県南部から和歌山県で行なわれていた、発酵させるタイプの古い製法だったといえよう。それを発酵させずに一夜寿司で食べる食べ方を習ったと考えられるのである。

以上のごとくに思いを巡らすと、谷崎流の柿の葉寿司の味は、じつに微妙なものとなる。まるで、谷崎の文体のように――。

（二〇一五年十二月）

東アジアへ、オペラ発信

アジアの時代、文化の時代といわれて久しい。しかし、それをかたちにしてゆくことは、じつに難しい。私は、万葉学徒として、細々と研究と教育を続けているが、ある時、千載一遇の経験をする事ができた。

数年前、「東アジア文化都市」という芸術、文化を中心とした都市交流が行なわれていたのをご存知だろうか。日本、中国、韓国、韓国の文化大臣会合で生まれたこの交流プログラムが、日本は奈良、中国は寧波、そして韓国は済州島で、一年を通じて開催されていた。国家間の関係がうまくゆかない今こそ、都市間交流を盛んに。政治問題が山積している今こそ、文化交流でという逆転の発想だ。簡単にいえば、都市相互での芸術交流をしましうよ、ということだ。奈良東大寺の

池に、突然、蔡國強の造る船が浮かんだり、済州での管樂祭に日本、中国、韓国の青年が参加したりというプログラムが、今年、繰り広げられたのである。

ではなぜ、「東アジア」か。東アジア世界は、文化で結ばれた地域だ。漢字、儒教、仏教、律令を受け入れて国造りをした地域であり、中国、日本、韓国はもとより、ベトナムやいわゆるシルクロードの西域諸国も入る。わかりやすくいえば、箸を使う国々、ということになるかもしれない。この漢字、儒教、仏教、律令を文化基盤として国造りした国家と地域が、連合体を作れば、EUよりも広大で、経済規模も大きな地域連合が出現することになる。

この「東アジア文化都市」の奈良の演劇プログラムのオペラの脚本を書くチャンスが巡って来たのである。『万葉集』の時代、奈良は国際都市であり、『万葉集』は漢字表現されたヤマト歌なので、交流にうってつけというわけだ。

舞台は、なんと『論語』の斉唱からはじめることに。『論語』こそ、古代東アジア世界の人びとが心の支えにした書物だからだ。貧しき民たちに、山上憶良が、『論語』を教えるところから、このオペラははじめることにした。子どもたちも、いつか自分も山上憶良のように遣唐使となつて、唐に渡ることを夢見ているのだ。そんな折も折。時の皇太子、首皇子すなわち後の聖武天皇の命によって、遣唐留学生の試験が行なわれる。人びとは、誰が遣唐使となるか興味津々だ。その試験で、不思議なことが起こる。なんと、阿倍仲麻呂という名が書かれた答案が、二枚も出てきたのだ。仲麻呂は、急病で試験を欠席していたにもかかわらずである。仲麻呂は、天下の秀才。仲麻呂こそ、唐に渡るべき人だと、吉備真備きびのまきびと葛井真成かつらのまなりの二人が、仲麻呂の名で答案を書いたのだ。真備も真成も、これまた天下の秀才。二人は、仲麻呂こそ、唐に渡るべきだと、己の出世を諦めたのだ。しかし、皇太子が催した試験での不正は、大逆罪に当たる。二人の処刑がなされよ

うとしたその時、……皇太子、首皇子と山上憶良は、どうしたかあ？ 奇想天外な方法で、三人を救う物語を書いて上演した。

オペラは二千人の観客動員を必要とし、出演者から裏方も含めれば二百人のスタッフが動く。また、こんな大きなチャンスが自分に巡って来るとは思わないが、今年もアジアの時代、文化の時代に自分なりに貢献したい、と思っている。

(二〇一七年一月)

悠久の時を生きる

すべての儀式は、退屈なものだ。

すべての儀式は、無駄なものだ。

私は、そう思いながら、椅子に座っていた。昨年、十月九日、奈良・興福寺の中金堂再建落慶慶讃法要のことだ。午前中とはいっても、照りつける陽光で、皆汗だくだ。ああ、退屈だ。いつまで続くのか、早く昼食会になってビールを飲みたい。雑念ばかりが、頭を過る。なんと生産性の低い時間か。今、自分はこの二十年間に書き溜めた論文を集成した著書の校正中なのだ。早く帰って、校正をした方が、有益だ。そんなことばかりを考えていた。私は、この二十年というもの、自らの提唱する万葉文化論という分野の研究に打ち込んできた。そして、ようやくその成果が一冊の本となる。その大詰めの時ではないか。そんな忙しい時に、こんな無駄な時間を二時

間も過ぐすなんて。舞楽・献茶・能、そして延々と続くお経。私には、すべてが退屈だった。法要もそろそろ終わりだなあ、と思った瞬間のことである。私の目の前に、一枚の散華が、ひらひらと舞い降りて来た。まるで蝶のような。散華には、お経の一部が写してあった。ほお、誰かが書いたんだ。写経の散華が今日の法要に使われたのだ。そして、散華に写経をした人びとは、経を納めるにあたっては、寄進をなし、その寄進も一助となって、今、中金堂が再建されたのである。なるほど。興福寺の中金堂は、かの藤原不比等（ふじわらのふひと）が、平城遷都と同時に創建したお堂だ。しかし、火災のほか、戦乱もあつて、これまでに七回の焼失と再建を繰り返している。が、しかし。享保二年（一七一七）に焼失した後は、寺の財政が再建を許さず、文政二年（一八一九）に仮のお堂が再建されて今日に至っていたのであった。その仮堂も、すでに老朽化している。つまり、今日は二七一年から、数えて三百年を経ての中金堂再建落慶の日なのだ。かくいう私は、二十六年前に、奈良大学に赴任し、今、この法要に参列している。私の目の前に舞い降りた散華は、風に吹かれて偶然にも私の前にやって来たもの。散華の写経をした人には、その人の思いというものがあるはずだ。しかし、散華は、なんと信仰心の薄い私のところにやって来たのだ。

私は、今、なぜこの法要の場にいるのだろうか。『万葉集』の研究者となり、二十六年前に奈良大学に赴任したからか？ ではなぜ、万葉学者になろうとしたのか？ 高校生の時に、『万葉集』と出逢ったからか？ ではなぜ『万葉集』に出逢ったのか？ そもそも、私が一九六〇年に福岡に生まれたのはなぜ？ それは、両親が出逢ったからとして、では私の父母の両親は、どこでどう出逢ったのか？ なぜ、なぜ、なぜだ。一言でいうなら、それはみんな偶然だ。でも、その累積された偶然の積み重なりの中で、私は今ここにいるのだ。仏教で説明すれば、これが縁というのか。

では、すべてが偶然かといえば、そうではない。私にとって、意志はある。中金堂を再建しようとして、その志を立てた人がいる。その立志の人を助けんとした人がいる。樹を伐る人、運ぶ人、削る人、瓦を焼く人、瓦を載せる人。そして、散華に写経して、大切なお金を寄進した人びと。焼失と再建の繰り返しの中、多くの人がびとが、強い意志をもって、再建してきたのだ。現興福寺貫主・多川俊映さんのご尊父も、その一人だ。ここに、七一〇年の興福寺建立以来、寺があるということは、そこに生きて、信仰を守ろうとした人びとの確固たる意志があったからなのである。

そして、一枚の散華には、その散華ごとに、写経をし、中金堂を再建しようとした人間の意志もあるはずだ。私は、偶然手にした一枚の散華によって、悠久の歴史の中で生きてきた人びとの意志というものを知った。悠久の歴史は、人間の意志と偶然の無限の積み重ねの産物なのだ。意志だけが、歴史を決定してゆくわけではない。

してみれば、この世界に無駄な時間など存在するはずはない。では、何が大切なことは、同じ時間を生きた、同じ歴史を生きたという感覚を共有することではないのか。十月とはいえ、この炎天下に、これだけの人が集まったねえ。暑かったねえ。俺はここにいましたよ。あなたはどこにいましたか。私たちは、ともに三百年の時を経て、再建される中金堂の落慶の日ここに集った、歴史の生き証人なんですよ。そういう悠久の時間を共有するために、私たちは延々と続く読経のなか、ここに集っていたのだ。そんなことすらも気付かなかった愚かな万葉学者も、この法要の場にはいたのだ。恥ずかしい。

『万葉集』をはじめとする古典研究も、日進月歩。大きく進んでいるようにも見える。しかし、『万葉代匠記』という『万葉集』の注釈書を著した僧・契沖（二六四〇―一七〇一）の学識に比すれば、

私など足元にも及ばないだろう。本居宣長（一七三〇—一八〇二）の注釈を越える『古事記』の注釈書など、この世には存在しない。もちろん、一部の解釈については、先学の批判をすることはできる。しかし、学力で見た場合、私など契沖や宣長の足元にすら及ばない。多くの古典学者は、そういった巨人の足元にも及ぶことなく、ただ死んでゆくのだ。それでも、上野誠という研究者が悪戦苦闘して書いた論文を後世に残そうと努力しているのだから、悲しい。本年とって五十九歳の私。創建一三〇九年目の興福寺、中金堂再建までの三百年の時間。散華の経文を書いた人の時間。そういった時と時とが、あの落慶慶讃法要において、交差したのだ。一枚の散華は、私にそんなことを教えてくれた。

「すべての儀式は、退屈だ」というのなら、お前の書いた本はどうなのかと問われるだろう。「すべての儀式は、無駄なものだ」というのなら、お前の研究こそ無駄ではないかと問われるだろう。そもそも、人も時間も生産性のためにあるのではない。今、あるという存在、そのものに意味があるのだ。

（二〇一九年一月）

謡曲〈野守〉と奈良

文芸を支える風土、文芸が作る風土

今夏、私はひとりの万葉学徒として、望外の喜びを得た。新作オペラの原作と脚本を書き、そ

れが奈良・西の京は薬師寺の玄奘三蔵院で上演されたからである。昨年には一幕と二幕が上演され、今年は三幕と四幕が上演されたのであった。したがって、今年をもつて、完結したのである。しかも、早々と本年来たる十月二日に奈良一〇〇年会館で四幕上演が決まったので、私はもう有頂天だ。ロレックス・タイム・デイに上演されたオペラの題は、『遣唐使く阿倍仲麻呂』である。監修の山田法胤薬師寺管主、制作総指揮の日本ロレックスのブルース・ベイリー社長、芸術監督・作曲の松下功東京藝術大学教授には御礼の言葉もない。そして、能薬師の野村四郎先生（東京藝術大学名誉教授）には、絶えずご指導を仰いだ。なんと、光栄なことだろう。

話の筋は、遣唐使として渡唐し、科挙に合格して高位高官となるも、ついに帰国を果たせなかった阿倍仲麻呂の内面とその葛藤を描くもので、オーケストラに邦楽アンサンブルを加えて構成されたオペラである。そして、能は野村四郎先生に舞っていただいた。大団円は、待ちに待った帰国に失敗し、さらには最愛の人を失った失意の仲麻呂を李白が励ます條なのだが、仲麻呂の望郷の思い遙か、仲麻呂の母を幻のうちに登場させることにした。故郷・奈良の母を想起させる能装束で、野村先生が舞台となった薬師寺玄奘三蔵院の門に立つと……観客の眼はすべて母に吸い寄せられてしまった。このオペラには福島明也・吉田浩之さんをはじめとして、日本を代表するテナーたちが勢ぞろいしていたのだが、終演後に一同は異口同音にこう語ったのであった。「われらテナーが束になってどんなにがんばっても、能装束の母親が登場すると、その存在感には勝てない。それは、なぜだろう?」。私も思った。あの存在感は何だったのか? その謎解きを、野村四郎先生と演出家の浜畑賢吉さんがしてくれた。野村先生は言う。「朱塗りの門と柱。ここは、薬師寺。能役者には、地の利があるよ。だって、この大和で、この寺院という空間で能は生まれたんだもの」と。いつものあの慈父の笑顔で、私に諭すように説かれた。また、浜畑賢吉さん

は、嘆息されたのち、こう語った。「場所の持っている力が、やはり能役者の演技に力を与えるんですよ。今風にいうと、オーラなんだろうけど」と。ちなみに、浜畑さんは、十月二日の奈良一〇〇年会館の全幕上演の演出をされることになっている。そう語る浜畑さんの心の奥には、秘めたものがあるようだ。

実は、日本の文芸とは、その文芸を育んだ風土の中にどっぷりと浸かって発生し、存在し、さらには発展してきた歴史がある。日本の文芸を日本の風土と切り離すことなどではしない。また、文芸が風土を形成することだってある。歌枕の土地イメージなどがそうだ。吉野といえば雪か桜、竜田といえば紅葉だ。春日野・竜田・飛鳥・吉野とさえいえば、ただそれだけで一つのイメージが喚起されてしまうのは、文芸が逆にその土地に対するイメージを固定化してしまっているからなのである。日本を代表するテナーたちを讃嘆させたのは、古都・奈良の磁場のようなものであったのではないか？ こんな私の経験をもとに、本稿では、奈良と文芸風土との関わりについて、稿を成そうと考えている。

謡曲〈野守〉と野守の鏡と

能はもとより、中古以降の諸文献に対するなんらの学殖もない私が、世阿弥の名作〈野守〉について論じることなど、笑止千万のことではあるのだが、一万葉学徒の妄説にしばしお付き合いたい。

「名ノリザシ不合 強」〔シテ〕これに出でたる老人は、この春日野に年を経て、山にも通ひ里にも行く、野守の翁にて候ふなり。

「サシ不合 強」〔シテ〕有難や 慈悲萬行の春の色、三笠の山にのどかにて、五重唯識

の秋の風、春日の里に訪れて、まことに誓ひも直なるや、神のまにまに行き帰り、運ぶ歩みも積もる老いの、栄行くみ影仰ぐなり。

〈野守〉横道萬里雄・表章校注『謡曲集（上）』日本古典文学大系四〇、岩波書店、一九六〇年）とあるように、この作品の「野守」は「春日野の野守」と設定されている。野守の役割は、野の管理にあり、たとえば天皇をはじめとする貴人が若菜摘みをするにあたっては、事前に野に標を置いて、その地が貴人の若菜摘みの前に荒らされないようにすることなどが、その仕事の一つであったと考えられる。天皇や貴人が鷹狩りなどで、野に巡行すれば、その案内役を務めるのも当然であろう。いわば、野の番人なのである。野に関しては「ものしり」ということになるのか。したがって、野守が「老人」「翁」「古老」としてイメージされるのも、それが野に対する常人には計り知れない知識を体得している人であると考えられていたからであろう。この「野守」の人物造型があつてこそ、「野守の鏡」のいわれを語る翁となり、地獄の隅々までを映し出して、地底に帰ってゆくという後場の展開が、がぜん生きてくるのではないか。つまり、この話の基底には、「野守」に対する畏敬の念があるのである。すると、やはり当該作品の素材となった「野守鏡」なるものが気にかかる。この点については、黒田彰子「野守鏡考―俊頼髓脳から謡曲『野守』まで―」が主張しているように、『俊頼髓脳』の影響を受けているとみることができる（『中世和歌論攷―和歌と説話と―』所収、和泉書院、一九九七年。初出「作品研究『野守』」『観世』第五八卷二―号所収、一九九一年）。

はし鷹ののりのかがみえてしがな思ひおもはずよそながらみむ

むかし、天智天皇と申すみかどの、野にいでて鷹狩せさせ給ひけるに、御鷹、風にながれてうせにけり。むかしは、野をまもる者ありけるに、召して、「御鷹うせにたり、たしかにもとめよ」と仰せられければ、かしこまりて、「御鷹は、かの岡の松のほつえに、南

にむきて、しか侍る」と申しければ、おどろかせ給ひにけり。「そもそなんぢ、地にむかひて、かうべを地につけて、ほかを見る事なし。いかにして、こずゑにゐたる鷹のあり所を知る」と問はせ給ひければ、野守のおきな「民は、公主におもてをまじふる事なし。しばのうへにたまれる水を、かがみとして、かしらの雪をもさとり、おもてのしわをかぞふるものなれば、そのかがみをまぼりて、御鷹の木居こゐを知れり」と申しければ、そののち、野の中にたまれりける水を、野守のかがみとはいふなり、とぞいひつたへたるを、野守のかがみとは徐君のかがみなり。そのかがみは、人の心のうちをてらせるかがみにて、いみじきかがみなれば、よの人、こぞりてほしがりけり。これに、さらに我持ちとげじと思ひて、塚づかのしたにうづみてけりとぞ、またひと申しける。いづれかまことならむ。

〔俊頼髓脳〕橋本不美男、有吉保、藤平春男校注・訳『歌論集』新編日本古典文学全集八七、小学館二〇〇二年

ここでは、「野守」は「おきな」になっている。失せた鷹の居場所を、「地にむかひて、かうべを地」につけたまま、探り当てた野守は、いわば知恵者であり、それは老いたる者の持つ知恵を持っている者である。野守の鏡は、野中のたまり水。そのたまり水で、野守は自らの老いをもさとり、失せた鷹のありかも探し出すというのである。「民は、公主に対しては顔を上げて対面することなどありえませぬ」と断言するところは、達観した老人がお上に対して苦言を言上する物言いである。一方『俊頼髓脳』は、異説も載せる。「野守の鏡」は中国の故事の徐君の鏡でもあるといい、人の心の内を映すものであるという。ために、自らが万人の欲する鏡を持つことに恐れをなした徐君は、塚に埋めたというのである。野の知恵者「野守」は、野中にたまった水鏡で、自らの老いをさとり、失せた鷹を見つけた。対して、異説では、人の心をも映す徐君の鏡であるというのである。ところが、二つのあい矛盾する伝えは、〈野守〉の中では一つの伝えとして語られている。

知恵者の鏡は、人の心の綾も映すのであろう。してみれば、この作品で「野守鏡」が映したのは、人の心の地獄であるということにもなるうか。やはり、『俊頼髓脳』は、本作品に大きな影響を与えているといえよう。なお、春日野と地獄との関わりについては、阿部由佳に議論がある（世阿弥作能の「場」―「野守」における春日野―『藝能史研究』第一五五号所収、藝能史研究會、二〇〇一年）。もう一つ、本作品と関わりが深いのが、

春日野の飛火とびひの野守のもりいでて見よ今幾日いくかありてわかなつみてん

〔古今和歌集〕春歌上 巻第一の一九

という歌であることは、諸家がすでに説き尽したところである。ちなみに、新体系の訳文を示しておく「春日野の飛火野の番人よ、出て見ておくれ、もう何日したら若菜が確かに摘めようかと」となるが、これらはあきらかに、『万葉集』以来の春日野のイメージと重なり合うものである。春日野で、春の若菜摘みが行われ、それが大宮人たちの風物詩になっていたことは、

春日野に 煙立つ見ゆ 娘をどめ子らし 春野はるののうはぎ 摘とみて煮にらしも

〔万葉集〕巻十の一八七九

という歌があることからわかる。「うはぎ」は「よめ菜」で、春日野に春に煙が立てば、すぐにそこで行われているであろう若菜摘みが想起されたのである。つまり、『古今集』の当該歌は、春日野が若菜摘みの名所であることを前提として作られているのである。また、『古今集』の春

日野の飛火の野守の歌には、次の万葉歌のイメージが想起されたとも私は推測している。

山部宿禰赤人が歌四首

春の野に すみれ摘みにと 来し我そ 野をなつかしみ 一夜寝にける

あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも

我が背子に 見せむと思ひし 梅の花 それとも見えず 雪の降れば

明日よりは 春菜摘まむと 標めし野に 昨日も今日も 雪は降りつつ

（『万葉集』巻八の一四二四～一四二七）

山部赤人のこの四首については、多くの議論のあるところだが、一八七九番歌でみたように、若菜摘みは、女性が行う行事であるので、以上の四首は、女性の立場で詠まれた歌であろう。すると一四二六番歌に「我が背子」とあっても、無理なく理解することができる。つまり、春浅い雪降る野で、「思いびと」への恋情の募る様子を歌った女歌なのである。その最後は、明日からは、春菜を摘もうとやって来た野に、昨日も今日も雪は降っていると結ばれているのである。この野に標をして、貴人の若菜摘みの場所を確保して、荒らされないようにするのが、野守の大切な仕事の一つなのである。「標」は二タイプあり、一つは、縄などを張り巡らせて進入を禁止する囲い込み型。もう一つは、杭や串を立てて、進入禁止を示す表示型である。どちらにせよ、貴人の

若菜摘みに際しては、標で進入禁止を表示し、野を荒す者を見張るのも野守の仕事であったことは間違いない。もちろん、それは葉狩りにおいても同じで、同じく標をして野を守るのが野守の仕事であったことは次の歌からわかる。

天皇、蒲生野に遊獵する時に、額田王の作る歌

あかねさす 紫草野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

皇太子の答ふる御歌「明日香宮に天の下治めたまひし天皇、謚を天武天皇といふ」

紫草の にはへる妹を 憎くあらば 人妻故に 我恋ひめやも

紀に曰く、「天皇の七年丁卯の夏五月五日、蒲生野に縦獵す。

時に、大皇弟・諸王・内臣また群臣、皆悉従ふ」といふ。

（『万葉集』巻一の二〇・二二）

この歌では、野守は「禁断の恋」の番人に喩えられている。私は、『古今集』巻第一春歌上の一九番歌の背景には、山部赤人歌四首と、蒲生野遊獵歌があると思う。野守よ、いったい何時になつたら若菜摘みができるのか、という問いかけは、明らかに赤人歌から想起されたものであり、赤人歌の背景には、野守が行っていた標野の番人の仕事が想起されていると見るべきであろう。つまり、世阿弥が着想を得た『古今和歌集』の歌も、万葉以来の文芸風土の伝統にどっぷりと浸かった歌なのである。

春日野というところ

私は、世阿弥の〈野守〉が『俊頼髓脳』の影響を受けているとすれば、それは野の古老の知恵者としてのイメージが付加されていると考えた。もう一つ影響を受けたとされる『古今集』の一九番の春日野の歌については、若菜摘みと貴人が若菜を摘む場に標をして見張る番人の仕事想起されていると考えなくてはならない、とも考えた。

してみると、〈野守〉は、やはり春日野という文芸風土から生み出された謡曲と考えなくてはならない。では、春日野とは、いったいどんなところなのだろうか。『万葉集』で、確認してこう。

▽春

若菜摘み（巻十の一八七九）

春の野遊び（巻十の一八八〇）

打毬（まりうち）（巻六の九四九）

梅の花見（巻八の一四三七、巻八の一四三八）

桜の花見（巻六の一〇四七、巻八の一四四〇、巻十の一八六六、巻十の一八七二）

▽夏

藤の花見（巻十の一九七四）

▽秋

萩の花見（巻七の一三六三、巻八の一六〇五、巻十の二二二一、巻十の二二二五）

もみじ狩り（巻八の一五七一、巻八の一六〇四）

秋の野遊び（巻二十の四二九五）

※季節のわからないもの

狩り（巻六の一〇二八）

月見（巻六の九八〇、巻六の九八七、巻七の二二九五）

ここは、大宮人たちの遊覧の地だったのである。

たとえば、「右、神亀四年正月に、あまた みこ もろもろ おみのこたち数の王子と諸の臣子等と、春日野に集ひて打毬の樂をなす。……」（巻六の九四九 左注）とあるように、春日野では、打毬も行われていた。打毬は、ペルシャ起源の遊びで、ヨーロッパではポロとなり、中国・日本では、ホッケーのごとき遊びとして親しまれたゲームである。また、巻十には、野遊びの歌四首があり、そのうちの一首には、「春日野の 浅茅あさぢが上に 思ふどち 遊ぶ今日けふの日 忘れえぬやも」（巻十の一八八〇）とあって、「思ふどち」すなわち友人と遊ぶ今日の日は、終生忘れられないと歌われている。

こういったイメージがすでに奈良時代の歌に堆積しているのである。以上のような土地イメージのなかで、〈野守〉を読もうとするのは、一万葉学徒の妄想に過ぎないであろうか。やはり、謡曲〈野守〉の「野守」は、春日野の野守でなくてはならないのだ。

堆積する土地イメージ

私は、阿倍仲麻呂のオペラを書くにあたって注意したことが一つある。それは、

天あまの原ふりさけ見れば春日なる御蓋の山にいでし月かも

（『古今和歌集』巻第九の四〇六）

の歌の背後にある春日野と御蓋山のイメージである。なぜならば、この景こそ、阿倍仲麻呂の故郷の景だからだ。日本の文芸は、天才がその才を駆使して突然出来上がったものではない。文芸風土という土壌の中から時代に応じて、自ら生ずるがごとく立ち現れるものである。だから、日本の文芸は、西欧の芸術とはまったく異なる存在であるとさえ思っている。春日奥山の原始林は、落葉も倒木も土に帰って地味を増す肥料となる。そして、次世代の生命の基となる。今、木々があるのは、枯れて生命を失った木々たちが地味を増す栄養となっていたからである。つまり、〈野守〉も、春日野と一緒に堆積した土地イメージを土壌として、すなわち文芸風土のなかで生み出された作品の一つなのだと思うに至った。

結語にあたり、私は再び、野村四郎先生と浜畑賢吉さんの言葉を思い起こしている。お二人の言葉を、この雑文に引き寄せていえば、文芸風土の磁場の力ということになるのではないか。謡曲〈野守〉も、春日野という土地に堆積した土地イメージから生まれた文芸の一つだということを確認して、妄語・妄説の擲筆の言とする。

(二〇一〇年八月)





撮影者、父・上野康正。父の腕前は
セミプロ級だった、と思う。

自選自注年譜

ずぼらな私は、日記などつけないし、記録など残していなかった。卒業生たちが作った年譜に、二〇二一年の今のコメントをつけてみた。

〇歳

●——昭和三十五年（一九六〇）七月一日

父康正、母繁子の第三子として、福岡県朝倉市にて生まれる。兄とは十三歳、姉とは十歳離れている。家業の洋品店は、このころすでに斜陽であった。父母には悪いが、祖父の死とともに自主廃業し、その後は資産の喰いだったと思う。その後、父は不動産業に転ずるも、大成功とまではいえなかった。しかし、私の学費も家業から出ているので、祖父、祖母、父母にも感謝だ。それに、ご先祖さまにも。

母は、俳誌『ホトトギス』の同人となり、俳人としては九州の俳壇では、それなりの顔であったと思う。句集に『日々新たなる』（天満書房、一九九七年）がある。その句風は、軽妙、洒脱な味わいがある。秀句ではないけれど、私を詠んだ句に、「日本茶と畳の好きな帰省の子」「帰省子を虜にしたる一古典」というのがある。

四歳

●——昭和四十年（一九六五）四月 高宮カトリック幼稚園入園

今から考えると、マリア信仰を中心としたカトリック教育だと思う（当時は、フランシスコ会。紺のベレー帽、白シャツ、半ズボン、黒タイツで通園していた。家族と従業員から、蝶よ花よと（誤用だが）世話されて甘やかされており、身辺自立ができていなかったで、母親はよく呼び出し

をくらっていた。ボタンのひとつも、留められない子だったのだ。末っ子の甘えん坊。それは、今に続く。とにかく、だらしがない。ちなみに通知表にあたる「育てのしるべ」には「大人の使う言葉をよく知っていますが、かんじんの自分のするべき事がおろそかになりがちです。子供なりの生活をさせて、大人の方があまり干渉されない方がよいと思います」とある。もちろん良い面もあった——。可愛がられ方のコツを知っているのだ。この点に関しては、天才的。

六歳

●——昭和四十二年（一九六七）三月 高宮カトリック幼稚園卒園

家業の洋品店は、現朝倉市と福岡市に店舗があり、朝倉と福岡とを往復しながら育ったような気がする。朝倉市甘木の丸山公園の桜のことは、今でも思い出す。その桜の下で死にたいと思う。西行さんの歌のように。

●——昭和四十二年（一九六七）四月 福岡市立若久小学校入学

ベッドタウンとして、人口急増地区の小学校で、一時期、全校生徒一六〇〇人を数えた日本一のマンモス校であった。灘尾弘吉文部大臣が視察に来たくらいである。一年生時の所見欄には「友達の世話がよくでき、やさしい気持をもっています。人のことにあまり夢中になって、自分のことができていないことが、よくあります。態度に落着きがでけると、もつともつとよい子になります。気持のやさしい、同情心の強い子です。作業にも、精を出しよくほめられましたが、まだ時間がかかりすぎるようです」とある。一学期の成績は国語2、社会3、算数2、理科2、音楽2、図画工作2、体育2。ひどいものだ。たぶん、机の前に座って、授業を受ける学習習慣が出来ていなかったのである。母の句に「赤のまま吾子の小さな黙秘権」がある。

一二歳

● 昭和四十八年（一九七三）三月 福岡市立若久小学校卒業

とにかく甘やかされて育ったので、依頼心が強く、その上、集中力がない。一方、小商人的サービス精神はあって、この性格は、今に続いている、と思う。論文でも、サービス精神をもって書いている。

四年生で泳げるようになった。六年生時にはわが高宮五丁目チームのソフトボールのピッチャーで四番だったのが自慢だ。校区で、六年時には、三位に輝く。書は、二年生から四年生まで、書道塾に通う。今でも、それなりの字だが、逆に中途半端なので、私には字がやや下品に思われてならない。やはり、小学校時代のハイライトは、親類に連れていってもらった万博だろう（四年時）。以後、神戸の親類、益子家には、ずっとお世話になっている。母の句に「思春期の反抗の汗臭ひけり」がある。

● 昭和四十八年（一九七三）四月 福岡市立筑紫丘中学校入学

一年生の一学期の成績は、「国語3、書写5、社会5、数学3、理科3、音楽1、美術3、保健体育5、技術・家庭2、外国語（英語）3」であった。当時、ようやく福岡でも偏差値が普及してきたが、私は基本、偏差値五十三〜六十の子だったと思う。つまり、クラスの中の上か。

両親は、経済力の許す範囲で教育投資をしてくれ、学習塾に行かせてもらい、読書習慣も身につけてくれた、と思う。また、旅行、観劇、絵画展へも連れて行ってもらった。だから、文化環境の投資はよくしてもらった。今、思うに、これは人文科学の研究者には必要な習慣づけである。読書習慣の獲得は、今に続く財産となった。年齢が上がると文科系の科目では、読書、旅行、観

劇の習慣がものをいうところがあるので、父母の文化環境投資には感謝している。今でも、旅行の前後には、その土地に関する歴史や文学の本を読もうと、必ず思う。

一五歳

● 昭和五十一年（一九七六）三月 福岡市立筑紫丘中学校卒業

母の句に「子の恋のあはく終りぬ草の花」がある。残念。陸上競技部のさえない選手で、百メートルで十三秒くらい。三種競技（四百メートル、走り幅跳び、砲丸投げ）をやっていた。陸上競技部の先生である渡辺忍先生の豪気な人柄を敬慕していた。「赤先生」というニックネームを持つこの先生は、大酒飲みでゆかいな人だった。この「赤先生」は、卒業時に、母親に「この男は、よか男になりますよ」と言ってくれた。ちなみに、中学三年一学期の学力水準テストの校内偏差値は「国語五十八、数学五十、社会六十九、英語五十四」で、総合五十九と記録に残っている（福岡図書の特集）。

● 昭和五十一年（一九七六）四月 福岡大学附属大濠高等学校入学

福岡県立筑紫高校を目指すも、不合格。「フクダイオーホリ」へ。「オーホリ」は、当時すべり止めの私学で、私のころは難関校ではなかった。ところが、自分の卒業後、進学校になってゆく。ここで、運命の人、上村紘一郎先生に出逢う。先生の熱い日本史の授業を聞き、学者になりたいと言ったら、「おまえなら、学者になれるかもしれないぞ」と言われた。これは、少年にとって、魔法の言葉になった。今でも、めげそうになると、自らを励ます呪言として念ずる言葉だ。「オーホリ」の古典や歴史教育は有名で、吉海直人（同志社女子大学教授）、佐々木英治（元・福岡県国語教育部会長）などを輩出している。両先生には、今もお世話になっている。当時の愛読書は『高橋是

清自伝』(上)(下)(高橋是清著、上塚司編、中央公論新社、一九七六年)。あのやんちゃぶりが大好きだ。

一八歳

●昭和五十四年(一九七九)三月 福岡大学附属大濠高等学校卒業

基本的に、私の高校までの学科教育の学力レベルは、学者としては最底辺ではないか、と思う。國學院大學文学部史学科を目指すも、不合格。一年間、全寮制の九大ゼミナールという予備校に入るはめに。つくづく、自己管理ができない人間だと思う。結局、一浪後、史学科を諦めて、日本文学科に入学した。母の句に「受験子のもう振り向かぬ距離に母」「一流に少しはずれて入学す」がある。國學院大學を目指したのは、中学生の時に、同大学の教授、樋口清之先生の本を読んだからである。父母は、死ぬまで生活態度のだらしなさを心配していた。歴史から文学へ転じたわけだが、今では自分に合っていたかなあ、と思う。やはり、人間への関心は強い方だと思うから。

一九歳

●昭和五十五年(一九八〇)四月 國學院大學文学部日本文学科入学

大学入学時点で、『万葉集』を勉強しようと思っていた。なぜならば、万葉研究は、きわめて歴史学に近いからだ。だから、私の研究は、文学の芸術研究ではなく、文学の文化論である(史学崩れの文学研究者)。大濠高の相良浩文先生に紹介状を書いてもらい、入学式当日に桜井満先生の研究室に挨拶に行く。その日から十二年間師事することになる。敬慕もし、師からも愛されたとも思う。が、しかし。当時は、とんがっていたから、周りは、苦労したと思う。いろいろと反発もしていたし、やっかいな学生だったと思う。ことに、反逆児だったから、先輩たちとの関係は、

最悪だった。というわけで、桜井先生は、私の人間関係のことを死ぬまで、心配していた。先輩の菊池義裕先生(現・東洋大学教授)、大石泰夫先生(現・國學院大学教授)、後輩の故城崎陽子さん(獨協大学教授)も、手を焼いたはずだ。

二三歳

●昭和五十九年(一九八四)三月 國學院大學文学部日本文学科卒業

國學院大學は、古典諸学の殿堂で、私にはパラダイスだった。とにかく、好きなことだけ勉強していればよいのだから。ただし、成績は、自分では中の上くらいだった、と思っている。

桜井先生が主催する万葉研究会と古典と民俗学会に属して、『万葉集』と民俗学の勉強をしていた。万葉研究会は、巻十三の講読をしており、卒業論文も、巻十三の挽歌についてであった(タイトルは「万葉挽歌小論」)。今、考えてみると、祭礼が中心ではあるが、年に二ないし三カ所のフイー

217 自選自注年譜
國學院大學の成績一覧表

授業科目名	成績
神道概説	A
文学	A
宗教	A
法学	A
社会学	A
社会人類学	B
物理学	A
自然科学史	A
自然地理	A
保健体育理論	A
体育実技Ⅰ	B
体育実技Ⅱ	B
英文法	B
英語Ⅰ	A
英語Ⅱ	B
英語Ⅲ (R)	A
中文法	B
中国語Ⅰ	B
中国語Ⅲ (R)	B
日本文学概説	A
国語概説	C
漢文概説	B
日本文学史(日本文学史Ⅰ)	A
日本文学演習Ⅰ(日本文学演習Ⅳ)	A
日本文学演習Ⅱ(日本文学演習Ⅰ)	A
日本文学概論	B
時代文学史「日本」(日本文学史Ⅱ)	A
日本文学特殊研究	A
日本文学作品研究	A
国語学概論	A
国語史	C
有職故実	C
民俗学	A
演劇概説	A
神道史(神道思想史)	A
世界宗教史	A
日本法制史	A
教育原理Ⅰ	A
教育原理Ⅱ	A
教育心理	B
青年心理	B
国語科教育法	B
教育実習Ⅰ	合格
教育実習Ⅱ	A
道德教育の研究	A
教育社会学	B

ルドワークをしていたのだから、民俗学もよく勉強していた方かもしれない。

万葉集研究と民俗学の兼学という組み合わせは、國學院大學と慶應義塾大学にしかなく、しかも折口信夫の学系の研究室にしか伝来していない特異な学問スタイルである。正直、化石的な学問スタイルだ。しかし、結局、この学問スタイルをわが一生の業とすることになった。

大学入学から、奈良赴任までの十二年間は、東京都文京区目白の和敬塾という学生寮で過ごした。四百人の、当時日本最大の男子寮である。寮風はバンカラ（死語か）で、厳しかった。でも、大学を三つ出たくらいの人脈が出来た。これが、今に活かしている。感謝だ。

しかも、歴代首相をはじめとする各界の指導者たちの講演会が毎月あった。それも、魅力の一つ。一割は留学生で、ブローケンだが、気合で話す英語を身につけた。度胸だけはあるから、遠目から見てペラペラだと思っている人も多いが、短文を繋いでいるだけで、英語力はきわめて、おそまつ。

●昭和五十九年（一九八四）四月 國學院大學大学院文学研究科博士課程前期入学

桜井満先生、宗教学の戸田義雄先生にも勧められて、大学院に進むことになった。ただし、卒業論文の指導教授については、桜井先生が中国留学中だったので、論文指導教授は内野吾郎先生に頼むことになった。後年、桜井先生曰く、それが学問上プラスに働いたのではないかと、いつていた。両先生の学風がまったく違うからだ。内野先生は、日本文芸史が専門だった。内野先生は、べらめえの江戸っ子教授。巨人が負けるとすこぶる機嫌が悪い。月曜日の二時間目に授業があり、「ナイヤゴロ、ゲッツー」と言っていた。当時は、一、三十名も修士に上がる者があり、日本文学での大学院は、日本最大規模であった。

桜井先生の教育は、論文指導も含めて学問作法を徹底的に叩き込むものであった。簡単にいえ

ば、何でもしっかりと、キッチリという指導である。礼儀正しく、まじめに仕事して、早く一人前にするという親心である。だから、未だに研究発表等で、時間を超過したことはない。先生曰く、時間の超過は、失礼だとのこと。今でこそ、論文も傍若無人な文体で書いているけれど、当時はそれなりにキッチリした文章を書いていた、と思うのだが。

このころは、奥三河の神楽「花祭」に夢中だった。当時、愛知学院大学の大学院生だった脊古真哉さんとは花祭で知り合う。彼は歴史学＋民俗学、私は文学＋民俗学で、うまが合った。

二五歳

●昭和六十一年（一九八六）三月 國學院大學大学院文学研究科博士課程前期修了

修士論文は「柿本人麻呂挽歌の研究」で、中心は「殯宮之時」挽歌の論。しかも、その殯宮の設営地をめぐる論文であった。挽歌研究は、今に続くわが万葉研究の始発点である。それに、奥三河の神楽や、綱引きの研究もしていた。民俗学研究の方はといえば、『芸能伝承の民俗誌的研究―カタとココロを伝えるくふう―』（世界思想社、二〇〇一年）の刊行をもって終結することになった。じつは、そのころすでに、万葉研究と民俗学の兼学に限界を感じていたのも事実だ。万葉研究の片手間に、民俗学はやれるような学問ではない。

当時、北海道大学の身崎壽先生が、学燈社の『国文学』に、「学界時評」を書いていて、公平公正で、かつ時に辛辣。この時評に評されることを目標に、以後、論文を書いていて、評された時は狂喜乱舞。

ちなみに、昭和六十年（一九八五）は、国際青年年で、総理府主催、国際青年の村（東京、国立オリンピック記念青年総合センター）で、さまざまな交流事業のため、ひと夏、代々木で過ごす。その前

後も、このボランティアに夢中になり、周りを心配させた。というか、実際に、翌年の大学院の試験に落ちる。

● 昭和六十一年（一九八六）四月 國學院大學大学院文学研究科特別研究生となる（昭和六十二年三月まで）

大学院の後期課程への進学試験を受け、不合格となる。研究への意欲は高かったもので、これほど情けないことはなかった。なんとか、気を取り直して、浪人生活の傍ら、神田の日中友好協会で中国語の勉強をし直すことにした。今、中国語がペラペラのように思っている人も多いようだが、それは大間違い——。中国の大学で、中国語で講義したというのはデマで、最初のあいさつを「ちよろつと」しただけだ。語彙はそこそこかもしれないが、四声（声調）がメチャクチャなのだ。ただし、ネイティブにも習ったので、捲舌音（R音）だけは、妙に上手い。

● 昭和六十一年（一九八六）四月 國學院大學久我山高등학교国語科非常勤講師（平成四年三月まで）
大学院後期課程の不合格でしよけていたが、國學院大學久我山高등학교で講師を募集していたので、高校で教えることになった。菊池義裕先生の紹介。以後週八コマくらいを、奈良大学に赴任するまで教えていた。男子部でも、女子部でも教えたが、後に大リーガーとなる井口忠仁に漢文を教えたのは私なのだ。本人に会えば、確かめてみたい。覚えてるのか、と。

このころから、倉石忠彦先生、あつ子先生の仙川会という研究会に出る。アットホームな雰囲気、おいしいごはんも出たから、毎回出席。この研究会は、リラックスできた。

二六歳

● 昭和六十二年（一九八七）四月 國學院大學大学院文学研究科博士課程後期入学

一年間の浪人生活の後に、後期課程に入る。大学院での研究と、高校での授業、それに予備校でも教えていた。両国予備校には、鉄野昌弘さん（現・東京大学大学院教授）、小松靖彦さん（現・青山学院大学教授）らの、若き万葉学徒がいた。それなりにフィールドワークをし、それなりに論文も書き、三年間を過ごしていた、と思う。また、民俗芸能研究の若手の勉強会にも出て、儀礼分析の手法をずっと考えていた。それに、大学院後期の三年間は、人付き合いを苦としないので、研究者間のネットワークもできた。これは、後年大きな財産となる。今でも、顔だけは、妙に広いのだ。

上代文学会、萬葉学会、美夫君志会、古代文学会、日本文学協会、全国大学国語国文学会、日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会、山岳修験学会等は、このころから今に至るまで学会活動をし、委員や理事もよく務めた（ている）方だと思う。それには、二つの理由がある。やはり、活動をすれば勉強になること。もう一つは、学会誌に書かないと就職も昇任もできないからである。とくに、私学出身者は。

二九歳

● 平成二年（一九九〇）三月 國學院大學大学院文学研究科博士課程後期 単位取得後退学

当時は、いわゆる「課程博士」がまだ一般的ではなく、学位を取得して退学し、それから論文を提出して、博士号を取得するのが一般的であった（いわゆる論文博士）。当時の國學院大學大学院の日本文学専攻の基準では、論文五本がないと、単位取得退学が認められなかったように記憶している。だから、「退学」といっても、修了なのでけつして悪いことをしたわけではない。その「退学」にも、「退学面接」があつて、指導教授の桜井満先生が主査、副査は岡野弘彦先生であった。

岡野先生には、学部時代に、日本文学史を習っていた。学部、大学院を通じて、指導教授の桜井満、歌人の岡野弘彦、民俗学の坪井洋文の三先生の授業は、大好きだった。

三〇歳

● 平成三年（一九九二）四月 武蔵野女子大学文学部非常勤講師（平成四年三月まで）

大学院後期の退学とともに、非常勤講師になればよかったが、結局、そのチャンスには恵まれなかった（ほんとに、悔しかった）。大学院退学の翌年、並木宏衛先生の紹介で、武蔵野女子大学文学部の非常勤講師にしてもらった。もちろん、専任職を求めて、大学教員の公募に応ずるも、不採用通知が次々と届く。その数は、十や二十ではない。このころは、切なくも悲しくもあり、まづもって将来が不安であった。いったい、誰が自分の研究を正しく評価してくれるのか。果たして、公募の評価は公平なのかと思悩んだのも事実である。けれども、その後、ポストクの就職は、さらにさらに厳しくなっていく。今なら、専任職を得られなかったであろう。

● 平成三年（一九九二）五月 大正大学文学部非常勤講師（平成四年三月まで）

武蔵野女子大学とともに、大正大学の非常勤にもしてもらった。大正大学は、桜井先生の後任であった。この二つの大学で、お坊さんとのネットワークができた。大学非常勤講師、予備校講師、高校講師、それに静岡県史をはじめとする各自自治体史の民俗篇の執筆などで、このころは生計を立てていた。こう書くとい見苦労働のようにも見えるが、日本育英会の奨学金ももらっていたし、父母からの仕送りもあったから、幸福な方だったろう（なんと、十二年間も仕送りをしてもらっていたのだ）。それに、寮生活だったので、住居費も安くおさえられていた。和敬塾十二年間の在籍は、未だにタイトルホルダーである。

三一歳

● 平成四年（一九九二）四月 奈良大学文学部国文学科専任講師（平成八年三月まで）

公募に出し続けて、ようやく採用となったのが、奈良大学であった。こうして、私は十九年間の福岡生活、十二年間の東京生活を終えて、万葉のふるさとあをによし奈良に赴任することになった。結局、奈良大学には、二十九年勤めることになる。居住地として選んだのは、交通の便のよい学園前だった。それから今に至る。専任講師時代は、共同研究室の運営を担当し、コピー機のバージョンアップやパソコンの導入を主導した。さらに、FDの導入も主導した。対して、講義は、基本的に万葉をやっておればよく、とにかく学生たちとよく歩いた記憶がある。毎週のように、万葉の野や山を歩いていた。最高の研究環境が与えられたことには、感謝してもしきれない。それに、なんといっても、奈良大学は古代学のメッカで、廊下での碩学との会話も、まるで口頭試問。恐いが勉強になった。このころから、荒井敦子先生のまっぼくり少年少女合唱団の『万葉集』の指導をして、その後、長いつきあいとなる。

三二歳

● 平成四年（一九九二）十月 第十二回日本民俗学会研究奨励賞受賞

受賞理由…「民俗芸能における見立てと再解釈―静岡県引佐町川名ヒョンドリを事例として―」『日本民俗学』第百八十四号、日本民俗学会、一九九〇年）を中心とする業績によって民俗芸能の分析手法に新しい地平を切り開いた。

大学院時代に書いた論文が推薦されて、受賞に至った。芸能や儀礼と、それらに付随する言説

の分析に、一つの指標を示し得たことが評価された、と思う。だから、儀礼の分析には、今でもちょっとした自信がある。

● 平成五年（一九九三）四月 堺女子短期大学非常勤講師（平成八年三月まで）

堺女子短期大学では、民俗学を担当した。テキストは、佐竹昭広『古語雑談』（岩波書店、一九八六年）で、テキストを読みながら、その民俗世界を解説するかたちを取った。体系的講義ではなかったが、それが学生たちにはよかったようだ。

このころから、鎌田道隆先生の奈良大学史学科宝来講に参加。浅田隆先生たちと、毎春、伊勢まで百キロを歩く。両先生のような熱血教師にはなれなかったが。

結婚。心齋橋の「こいさん」で、大学首席卒業の才媛。それでは、頭が上がるはずがない。お嫁さまのスローガンは、池田勇人内閣と同じで、「忍耐と寛容」。

三五歳

● 平成八年（一九九六）四月 奈良大学文学部国文学科助教授（平成十六年三月まで）

それなりに論文も書いていたし、受賞歴もあったので、早く上げてもらったのだと思う。関西の学者の重厚な学風に学びつつ、風土や文化について考究する論文スタイルも、このころに確立していったと思う。とにかく、関西の研究会には、ほぼすべて出た。林屋辰三郎、松前健、上田正昭、横田健一、直木孝次郎、岡田精司、井村哲夫、中西進といった老大家にも可愛がってもらった。また、兄貴分ということになると、毛利正守、内田賢徳、坂本信幸の諸先生ということになるのか。平成七年（一九九五）三月に、恩師の桜井満先生が亡くなって、しばらくは意気消沈したが、幸い老大家の知遇を得、研究者仲間にも恵まれ、なんとかやっていった。よく遊んだのは、鉄

野昌弘、影山尚之（現・武庫川女子大学教授）、村田右富実（現・関西大学教授）、大浦誠士（現・専修大学教授）の研究仲間の諸氏。よくも悪くも学界は狭く、つきあいは一生続くのが、万葉学徒の一生。悪いことはできない。

● 平成八年（一九九六）六月（仮称）万葉ミュージアム運営委員会委員（平成十三年三月まで）

長女誕生。大酒、バクチ、借金はないが、家庭人としては、最悪だと思う。

三六歳

● 平成九年（一九九七）三月 平城遷都一三〇〇年を考える奈良の会委員および平城遷都

一三〇〇年記念事業協会評議員（平成二十三年三月まで）

三七歳

● 平成十年（一九九八）四月 関西学院大学文学部非常勤講師（平成十一年三月まで）

小松和彦先生と共同で、日本の祭礼文化について講じた。関学で論じたのは祭りの時空のダイナミックスで、粗削りのものではあったが、自分としては講じていて楽しかった。小松先生には、大学三年生の時に社会人類学を学んだ（ただし、評価はB）。だから、山折哲雄先生とともに、関西の身元引き受け人のひとりみたいなもの。両先生には、何かと引っ張ってもらった。関西での身元引き受け人といえば、弁護士岩城本臣先生、小説家の辻原登先生がいる。それに、同窓ネットワーク。ありがたかった。

● 平成十年（一九九八）五月 第十五回上代文学会賞受賞

受賞理由…『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼』（雄山閣出版、一九九七年）を中心とする業

績に対して。

今だからいえるが、受賞をねらっていたことは事実。この業界にいる限りは、どうしても取りたい賞だった。中心となる論文は、人麻呂挽歌殯宮の設営地をめぐる論考で、渡瀬昌忠先生、身崎壽先生の結論を別資料で論証した論文である。が、しかし。近年、この渡瀬・身崎・上野学説も、批判の対象となっている。いずれ再反論を書きたいと思っているのだが……。

三八歳

●——平成十年（一九九八）七月十七日 博士（文学、文乙第七号）、論文題名『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼―』（雄山閣出版、平成九年、授与機関：愛知学院大学）

奈良大学での昇格や大学院担当のこともあり、桜井満先生が逝去されたこともあって、学位取得を急ぐことにした。英語の学力確認テストもあったので、久しぶりに英文解釈の勉強をするために。学位取得で、まあ、なんとか一本立ち、板前さんならようやく暖簾分けというところか。このころより、三輪そうめん山本の山本太治COO、宮滝しようゆの梅谷清嗣社長に応援していただくことに。ありがたいことだ。

三九歳

●——平成十二年（二〇〇〇）四月 帝塚山大学人文学部非常勤講師（平成十五年三月まで）

帝塚山大学で、新学部設置にともない、『万葉集』を講じることになった。三年あまりであったが、今でもこのころの学生が、ふらりと奈良大学の研究室を訪れることもある。案外、よい教師だったかもしれない。

そろそろ「ひとり立ち」ということで、メディアへの露出も多くなる。MBSラジオ「上野誠の万葉歌ごよみ」は、今も千回続く番組に。二十年間だから、ライフワークだ。

四〇歳

●——平成十三年（二〇〇一）四月 奈良教育大学非常勤講師（平成十六年四月まで）

奈良教育大学では、地域文化論の一つとして、奈良の文学を広く講義した。教育大学での講義は、この時だけだったが、師範学校の伝統のようなものを感じることができて、よかった。

四一歳

●——平成十三年（二〇〇一）七月 財団法人奈良県万葉文化振興財団万葉古代学研究所副所長（平成二十四年三月まで）

奈良県が明日香村に万葉集の博物館を設置するということになり、その準備段階から委員も務め、準備室の勤務もして、万葉古代学研究所の副所長の任を拝命することになった。所長は寺川真知夫先生。三十代中葉から四十代中葉は、私なりに万葉文化館の設立と運営に注力したつもりである。だから、今でも思い入れのある施設である。共同研究では、多くの研究者と知り合えたり、現職の国務大臣も含め、外国のVIPの明日香案内も楽しかった。したがって、この間は、館長の中西進先生の下で働いた。だから、中西先生の優しさも、恐さも、多少は知っているつもりだ。

四二歳

●——平成十四年（二〇〇二）十二月一日 内閣府主催、タウンミーティング in 奈良実行委員長

現職の国務大臣を大学に招き、学生と市民との討論会を行うということで、なかなかハードルが高かった。ことに、警備の問題等で、苦慮した思い出がある。奈良青年会議所に共催をしていただいた。その交流から、北岡篤前吉野町長、小林茂樹衆議院議員、清水克能名阪食品社長には、その後もご支援をいただいている。驚いたのは、学生たちの鋭い質問に、現職国務大臣が唸ったことであつた。

奈良大学のよいところは、中規模地方都市に立地しているため、教員、学生、市民との交流が盛んなことである。小山新造奈良商工会議所会頭、菊池政奈良トヨタ社長に泣きついたことが何度もあった。多謝。

四三歳

●——平成十六年（二〇〇四）三月二十二日 平成十五年度の放送記念日NHK奈良放送局長表彰
受賞理由…多年にわたる奈良の地域文化に関わる啓発活動に對して。

この表彰に関しては、奈良大学の学長・理事長から誉められた思い出がある。

●——平成十六年（二〇〇四）四月 奈良大学文学部国文学科教授（現在に至る）

非常勤や各種公職で多忙な助教時代であつたが、教授昇任の時期を迎えることになった。著書もあり、学位もあつて、さらに受賞歴もあつたので、かなり昇任が優遇されたと思う。感謝だ。教授昇任のお祝いの会を、奈良ホテルでしていただいた。山口昌紀近鉄社長、大川靖則奈良市長、小城利重斑鳩町長に発起人となつていただいたのも名誉。一世一代の見栄っぱり親孝行だった。司会は、吉川友子、高橋晴子両女史。

当時はまだ、時間もあつたので、中国と東南アジアには、よく研究旅行に行った。このころは、

旅行費用も安く、体力もあつたから、リュックを背負って一人旅をしていた。北京のガラクタ市が一番のお気に入り。タイにも、よく行った。今でも、探せばお宝があるはずなのだが。

●——平成十六年（二〇〇四）四月 奈良医科大学看護学部非常勤講師（平成十七年三月まで）

県立奈良医科大学に、看護学部が設置されることになり、これからは看護師にも地域を知る授業が必要ということで、万葉風土論を講ずることになった。非常勤ながら、創立メンバーということで、なんと看護学科創立十周年の記念講演の栄を賜ったこともある。そんな縁もあつて、看護学校や看護協会で講演することは、今でも多い。不思議なご縁だ。

このころより、奈良大学の高大連携事業の一環として、高校で授業することが多くなる。高校訪問ばかりでなく、修学旅行生の受入れも行なつた。國學院栃木高校の受入れについては、影山博、今井恵秀両先生のご尽力によるところが大きい。

四五歳

●——平成十八年（二〇〇六）四月 同志社大学文学部非常勤講師（平成二十五年三月まで）

同志社では、『万葉集』を講じたが、京都の大学なので、基本的には都城や古代都市の文学論を講じた。毎週、今出川校地に出向したが、京都の料理屋さんは敷居が高く出入りできなかった。やはり、「いちげんさん」での入店は、恐い。紹介を受けて、出入りできるようになったのは、五十代になってからだ。

兄の病氣治療のこともあり、母を旅行に連れ出すことが、増えてゆく。兄の家族との時間を考へてのことである。ただし、費用は、母持ち。私は、ちゃっかりしている。

四九歳

●——平成二十一年（二〇〇九）十二月 第七回角川財団学芸賞
受賞理由…『魂の古代学―問いつづける折口信夫―』（新潮社）に対して。

私が書いた折口信夫論は、万葉学徒であり、大阪商人の子としての折口である。そこには、折口に小商人の子である自分の姿を投影しているのかもしれない。角川賞受賞を機に資生堂の福原義春、角川書店の角川歴彦の両先生からご支援を賜ることとなった。ありがたいことだ。この受賞で依頼原稿が急に増えたが、著作物の質が落ちていないか、今でも気にかかるところである。心せねば。

●——平成二十二年（二〇一〇）五月 上代文学会平成二十二年度大会の当番校の業務にあたる

平城遷都千三百年を記念した大会を奈良大学で開催していただいた。大学としても、名誉なことであった。懇親会場は、名門料亭「菊水楼」にした。これは、奈良大会伝説となった。菊水楼の経費のからくりについては、秘密にしておこう。学会終了後、学生たちが胴上げしてくれた。思い出に残る大会である。

平城遷都千三百年で、もう一つ思い出となったのは、ノーベル文学賞作家・莫言先生と奈良を歩いたこと。先生が中国に戻られてから、「石破驚天」のご揮毫大書を送っていただいた。

母・繁子に介護のこともあって、奈良に来てもらった。その事情については『万葉学者、墓をしまい母を送る』（講談社、二〇二〇年）に記したとおりである。しかも、国文学科の主任を、連続八期。前後を合わせると通算十二期も担当した。「ミスター国文学科」と呼ばれることに。とに

かく、必死だった。

五一歳

●——平成二十四年（二〇一二）四月 万葉文化館 研究顧問（現在に至る）

このころより、奈良大学の広報活動の一環として、全国の高校を訪問。飛び込み営業の悲哀を感じる日々だった。苦しかったが、高校の先生方と交流できてよかった。

五二歳

●——平成二十五年（二〇一三）四月 国営平城宮歴史公園第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会委員（平成二十九年三月まで）

毎月のように委員会があったが、平城宮の復原事業のお役に立てて嬉しかった。

五三歳

●——平成二十五年（二〇一三）七月 宮崎県神楽魅力発信委員会委員（現在に至る）

●——平成二十六年（二〇一四）四月 国際日本文化研究センター客員教授（平成二十九年三月まで）

国際日本文化研究センターの客員教授になり、同時に東アジア古代学会の副会長に就任することとなった。もちろん、国際学会で英語でやり取りする力は毛頭ない。困り果てたが、そのたびに、誰かが助けてくれた。多謝。なんとか、つつがなく任期満了。ありがたい。万歳だ。

五五歳

●——平成二十七年（二〇二五）十月 第二十回奈良新聞文化賞受賞
受賞理由…多年にわたる万葉集研究とその普及啓発活動に対する功績。
奈良大学は地域に根差した大学を目指し、私も地域に愛される万葉学者を目指していたので、受賞は励みとなった。

五六歳

●——平成二十九年（二〇一六）十月 第六十九回萬葉学会大会を奈良大学で開催の当番校の業務に当たる

とにかく、半年は忙殺されたが、学生たちの協力で無事大会を終了できた。ストレスの溜まる任務だったが、なんとか、かんとかという感じである。前年より、萬葉学会の編集長も務めていて、その二年目に大会も行なった。萬葉学会の質疑応答は、激烈で、時に怒号が飛び交う。コワイ学会だから、とにかく、へとへとになった。

中国、日本語教員界の今や重鎮、郭恵珍先生が来日。奈良大学上野誠研究室で一年間、研究に従事することに。この期間中、多くの翻訳を公表。翌年、上野は郭先生の勤務先、福建省の華僑大学で講演の榮に浴した。郭先生の研究室受入れについては、小松純一先生ご夫妻、佐野純子先生、大場友加、西村潤、仲島尚美、吉田明美、太田遙、永井里歩の諸氏の協力を仰いだ。指導は、研究七分に、見学三分というところか。やはり、人文科学は、遊ばないとダメだ。

五七歳

●——平成三十年（二〇一八）五月 第十二回立命館白川静記念東洋文字文化賞
受賞理由…『万葉集から古代を読むとく』（筑摩書房）、「讃酒歌十三首の示す死生観―『莊子』『列氏』と分命論―」（『萬葉集研究』第三十六集、塙書房）、「南山、吉野の文学―『万葉集』『懷風藻』と神仙世界―」（辰巳正明編『万葉集』と東アジア、竹林舎）に対して。

白川静先生には、生前二度ほど会ったことがある。素朴、天真爛漫に見えて、眼光が鋭かった。実力に比して、私は賞には恵まれた方だと思う。白川先生は、最初、万葉学者を目指しており、『万葉集』に関する著作もある。賞というものは、まさしく縁だ。よく受賞できたと思う。

前年から、『万葉文化論』の上梓のために、忙殺されていた。二十年間書き溜めた論文を一冊の本に。千頁は、さすがに重かった。杉田啓三、坂根良枝、柿山真紀の三氏のお蔭で出版できた。感謝。

五九歳

●——令和元年（二〇一九）九月二日 二〇一九年民間放送連盟賞 ラジオ教養番組部門優秀賞
受賞理由…「上野誠の万葉歌ごよみ 令和スペシャル」に対して。親しみやすく、万葉の世界を伝えることに成功している。

ただし、これは番組に対して与えられた賞で、上野個人に与えられたものではない。令和改元の思い出の一つとなった。

●——令和二年（二〇二〇）一月十六日 宮中歌会始陪聴（松の間）

御代替わりの歌会始にご招待を受け、陪聴の榮に浴することができた。感激。

●——令和二年（二〇二〇）六月二十三日 第六十八回日本エッセイスト・クラブ賞
受賞理由…『万葉学者、墓をしまい母を送る』（講談社、二〇二〇年）に対して。

過去受賞者には、森繁久彌、高峰秀子、岸恵子など華やかな人士もいる賞。学術賞とは違う趣があったのが印象的だ。新聞取材も多く、いつになくはしゃいだ気がする。しかし、はしゃぎすぎてはいけない。本業が大切だ。

六〇歳

●——令和二年（二〇二〇年）二月

鉄野昌弘、村田右富実の二氏と相談して、角川選書『万葉集の基礎知識』という本を作ろうということになる。発案者は私だが、難しいところは、ずぼらな私では難しく、両氏が担当。申しわけない。このほか、小学館で『教会と千歳飴』（仮題）という本の企画も進行中。果たして、どうなることやら——。

●——令和三年（二〇二二年）三月三十一日 奈良大学早期円満退職

万感の思いの二十九年間である。とにかく、よく遊び、よく学んだ。もちろん、学務にも精励したつもりだが、わがままな私をよく使ってくれた。しかも、最後の五年は、大学業務や入試業務の変化のスピードにまったくついてゆけなかった。ズームも使えないのだから。木田隆文、光石亜由美、松本大、中尾和昇、山田昇平の諸先生には、ご迷惑をおかけした、と思う。お許しを。奈良大学には、感謝、多謝、深謝、ありがとうございます。ありがとうございます。

記録

卒業生たちが、日本全国の図書館を駆け巡って作ってくれた記録である。書いたことすら忘れていた文章も多かった。ただただ、感謝。

主要論文集目次・初出一覧

『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼―』

(雄山閣出版、一九九七年)

目次

総論―古代宮都の文芸としての万葉歌―

はじめに――本書のめざすもの

一 〈古代宮都〉という用語

二 儀礼の空間という視点

三 律令官人の文芸

四 〈大宮人〉の誕生

おわりに――律令国家形成期の文芸

第一章 フルサト飛鳥とその〈景〉

第一節 歴史的空間飛鳥の予備的考察

はじめに

一 飛鳥の範囲

二 飛鳥川と飛鳥

おわりに

第二節 万葉語「フルサト」の位相

はじめに

一 「フルサト」と「フリニシサト」と

二 「フルサト」と「ヒナ」と

三 「ヒナ」と「キナカ」と「フルサト」と

四 大伴旅人の望郷歌から

五 大伴坂上郎女の「フルサト」

六 大伴家持と「フリニシサト」

おわりに

第三節 古代宮都とカムナビ

はじめに

一 大場磐雄のカムナビ研究

二 カムナビという語

三 カムナビを山岳に対する呼称と

限定することはできない

四 飛鳥のカムナビとカムオカ

五 故郷の景

六 用例の偏在が意味するもの

七 カムナビから三山へ

おわりに

第四節 カムナビと〈王権〉

はじめに

一 大三輪のカムナビ(三輪山)と崇神天皇

二 飛鳥のカムナビと天武天皇

三 王権の倫理と失われた祭祀と

おわりに

第五節 カムナビの〈景〉

はじめに

一 神の帯せる川

二 吉備の中山

三 細谷川の伝承

おわりに

補論 山岳信仰と宗教的心性

第六節 故郷・飛鳥思慕の文芸

はじめに

一 讃歌をもつ旧都・飛鳥

二 天武天皇降臨の聖地

三 平城遷都以降の飛鳥

おわりに

補論 天武皇統について

第二章 殯宮儀礼の空間

第一節 殯宮という儀礼の空間

はじめに

一 殯宮という建造物について

二 殯宮の表現とその設営地

三 皇子・皇女の「殯宮」が〈生前居所〉の宮に

設営されない理由

おわりに

第二節 殯と宮

はじめに

一 日並皇子挽歌の殯宮表現

二 頌から哀へ

三 日並皇子挽歌の殯宮表現の背景

おわりに

第三節 天武天皇殯宮の芸能

はじめに

一 殯宮という芸能の場の伝統

二 殯宮の内外

三 天武天皇殯宮の芸能

四 天武天皇殯宮の前・後

おわりに

第四節 奉誄者の系譜

はじめに

- 一 奉誄にともなう所作
 - 二 奉誄の巧拙
 - 三 当麻真人智徳の登場とその立場
- おわりに——記紀成書化前夜の日継の担い手

第三章 万葉挽歌と葬送儀礼

第一節 日並皇子挽歌と〈誄詞〉の受容

はじめに

- 一 日継の皇子の挽歌と〈誄詞の受容〉
 - 二 歌の発想と質の違い
 - 三 日並皇子挽歌の場
- おわりに

第二節 高市皇子挽歌と城上殯宮

はじめに

- 一 香具山宮
 - 二 城上殯宮Ⅱ飛鳥説批判
 - 三 高市皇子と城上殯宮―長屋王邸宅跡出土
木簡資料を手掛かりとして―
- おわりに

第三節 高市皇子挽歌と香具山宮

はじめに

- 一 香具山宮・埴安池・泣沢杜
 - 二 神話の接合
 - 三 「類聚歌林」の伝
 - 四 持統十年秋七月の「禱祈」
- おわりに

第四節 人麻呂挽歌の枕と床

はじめに

- 一 人麻呂挽歌の枕と床
 - 二 トコの荒らび
 - 三 漢語受容の問題
- おわりに

付節 身崎壽の挽歌史論をめぐって

はじめに

- 一 挽歌史の構想
 - 二 天智挽歌群から「殯宮之時」挽歌創成へ
 - 三 天武挽歌の「時」と「場」
 - 四 「殯宮之時」挽歌の〈場〉
- おわりに——〈場〉の論の可能性

第四章 結界と排除の空間構造

第一節 結界の空間・飛鳥のオツナカケ

はじめに

- 一 オツナカケの現況
 - 二 オツナカケの伝承基盤
 - 三 オツナカケの機能
 - 四 ツナの行事の広がりから
- おわりに

第二節 結界の空間・平群のオツナカケ

はじめに

- 一 オツナカケの現況
 - 二 平群町槻原と鳴川の事例から
 - 三 オツナカケの時空
- おわりに

結論——万葉歌をめぐる歴史的空間

- 一 飛鳥をはじめとする意識
- 二 儀礼空間としての古代宮都
- 三 葬送儀礼と挽歌の〈場〉
- 四 研究方法に関する総括

参考文献一覧

収載論文初出一覧
図・表・写真一覧
あとがき
索引

初出一覧

一九八六年	「人麻呂挽歌の発想―枕と床と―」	『日本文学論究』第四十五号所収、國學院大學国語文学会〈三月二十日〉（第三章第四節）
一九八八年	「殯と宮―日並皇子挽歌の背景」	『上代文学』第六十一号所収、上代文学会〈十一月三十日〉（第二章第二節）
一九八九年	「飛鳥川とお綱掛け―伝承基盤とその機能―」	桜井他編『飛鳥の祭りと伝承』所収、桜楓社〈二月一日〉（第四章第一節）
一九九〇年	「日並皇子挽歌と〈誄詞〉の受容―天武殯宮奉誄儀礼との関わりから―」	『美夫君志』第四十一号所収、美夫君志会〈十月三十一日〉（第三章第一節）
一九九一年 a	「天武天皇殯宮の芸能―王権・儀礼・文学―」	『芸能史研究』第百二十三号所収、芸能史研究会〈四月二十日〉（第一章第三節）
一九九一年 b	「平群のオツナカケ―ムラ境の祭儀と伝説―」	桜井他編『生駒谷の祭りと伝承』所収、桜楓社〈四月一日〉（第四章第二節）
一九九二年	「『このころのわが恋力 記し集め……』（『万葉集』16・三八五八・三八五九）―文字をメディアとする官僚社会の文学―」	『日本文学』第四十一巻第六号所収、日本文学協会〈六月十日〉（総論）
一九九三年 a	「葬送の民俗」	桜井満監修・並木他編『万葉集の民俗学』所収、桜楓社〈四月十日〉（第二章第一節）
一九九三年 b	「王権の論理」	桜井満監修・並木他編『万葉集の民俗学』所収、桜楓社〈四月十日〉（第一章第四節）
一九九五年 a	「万葉カムナビ考―古代宮都とカムナビ信仰の起伏―」	『山岳修験』第十五号所収、日本山岳修験学会〈四月二十八日〉（第一章第三節）
一九九五年 b	「万葉びとの聖地観―春日を中心に―」	『かすがオープンセミナー講演論集 春日文化』第三冊所収、春日大社〈七月三十一日〉（第一章第五節）
一九九五年 c	「神話の担い手―記紀成書化前夜の日継の奉誄者たち―」	美濃部他編『講座日本の伝承文学第三巻 散文学（物語）の世界』所収、三弥井書店〈十月五日〉（第二章第四節）
一九九五年 d	「香具山宮と城上宮―『殯宮之時』挽歌と殯宮設営地―」	『萬葉』第百五十五号所収、萬葉学会〈十一月二十日〉（第三章第二節）
一九九五年 e	「身崎壽『宮廷挽歌の世界―古代王権と万葉和歌―』が問いかけるもの」	『国語国文研究』第百一号所収、北海道大学国語国文学会〈十一月三十日〉（第三章付節）
一九九六年 a	「万葉語『フルサト』の位相―大伴家関係歌を手がかりとして―」	『奈良大学総合研究所所報』第四号所収、奈良大学総合研究所〈二月二十六日〉（第一章第二節）
一九九六年 b	「飛鳥川の上ツ瀬を歩く―飛鳥の神々―」	『近畿文化』第五百六十二号所収、近畿文化会〈九月一日〉（第一章第一節）
一九九七年 a	「故郷・飛鳥思慕の文学―『万葉集』と天武皇統―」	古典と民俗学の会編『古典と民俗学論集―桜井満先生追悼―』所収、おうふう〈二月三日〉（第一章第六節）
一九九七年 b	「ナキサハノモリ伝承論―高市皇子挽歌『或書反歌』から―」	上田正昭編『古代日本と渡来文化』所収、学生社〈四月二十九日〉（第三章第三節）

『芸能伝承の民俗誌的研究

―カタとココロを伝えるくふう―』

(世界思想社、二〇〇二年)

目次

第一章 民俗芸能研究の方法とその思想的背景	第一節 双分制祭祀組織と芸能 ―奈良県大宇陀町平尾水分神社のオンダー
第一節 折口信夫のフィールド・ワーク	第二節 伝説と祭り ―奈良県葛城地方の役の行者伝説―
―「古典」と「生活の古典」を結ぶもの―	第三節 宮座と年中行事 ―奈良県桜井市滝倉神社の宮座の現状―
第二節 民俗芸能研究における観客論	第四節 稽古とその場 ―「伝承」を考える―
―三つの可能性―	第四章 芸能と競技のはざま
第三節 早川孝太郎『花祭』の方法	第一節 力と対立の競技
―「民俗芸能誌」の記述をめぐって―	―祭りの中での機能―
第四節 〈神〉という自動説明ボタンに封印をせよ	第二節 〈盆綱引き〉と〈精霊送り〉と ―福岡市西区玄界島を事例として―
―あまりにも、巨大な風流獅子の話―	第三節 盆綱引きとその伝承 ―福岡県筑後市久富地区を事例として―
第二章 民俗芸能における見立てと再解釈	結語にかえて エッセイ三題
第一節 民俗芸能における見立てと再解釈	第一節 カタとココロ
―静岡県引佐町川名ヒヨンドリを事例として―	第二節 宮本常一のこと
第二節 静岡県引佐町川名のヒヨンドリ	第三節 民俗学は落日か!?
第三節 静岡県引佐町川名の年中行事	本書に収載した論文・調査報告の一覧
第四節 〈花祭〉と天狗伝承	あとがき
―招かれざる精霊たちの座―	
第三章 村落祭祀と芸能	

初出一覧

一九八八年 a	「盆綱引きとその伝承―筑後市久富地区を事例として―」	『國學院大學大学院紀要』第十九輯所収、國學院大學大学院〈三月十日〉(第四章第三節)
一九八八年 b	「〈盆綱引き〉と〈精霊送り〉と―福岡市西区玄界島を事例として―」	『國學院大學大学院文学研究科論集』第十五輯所収、國學院大學大学院文学研究科学生会〈三月三十一日〉(第四章第二節)
一九八八年 c	「川名のひょんどり」「仏供―その役割」「ムラの人生儀礼としてのひょんどり」	静岡県引佐町教育委員会編『川名のシシウチ行事―国選沢無形民俗文化財記録保存報告―』所収、静岡県引佐町教育委員会〈三月三十一日〉(第二章第二節および第三節)
一九八九年	「〈花祭〉と天狗伝承―招かれざる精霊たちの座―」	『民俗芸能研究』第九号所収、民俗芸能学会〈五月二十日〉(第二章第四節)
一九九〇年 a	「マチの神々と祭り」	静岡県教育委員会編『静岡県史民俗調査報告 第十二集 掛川町の民俗』所収、静岡県教育委員会〈三月三十一日〉(第一章第四節)
一九九〇年 b	「民俗芸能における見立てと再解釈―静岡県引佐町川名ヒヨンドリを事例として―」	『日本民俗学』第百八十四号所収、日本民俗学会〈十一月十五日〉(第二章第一節)
一九九一年 a	「折口信夫のフィールド・ワーク―『古典』と『生活の古典』を結ぶもの―」	『国立歴史民俗博物館研究報告』第三十四集所収、国立歴史民俗博物館〈三月三十日〉(第一章第一節)
一九九一年 b	「懐山のおくない」	『民俗芸能』第七十二号所収、民俗芸能刊行委員会〈十一月二十三日〉(第二章第二節)
一九九一年 c	「神という自動説明ボタンに封印をせよ―あまりにも、巨大な風流獅子の話―」	『正しい民俗芸能研究』第0号所収、民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会〈十二月十四日〉(第一章第四節)
一九九一年 d	『民俗芸能誌』におけるカミの記述」	『民俗芸能学会会報』第二十一号所収、民俗芸能学会〈十一月十七日〉(第一章第四節)

一九九二年	「役行者伝説と祭り―大トンドと汁かけ祭り―」	桜井満・大石泰夫共編『葛城山の祭りと伝承』所収、桜楓社（九月十五日）（第三章第二節）
一九九三年 a	「民俗芸能研究における観客論―三つの可能性―」	『芸能』一九九三年二月号所収、芸能学会（二月十日）（第一章第二節）
一九九三年 b	「早川孝太郎『花祭』の方法―『民俗芸能誌』の記述をめぐる―」	民俗芸能研究会／第一民俗芸能学会編『課題としての民俗芸能研究』所収、ひつじ書房（十月三十日）（第一章第三節）
一九九四年	「稽古とその場―『伝承』を考える―」	松戸市立博物館編『松戸市立博物館調査報告1 千葉県松戸市の三匹獅子舞』所収、松戸市立博物館（三月二十五日）（第三章第四節）
一九九五年 a	「川名のひょんどり」	静岡県引佐町編『引佐町史 民俗芸能編』所収、静岡県引佐町（三月三十一日）（第二章第二節）
一九九五年 b	「宮座の歳月―カタとココロ―」	『儀礼文化ニュース』第八十四号所収、儀礼文化学会（七月一日）（結語第一節）
一九九五年 c	「平尾水分神社のオンダ」	桜井満・瀬尾満共編『宇陀の祭りと伝承』所収、おうふう（十月二十五日）（第三章第一節）
一九九七年	「泊瀬川上流の祭りと伝承」	桜井満・上野誠共編『泊瀬川の祭りと伝承』所収、おうふう（三月二十日）（第三章第三節）
一九九八年	「民俗学は落日か」	『読売新聞』夕刊、読売新聞社（十二月二十五日）（結語第三節）
一九九九年 a	「奈良を旅した巨人―宮本常一伝説―」	『あかい奈良』一九九九年春号所収、グループ丹（三月十日）（結語第二節）
一九九九年 b	「力と対立の競技」	小松和彦・野本寛一編『講座日本民俗学 第八巻 芸術と娯楽の民俗』所収、雄山閣出版（八月十日）（第四章第一節）

『折口信夫的思考―越境する民俗学者―』

（青土社、二〇一八年）

目次

序詩―大ぼら吹き讃

第Ⅰ部 古典研究の未来

第1章 万葉研究の現状と研究戦略

第2章 万葉民俗学の可能性を探る

第3章 日本文学研究における自覚的「補充」

第4章 模擬授業の中の万葉集―〈授業芸〉の誕生

第Ⅱ部 折口信夫的思考

第1章 歌による暴力

第2章 白川静と万葉集

第3章 万葉集研究と民俗学的思考

第4章 いむ・いみ

第5章 『口訳万葉集』、等身大の恋歌

創作*1 初春講談、日本初『万葉集』全口語訳の由来、

小田原の一夜

第Ⅲ部 小説家・折口信夫

第1章 万葉歌から作られた物語、

小説「神の嫁」の時空

第2章 「神の嫁」と憑依感覚

第3章 「生き口を問ふ女」の論

第4章 「生き口を問ふ女」と大阪言葉

創作*2 小説、折口信夫、一九四五・七・二六

第Ⅳ部 戦時下の折口信夫

第1章 「アラヒトガミ事件」再考

第2章 高見順の見た折口信夫

あとがき

参考文献

初出一覧

初出一覧

二〇〇〇年	「万葉研究の現状と研究戦略——筆者が選んだ選択肢」	『日本文学』第四十九巻第一号所収、日本文学協会（二月二十日）（第一部第1章）
二〇〇三年	「万葉民俗学の可能性を探る」	大石泰夫・上野誠共著『万葉民俗学を学ぶ人のために』所収、世界思想社（十月十日）（第一部第2章）
二〇〇七年	「等身大の恋歌——『口訳万葉集』から学んだこと」	『國文學——解釈と教材の研究』第五十二巻第十四号所収、學燈社（十一月十日）（第II部第5章）
二〇〇八年 a	「歌による暴力——心性と場と」	『国文学——解釈と鑑賞』第七十三巻第八号所収、至文堂（八月一日）（第II部第1章）
二〇〇八年 b	「いむ・いみ」	近藤信義編『修辭学』所収、おうふう（十二月六日）（第II部第4章）
二〇〇九年 a	「折口信夫の小説『生き口を問ふ女』の論」	菅野雅雄博士喜寿記念『記紀・風土記論究』所収、おうふう（三月四日）（第III部第3章）
二〇〇九年 b	「折口信夫と憑依感覚——『神の嫁』試論」	青木周平先生追悼論文集刊行会編『青木周平先生追悼古代文芸論叢』所収、おうふう（十一月十五日）（第III部第2章）
二〇一〇年 a	「折口信夫の小説『神の嫁』の時空——万葉歌から作られた物語」	『叙説』第三十七号所収、奈良女子大学国語国文学会（三月三十一日）（第III部第1章）
二〇一〇年 b	「折口信夫の小説『生き口を問ふ女』と大阪言葉」	谷口貢・鈴木明子編『民俗文化の探求——倉石忠彦先生古希記念論文集』所収、岩田書院（八月一日）（第III部第4章）
二〇一〇年 c	「白川静の万葉論」	立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所編『入門講座白川静の世界II 文学』所収、平凡社（九月二十四日）（第II部第2章）
二〇一〇年 d	「日本文学研究における自覚的『補完』——国文学者の肖像写真」	全国大学国語国文学会編『文学・語学』第百九十八号所収、全国大学国語国文学会（十一月三十日）（第一部第3章）
二〇一二年	「万葉研究と民俗学的思考——シメの話」	『アナホリッシュ國文学』第一号所収、響文社（十二月五日）（第II部第3章）
二〇一四年 a	「折口信夫、『アラヒトガミ事件』再考」	『現代思想』第四十二巻第七号所収、青土社（四月十五日）（第IV部第1章）
二〇一四年 b	「高見順の見た折口信夫——『かつ・よさ』の秘密」	『三田文学』第九十三巻第十一号所収、三田文学会（十一月一日）（第IV部第2章）
二〇一四年 c	「折口信夫、一九四五・七・二六」	『短歌往来』二〇一五年一月号（十二月号所収、ながらみ書房（十二月十五日）（二〇一五年十一月十五日）（創作*2）
二〇一五年 a	「初春講談、日本初『万葉集』全口語訳の由来、小田原の一夜」	『日本文学論究』第七十四冊所収、國學院大學國文學會（三月二十日）（創作*1）
二〇一五年 b	「模擬授業の中の万葉集——〈授業芸〉の誕生」	『国語と国文学』第九十二巻第十一号所収、東京大学国語国文学会（十一月一日）（第一部第4章）

『万葉文化論』

(ミネルヴァ書房、二〇一八年)

目次

序詩

凡例

緒言 万葉文化論の自己定位

第一章 古代宮都とその景の万葉文化論

第一節 古代宮都と官人の心性

第二節 古代宮都と三山

第三節 香具山から見た明日香

付、奈良時代、平安時代の明日香

第四節 平城京と三笠山の月

第二章 律令官人と宴の万葉文化論

第一節 書殿送別宴の歌

第二節 山上憶良の申文

第三節 越中官人の正月宴

第四節 讃酒歌の酒

第三章 往来と贈答の万葉文化論

第一節 大伴書持挽歌と使者往来

第二節 大伴坂上郎女と駿河麻呂の贈答歌

第三節 古代酒宴歌謡の本願

第四節 好去好来歌における笑いの献上

第四章 歌と木簡の万葉文化論

第一節 難波津歌典礼唱和説批判

第二節 難波津歌の伝

第三節 歌と木簡と

付、黄葉と書かれた墨書土器について

第四節 秋萩木簡と仏前唱歌

第五章 自然と庭の万葉文化論

第一節 古代の祭場、ミモロ

付、歌ことば「カムナビ」の性格

第二節 王の庭と民の庭

第三節 南山、吉野と神仙世界

第四節 みやびの鹿とひなびの鹿

第六章 農と心性の万葉文化論

第一節 語られる農

第二節 稲作と心性

第三節 「私田刈る」という歌表現

第四節 「小山田の苗代水」という歌表現

第七章 洗濯と掃除の万葉文化論

第一節 麻と女

第二節 万葉びとの洗濯

第三節 「橡の解き洗ひ衣」という歌表現

付、曝さず縫ひし我が下衣

第四節 万葉びとの掃除

第五節 天智天皇挽歌と後宮

初出一覧

一九九九年

「歌ことば『カムナビ』の性格―三輪・飛鳥・葛城・竜田―」

『大三輪』第九十六号所収、大神神社（一月一日）（第五章第一節付）

二〇〇一年 a

「万葉のモリとミモロと―古代の祭場、あるいは古代的祭場―」

『祭祀研究』第二号所収、祭祀史料研究会（二月一日）（第五章第一節）

二〇〇一年 b

「文学が語る都市―律令官人と『万葉集』―」

奈良大学文学部世界遺産コース編『世界遺産と都市』所収、風媒社（六月二十五日）（第一章第一節）

二〇〇一年 c	「大伴書持挽歌の説明的自注―萩の花にはへる屋戸を―」	美夫君志会編『美夫君志論攷』所収、おうふう（九月十五日）（第三章第一節）
二〇〇一年 d	「妹がみためと私田刈る（巻七の二二七五）―旋頭歌の笑い―」	『美夫君志』第六十三号所収、美夫君志会（十月三十日）（第六章第三節）
二〇〇二年 a	「筑紫君磐井の墓―その説話的理解―」	菅野雅雄博士古稀記念論集刊行会編『古事記・日本書紀論集』所収、おうふう（四月三日）（第八章第三節）
二〇〇二年 b	「それからの明日香」	『東アジアの古代文化』第百十三号所収、大和書房（十一月五日）（第一章第三節付）
二〇〇三年 a	「万葉びとの庭、天平の庭―王の庭と、民の庭―」	梶川信行・東茂美共編『天平万葉論』所収、翰林書房（四月十六日）（第五章第二節）
二〇〇三年 b	「万葉びとの生活―解釈・復原・記述―」	中西進編『万葉古代学』所収、大和書房（五月二十五日）（第六章第一節）
二〇〇三年 c	「小山田の苗代水の中淀にして（『万葉集』巻四の七七六）―紀女郎の意趣返し―」	森永道夫編『芸能と信仰の民俗芸術』所収、和泉書院（五月三十日）（第六章第四節）
二〇〇三年 d	「稲作の民俗から『心意伝承』を垣間見る！」	大石泰夫・上野誠共編『万葉民俗学を学ぶ人のために』所収、世界思想社（十月十日）（第六章第二節）
二〇〇四年 a	「初期万葉挽歌と遊離魂感覚―倭太后奉献歌における『儀礼』と『個』―」	『万葉古代学研究所年報』第二号所収、財団法人万葉文化振興財団（三月十日）（第八章第一節）
二〇〇四年 b	「万葉びとの洗濯―白を希求した男と女―」	高岡市万葉歴史館編『色の万葉集』所収、笠間書院（三月三十一日）（第七章第二節）
二〇〇四年 c	「麻と女―古代の労働環境を考える」	『国文学』第四十九巻第八号所収、学燈社（七月十日）（第七章第一節）
二〇〇五年 a	「曝さず縫ひし我が下衣―解釈の迷路―」	『明日香風』第九十三号所収、明日香保存財団（一月一日）（第七章第三節付）
二〇〇五年 b	「橡の解き洗ひ衣―譬喩と生活実感と―」	『古代文学』第四十四号所収、古代文学会（三月五日）（第七章第三節）
二〇〇六年 a	「万葉民俗学と万葉文化論の将来」	全国大学国語国文学会編『日本語日本文学の新たな視座』所収、全国大学国語国文学会（六月三日）（緒言）
二〇〇六年 b	「金子裕之『古代都城と道教思想』の問いかけるもの―万葉歌の三山―」	『明日香風』第百号所収、明日香保存財団（十月一日）（第一章第一節）
二〇〇七年 a	「大伴坂上郎女と大伴駿河麻呂の贈答歌―『怨み』をめぐる表現の特性と内実と―」	『万葉古代学研究所年報』第五号所収、財団法人万葉文化振興財団万葉古代学研究所（三月二十五日）（第三章第二節）
二〇〇七年 b	「憶良の申文―春さらば奈良の都に召上げたまはね―」	『国語と国文学』第八十四巻第十一号所収、東京大学国語国文学会（十一月一日）（第二章第二節）
二〇〇八年	「みやびの鹿とひなびの鹿」	高岡市万葉歴史館編『四季の万葉集』所収、笠間書院（三月三十一日）（第五章第四節）
二〇〇九年 a	「難波津歌典礼唱和説批判―いわゆる『万葉歌木簡』研究覚書」	『国文学』第五十四巻第六号所収、学燈社（四月二十五日）（第四章第一節）
二〇〇九年 b	「明日香からの視線で舒明天皇御製歌を読む」	美夫君志会編『万葉集の今を考える』所収、新典社（七月五日）（第一章第三節）
二〇〇九年 c	「『黄葉』と書かれた墨書土器について―馬場南遺跡出土―」	『日本文学』第五十八巻第十号所収、日本文学協会（十月十日）（第四章第三節付）
二〇〇九年 d	「馬場南遺跡出土木簡臆説―ヤマトウタを歌うこと―」	『國學院雑誌』第百十巻第十一号所収、國學院大學（十一月十五日）（第四章第二節）
二〇一〇年 a	「難波津歌の伝―いわゆる安積山木簡から考える―」	『文学・語学』第百九十六号所収、全国大学国語国文学会（三月三十一日）（第四章第二節）

二〇一〇年 b	『書殿にして饒酒する日の倭歌』の論	『萬葉』第二百六号所収、萬葉学会〈三月三十一日〉(第二章第一節)
二〇一〇年 c	「春日なる三笠の山に出でし月―平城京の東―」	『国語と国文学』第八十七卷第十一号所収、東京大学国語国文学会〈十一月一日〉(第一章第四節)
二〇一二年	「天智天皇挽歌群と『後宮』―その予備的考察―」	稲岡耕二監修、神野志隆光・芳賀紀雄編『萬葉集研究』第三十三集所収、塙書房〈十月一日〉(第七章第五節)
二〇一四年 a	「宴の場を歌集から復元することは可能か―『万葉集』巻十九の四二二九～四二三七―」	『日本文学』第六十三巻第五号所収、日本文学協会〈五月十日〉(第三章第三節)
二〇一四年 b	「山科御陵退散歌再考―不足、不満の抒情―」	『國學院雑誌』第百十五巻第十号所収、國學院大學〈十一月十五日〉(第八章第二節)
二〇一四年 c	「この御酒は我が御酒ならず―古代酒宴歌の本願―」	和田萃編、田原本町記紀・万葉事業実行委員会監修『古事記と太安万侶』所収、吉川弘文館〈十一月二十日〉(第三章第三節)
二〇一五年 a	『紐解き放けて立ち走りせむ』再考―好去好来歌の笑い―	『文学』第十六巻第三号所収、岩波書店〈五月二十五日〉(第三章第四節)
二〇一五年 b	『大伴の三津の松原搔き掃きて』再考―好去好来歌反歌の論―	『京都語文』第二十二号所収、仏教大学国語国文学会〈十一月二十八日〉(第七章第四節)
二〇一六年 a	「遊部の伝承をどう見るか―礼制と化外・遺制の俗―」	『東アジア民族文化研究』第十五号所収、東アジア民族文化学会〈三月三十一日〉(第八章第五節)
二〇一六年 b	「讃酒歌十三首の示す死生観―『莊子』『列子』と分命論―」	芳賀紀雄監修、鉄野昌弘・奥村和美編『萬葉集研究』第三十六集所収、塙書房〈十二月二十日〉(第八章第四節)
二〇一七年 a	「秋萩木簡と仏前唱歌と―吉川真司氏の批判に答える―」	『萬葉』第二百一十四号所収、萬葉学会〈八月三十一日〉(第四章第四節)
二〇一七年 b	「南山、吉野の文学―『万葉集』『懷風藻』と神仙世界―」	辰巳正明編『『万葉集』と東アジア』所収、竹林舎〈九月十日〉(第五章第三節)
二〇一七年 c	「讃酒歌の酒―酒をめぐる頌讃の文学様式から―」	万葉七曜会編『論集上代文学』第三十八冊所収、笠間書院〈九月三十日〉(第二章第四節)

単行本未収録論文および短報一覧

一九九〇年	岩下均・大石泰夫・上野誠共著「第二章 吉野の祭り金峯山寺蔵王堂の年中行事の特質」	古典と民俗学の会、桜井満・岩下均編『吉野の祭りと伝承』桜楓社（四月十一日）
一九九二年	上野誠・西瀬英紀共著「民俗芸能研究の現在」	『日本民俗学』第百九十号、日本民俗学会（五月三十一日）
一九九八年	「初期万葉における古代的特質と呪的特質―天智挽歌群、倭太后奉献歌から―」	美夫君志会編『万葉史を問う』、勉誠社（十二月十日）
〃	「万葉史における卷第十三―擬古の文芸として位置付ける―」	美夫君志会編『万葉史を問う』、勉誠社（十二月十日）
二〇〇三年	「万葉びとの小さな旅」	大学教育出版編集部編『旅のはじまりと文化の生成』大学教育出版（一月二十五日） ※「万葉びとの生活―解釈・復元・記述―」 中西進編『万葉古代学』大和書房、二〇〇三年）を改稿して掲載されたもの。「万葉びとの生活―解釈・復元・記述―」は『万葉文化論』第六章第一節に収載されている。
二〇一〇年	「謡曲〈野守〉の文芸風土」	『観世』第七十七巻第八号、檜書店（八月一日）
〃	「遣唐使と歌―平群広成と阿倍仲麻呂をめぐる夢想」	遣唐使船再現シンポジウム編『遣唐使の時代―時空を駆けた超人たち』、角川学芸出版（十月二十五日）
二〇一七年	「大岡信の『万葉集』―窪田空穂に学んだもの―」	『ユリイカ』（総特集 大岡信の世界）七月臨時増刊号、第四十九巻第十号、青土社（六月十五日）
二〇一八年	「裳をめぐる万葉歌表現―裳のいろいろ（前）―」	『早稲田大学日本古典籍研究所年報』第十一号、早稲田大学総合研究機構日本古典籍研究所（三月二十一日）
〃	「『紅の赤裳』という表現―裳のいろいろ（後）―」	『美夫君志』第九十七号、美夫君志会（十月二十日）
二〇一九年	「民俗学的研究が残したもの―文化の連続・非連続、あるいは等質・異質」	上野誠・大浦誠士・村田右富実編、上代文学会監修『万葉をヨム―方法論の今とこれから』、笠間書院（五月二十四日）
〃	郭恵珍・上野誠共著「戦争時期日本文人の矛盾与軟弱―以三好十郎的《浮標》為例」	『日語学習と研究』第二百三三号、中国北京『日語学習と研究』編集委員会（八月二十五日）
二〇二〇年	「折口信夫の自己定位―矢野玄道歌への言及から―」	國學院大學研究開発推進センター編（責任編集・阪本是丸）『近代の神道と社会』弘文堂（二月十五日）
〃	「『万葉集』の高麗剣と高麗錦と―呼称感覚と表現性をめぐって―」	『萬葉』第二百三十号、萬葉学会（九月三十日）
二〇二二年	「万葉歌の内と外と―大宰府文学圏の点と線―」	『日本文学』第七十巻第二号、日本文学協会（二月十日）
二〇二三年	「纏向の文学イメージ―山びとの降り来る里―」	『纏向学研究』第十号（纏向学研究センター開設十周年記念論集）所収予定、纏向学研究センター（入稿済）

※未刊の論文に「紅の赤裳とは何か」（奈良国立博物館編集『正倉院に学ぶ』思文閣出版）がある。すでに、二〇一八年一月に提出済（受理）だが、刊行のメドは立っていない。

著書・CDソフト一覧

一九九七年	桜井満・上野誠共編『泊瀬川の祭りと伝承』	おうふう〈三月二十日〉
〃	『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼』	雄山閣出版〈十一月十五日〉
一九九八年	『風呂で読む 万葉挽歌』	世界思想社〈十月十日〉
二〇〇〇年	『万葉びとの生活空間―歌・庭園・くらし』	塙書房〈十一月六日〉
二〇〇一年	吉野歴史史料館編、上野誠著『歩いて実感する万葉吉野紀行』	吉野町教育委員会・吉野歴史史料館〈三月〉
〃	『芸能伝承の民俗誌的研究―カタとココロを伝えるくふう―』	世界思想社〈三月十日〉
二〇〇二年	CD『万葉うた紀行―古代の夢―』	NMG〈八月一日〉
〃	『万葉にみる 男の裏切り・女の嫉妬』	日本放送出版協会〈九月十日〉
〃	『みんなの万葉集―響きあう「こころ」と「ことば」―』	PHP研究所〈九月二十日〉
二〇〇三年	大石泰夫・上野誠共編『万葉民俗学を学ぶ人のために』	世界思想社〈十月十日〉
二〇〇四年	『万葉体感紀行―飛鳥・藤原・平城の三都物語―』	小学館〈九月二十日〉
二〇〇五年	『小さな恋の万葉集』	小学館〈十二月一日〉
二〇〇六年	『おもしろ古典教室』	筑摩書房〈四月十日〉
二〇〇七年	『万葉びととの対話』	日本放送出版協会〈十月一日〉
二〇〇八年	『大和三山の古代』	講談社〈七月二十日〉
〃	『魂の古代学―問いつづける折口信夫』	新潮社〈八月二十五日〉

二〇〇九年	CD『苦難の遣唐使（解説・朗読）』	NMG※パッケージに日付が記されていないため、刊行日不明。
二〇一〇年	『万葉びとの奈良』	新潮選書〈三月二十五日〉
二〇一一年	上野誠編『国文科へ行こう！』	明治書院〈四月二十五日〉
〃	文・上野誠、絵・えんぴつ社『よしのよく見よ』	角川学芸出版〈十一月二十五日〉
二〇一二年	『万葉挽歌のこころ―夢と死の古代学―』	角川学芸出版〈二月二十五日〉
〃	文・上野誠、書・中嶋玉華『心ときめく万葉の恋歌』	二玄社〈九月五日〉
〃	小説『天平グレート・ジャーニー―遣唐使・平群広成の数奇な冒険―』	講談社〈九月二十日〉
〃	『はじめて楽しむ万葉集』	角川学芸出版〈九月二十五日〉
〃	※本書は二〇〇二年九月、PHP研究所より刊行された単行本『みんなの万葉集―響きあう「こころ」と「ことば」―』を改題の上、文庫化したものです。	書肆アルス〈十二月十一日〉
二〇一三年	『書淫日記―万葉と現代をつないで―』	ミネルヴァ書房〈六月二十日〉
〃	『遣唐使 阿倍仲麻呂の夢』	角川学芸出版〈九月二十五日〉
〃	『万葉集の心を読む』	KADOKAWA〈十一月二十五日〉
〃	※本書は二〇〇七年九月に日本放送出版協会より刊行された『万葉びととの対話』（NHKラジオ第2放送「こころをよむ」テキスト）を文庫化したものです。	講談社〈四月十七日〉
二〇一四年	『万葉びとの宴』	
〃	『折口信夫 魂の古代学』	KADOKAWA〈九月二十五日〉
〃	※本書は二〇〇八年八月、新潮社より刊行された『魂の古代学―問いつづける折口信夫』を改題の上、文庫化したものです。	

二〇二四年	渡部泰明編『和歌のルール』第九章「長歌」担当	笠間書院〈十一月一日〉
二〇二五年	小説『天平グレート・ジャーニー―遣唐使・平群広成の数奇な冒険―（文庫版）』	講談社〈二月十五日〉
〃	『日本人にとって聖なるものとは何か―神と自然の古代学―』	中央公論新社〈二月二十五日〉
〃	『古典不要論への反撃!? 書評劇場』	笠間書院〈四月二十日〉
〃	『さりげなく思いやりが伝わる大和言葉』	幻冬舎〈六月二十五日〉
〃	『万葉集で親しむ大和言葉』 ※本書は二〇〇二年九月に日本放送出版協会より刊行された『万葉にみる男の裏切り・女の嫉妬』を文庫化したものです。	KADOKAWA〈九月二十五日〉
二〇二六年	『万葉手帳』	東京書籍〈二月十八日〉
〃	本居宣長・津田左右吉他、上野誠編『日本の古代を読む』	文藝春秋〈六月二十日〉
〃	古代史シンポジウム「発見・検証 日本の古代」編集委員会編 『発見・検証 日本の古代Ⅰ 纏向発見と邪馬台国の全貌―卑弥呼と三角縁神獣鏡―』	KADOKAWA〈七月二十五日〉
〃	古代史シンポジウム「発見・検証 日本の古代」編集委員会編 『発見・検証 日本の古代Ⅱ 騎馬文化と古代のイノベーション』	KADOKAWA〈九月二十五日〉
〃	古代史シンポジウム「発見・検証 日本の古代」編集委員会編 『発見・検証 日本の古代Ⅲ 前方後円墳の出現と日本国家の起源』	KADOKAWA〈十一月十日〉
二〇二七年	『筑紫万葉恋ひこころ』	西日本新聞〈五月一日〉
〃	『万葉集から古代を読みとく』	筑摩書房〈五月十日〉
〃	『美しい日本語が話せる 書ける 万葉ことば』	幻冬舎〈十一月十日〉

二〇一八年	『折口信夫的思考―越境する民俗学者―』	青土社〈十二月十日〉
〃	『万葉文化論』	ミネルヴァ書房〈十二月三十日〉
二〇一九年	『令和』の心がわかる 万葉集のことば ※本書は、二〇一七年十一月に刊行された『美しい日本語が話せる 書ける 万葉ことば』を加筆・修正の上、改題した著作。	幻冬舎〈四月二十五日〉
〃	『体感訳 万葉集―令和に読みたい名歌36―』	NHK出版〈七月二十五日〉
〃	『入門 万葉集』	筑摩書房〈九月十日〉
〃	監修・上野誠、マンガ・サンドランチ『マンガでわかる万葉集』	池田書店〈十月二十五日〉
〃	上野誠・蜂飼耳・馬場基著『万葉集であるく奈良』	新潮社〈十月三十日〉
〃	著・上野誠、絵・花村えい子『令和のこころ―万葉の世界と梅花の宴―』	ミネルヴァ書房〈十二月十日〉
二〇二〇年	監修・上野誠、絵・花村えい子、編・こどもくらぶ 『万葉集から学ぼう 日本のこころと言葉 古代の都』	ミネルヴァ書房〈二月二十日〉
〃	『万葉学者、墓をしまい母を送る』	講談社〈三月三十日〉
〃	『万葉集講義―最古の歌集の素顔―』	中央公論新社〈九月二十五日〉
〃	監修・上野誠、絵・花村えい子、編・こどもくらぶ 『万葉集から学ぼう 日本のこころと言葉 万葉の恋うた』	ミネルヴァ書房〈十二月一日〉
二〇二二年	監修・上野誠、絵・花村えい子、編・こどもくらぶ 『万葉集から学ぼう 日本のこころと言葉 万葉の旅うた』	ミネルヴァ書房〈三月十日〉

翻訳された書籍・論文

二〇〇一年	『万葉集』と日本人―日本文化の理解のために―『風 [Kaze]』十九号所収、なら・シルクロード博記念国 際交流財団〈九月一日〉	英訳は、同誌に和文とともに収載された。「The Manyoshu and the Japanese – An Approach to Understanding Japanese Culture –」
二〇〇二年	『万葉にみる 男の裏切り・女の嫉妬』NHK出版協 会〈九月十日〉	韓国語訳は、二〇〇六年三月に刊行された。 〔도서〕천년의 연가 만년전 우에노 마코토 저 / 박성현 역 出版社・・ 제이앤씨 (J&C) 2006년 03월
二〇〇三年	「万葉びとの庭、天平の庭―王の庭、民の庭―」 梶川信行・東茂美編『天平万葉論』所収、翰林書房〈四 月十六日〉	韓国語訳は、『東アジア古代学』第十三輯（東アジア古代学会、 韓国ソウル、二〇〇六年六月発行）に収載された。 천평(天平) 시대의 마당(庭), 백성(民)의 마당・동아시아 ^정원(庭園) <문화연구를 위해・ 우에노 마코토 (上野誠), 박성현 동아시아고대학, vol.13, (2006年06月) pp.199-226 出版社・・ 동아시아 고대학회
二〇〇四年	「初期万葉挽歌と遊離魂感覚―倭太后奉獻歌における 『儀礼』と『個』―」『万葉古代学研究所年報』第二 号所収、財団法人万葉文化振興財団万葉古代学研究 所〈三月十日〉	全面改稿し、韓国語訳は、『東アジア古代学』第八輯（東アジ ア古代学会、韓国ソウル、二〇〇三年十二月二十日発行）に収 載された。 만엽인의 유리혼(遊離魂) 감각・텐치(천황) 만가작품권, 아마토 태후 봉헌가・ 上野誠・박성현 동아시아고대학, vol.8, (2003年12月) pp.45-69 出版社・・ 동아시아 고대학회

二〇〇八年	『魂の古代学―問いつづける折口信夫―』第三章 抗議する詩人―静かだが呪うように―新潮社〈八 月二十五日〉	韓国語訳は、『東アジア古代学』第十九輯（東アジア古代学会、 韓国ソウル、二〇〇九年六月発行）に収載された。 조선인 대량 살해를 고발했던 고전학의 거인, 오리쿠치 시노부 우에노 마코토, 박성현 동아시아고대학, vol.19, (2009년06월) pp.301-320 出版社・・ 동아시아 고대학회
二〇一四年	『万葉びとの宴』講談社〈四月十七日〉	中国語訳は、二〇一八年二月に刊行された（郭惠珍訳『万葉和 歌母体研究』東北師範大学出版社）
二〇一七年	『万葉集から古代を読みとく』筑摩書房〈五月十日〉	中国語訳は、二〇一八年二月に刊行された（郭惠珍訳『万葉和 歌母体研究』東北師範大学出版社）

※未刊の論文に「後宮とその文学の広がり―日中の比較から―」（南開大学外国語学院編『東亜文学与文化交流国際學術検討会論文集』）がある。すでに、二〇一二年十月十七日に提出済（受理）だが、刊行のメドは立っていない。同論文は、和文に加え、中国語訳がなされ、当該論文集に収載される予定である。

新聞・雑誌取材インタビュー記事、座談会記録など

一九九三年	「シンポジウム 民俗芸能の継承・断絶・再生」(パネリスト・門屋光昭、西郷由布子、神田より子、司会・上野誠)	『民俗芸能研究』第十八号、民俗芸能学会(十一月十五日)
一九九九年	「対談 『場』をめぐる」(上野誠、滝川幸司)	『研究室だより』第十七号、奈良大学文学部国文学研究室(三月十二日)
二〇〇〇年	「あつちゃんのさわやか対談第五回」(ホスト・荒井敦子、ゲスト・上野誠)	『月刊 大和路ならら』第三卷第十六号、地域情報ネットワーク株式会社(一月一日)
二〇〇一年	「インタビュー 日本人の心の源流・飛鳥川」	『月刊大和路ならら』第四卷第六号、地域情報ネットワーク株式会社(六月一日)
〃	「基調講演 万葉集と大伴家持」水野正好、上野誠、中山和之	『因幡万葉歴史館紀要』第一号、因幡万葉歴史館(六月三十日)
〃	「シンポジウム 大伴家持の光と影」(コーディネーター・水野正好、パネリスト・上野誠、中山和之)	水野正好、上野誠、中山和之『因幡万葉歴史館紀要』第二号、因幡万葉歴史館(六月三十日)
〃	「対談 生きて生活した人間そのものの声が万葉集。それを万葉文化館で体感してほしい」(中西進、上野誠)	『明日香風』第八十号、飛鳥保存財団(十月一日)
二〇〇二年	「矢守先生、上野先生の学問異種格闘技戦」	『クレオ大阪東・奈良大学社会学部 おもしろ文化講座 女性・環境・文化を考える―古今東西総ざらい―』奈良大学社会学部(三月)
二〇〇三年	「講演 春日山と万葉集」	『第二三三回 興福寺佛教文化講座要旨』興福寺教学部(九月十三日)
二〇〇四年	「対談 戦争を経験し、信用できるのは自分の目で確かめたことだけだと知った。それで、万葉集をもう一度見つめ直そうと思った。」(渡瀬昌忠、上野誠)	『明日香風』第八十九号、飛鳥保存財団(一月一日)

〃	「第三十四回大学図書館問題研究会全国大会奈良大会記念講演「よこゑ万葉の世界へ」	記録集『大学図書館問題研究会誌』第二十五号、大学図書館問題研究会事務局(二月一日)
〃	「対談 日本人の心の故郷・万葉集は世界に誇る貴重な文献。日本人を理解しようと思えば万葉集を抜きにしては考えられません。」(尹永水、上野誠)	『明日香風』第九十二号、飛鳥保存財団(七月一日)
二〇〇五年	「歴史街道クローズアップ人 万葉びとの生きた時代を体感する新鮮さ」	『歴史の旅人』第四十二号、歴史街道倶楽部事務局(三月二十日)
二〇〇七年	「鼎談 視点を変えれば飛鳥は、もっともっと違った新しい魅力のある所。『明日香風』には、飛鳥の魅力を再発見する指針を示す使命がある。」(猪熊兼勝、和田萃、上野誠)	『明日香風』第一百一号、飛鳥保存財団(八月一日)
〃	「対談 韓国の若者には、まだ兵役があります。だから、私は、家族への愛情をストレートに表現した防人歌に魅かれます。」(パク・サンヒョン、上野誠)	『明日香風』第一百二号、飛鳥保存財団(四月一日)
二〇〇八年	「人物クローズアップ 万葉学者上野誠さん 読者引き込む〈迷い〉の表現『大和三山の古代』」	読売新聞(八月二十一日夕刊)
〃	「鼎談 弱い立場の人の視点に立ち、温かいまなざしを持ち続けた折口信夫。」(飛鳥弘文、和田萃、上野誠)	『明日香風』第百八号、飛鳥保存財団(十月一日)
〃	「著者に聞く『折口学』の全体像解く」	奈良新聞(十月五日朝刊)
〃	「等身大の折口信夫論『魂の古代学』」	毎日新聞(十月七日朝刊)
〃	「第3回平城遷都一三〇〇年奈良・読書の旅」	読売新聞(十二月九日夕刊)
二〇〇九年	「大和ひと点描 万葉集 心読み取る醍醐味」	産経新聞(二月十一日朝刊)
〃	「修学旅行で万葉講義」	読売新聞(三月十一日朝刊)

二〇〇九年	「新説「難波津」の歌木簡は練習」手習い歌の「唱和」に異論」	読売新聞〈三月十七日夕刊〉
〃	「インタビュー 上田正昭氏に聞く―新発見資料が切り拓く万葉考古学（特集 新発見資料が語る万葉考古学）―」（上田正昭、上野誠）	『国文学―解釈と教材の研究―』第五十四巻第六号、學燈社〈四月二十五日〉
〃	「第3回なにわの宮新作万葉歌、記念シンポジウム『万葉集』誕生の道のりをたどる」	毎日新聞〈四月六日朝刊〉
〃	「オペラ『遣唐使』 in 薬師寺」	読売新聞〈六月二十三日朝刊〉
〃	「飛鳥学講演会『木簡に書かれたヤマトウタ』」	『明日香風』第百十二号、飛鳥保存財団〈十月一日〉
〃	講演記録『万葉集』はおもしろい」	『人間と文化 教養講演集』第七十五巻、三愛会〈十二月一日〉
〃	「よみがえる平城京 遷都一三〇〇年の物語第一部 天平の宮仕え」	読売新聞〈十二月五日朝刊〉
〃	「折口信夫の古代学に迫る 角川財団学芸賞」	読売新聞〈十二月十七日夕刊〉
二〇一〇年	「まほろばを受け継ぐ ひと脈々」	日本経済新聞〈五月二十日夕刊〉
〃	「私だけのふるさと 宙づりファントム見とかな『損』」	毎日新聞〈七月一日夕刊〉
〃	「講演録 万葉びとの世界―歌に託した私たちの心―」	『リそなれ』第八巻第九号、リそな総合研究所〈九月〉
〃	「オペラ『遣唐使』新装上演」	日本経済新聞〈九月二十一日夕刊〉
〃	「上野誠さんの思い出の味 TEN. TEN. CAFE」	読売新聞〈十一月十七日夕刊〉
〃	「鼎談 画期としての雄略朝と継体朝―考古学・古代史・万葉集から」（和田萃、辰巳和弘、上野誠、司会・山成孝治）	和田萃『ヤマト国家の成立―雄略朝と継体朝の政権―』文英堂〈十二月十日〉
二〇一二年	「奈良発オペラ『遣唐使』3度目公演」	朝日新聞〈二月十日朝刊〉

〃	「セミナー―古都に学ぶ 講演『万葉に学ぶ奈良 トークセッション』奈良の魅力と楽しみ方」	日本経済新聞〈三月十三日朝刊〉
〃	「明日香村まるごと博物館フォーラム in 福岡」	読売新聞〈八月二十五日夕刊〉
〃	「万葉朗読劇『山上憶良と遣唐使』公開練習で小学生合唱披露」	毎日新聞〈九月二十日朝刊〉
〃	「対談 歴史を動かしてきた原動力は何なのか？」（上野誠、井沢元彦）	井沢元彦『源氏物語はなぜ書かれたのか』十一月二十五日
〃	「学びのふるさと ものの見方・感度を磨く」	日本経済新聞〈十二月十六日夕刊〉
二〇一二年	「LITERATURE 1300 bougies pour le Kojiki」	『ZOOM JAPON』一十三号〈九月〉※バリで発行されているジャバノロジスト向けの新聞。
〃	「絵本で学ぶ吉野」	読売新聞〈一月五日朝刊〉
〃	「後宮文学 火花があげばの？ 天智天皇めぐる女性挽歌に着目」	朝日新聞〈三月十四日夕刊〉
〃	「セミナー―古都に学ぶ 講演「恋の万葉集」・トークセッション「奈良の魅力と楽しみ方」」	日本経済新聞〈三月十八日朝刊〉
〃	「記紀万葉 ソコハカトナク深き奈良の魅力 記紀編纂の意義」	奈良新聞〈三月三十日朝刊〉
〃	「グラフ 古事記は謡う」	『芸術新潮』第六十三巻第六号、新潮社〈六月二十五日〉
〃	「三浦佑之・上野誠「紀行 ヤマト古事記あるき」	『芸術新潮』第六十三巻第六号、新潮社〈六月二十五日〉
〃	「鼎談 日本人にとって挽歌とは何か（特集 挽歌…亡き人を想い歌う）」（山折哲雄、上野誠、水原紫苑）	『短歌』第五十九巻第七号、角川学芸出版〈六月二十五日〉
〃	「万葉集から古代を探る 講演会『日本の始原を問う』」	朝日新聞〈六月六日夕刊〉

二〇二二年	「奈良パークホテル古事記講演とシンポ 齊明天皇の生涯紹介」	奈良新聞〈六月二十三日朝刊〉
〃	「われら大学人 万葉集は言葉の文化財」	教育芸術新聞〈十月三日〉
〃	「ひと 遣唐使のオペラと小説を書いた奈良大教授」	朝日新聞〈十一月三日朝刊〉
二〇二三年	「時を旅する『大人』の楽しみ」	京都新聞〈二月二十一日朝刊〉
〃	「オペラ『猿沢ノ池不思議ノ横笛』一〇〇年会館が制作・上演」	奈良新聞〈二月十七日朝刊〉
〃	「オペラ『魔笛』翻案 猿沢ノ池不思議の横笛―モーツァルト先生に捧ぐ」	『ミセス』六月号、文化出版局〈五月七日〉
〃	『書淫日記』出版で講演」	読売新聞〈八月八日夕刊〉
〃	「薬師寺二十一世紀まほろば塾 国づくり数奇なドラマ」	読売新聞〈十一月六日夕刊〉
〃	「僕の三ツ星私の三ツ星 野菜蒸し鍋 旬彩ひより」	産経新聞〈十一月二十日夕刊〉
〃	「奈良ゾンタクラブ 力沸く慈善講演会 万葉の女子力 ヌギリリ」	奈良日日新聞、二〇一三年十二月十三日、十九日号〈十一月十三日〉
〃	「阿倍仲麻呂の生涯描く『遣唐使阿倍仲麻呂の夢』」	読売新聞〈十二月二日夕刊〉
〃	「万葉文化テーマにオペラ『風の森、風の饗宴』」	京都新聞〈十二月十四日朝刊〉
二〇二四年	「現代の肖像」	『AERA（アエラ）』第二十七巻第六号、朝日新聞出版〈二月十日〉
〃	「公開シンポジウム 日本文学にみる『旅』（基調講演・中西進、パネルディスカッション・辰巳正明、伊藤一彦、小島ゆかり、司会進行・上野誠）」	『文学・語学』第二百八号、全国大学国語国文学会〈三月三十一日〉
〃	「万葉歌から古代の生活を追究 宴会は日本文化の源」	中日新聞〈七月五日夕刊〉
〃	「天声人語」	朝日新聞〈八月四日朝刊〉

〃	「シンポジウム『やまとのまほろば田原本』（寺川眞知夫、上野誠、辰巳和弘、和田萃）」	和田萃編・田原本記紀・万葉事業実行委員会監修『古事記と太安万侶』吉川弘文館〈十一月二十日〉
二〇二五年	「座談会 万葉集と隣接科学」（小川直之、大石泰夫、菊地義裕、上野誠、曹咏梅、司会・辰巳正明）」	『國學院雑誌』第百十六巻第一号、國學院大學〈一月十五日〉
〃	「オペラ『魔笛』翻案 猿沢ノ池不思議の横笛―モーツァルト先生に捧ぐ」	『ミセス』二〇一五年四月号、文化出版局〈三月七日〉
〃	「文学から角栄本まで案内『古典不要論への反撃!? 書評劇場』」	読売新聞〈六月一日夕刊〉
〃	「相手に思いをはせてこそ『さりげなく思いやりが伝わる大和言葉』」	毎日新聞〈七月七日夕刊〉
〃	「思いやり伝わる大和言葉 奈良大教授が解説本『さりげなく思いやりが伝わる大和言葉』」	産経新聞〈七月三十一日朝刊〉
〃	「情を伝える『大和言葉』意味や語源の本を出版『さりげなく思いやりが伝わる大和言葉』」	北海道新聞〈八月十日〉
〃	「大和言葉で人間関係を変える『さりげなく思いやりが伝わる大和言葉』」	日刊ゲンダイ〈八月十一日〉
〃	「なら歳時記 長皇子の歌にゆかり 奈良・佐紀 秋の宴に響いた鹿の声」	毎日新聞〈九月九日朝刊〉
〃	「やんごとなき大和言葉『さりげなく思いやりが伝わる大和言葉』」	読売新聞〈九月九日夕刊〉
〃	「思い合って交わされる『言葉』へのまなざし『さりげなく思いやりが伝わる大和言葉』」	西日本新聞〈九月十二日朝刊〉
〃	「講演会 万葉びとはいかに生きたか―生活の実相をみつめて―」	『窓』第八十七号、日本法律家協会〈九月二十日〉

二〇二五年	「第二十回奈良新聞文化賞」	奈良新聞〈十月二十六日朝刊〉
〃	「マチタビ 奈良町 万葉の新風町家渡る」	読売新聞〈十二月二十六日夕刊〉
二〇二六年	「万葉オペラ・ラボスベシャルコンサート 遣唐使の歴史に思いはせ …」	産経新聞〈二月十一日朝刊〉
〃	「万葉オペラ・ラボ 今秋上演、一部を披露 遣唐使の友情情熱の 歌に」	朝日新聞〈二月十一日朝刊〉
〃	「益田でシンポ 人麻呂石見の財産に」	山陰中央新報〈三月二十七日〉
〃	「上野誠さん講演『万葉びとの筑紫を語る』 先人がたどり着いた 『生の哲学』」	西日本新聞〈六月八日朝刊〉
〃	「大阪市立南高校 国語科 万葉びとを知る」	朝日新聞〈六月二十八日朝刊〉
〃	「近況往来 『万葉オペラ』で名もなき人々を思う」	西日本新聞〈九月三十日朝刊〉
〃	「食の履歴書 古代人の生活映す万葉集 農やおいしき知る歌も」	日本農業新聞〈十二月四日〉
〃	「万葉学者・上野誠さん福岡市で講演『言葉は歴史を背負っている』」	西日本新聞〈十二月十六日朝刊〉
〃	「文学周遊『天平グレート・ジャーニー』」	日本経済新聞〈十二月二十四日夕刊〉
二〇二七年	「第三十六回ラジオオウオーク 野を歩き忘れられない体験を」	毎日新聞〈三月十四日朝刊〉
〃	「宝物の色テーマに研究発表 東大寺金鐘ホールで学術シンポ」	読売新聞〈十一月四日朝刊〉
二〇二八年	「座談会 古典のあり方をめぐって」（川合康三、上野誠、杳掛良彦、 ワンソン・マンケル、司会・河野貴美子）	『國學院雑誌』第百十九卷第二号、國學院大 學〈二月〉
〃	「立命館大学白川静記念東洋文字文化賞『万葉文化論』掲げ研究」	奈良新聞〈五月二十二日朝刊〉
〃	「やまと人模様 万葉集を分かりやすく」	毎日新聞〈六月十二日朝刊〉

〃	「万葉集の素晴らしき中国にも 奈良大の恩師の著書を翻訳・出版」	朝日新聞〈六月二十日朝刊〉
〃	「くらしナビカルチャー たしなみの文化」	毎日新聞〈七月三日朝刊〉
〃	「倉吉で講演 山上憶良 人物像読み解く」	山陰中央新報〈七月十六日朝刊〉
〃	「鼎談 新・三十六歌仙はかくして決まった（特集いまこそ読みたい 新・三十六歌仙やまとうた二〇〇〇年古今オールスターズ決定 戦!）」（上野誠、渡辺泰明、馬場あき子、橋本真里）	『芸術新潮』第六十九卷第九号、新潮社〈九 月二十五日〉
〃	「『知』の現場 万葉集は言葉の文化財」	産経新聞〈十月十四日朝刊〉
〃	「万葉集研究を中国語に 翻訳者特別講義」	朝日新聞〈十月三十日朝刊〉
〃	「翻訳で文化交流の可能性 奈良大 中国の准教授特別講義」	読売新聞〈十月三十日朝刊〉
〃	「折口信夫 静かなブーム」	読売新聞〈十一月四日朝刊〉
〃	「折口信夫 万葉の考察 『折口信夫的思考』」	読売新聞〈十二月十日夕刊〉
二〇一九年	「『やばい』はやばい？ やばくない？」	『家の光』第九十八卷第三号、JAGグループ家 の光協会〈三月一日〉
〃	「新元号令和『言葉の文化財』価値再考を」	京都新聞〈四月八日朝刊〉
〃	「『令和 人間の幸せ表す』奈良大で特別授業」	産経新聞〈四月九日朝刊〉
〃	「文化 歌から読み解く古代の暮らし 『万葉文化論』刊行」	読売新聞〈四月十日朝刊〉
〃	「『令和』で注目万葉集 今に通じる暮らしの苦楽」	中日新聞〈四月十二日朝刊〉
〃	「ほんのレストラン『令和』開幕『万葉集は楽しい』」	読売中高生新聞〈五月三日〉
〃	「座談会『日本文学研究の楽しさ、広さ、深さ』（中西進、川合康三、 野崎歓、司会・上野誠）」	『文学・語学』第三百二十四号、全国大学国語 国文学会〈五月二十日〉

二〇一九年	『令和と大宰府』特別講演	西日本新聞〈六月十四日朝刊〉
〃	「郡山でYMCセミナー 令和の意味、願い解説」	福島民友〈六月二十日〉
〃	「万葉集と正倉院展」	読売新聞〈七月二十九日朝刊〉
〃	「総特集・万葉集を読む 討議1 万葉集はいまどこにあるか―研究の未来と未来の読者―」（上野誠、村田右富実、田中康二）	『現代思想』八月臨時増刊号、第四十七卷第十一号、青土社〈八月十日〉
〃	「HOT INTERVIEW 『体感訳万葉集』」	日刊ゲンダイ〈八月二十八日〉
〃	「一三〇〇年前の日本人の心が伝わる 令和の出典 万葉集の新しい味わい方」	『プレジデント』President』第五十七巻第十七号、プレジデント社〈九月十三日〉
〃	「松坂慶子さんとなら万葉散歩 天平のみやび 見つけた」	読売新聞〈十月九日朝刊〉
〃	シンポジウム「令和」の時代を考える「基調講演 新元号『令和』の希求するもの―万葉の世界―〈五月三十一日〉」	『天地人』自立九州』令和特別号、九州の自立を考える会〈十二月〉
二〇二〇年	『「令和」と『万葉』の心』	『THE ZEN』第七十一号、フジキンソフ株式会社〈八月十八日〉
〃	「弔い方『生者の幸せ』前提」	読売新聞〈五月十一日朝刊〉
〃	「産経書房 万葉学者、墓をしまい母を送る」	産経新聞〈五月十七日朝刊〉
〃	「インタビュ― 書いたのは私です 『万葉学者、墓をしまい母を送る』」	『週刊現代』五月二十三日、三十日号〈五月十八日〉
〃	「神話から読み解く『死の哲学』 万葉学者・上野誠さん祖父や母を看取った体験本に」	朝日新聞〈五月二十日夕刊〉
〃	「小さな『心性の歴史』記す 万葉学者、墓をしまい母を送る」	毎日新聞〈五月二十六日夕刊〉

〃	「編集委員 鵜飼哲夫のああ言えばこう聞く 天平と令和 重なる思い 今こそ読みたい『万葉集』」	読売新聞〈五月二十六日夕刊〉
〃	「私の地図…あの場所へ帰りたい（第四五四回）万葉学者 上野誠」	『週刊現代』七月十八号、講談社〈七月十八日〉
〃	「県歌人クラブ夏季大会 『令和』によせて」	徳島新聞〈七月二十三日朝刊〉
〃	「第五回紙面検証 コロナ報道情報見極め」	読売新聞〈八月四日朝刊〉
〃	「ケアノート 施設転々…母との『旅』」	読売新聞〈八月十二日朝刊〉
〃	「わたしの居場所 墓じまい」	北日本新聞〈九月六日朝刊〉
〃	「現代家族映す『墓じまい』」	毎日新聞〈九月七日夕刊〉
〃	「日本エッセイスト・クラブ賞『万葉学者、墓をしまい母を送る』」	奈良新聞〈九月八日朝刊〉
〃	「一聞百見 ①看取り 葬送 墓じまい」	産経新聞〈九月八日夕刊〉
〃	「一聞百見 ②福岡の商家に生まれ」	産経新聞〈九月九日夕刊〉
〃	「一聞百見 ③60歳これからの目標」	産経新聞〈九月十日夕刊〉
〃	「文化 万葉集『外伝との葛藤』」	読売新聞〈十月十三日夕刊〉
〃	「関西のミカタ 万葉集を体感 格別の環境」	日本経済新聞〈十月十四日夕刊〉
〃	「本と人 『万葉集講義』『令和バブル』の体験超えて」	西日本新聞〈十月二十四日朝刊〉
〃	「今週の本棚 奈良の秋 鼎談 小島ゆかり・池澤夏樹・上野誠」	毎日新聞〈十月三十一日朝刊〉

放送関係 シリーズ出演

一九九八年	毎日カルチャースペシャルラジオウオーク	〈二月十一日（第十七回）〉現在に至るまで連続出演※年一回の恒例イベントに関わるラジオ番組
一九九九年	MBSラジオ「上野誠の万葉歌ごよみ」	〈現在に至るまで一〇〇〇回を越えて継続中〉
二〇〇二年	NHK総合「万葉紀行」	〈十月二日～二〇〇四年十一月二十五日〉
二〇〇四年	NHKラジオ第2「私の日本語辞典 私のなかの万葉集」	全四回〈四月四日～四月二十五日〉
〃	NHK総合ならナビ企画「やまと路 万葉紀行」	〈四月七日～二〇〇六年三月二十七日〉
二〇〇七年	NHKラジオ第2「ここをよむ 万葉びととの対話」	全十三回〈十月七日～十二月三十日〉
〃	NHKラジオ第1「関西発ラジオ深夜便 ないとエッセー」	〈十一月二日～二〇一四年四月十八日の期間に十九回ほど担当〉
二〇〇八年	NHK教育「知るを楽しむ 歴史に好奇心 万葉びとに恋愛を学ぶ」	全4回〈十一月六日～十二月二十七日〉
二〇一一年	NHKラジオ第2「古典講読 万葉集、魂の宿ることば」	全五十二回〈四月二日～二〇二二年三月三十一日〉
二〇二〇年	NHKラジオ第2「カルチャーラジオ 文学の世界体感する万葉集」	全十二回〈一月九日～三月二十六日〉

放送関係 個別番組出演

二〇〇二年	NHKラジオ第2「文化講演会 現代に響く万葉びとのこころ」	〈六月九日〉
二〇〇三年	NHKラジオ第2「文化講演会 旅人のホンネ、家持のタチマエ」	〈十月十二日〉

二〇〇六年	NHKラジオ第2「文化講演会 万葉集は言葉の文化財」	〈十月一日〉
二〇〇七年	NHK教育「美の壺 春特集 奈良・大和路」	〈五月四日〉
二〇一〇年	NHK教育「NHK短歌 題『顔』／女たちの花の華麗さ」	〈四月二十五日〉
〃	NHK教育「この時代の宗教・人生／天平の言霊をみつめて」	〈六月十三日〉
〃	NHKBS2「平城遷都1300年中継 あなたの知らない奈良／美と風景と生き方の再発見物語」	〈十月十七日〉
〃	NHKBS2「あなたの知らない奈良 総集編」	〈十二月五日〉
二〇一四年	NHK総合「視点・論点 『宴会』ニッポンの原点」	〈六月十九日〉
〃	NHKラジオ第2「文化講演会」『日本文学史上の吉野』	〈九月二十八日〉
〃	NHK教育「NHK短歌 題『行く』」	〈十二月七日〉
二〇一五年	NHK総合「世界遺産ドリームツアー！ 外国人が驚く！ 古都奈良&京都」	〈一月二日〉
〃	NHK総合「視点・論点 小さき神々の国」	〈四月六日〉
〃	NHK教育「この時代の宗教・人生／『聖典』として読む万葉集」	〈五月二十四日〉
〃	NHKラジオ第1「関西発ラジオ深夜便 明日へことば『聖典』として読む万葉集」	〈六月六日〉
〃	NHK総合「特集番組 白鳳―仏教美術の青春時代―」	〈八月二十二日〉
〃	NHKBSプレミアム「英雄たちの選択 東アジアの懸け橋 遣唐使・阿倍仲麻呂の実像」	〈十一月五日〉

二〇一五年	NHKラジオ第2「文化講演会 三輪山 巨大な神座」	〈十一月二十二日〉
二〇一六年	NHK総合「視点・論点 愚かなる人、憶良」	〈五月十六日〉
二〇一七年	NHK総合「阿修羅 1300年の新事実」	〈三月二十三日〉
〃	BSプレミアム「スピリチュアル・プレイス 奈良『三輪』」	〈九月二十八日〉
二〇一八年	NHK総合「視点・論点 万葉人の赤いスカート」	〈二月十二日〉
二〇一九年	RKB毎日放送「JNN九州沖縄ドキュメント ムーブ 古代を学び、未来へつなぐ万葉学者・上野誠」	〈三月二十四日〉
〃	NHK教育「視点・論点 万葉集から読み解く『令和』」	〈四月十五日〉
〃	BS・TBS「につぼん! 歴史鑑定『万葉集が伝える本当の古代史』」	〈五月二十七日〉
〃	BSプレミアム「英雄たちの選択 そして万葉集が生まれた 大伴家持が残した日本人の心」	〈七月三十一日〉
〃	NHKラジオ第2「カルチャーラジオ 日曜カルチャー 人間を考える 新しい時代に、今、伝えたいこと(1)」	〈九月一日〉
〃	NHKラジオ第2「文化講演会 万葉びとの朝」	〈十一月二十四日〉
二〇二〇年	NHKラジオ第1「ラジオ深夜便 明日へのことば」	〈九月十七日〉
〃	NHKラジオ第2「文化講演会 いのちの古典学」	〈九月二十七日〉
二〇二二年	NHK教育「介護百人一首 二〇二〇冬」	〈一月十九、二十日〉

新聞・雑誌・パンフレット連載記事

一九九五年	「学者修行覚え書」	全十一回、奈良新聞〈四月十四日朝刊〉 一九九六年三月八日朝刊
一九九八年	「潮音風声」	読売新聞〈十一月二十七日夕刊〉十二月十日夕刊
二〇一〇年	「万葉集の楽しみ」	全四回、日本経済新聞〈六月三日夕刊〉六月二十四日夕刊
二〇一五年	「ほとけを旅する」第一期	全二十五回、『週刊新潮』二〇一五年第十八号 〜第四十二号、新潮社〈四月二十八日〉十月二十八日
〃	「匠の美」	全十二回、朝日新聞〈六月二十七日朝刊〉九月十九日朝刊
二〇一六年	「ほとけを旅する」第二期	全二十五回、『週刊新潮』二〇一六年第十八号 〜第四十二号、新潮社〈四月二十七日〉十月二十七日
〃	「日本の美しいことば―万葉言葉塾―」	全二十四回、月刊『書写書道』日本武道館〈四月〜二〇一八年三月〉
〃	「上野誠の放心録」	週刊『世界と日本』〈九月五日〉連載中
二〇一八年	「やまと恋物語〜万葉抄〜」	全二十四回+「連載を終えて」、読売新聞〈九月四日〜二〇一九年八月二十一日〉
二〇一九年	「海を越えた記憶 『日本書紀』千三百年に寄せて」	全十回、『月刊 日本教育』公益社団法人日本教育会〈五月一日〜二〇二〇年三月一日〉
〃	「今、令和の時代に万葉を語る(一)〜(三)」	全三回、『正筆』八月号〜十月号、第八十八巻 第千四十号〜第八十八巻第千四十二号、正筆会〈八月一日〜十月一日〉

二〇一九年	「万葉集を学ぶ」	全九回、『東商新聞』八月二十日号（第二千三百三十九号）～二〇二二年二月二十日号（第二二六六号）、東京商工会議所（八月二十日～二〇二二年二月二十日）
〃	「みじかすぎるうた」	全十二回、『角川短歌』第六十七卷第一号～第六十七卷第十二号、角川文化振興財団（十二月二十五日～二〇二〇年十一月二十五日）

新聞・雑誌・パンフレット寄稿記事

一九八五年	古典と民俗学の会編『奄美大和村の年中行事（古典と民俗学叢書9）』	分担執筆、古典と民俗学の会（十一月十五日）
一九八六年	静岡県天竜市教育委員会編『懐山のおくない（国選択無形民俗文化財記録保存報告）』	分担執筆、天竜市教育委員会（三月三十一日）
一九八八年	桜井満・菊地義裕編『大和神社の祭りと伝承（古典と民俗学叢書11）』	分担執筆、桜楓社（四月一日）
〃	「刊行のことば」	『共同生活と人間形成』第二号、和敬塾教育文化研究所（十一月三十日）
〃	「ケーススタディー『新入塾生の退塾』——コミュニケーションギャップを中心として——」	『共同生活と人間形成』第二号、和敬塾教育文化研究所（十一月三十日）
一九八九年	静岡県教育委員会文化課県市史編さん室編『横地の民俗——小笠郡菊川町——（静岡県史民俗調査報告書第七集）』	分担執筆、静岡県（三月三十一日）
〃	「昆虫の民俗——虫を食べる、虫を送る——」	『静岡の文化』十八号、静岡県文化財団（五月一日）

〃	「第一回シンポジウムを終えて——司会者から」	『共同生活と人間形成』第二号、和敬塾教育文化研究所（九月二十日）
〃	「鈴木道子著『奥三河・花祭と神楽（神の詞・人の声）』」	『芸能』第三十一巻第十号、芸能学会（十月十日）
〃	「第四章 信仰と儀礼 第二節 民俗芸能」	袖ヶ浦町民俗文化財調査会編『袖ヶ浦町民俗文化調査報告書4 中川・富岡地区の民俗』袖ヶ浦町教育委員会（十一月三十日）
一九九一年	静岡県教育委員会文化課県市史編さん室編『田代・小河内の民俗——静岡市井川——（静岡県史民俗調査報告書第十四集）』	分担執筆、静岡県（三月三十日）
〃	「第四章 信仰と行事 第二節 神事と祭礼」袖ヶ浦町民俗文化財調査会編『袖ヶ浦町民俗文化調査報告書5 平岡地区の民俗』	袖ヶ浦町教育委員会（三月三十一日）
一九九二年	「《総括・展望》フォーラム 久高島は、今——その本質と変容など——」	『古典と民俗学』第十六号、古典と民俗学の会（三月二日）
〃	「書評 桜井満著『万葉びとの世界——民俗と文化——』」	『國學院雑誌』第九十三巻第六号、國學院大學（八月十五日）
一九九三年	「新任の挨拶にかえて——最初から尾籠な話ですが……」	『研究室だより』第十一号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十九日）
〃	「書評 宮田登著『日和見——日本王権論の試み——』」	『民俗文化』第五号、近畿大学民俗学研究所（三月二十五日）
〃	「シンポジウムを終えて——反省・課題・展望——」	『民俗芸能研究』第十八号、民俗芸能学会（十一月十五日）
一九九四年	「奈良大学の魅力——学びに遊び、遊びに学べ——」	『研究室だより』第十二号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十九日）
〃	「文化 ルーツ追究に潜む危険性——すれ違いと空振りに学ぶ——上」	奈良新聞（八月二十六日朝刊）
〃	「文化 研究者の視点の違いと認識——すれ違いと空振りに学ぶ——下」	奈良新聞（八月三十日朝刊）

一九九五年	「薬師寺花会式のオニ」「念仏寺の鬼走りのオニ」「金峯山寺花供懺法会のオニ」	『日本「鬼」総覧（歴史読本特別増刊・事典シリーズ（第二十三号）』新人物往来社（一月五日）
〃	「私の卒業論文 やはり、これは『アカン』」	『研究室だより』第十三号、奈良大学文学部国文学研究室（三月二十日）
〃	「飛鳥の自然神を歩く」	『歴史読本 古代ミステリーツアー』十月特別増刊、第四十巻第二十号、新人物往来社（十月七日）※本書は二〇一〇年に『日本の古代史ミステリー 謎解き散歩』新人物往来社（八月十四日）として改題・再編集されて刊行されている。
一九九六年	小野寛、桜井満編『上代文学研究事典』	分担執筆、おうふう（五月二十五日）
〃	「八十三キロ・三十五歳の『真実』」	『季刊ウォーク万葉』第四十七号、クリエイト大阪（七月二十五日）
〃	「大和の年中行事」	入江泰吉『入江泰吉の大和路5 祭と歳時記』小学館（十一月二十日）
一九九七年	「やさしいが、こわい先生」	『古典と民俗学』第二十号、古典と民俗学の会（三月二日）
〃	「氏子地区の諸相・神社を支えるさまざまな組織・甲子講・家々の行事と季節の祭り」	『小國神社誌おうふう・小國神社（四月十八日）』
〃	大林太良、吉田敦彦監修『日本神話事典』	分担執筆、大和書房（六月二十日）
〃	「平成八年（自一月～至十二月）国語国文学界の展望（Ⅰ）上代 万葉・第三期」	『文学・語学』第百五十六号、全国大学国語国文学会（十月十三日）
〃	加藤隆久編『神葬祭大事典』	分担執筆、戎光祥出版（十一月一日）

一九九八年	「非業の死者の語りと王権―崇りと祭祀の円環的構造―」	『国文学 解釈と鑑賞』第六十三巻三号、至文堂（三月一日）
〃	「橋本裕之著『王の舞の民俗学的研究』」	『日本文学』第四十七巻第三号、日本文学協会（三月十日）
〃	「付録十五 ふるきやまとまひのうた」	『本田安次著作集第十五巻 日本の傳統藝能』錦正社（四月）
一九九九年	「書評 中原ゆかり著『奄美の『シマの歌』を読んで』」	『日本文学』第四十八巻第一号、日本文学協会（二月十日）
二〇〇〇年	「国内研修を終えて」	『研究室だより』第十八号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十五日）
〃	松尾光編『万葉集一〇一の謎』	分担執筆、新人物往来社（十月十五日）※本書は、二〇一一年に松尾光編『古代史がわかる『万葉集』の読み方』新人物往来社（一月九日）として改題・再編集し、刊行されている。
〃	「故郷への旅―『宅』と『庄』と―」	『まほら』第二十二号、旅の文化研究所（一月一日）
〃	万葉情報システム調査会（坂本信幸・上野誠・西端幸雄・鈴木榮一）「万葉集を中心にした上代文学データベースの構想とその現状」	『日本語研究センター報告』第八号、大阪樟蔭女子大学日本語研究センター（三月三十一日）
〃	「采女の袖吹きかへす明日香風」	『明日香風』第七十五号、飛鳥保存財団（七月一日）
〃	「万葉研究と民俗学の結婚―光と影と―」	『歴博』第百一号所収、国立歴史民俗博物館（七月二十日）
〃	「白い喪服の古代学（一）」	『明日香風』第七十六号、飛鳥保存財団（十月一日）

二〇〇〇年	フォーラム資料「平城の都・万葉集から」「采女の袖吹きかへす明日香風」(季刊 明日香風)第七十五号二〇〇〇年 飛鳥保存財団「	『奈良市立』条高等学校人文科学コース第六回市民公開フォーラム「卑弥呼・豪族と大和朝廷の時代から平城の都へ」奈良市立一条高等学校人文科学コース(十月七日)
〃	「車持千年養老七年吉野行幸歌」	神野志隆光編『セミナー万葉の歌人と作品』和泉書院(十二月二十五日)
二〇〇一年	「白い喪服の古代学(二)」	『明日香風』第七十七号、飛鳥保存財団(一月一日)
〃	「棚橋昭夫『けったいな人びと―ホンマモンの芸と人―』をよんで」	『研究室だより』第十九号、奈良大学文学部国文学研究室(三月十五日)
〃	「白い喪服の古代学(三)」	『明日香風』第七十八号、飛鳥保存財団(四月一日)
〃	「青木周平著『古代文学の歌と説話』」	『国文学』第四十六巻第五号、學燈社(四月十日)
〃	「万葉びとの喜怒哀楽(一)」	『明日香風』第七十九号、飛鳥保存財団(七月一日)
〃	青木生子、橋本達雄監修『万葉ことば事典』	分担執筆、大和書房(十月十日)
〃	奈良県、平城遷都一三〇〇年記念二〇一〇年委員会編、樋口隆康ほか監修『平城京 その歴史と文化』	分担執筆、小学館(十二月十日)
二〇〇二年	「たまげた話」	『クレオ大阪東・奈良大学社会学部 おもしろ文化講座 女性・環境・文化を考える―古今東西総ざらい―』奈良大学社会学部(三月)
〃	「想像力は大切だ!」	『クレオ大阪東・奈良大学社会学部 おもしろ文化講座 女性・環境・文化を考える―古今東西総ざらい―』奈良大学社会学部(三月)

〃	「インパクで賞をとりました!―奈良発、研究の森―」	『研究室だより』第二十号、奈良大学文学部国文学研究室(三月十五日)
〃	「飛鳥の観光政策に関する若干の提言―歴史的文化的資源のワイズユースという観点から―」	『奈良大学総合研究所特別研究成果報告書』、奈良大学(三月二十日)
〃	「万葉びとの喜怒哀楽(二)」	『明日香風』第八十二号、飛鳥保存財団(一月一日)
〃	「万葉びとの喜怒哀楽(三)」	『明日香風』第八十二号、飛鳥保存財団(四月一日)
〃	「万葉びとの喜怒哀楽(四)」	『明日香風』第八十三号、飛鳥保存財団(七月一日)
〃	「万葉びとの喜怒哀楽(五)」	『明日香風』第八十四号、飛鳥保存財団(十月一日)
〃	「リレー連載 世界遺産奈良文学散歩1 春日野に遊ぶ」	『Ingen2』第六号、共同精版印刷株式会社(十月一日)
二〇〇三年	「万葉びとの愛娘(上)」	『明日香風』第八十五号、飛鳥保存財団(一月一日)
〃	「しきしまの大和こころは恋の道―その見どころ―」	パンフレット『第二十二回朝日カルチャースペシャル 邪馬台国の道ラジオウオーク―卑弥呼と人麻呂の浪漫を求めて―』毎日新聞社・毎日放送(二月十一日)
〃	「奈良盆地にみる祭祀空間―奈良盆地を中心に―」	『総合研究所報』第十一号、奈良大学総合研究所(三月一日)
〃	「和歌表現にみる生活空間―奈良盆地を中心に―」	『総合研究所報』第十一号、奈良大学総合研究所(三月一日)

”	「万葉の飛鳥―甘樫丘の夕陽と、飛鳥川の恋と―」	『別冊太陽 飛鳥 古代への旅』平凡社（十一月二十五日）
”	「万葉恋歌新訳抄（上）」	『明日香風』第九十六号、飛鳥保存財団（十月一日）
”	「田辺福麻呂秀歌鑑賞」	分担執筆、中西進編『笠金村・高橋虫麻呂・田辺福麻呂 人と作品』おうふう（九月二十五日）
”	「高市黒人秀歌鑑賞」	分担執筆、中西進編『高市黒人・山部赤人 人と作品』おうふう（九月二十五日）
”	「笠郎女秀歌鑑賞」	分担執筆、中西進編『女流歌人（額田王・笠郎女・茅上娘子） 人と作品』おうふう（九月二十五日）
”	「君が目の 恋しきからに（下）」	『明日香風』第九十五号、飛鳥保存財団（七月一日）
”	「万葉おもしろ主義で」	朝日新聞（七月七日夕刊）
”	「紹介『渡瀬昌忠著作集』八巻・補巻一」	『萬葉』第百九十二号、萬葉学会（四月三十日）
”	「君が目の 恋しきからに（上）」	『萬葉』第百九十二号、萬葉学会（四月三十日）
”	「日本民俗学の研究領域拡大―新しい共同研究の前提―」	『明日香風』第九十四号、飛鳥保存財団（四月一日）
”	「特別講義 人気落語家桂ざこば師匠の国文科特別講義」	『研究室だより』第二十三号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十五日）

二〇〇三年	「『奈良大学、ここにあり』の精神」	『研究室だより』第二十一号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十五日）
”	「平城京生活者の三輪山―泊瀬川のほとりから―」	上野誠・門脇慎二・田稔・塚口義信・和田萃『三輪山の古代史』学生社（三月三十日）
”	「万葉びとの愛娘（下）」	『明日香風』第八十六号、飛鳥保存財団（四月一日）
”	「万葉の父と母」	『明日香風』第八十七号、飛鳥保存財団（七月一日）
二〇〇四年	「万葉びとの歌まなび（上）」	『明日香風』第八十九号、飛鳥保存財団（一月一日）
”	「書評 保坂達雄著『神と巫女の古代伝承論』」	『日本民俗学』第二百三十七号、日本文学協会（二月二十九日）
”	「一枚の絵から、わが非才を恥ず」	『研究室だより』第二十二号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十五日）
”	「〈学史〉 松前健の神話学」	『古代文化』第五十六巻第三号、古代学協会（三月二十日）
”	「万葉びとの稲作―心意伝承を垣間見るために―」	『朱』第四十七号所収、伏見稲荷大社（三月六日）
”	「万葉びとの歌まなび（下）」	『明日香風』第九十号、飛鳥保存財団（四月一日）
”	「古代洗濯物語」	『明日香風』第九十二号、飛鳥保存財団（十月一日）
二〇〇五年	「アナタの目を見たい…」	パンフレット『第二十四回毎日カルチャースペシャル飛鳥川・甘樫丘ラジオウォーク―幻の飛鳥美人・天翔る朱雀は？―』毎日新聞社・毎日放送（二月十一日）

二〇〇五年 フォーラム資料「万葉びとのラブレター!？」

二〇〇六年 「万葉恋歌新訳抄（中）」

上田正昭監修『日本古代史大辞典』

「左手の奥の手―『万葉集』巻九の一七六六番歌」

「万葉を生き抜いた男―中臣清麻呂のこと―」

「奈良大学研究助成概要報告 万葉文化論の展開」

「解説 二つの故郷と地図の空白と」

「特別寄稿 出前講義を聴いて」

「万葉恋歌新訳抄（下）」

「いにしへのふみをよむ」

二〇〇七年 「難波京・奈良往還 花に嵐を歌う」

「万葉集のまどころ、自画自賛」

「万葉集と遊ぶ―随想つれづれ― 博多、母、そして『万葉集』」

『奈良市立一条高等学校人文科学コース第十回市民公開フォーラム「薫いたつ平城の都と万葉の華」』奈良市立一条高等学校人文科学コース（十二月十日）

『明日香風』第九十七号、飛鳥保存財団（一月一日）

分担執筆、大和書房（二月三十日）

『別冊国文学』第六十号、學燈社（二月二十日）

『こよう』第二十八号、向陽台高等学校（二月一日）

『総合研究所所報』第十四号、奈良大学総合研究所（三月一日）

堀内民一『大和万葉旅行』講談社（三月十日）

『研究室だより』第二十四号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十五日）

『明日香風』第九十八号、飛鳥保存財団（四月一日）

『明日香風』第九十九号、飛鳥保存財団（七月一日）

パンフレット『第二十六回朝日カルチャースペシャル斑鳩・聖徳太子の道ラジオウォーク―世界文化遺産の郷をたずねて―』毎日新聞社・毎日放送（二月十二日）

『明日香風』第一百二号、飛鳥保存財団（四月一日）

産経新聞（五月十四日）

二〇〇八年 「飛鳥百景『折口信夫『口ぶえ』の大和三山』」

「飛鳥の道標『飛鳥坐神社のいしぶみ』」

「最期まで問いを出し続ける人・折口信夫」

「万葉古代学における比較研究の覚書（万葉古代学研究所第二回主宰共同研究報告）」

「書評 高松寿夫著『上代和歌史の研究』との対話」

「モノとモノガタリとウタと―万葉集研究からの話題提供（モノとモノノケとモノガタリ）―」

「大和三山研究余滴―山はどこから見るのがよいか―」

「万葉びとに恋愛を学ぶ（十一月）」

「折口信夫と天子非即神論」

「飛鳥の道標『飛鳥坐神社の折口信夫の歌碑』」

二〇〇九年 「身体感覚の古代学」

「折節の記 娼婦に語りかける折口信夫」

「律令官人の送別宴―饞酒について―」

「書評 石井正己『民俗学と現代』 研究余滴と書評集―批評を通じた対話のために―」

『週刊読書人』（三月六日）

『正論』第四百四十二号、産経新聞社（一月一日）
『食文化誌ヴェスタ』第七十三号、味の素食の文化センター（二月十日）

『東アジアの古代文化』第三百三十七号、大和書房（二月十五日）

『NHK知るを楽しむ 歴史に好奇心』日本放送出版協会（九月二十五日）

『明日香風』第百八号、飛鳥保存財団（十月一日）

『明日香風』第百八号、飛鳥保存財団（十月一日）

『モノ学・感覚価値研究』第二号、モノ学・感覚価値研究会（三月三十一日）

『国文学研究』第五百五十三・五百五十四集合併号、早稲田大学国文学会（三月十五日）

『研究室だより』第二十六号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十五日）

『万葉古代学研究所年報』第六号、奈良県立万葉文化振興財団万葉古代学研究所（三月二十日）

『明日香風』第百五号、飛鳥保存財団（一月一日）
『明日香風』第百五号、飛鳥保存財団（一月一日）

二〇〇九年	「本居宣長『菅笠日記』の大和三山」	『明日香風』第百十号、飛鳥保存財団（四月一日）
〃	「万葉集を読み、歩くための特集です！」	『明日香風』第百十一号、飛鳥保存財団（七月一日）
〃	「飛鳥の道標『をか寺まいりに』」	『明日香風』第百十二号、飛鳥保存財団（七月一日）
〃	「正倉院展、皇室の名宝展に寄せて『今』『自分』と繋がる宝物」	読売新聞（十月三十日朝刊）
〃	「平城遷都一三〇〇年記念企画 わたしの好きな万葉集」	毎日新聞（十一月二十九日朝刊）
〃	「鑑真渡来はいかにして千年物語となったか」	『芸術新潮』第六十巻第十二号、新潮社（十一月二十五日）
二〇一〇年	「新年の抱負―『抱負』というにはお粗末だが……」	『院友会報（新年号）』國學院大學（一月一日）
〃	「万葉びとの歩いた都大路」	『別冊太陽 平城京』平凡社（二月十五日）
〃	「遷都に理由なし！」	パンフレット『第二十九回毎日カルチャースペシャル絲網之道終着の都ラジオウォーク―咲く花の天平の演出者たち―』毎日新聞社・毎日放送（二月十一日）
〃	「高橋是清の放蕩」	『研究室だより』第二十八号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十五日）
〃	「私の平城遷都一三〇〇年祭 オペラ『阿倍仲麻呂』」	産経新聞（三月二十日夕刊）
〃	「時代を彩った万葉歌人」	『芸術新潮』第六十一巻第四号、新潮社（四月二十五日）
〃	「遷都が語る万葉、ころ」	『芸術新潮』第六十一巻第四号、新潮社（四月二十五日）
〃	「平城新都讃歌を読む」	『明日香風』第百十四号、飛鳥保存財団（四月一日）

〃	「数奇の遣唐使・平群広成①②」	読売新聞（四月二十二日夕刊および四月二十七日夕刊）
〃	「鑑真物語」の力」	『歴史読本』第五十五巻第六号、新人物往来社（六月一日）
〃	「甘樫丘の佐藤榮作首相」	『明日香風』第百十五号、飛鳥保存財団（七月一日）
〃	「猪股ときわ著『古代宮廷の知と遊戯―神話・物語・万葉歌―』の問いかけもの」	『日本文学』第五十九巻第九号、日本文学協会（九月十日）
〃	シンポジウム「平城京研究と木簡研究の最前線」を終えて」	『上代文学』第百五号所収、上代文学会（十一月三十日）
〃	「万葉歌木簡と万葉集研究」（馬場南遺跡が語るもの）シンポジウム記録）	上田正昭監修・（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター編『天平びとの華と祈り―謎の神雄寺―』所収柳原出版（十二月二十四日）
〃	「わたしの古都 私が飛鳥を語るなら」	『季刊 古都』第六十八号、古都飛鳥保存財団（十二月二十五日）
二〇一二年	「歴史都市・奈良の歓声―万葉集は、ことばの文化財―」	『日本教育会叢書』第三十七集、日本教育会（三月一日）
〃	「教員エッセイ『日本国憲法』前文の文体」	『研究室だより』第二十九号、奈良大学文学部国文学研究室（三月十五日）
〃	「万葉びとの小さな旅（万葉古代学研究所第三回主宰共同研究報告）」	『万葉古代学研究所年報』第九号、奈良県立万葉文化振興財団万葉古代学研究所（三月十七日）
〃	「伝説の万葉歌人 柿本人麻呂―人麻呂伝承―」	『別冊太陽 万葉集入門（神野志隆光監修）』平凡社（四月二十五日）
〃	「二万葉学徒の見た映画『朱花の月』」	『朱花の月 公式プログラム』合同会社東風（九月三日）

二〇二二年	「國文学は瑣末な学問である」	出版ダイジェスト〈十月一日〉
〃	「唐物と虚栄心の心の話をしよう!」	『アジア遊学』第百四十七号、勉誠出版〈十一月〉
二〇二二年	「辞世の歌に万葉人の『記憶』」	読売新聞〈二月十一日朝刊〉
〃	「研究助成概要報告」折口信夫『生き口を問ふ女』と大阪言葉』の概要」	『総合研究所所報』第二十巻、奈良大学総合研究所〈三月一日〉
〃	「教員エッセイ 私は情けない男です!」	『研究室だより』第三十号、奈良大学文学部国文学研究室〈三月十五日〉
〃	「賜死・大津皇子の歌と詩―磐余池候補地の発掘に寄せて―」	『季刊 明日香風』第百二十三号所収、古都飛鳥保存財団〈七月一日〉
〃	「山上憶良の『子等を思ふ歌』―我迷うゆえに、我あり―」	『文 MON NEXT』第百四号、公文教育研究会〈七月十日〉
〃	「空想書店―さあ、奈良へ飛鳥へ大和へ―」	読売新聞〈九月九日朝刊〉
二〇二三年	「飛鳥から、柿本人麻呂と山部赤人の歌々を読む」	『明日香風』第百一十五号、飛鳥保存財団〈二月一日〉
〃	「主任の言葉」	『研究室だより』第三十一号、奈良大学文学部国文学研究室〈三月十五日〉
〃	「教員エッセイ 書淫 [・] 日記の由来 ^{いわれ} 」	『研究室だより』第三十一号、奈良大学文学部国文学研究室〈三月十五日〉
〃	「現代のことば 阿倍仲麻呂」	京都新聞〈七月五日夕刊〉
〃	「知りたいと思う心、三輪の糸」	パンフレット『公益財団法人文楽協会創立五十周年記念 竹本義太夫三百回忌 夏休み特別公演』(七月二十日)八月五日公演〈七月二十日〉
〃	「現代のことば 古代の神と天皇」	京都新聞〈九月二日夕刊〉

〃	「現代のことば 教師について」	京都新聞〈十一月六日夕刊〉
二〇二四年	「奈良大学国文学科のひととせ」	『研究室だより』第三十二号、奈良大学文学部国文学研究室〈三月十五日〉
〃	「試験地獄・無間地獄」	『群像』第百六十九巻第七号、講談社〈六月七日〉
〃	「現代のことば 学問の東西」	京都新聞〈二月二十日夕刊〉
〃	「現代のことば 試験の季節に」	京都新聞〈二月二十四日夕刊〉
〃	「第四回万葉文化館主宰共同研究 故郷・飛鳥の形成」	『万葉古代学研究年報』第十二号、奈良県立万葉文化振興財団万葉古代学研究所〈三月十八日〉
〃	「シンポジウムを終えて」	『文学・語学』第百八号、全国大学国語国文学会〈三月三十一日〉
〃	「大和と世界帝国を結んだ遣唐使、随想風に」	『季刊 明日香風』第百三十号、古都飛鳥保存財団〈四月一日〉
〃	「味の私記 パワフル牛重 英五さんの面影」	読売新聞〈四月二十一日夕刊〉
〃	「特集読み物 中央に反旗を翻した一豪族にまつわる異伝 筑紫君磐井の墓と、その語り」	『歴史読本』第五十九巻第四号、KADOKAWA〈四月二十四日〉
〃	「現代のことば 急所は何か?」	京都新聞〈五月十三日夕刊〉
〃	「書評 村上桃子『古事記の構想と神話論的主題』の問いかけもの」	『萬葉』第百二十七号、萬葉学会〈五月三十一日〉
〃	「新釈漢文大系 継承すべき知の遺産」	読売新聞〈七月六日朝刊〉
〃	「随筆喫茶 宴の終わる時――」	西日本新聞〈七月十九日朝刊〉
二〇二五年	「総論 神と自然の古代学」	『明日香風』第百三十三号、飛鳥保存財団〈二月一日〉

二〇一五年	「君たちは未来から来た留学生である」	『研究室だより』第三十三号、奈良大学 部国文学研究室〈三月十五日〉
〃	「休刊に向けて」	『明日香風』第百三十四号、飛鳥保存財団〈三 月二十六日〉
〃	「書評 保坂達雄著『神話の生成と折口学の射程』」	『日本文学』第六十四巻第六号、日本文学協 会〈六月十日〉
〃	「万葉人 盤上の興奮」	読売新聞〈六月二十二日夕刊〉
〃	「『思い入れ』と『思い込み』」	『国語研究つくし野』三十八号、福岡県高等学 校国語部会福岡地区〈六月二十六日〉
〃	「今、なぜ『発見・検証 日本の古代』なのか？―何がわからないのか、 わかるというこゝと―（徹底討論古代史シンポジウム発見・検証日本 の古代（第一回）開催報告 邪馬台国とヤマト王権をどう考えるか）」	『本の旅人 = Travelers of the books』第 二十一巻第七号、角川書店〈六月二十七日〉
〃	「万葉集は言葉の文化財」	週刊『世界と日本』第二千五百六十六号、内外ニュー ス〈七月六日〉
〃	「コラム 白鳳という時代―万葉学徒妄説―」	奈良国立博物館編『図録 開館二〇年記念 特別展 白鳳―花ひらく仏教美術―』奈良国 立博物館、読売新聞社、NHKブラネット近 畿〈七月十八日〉
〃	「お金が阿弥陀に光ります」	『かまくら春秋』第五百四十六号、かまくら春 秋社〈十月一日〉
〃	「万葉びとの稲刈り」	週刊『世界と日本』第二千六百四十四号、内外ニュー ス〈十一月二日〉
〃	「漢字を飼い慣らす知性―日本人的知識人の誕生―」	『アステイオン』第八十三号、阪急コミュニケーションズ 〈十一月二十五日〉
〃	「谷崎潤一郎先生の柿の葉縮談義」	『芸術新潮』十一月号、新潮社〈十二月二十五日〉

〃	「交遊抄 座右の2著」	日本経済新聞〈十二月二十二日朝刊〉
二〇一六年	「書評 笑いの深みは…… 品田悦一編『鬼酩房先生かく語りき』」	『三田文学』第三期第九十五巻第二百二十四号、 三田文学会〈一月十日〉
〃	「日本人の聖地観―いつでも、どこでも」	『宗教と現代がわかる本2016』平凡社〈三 月〉
〃	「パリの豆スープ、スーダン風」	『新世』平成二十八年四月号、倫理研究所〈三 月一日〉
〃	「国文学科の一年」	『研究室だより』第三十四号、奈良大学文学 部国文学研究室〈三月十五日〉
〃	「教員インタビュー 高校生の取材を受けました」	『研究室だより』第三十四号、奈良大学文学 部国文学研究室〈三月十五日〉
〃	「あまい話、せつない話」	『よむカステラ』第二十二号、松翁軒〈五月〉
〃	「週刊読書日記 助けられる側にも心がある」	日刊ゲンダイ〈三月八日〉
〃	「上田正昭さんを悼む 時と競り『渡来人』集大成」	朝日新聞〈三月二十四日朝刊〉
〃	「岩波書店『文学』休刊に寄せて」	読売新聞〈四月五日朝刊〉
〃	「書評 今野真二『ことばあそびの歴史』 笑いながら読める言語遊 戯」	新潟日報〈七月三十一日〉
〃	「『浮標』と万葉歌と」	葛河思潮社第五回公演『浮標』パンフレット〈八 月四日〜九月二日公演〉
〃	「解説」すすき大和文・絵、上野誠解説	『天の原 ふりさけみれば―日本と中国を結 んだ遣唐使・阿倍仲麻呂―』出版ワークス〈九 月三十日〉
〃	「神々を選んだ山上憶良―遣唐使と神―」	『現代思想』第四十五巻第二号、青土社〈十二 月二十八日〉

二〇一七年	「書く心、掲げる心——万葉学徒の迷妄から——」	『正筆』第八十六巻第千十八号、正筆会（十月一日）
〃	「ただ今、論争中！」	『ちくま』第五百五十五号、筑摩書房（六月一日）
〃	「東アジアへ、オペラ発進」	週刊『世界と日本』内外ニュース（二月一日）
〃	「薬師寺村上太胤管主就任特集　ひとすじの道」	奈良新聞（一月三十日朝刊）
〃	「神楽と神歌（第一部みやざきの神楽の概要　みやざきの神楽の周辺）」	みやざきの神楽魅力発信委員会編『みやざきの神楽ガイド―その歴史と特色―』宮崎県教育庁文化財課（三月）
〃	「緑風エッセイ　博多、母の商法」	週刊『世界と日本』第千二百六号、内外ニュース（八月一日）
〃	「著書語る『筑紫万葉恋ひこころ』」	『書標　ほんのしるべ』第四百六十七号、丸善ジュンク堂書店（十月五日）
二〇一八年	「マレビトの話した方言」	『よむカステラ』第二十四号、松翁軒（五月）
〃	「『古典を読む』ということ」	週刊『世界と日本』第千二百十六号、内外ニュース（一月一日）
〃	「白川静博士と『万葉集』」	週刊『世界と日本』第千二百二十八号、内外ニュース（七月一日）
〃	「百人一首を味わう【四二】——み吉野の山の秋風さよふけてふるさと寒く衣うつなり　参議雅経——」	『日本語学』第三十七巻第七号、明治書院（七月十日）
〃	「歌のとおり　川近くの吉野離宮」	朝日新聞（五月十六日夕刊）
〃	「はい、ご湯濯でございます」	『日本近代文学館　館報』第二百八十四号、日本近代文学館（七月十五日）
〃	「スリーAの上野」	『ひろろ』Vol.44、平凡社（八月二十一日）

〃	「古代編　やまとうた誕生！　万葉集と王朝のうたびと達（特集いまこそ読みたい新・三十六歌仙やまとうた二〇〇〇年古今オールスタース決定戦！）」	『芸術新潮』第六十九巻第九号、新潮社（九月二十五日）
〃	「日本型資本主義　長い歴史の中で生きている」	西日本新聞（九月九日朝刊）
〃	「正倉院展　情熱の赤　恋する乙女心　錦紫綾紅臈纈絶間縫裳」	読売新聞（十月二十九日夕刊）
〃	「万葉びとの生き方」	山陰中央新報（十一月二十一日）
二〇一九年	「悠久の時を生きる——新年を迎えて——」	週刊『世界と日本』第千二百四十号、内外ニュース（一月七日）
〃	「死を巡る体験から黄泉行神話を考える」	『古代学研究所紀要』第二十七号、明治大学日本古代学研究所（二月二十五日）
〃	「新元号に思う『令和』に込められた平和への思い」	西日本新聞（四月二日朝刊）
〃	「世界に開かれた万葉集の時代『令和』文化模索の世へのあこがれ」	朝日新聞（四月四日朝刊）
〃	「めでたい月　気候もよく」	読売新聞（四月四日夕刊）
〃	「新元号『令和』に寄せて」	奈良新聞（四月五日朝刊）
〃	「令和に学ぶ　万葉びとの和魂漢才」	産経新聞（四月八日朝刊）
〃	「九州人は濃い——」	『よむカステラ』第二十五号、松翁軒（五月）
〃	「天皇・民　和歌が結んだ絆」	日本経済新聞（五月一日朝刊）
〃	「『令和』の出典をめぐる」	『中央公論』第百三十三巻第六号、中央公論新社（五月十日）
〃	「『令和』の歌を読む」	毎日新聞（五月十一日夕刊）

二〇一九年	「万葉学徒の想い——序文は序文」	週刊『世界と日本』第二百五十二号、内外 ニュース（七月一日）
〃	「奈良・宮滝遺跡建物跡発掘に寄せて」	朝日新聞（七月三十一日夕刊）
〃	「書物逍遙 万葉学徒のフランス文学レポート」	『ミネルヴァ通信「究」』第百号、ミネルヴァ 書房（七月一日）
〃	「緑風エッセイ『歌の国・日本』」	週刊『世界と日本』第二百五十五号、内外 ニュース（八月十二日）
〃	「古典学習今昔物語」	『短歌』九月号、角川文化振興財団（八月 二十五日）
〃	「正倉院展に寄せて 天平美人装い競演」	読売新聞（十月十日夕刊）
〃	「地方を元気にする『令和』の時代」	『天地人』自立九州』令和特別号、九州の 自立を考える会（十二月）
二〇二〇年	「新元号『令和』について（特集いわ）」	『高翔』自動車技術開闢東支部報』第七十三号、 自動車技術会関東支部（一月一日）
〃	「解説」梓澤要『万葉恋づくし』	新潮社（二月一日）
〃	「新春エッセイ」私の薦める三冊」 山上憶良の問い掛け」	週刊『世界と日本』第二百六十四号、内外 ニュース（二月六日）
〃	「随筆喫茶 大宰府政庁復原の初夢」	西日本新聞（二月十二日朝刊）
〃	「胸襟を開く」	読売新聞（二月十七日夕刊）
〃	「朗々と響き渡る夢空間」	読売新聞（二月二十二日朝刊）
〃	「奈良大学理事長市川良哉先生を偲びて」	奈良新聞（二月二十六日）
〃	「日本思想史事典編集委員会編『日本思想史事典』	分担執筆、丸善出版（五月二日）
〃	「オピニオン 元号は願いのかたちだ」	西日本新聞（五月三日）

〃	「こもれば 四十年のご無沙汰」	神社新報（五月十一日）
〃	「コロナ禍 お願い文化の光と影」	朝日新聞（六月四日夕刊）
〃	「腰田低男氏の人生」	『群像』第七十五巻第七号、講談社（七月一日）
〃	「緑風エッセイ あかねさす紫草野行き」	週刊『世界と日本』第二百七十九号、内外 ニュース（八月二十四日）
〃	「第六十八回日本エッセイスト・クラブ賞受賞のことは ありがと うございました」	『日本エッセイスト・クラブ会報』二〇二〇年 秋号、日本エッセイスト・クラブ（九月三十日）
〃	「万葉びとの橘―菓子の上―」	『vesta』第百二十号、味の素食の文化セ ンター（十一月一日）
二〇二二年	「経験を知恵にする教育を」	月刊『日本教育』第五百四号、日本教育会（一 月一日）
〃	「生まれながらに恩を受けている私」	『大望』第六百二十六号、天理教青年会本部（二 月一日）

※未刊の辞典に『飛鳥大辞典』（東京堂出版）がある。「犬養孝」「安騎野」「弓月が岳」などの十二項目を執筆、二〇〇九年春提出済、受理。まだ、刊行のメドは立っていない。

原作・脚本を担当したオペラ、朗読劇の上演実績

二〇〇九年	遙かなる時を越えて「オペラ『遣唐使く阿倍仲麻呂く』」第一幕・第二幕	〈六月十日、主催：ROLEX TIME DAY、協力：法相宗大本山薬師寺、場所：薬師寺〉
二〇一〇年	遙かなる時を越えて「オペラ『遣唐使く阿倍仲麻呂く』」第三幕・第四幕	〈六月十日、主催：ROLEX TIME DAY、協力：法相宗大本山薬師寺、場所：薬師寺〉
〃	遙かなる時を越えて「オペラ『遣唐使く阿倍仲麻呂く』全四幕完全版」	〈十月二日、主催：財団法人奈良市文化振興センター（なら二〇〇〇年会館）、場所：なら二〇〇〇年会館〉
二〇一一年	東京藝術大学 平山郁夫先生一周忌追悼「オペラ 遣唐使く阿倍仲麻呂く全四幕」	〈二月十一日、十二日、制作：平山郁夫先生一周忌追悼・オペラ《遣唐使》公演実行委員会、東京藝術大学演奏芸術センター、場所：東京藝術大学奏楽堂、主催：東京藝術大学〉
〃	万葉オペラ・ラボ公演第一回万葉朗読劇「山上憶良と遣唐使く好去好来のうた」	〈十一月八日、九日、場所：なら二〇〇〇年会館〉
〃	絵本『よしのよく見よ』完成披露講演と朗読会	〈十二月十八日、朗読：松坂慶子、場所：吉野町中央公民館図書閲覧室〉
二〇一二年	朗読劇『額田王と吉野』	〈十一月十一日、近畿日本鉄道イベント＆ハイキング、朗読：松坂慶子、場所：吉野町中央公民館〉
二〇一三年	万葉オペラ・ラボ公演第二回オペラ『魔笛』翻案「猿沢ノ池不思議ノ横笛——モーツァルト先生に捧ぐ」	〈二月十日、十一日、場所：なら二〇〇〇年会館〉
〃	朗読劇『額田王と吉野』	〈七月二十七日、吉野のさくら保全プロジェクト、朗読：松坂慶子、制作：書肆アルス、場所：有楽町よみうりホール〉

〃	万葉篝火朗読会「よしのよく見よ」	〈九月二十九日、吉野のさくら保全プロジェクト、朗読：松坂慶子、場所：宮滝河川交流センター〉
〃	朗読劇「額田王と吉野」	〈十一月二十五日、「徹子の部屋」コンサート、朗読：松坂慶子、制作：書肆アルス、場所：有楽町国際フォーラム〉
〃	朗読劇「額田王と吉野」	〈十二月九日、「徹子の部屋」コンサート、朗読：松坂慶子、制作：書肆アルス、場所：フェスティバルホール〉
二〇一四年	万葉オペラ・ラボ公演第三回万葉オペラ『風の森・風の饗宴』	〈二月二十二日、二十三日、場所：なら二〇〇〇年会館〉
〃	朗読劇「宴の花」	〈五月二十九日、朗読：松坂慶子、制作：書肆アルス、場所：ソウル／韓国中央大学校国際会議室〉
〃	朗読劇「額田王と吉野」	〈六月二十九日、能と吉野、朗読：松坂慶子、制作：書肆アルス、場所：豊田市能楽堂コンサートホール〉
〃	朗読劇「額田王と吉野」	〈十月二十五日、ホームカミングデー、朗読：松坂慶子、制作：書肆アルス、場所：和敬塾本部棟講堂〉
二〇一五年	万葉オペラ・ラボ公演第四回オペラ『魔笛』翻案「猿沢ノ池不思議ノ横笛——モーツァルト先生に捧ぐ」	〈一月十一日、十二日、場所：なら二〇〇〇年会館〉
〃	「古代の文化交流く琴とうたと」	〈七月四日、朗読：松坂慶子、場所：吉野町中央公民館〉
〃	「宴の花」	〈七月五日、朗読：松坂慶子、制作：書肆アルス、場所：万葉文化館〉

二〇一五年	朗読劇「海と雲と月と星と」	〈十月三十日、朗読…松坂慶子、制作…書肆アルス、場所…ハワイ／ハワイ大学〉
二〇一六年	万葉オペラ・ラボ公演第五回「万葉オペラ・ラボ スペシャルコンサート」 「遣唐使物語への道」	〈一月十日、場所…なら二〇〇年会館〉
〃	朗読劇「額田王と吉野」	〈五月二十五日、朗読…松坂慶子、制作…書肆アルス、場所…テジョン／ハンナム大學校文化大学創意ホール〉
〃	朗読劇「額田王と吉野」	〈五月二十六日、朗読…松坂慶子、制作…書肆アルス、場所…プサン／釜山外国語大學校D110教室〉
〃	万葉オペラ・ラボ公演第六回「万葉オペラ『遣唐使物語』名も無き民へのオマージュ」	〈十月一日、二日、場所…なら二〇〇年会館〉
二〇一七年	万葉オペラ・ラボ公演第七回「万葉オペラ・ガラコンサート」 「続・遣唐使物語」 「学びて時にこれを習う」	〈九月三十日、場所…なら二〇〇年会館〉
〃	全幕物「宴の花」	〈十一月十二日、朗読…松坂慶子、制作…書肆アルス、場所…ソウル／国立劇場〉
〃	「宴の花」第二幕	〈十一月十三日、朗読…松坂慶子、制作…書肆アルス、場所…ソウル／仁川大学〉
二〇一八年	「あさくら天智天皇ものがたり」 「宴の花」	〈九月十五日、朗読…松坂慶子、制作…書肆アルス、場所…朝倉市／朝倉地域生涯学習センターホール〉
二〇一九年	万葉オペラ・ラボ公演なら二〇〇年会館開館二十周年記念第八回「万葉オペラ『遣唐使 阿倍仲麻呂の夢』東アジアを駆け抜けた風の男」	〈二月十一日、場所…なら二〇〇年会館〉

〃	朗読と合唱による記紀・万葉の新作公演『言霊の旅―はじまりのときへ―』	〈三月九日、主催…『言霊の旅―はじまりのときへ―』公演実行委員会、場所…なら二〇〇年会館、後援…奈良県、奈良県教育委員会、奈良市、奈良市教育委員会〉
〃	朗読劇「梅薫る庭のしあわせ」	〈六月十二日、朗読…松坂慶子、制作…書肆アルス、場所…ソウル／シンシル大学〉
〃	朗読劇「梅薫る庭のしあわせ」	〈六月十二日、朗読…松坂慶子、制作…書肆アルス、場所…ソウル／中央大学〉

※オペラや朗読劇は、作者のみならず、作曲家、演奏家、演出家を含めた人びとの協力があつてこそ成り立つ。だから、すべての人に感謝だ。なかでも、山田法胤先生、三原剛先生、松坂慶子先生の尽力は大きかった。さらには、万葉オペラ・ラボ、奈良百年会館、書肆アルス、記紀・万葉合唱団、大阪芸術大学、東京藝術大学の各団体の力が一つになったことにも、感謝したい。至福の時をありがとございました。

万葉オペラ 風の森、風の饗宴

原作・脚本 上野誠

日本ロレックスの支援のもと、オペラの脚本を執筆できたことは、望外の喜びであった。作品のなかから、この本に一作を、ということになれば、これになる。

●あらすじ

下野誠教授の思い、そして妄想

万葉学者の下野誠教授も、今日で停年六十歳となった下野教授は、退職する二月二十三日の朝、その日も、いつものように研究室にやって来た。今日は、最終講義の日なのだ。教授の胸裏には四十年の歳月が走馬灯のように流れる。しかし、教授の脳裏には、ほんとうに自分は、万葉学者になりたかったのか—という疑問が湧いてくるのであった。そして、自分は、本来、風のように、風来坊のように生きたかったのではないかと、夢想しはじめる。

風、風、風、どこからともなくやって来て、どこかへともなく消えてゆく風。ひよっとしたら、人間の命も、わかるのは「今生」つまり生きている間だけで、「前世」も「来世」もわからない。だとしたら、人も本来、風のように生きるべきではないかと思うに至ったのである。自分も風になれば……、と。

下野教授の妄想は、もう止まらない。自分が四十年も研究してきた『万葉集』に登場する風たちが、本の中から現われて、自らを語り出すのであった。われこそは、万葉の風なりと、風の女王なりと……。かくして、はじまる万葉、風の物語。

* * *

年に一度、大和を吹く風たちが集って、風たちの大宴会の日というものがある。通常、人の目には見えないけれど。

その宴会の場所こそ風の森だ。飲めや歌えの風たちの饗宴。それは、秋風の吹く一日、風の森というところで密かに行われる大宴会である。

風たちは、ここで我こそは風の王者、私こそ風の女王と、その覇を競い合う。その呼び物はなんといっても風合戦。力自慢の風たちの戦いだ。そして、次に風の女神を決める歌合戦がはじまる。

我こそは明日香の風だ。我こそは奈良の都の風、また我こそは生駒の風。いや、泊瀬の風もここに在るぞと、風たちは覇

を競い合う。大和の風の王者を決めるのだ。しかし、なかなか勝負はつかない。そのうち、風の女王を決める歌合戦も始まる。

まず、恋はときめきだと、ときめき風が現れて恋のときめきを歌う。一同はうっとり。皆は口々に「彼女こそ女王」と言い合う。

そこに現れたのはうらみ風。うらみ風は、恋はそんな甘いもんじゃないよと、自らの恋の悩みをせつせつと歌う。一同の同情は一心にうらみ風に集まる。

それも束の間、そこにひとりの老婆の風が現れる。なにやら、人を怨むというよりも、その怨みさえも超越した表情。無表情だ。そして、老婆も歌い出す。男ってえものは、みんな同じさと。若い女を好むもんだと。一同は老婆のことを憐れんだ。いったい、誰が、風の女王なのか。こうして、覇を競う風たちの饗宴も終わりに近づいていた。夜明けは近い。風たちは、互いの思いを述べ合い、大団円を迎える。

さて、下野教授の最終講義はいかなることに——。

●使用する万葉歌

君待つと

アナタヲ待つツテ

我が恋ひ居れば

ワタシガ恋イ慕ツテイルト

我が屋戸の

ワタシノ家ノ

簾動かし

スダレヲ動カス秋ノ風ガ

秋の風吹く

——デモ、ソレハ風ダツタ

(ソコニハ、タダ風ガ

吹イテイルダケ)

巻四の四八八

よしゑやし

エエマヨ

恋ひじとすれど

モウ恋ナドスルモノカ!

ト思ツテモ……

秋風の

秋風ノ

寒く吹く夜は

寒ク吹ク夜ダケハ

君をしる思ふ

——アナタノコトヲ思ツテシマウ

(ソコニ私デス)

巻十の二三〇一

古衣ふるころも

古イ衣ヲネ

打棄うつつる人は

ポイツト捨テ去ルヨウナ人ハネ

秋風の

秋風ノ

立ち来る時に

立ち来ル時ニネ

物思ふものぞ

——物思イナスルモンデスヨ—ダ

(ザマアミロ)

巻十一の二六二六

●出演者

下野誠教授……今日、定年で最終講義をする万葉学者
秘書A・B……謹厳、実直な有能秘書

校内放送の声……事務的な声で

タミーノ『魔笛』……パロディックに

パパゲーノ『魔笛』……パロディックに

第一の侍女『魔笛』……パロディックに

第二の侍女『魔笛』……パロディックに

第三の侍女『魔笛』……パロディックに

子どもA……無邪気に、かつ聡明に

子どもB……無邪気に、かつ聡明に

子どもたち全員……無邪気に、かつ聡明に

明日香風……気高き男、貴公子の体。貴族の姿。きつちりとした姿

明日香風のおとりまきの風(複数)……たいこもち風

春日風……都のだて男、おしゅれ。明日香風よりおしゅれに

春日風のおとりまきの風(複数)……たいこもち風

生駒風……マツチョで武の男、剛の人。身分は低くてよい

生駒風のおとりまきの風(複数)……たいこもち風

泊瀬風……存在感が薄い男が、急に自己主張する感じ

泊瀬風のおとりまきの風(複数)……たいこもち風

ときめき風……額田王をイメージ、清廉だが陰のある人。

やはり、ゴージャスな飛鳥衣装

ときめき風のおとりまきの風(複数)……たいこもち風

うらみ風……妖艶な美女、マダム風。現代衣装でもよいが、

一考の余地あり

うらみ風のおとりまきの風(複数)……たいこもち風

風の老婆……落ちぶれてはいるが、かつては美貌でならし

た気高き老女。この表現は難しいが、衣装さんよろしく

風たち……クロスで表現か。各風のおとりまきが、全体の

合唱隊になる感じで

かけ声……舞台ソデ二人、客席三人、五人くらいを

想定している。演出は、おまかせ

風の森の饗宴の司会者……道化系

第一幕

ンポン。

暗転。序曲……昨年の『魔笛』を使う。
そのまま。ただし、『魔笛』の序曲は二幕
にも使用するので、無しにしてもよいし、
アレンジを変えてもよい。

下野教授入場(演奏終わりに、舞台へ)

下野教授

五十年、五十年、半世紀……。

今日で私は、この学園を去る。退職だ。
五十年の歳月が長いか短いかわからず、それは、
まさに哲学的問題だ。

はたして、時間というものは、長い短
いを比較できるのか。それも、問題だ。

すばらしい芝居は、二時間が一瞬にし
て終わってしまうが、たいくつな芝居は、
見ていると、百年間、奴隷として働かさ
れるように感じられる。だとしたら、時
間というものは、主観によって形成され
るものだ。客観的な時間などというもの
はない。時間における主観と客観、これ
はひとつとして、人生の最大の問題かも
しれない。それを、退職の日に気づくと

は……。

ただし、教養ある観客は、役者たちに
遠慮して、居眠りなんかしないが……(こ
こは、観客席を見つつ、ちよつとユーモ
ラスに)。

例えば、夢の中の時間、人間は一瞬に
して、地の果てまでもゆくことができ、
一瞬にして、五十年も若返ることができ
る。

そうだ、この私も、この学園の入学試
験を受けた時は、若かった。しかし、私
はなぜ、『万葉集』の研究者になったの
だらう。なぜ、辛気くさい国文学者など
になったのか。いや、いや、なり果てた
のか。

セ・〇・キ・シ・シカ・〇、カ・キ・
ク・ク・ケ・ケ、活用の勉強だ。ほとん
どは教室から抜け出して、クラブ、いや
ディスコ。いやあ、ゴーゴー喫茶。あー
いや、ダンスホールに行きたかった。学
生運動をやってもよかったんだ。どうし
て、デバ棒を振り回さなかったのか。い
や、それよりも、風に髪を靡かせる女子
学生と、デートしたかった。

舞台の左か右に、一台の机、そして椅子。
机の上にはスタンドのみ。

開演五分前となって、校内放送が流れる。

校内放送の声

ピンポンパンポン……本日、十四時半
より、文学部、三〇一教室において、本
学教授・下野誠教授の退職記念特別最終
講義が行われます。本日については、受
講生以外の方も、自由に講義を聴くこと
が出来ますので、先生の最終講義を、是
非お聴きください。なお、本日は、学外
の方も、聴講が許されます。ピンポンパ

しかし、私は、なぜか、教室にいた。教室、それは学問のための牢獄。でも、どうして、私は、その牢獄から抜け出そうとしなかったのか。教室には、鍵はかけられていなかったはずなのに。

なんとなく、大学に残り、ある時から、教師になった。いや、なっていた。そして、学生たちに、セ・〇・キ・シ・シカ・〇、カ・キ・ク・ク・ケ・ケと教える側になっていた。

若いころ、年輩いた教授たちの、あの長つたらしいお説教が大嫌いで大嫌いでも、たまらなかったのに、いつしか自分も、くだらないお説教をしていた。いや、説教を垂れていた。

ほんとうに、私は万葉学者になるべきだったのか。教室を抜け出して……風のように遊んでもよかったはず。風のように遊びたかった（ここは、タメを作ってゆつくりと）。

秘書二人登場（二人はスケジュール表を持っていて。ここは、有能秘書がまくし立てる感じで。AとBでかけあいながら、テンポアップしてゆく）

つまり……。

秘書A B つまり……。

下野教授 今日が、最後だということだ。つまり、予定は予定にして、未定にして、決定にあらず。したがって、すべてをキャンセルする。

秘書A すべて……と言われましても。

下野教授 すべてだ。全部。すべてだ。

秘書B すべて……（不思議そうに）。

下野教授 申し訳ないが、今日は研究室にひとりにもしてもらう。来客もお断り。電話も取り次がないように。会議を減らす対策会議なら、ないほうがよいはずだ。最終講義だけは、行う予定だが。

秘書A 電話もですか……。例の件もありますのに。

下野教授 すべてキャンセル、電話も……。

秘書A B はっ、はい。わかりました（こゝで帰る、四、五歩歩む）。

下野教授 それに……。秘書A B それに……。不思議そうにふりかえる）。

下野教授 サラダは、今日は、最初ではなく、最後に食べる。

秘書A B 下野教授、本日のスケジュールを申し上げます。

秘書A 九時三十分から十時二十五分まで、文学部教授会。

秘書B 休憩の五分間の間に、文部科学省の大学局長に電話をかけて下さい。例の件です。

秘書A 十時三十分から十一時五十分まで、会議を減らすための対策会議のため予備会議があります（ここは、早口だがわかりやすく）。

秘書B 十一時五十分、学部長から、お電話がかかってきます。例の件です。

秘書A 本日は、お昼はかつ丼、ただし、脂身のないヒレ肉です。それにヨーグルト、野菜サラダで、八五三キロカロリー。奥様から、野菜サラダから先に食べていただくように、との指示が出ております。秘書B たいへん申し訳ありませんが、今日のランチは、留学生との懇談会も兼ねておりまして……。そして、奥様からの伝言で、サラダから先に食べたかどうか、一応、電話を入れて下さいとのこと。それに、例の件も。

秘書A 十三時から、角川学芸出版、講

下野教授のモノローグがはじまる。

下野教授

「自由時間」、聞いて呆れる！ 本来、人生の時間はすべて「自由時間」のはず。けれど人の人たるものは、人と生き、社会と生きる動物なのだ。

だから、私は教室という名の学問の牢獄から抜け出さなかった。そして、人は生きてゆくためという理由によって、時間の牢獄から、抜け出せないでいるのだ。

ただし、ただし……その牢獄から、こっそりと抜け出す方法が、じつは二つだけあるのを、ご存知か？ まるで、風のよう……抜け出す方法が二つだけある。この二つは、二つにして一つ、一つにして二つ。

一つは、心の中で想像すること。それだけは、誰にも止められない。

二つめは、夢を見ること。私の夢を、他人が見ることはできない。

会議を減らすための会議の予備会議。その議事録作成。そんなのは、やめた。やめた。すべては、キャンセル。今日から、私は、時間という牢獄から抜け出す。

談社、小学館との出版打ち合わせ。その時に、今後二年間の原稿執筆計画を出していたことになっております。その際、例の件もよろしくお伝え下さい。

秘書B 十三時五十五分から五分間は、ラジオ体操をしていただきます。ただし、本日は第二です。そして、会議を減らすための対策会議の予備会議の議事録を作成していただきます。それに、例の件が……（いちばん早いテンポ）。

秘書A そして、そして……（こゝで、急にゆつくりになる）

下野教授 そして、どうした。電話か、例の件か。

秘書B 十四時半から、先生の最終講義です。

下野教授 そのあとは……

秘書A そのあとは、……何もありません。スケジュール表には、ただ、自由時間と書いてあります。

秘書A B 以上が、本日のスケジュールです。どうなさいますか。

下野教授 君たち、私は、今日をもって退職する。わかっているね。最終講義。

これまで、私は『万葉集』を研究してきた。でも、よく考えてみると、歌を楽しむ、万葉びとと遊ぶことなど、してこなかった。『論語』読みの『論語』知らず。これから、私は……万葉の風になる（こゝはタメを作って）。

絶妙の間をとって、暗転。下野教授、退場。舞台上の机と椅子、スタンドを撤去する。

第二幕

舞台が明るくなり、『魔笛』と同じように、タミーノが登場する。

タミーノ

助けて、助けて、あー、助けを助けて、助けて、あー、助けを

迫り来るぞ 池の龍！

あの龍が 迫り来る

あの龍が 迫り来る

ああ、早く！ 誰か助けよ！

ああ、我を助けよ 早く助けよ！

三人の侍女が登場する。

三人の侍女 さあ、これでおだぶつ、

さあ！

空手の型のようなものをお揃いで見せる。

万歳！ 万歳！

我らの勝利だ！

この皇子の命を

助けし我れらが力

助けし我れらが力

第一の侍女 ああ、うるわしき男！

第二の侍女 うるわしき男ぶり

第三の侍女 ああ、ほんと！ 絵のよう

な

三人の侍女

我が心を捧げん

このうるわしき人に

さあ、お伝えしなくては

夜の女神様に（楽譜では、「月読」）

さあ、女神様に

さあ、女神様に

さあ、女神様に

第一の侍女 はい、私めがお残りいたしましよ

第二の侍女 いえ、私が見張りますわ

第三の侍女 いえ、私が守りますわ

第一の侍女 いえ、私だけ

第二の侍女 いえ、私だけ

第三の侍女 いえ、私だけ

第一の侍女 私が

第二の侍女 私が

第三の侍女 私が

第一の侍女 いえ

第一・二の侍女 いえ

三人の侍女 いえ！

第二の侍女 それとも！

第三の侍女 それとも！

第一の侍女 私が！

第二の侍女 行かねば！

第三の侍女 行かねば！

第一の侍女 ならぬか！

第三の侍女 嫌よ！

第二の侍女 嫌よ！

第一の侍女 嫌よ！

三人の侍女 私が行くのは嫌よ！

第一の侍女 え、いえ

第二・三の侍女 いえ、いえ！

第一の侍女 いえ、いえ

第二・三の侍女 いえ、いえ！

三人の侍女 だめよ それは

遠くから笛の音。

何だ、あの笛の音は。誰かがやって来る。

パバゲーノがやって来る。

パバゲーノ

おいらは名物男

氣のいい男 ホイサツサ！

誰にでも知られた 鳥を取る名人だ

餌を仕掛けておいて

笛をちよいと鳴らせば

（パバゲーノ笛の音）

鳥はみな俺の物 愉快な商売、大繁盛

おいらは名物男

氣のいい男 ホイサツサ！

誰にでも知られた 鳥を取る名人だ

娘に網張って どっさり捕らえよか

（パバゲーノ笛の音）

鳥かごに入れば どの娘もわしのも

誰か一人だけ残すの

第一の侍女 いえ、いえ

第二・三の侍女 いえ、いえ！

第一の侍女 いえ、いえ

第二・三の侍女 いえ、いえ！

三人の侍女 だめよ それは

だめよ それは

だめよ それは

第三の侍女 望みは唯一つ

第二の侍女 望みは唯一つ

第一の侍女 望みは唯一つ

第三の侍女 共に暮らしたいわ！

第二の侍女 共に暮らしたいわ！

第一の侍女 共に暮らしたいわ！

第三の侍女 この私めと 二人だけで

第二の侍女 この私めと 二人だけで

第一の侍女 この私めと 二人で二人で

でも、誰も行かないわ

第二の侍女 でも、誰も行かないわ

第三の侍女 でも、誰も行かないわ

第一の侍女 やはり諦めて

第二の侍女 やはり諦めて

第三の侍女 やはり諦めて、

やはり諦めて

三人の侍女 行きましよう

三人の侍女が去る。

タミーノ（氣がつく、びくびくしながら辺りを見回す）ここはどこだ。我は生きてあり。生きているんだ！ あの龍は、もういない。

さて、その娘たち
みなお砂糖とつかえて
一番可愛い娘に
それをみんなあげよ。
甘い口づけかわし
お楽しみはこれからだ。

（パパゲーノ笛の音）

その子がおねんねする時
そっと歌ってあげようよ

タミーノ　なんだ、お前さん！
パパゲーノ　なんだとは、なんだ。お前さん。

タミーノ　なんだとは、なんだとは、なんだ。お前さん？

パパゲーノ　ちょっと待て（ここは、相手に警告を発する感じ。もちろん大声）。
タミーノ　ちょっと待て……だと。

パパゲーノ　ちょっと待て。俺たち、間違っていないかあー。

タミーノ　間違っているって？

パパゲーノ　ここまでは、かのモーツァルトの名作、『魔笛』のはじまりになっているぞ。

タミーノ　昨年、奈良一〇〇年会館で、

翻案で上演された『魔笛』かあ。
パパゲーノ　だとしたら、俺もお前さんも、大変なことになるぞ。

タミーノ　大変なことって、どんなこと。パパゲーノ　どんなことも、そんなこともないよ（怯える感じで）。

タミーノ　何を怯えているんだ。

パパゲーノ　だってだよ。このまま、この舞台に立っていたら、二人ともザラストロの宮殿に連れてゆかれて、魔物たちや、モノスタスと戦うことになるんだぞ。

タミーノ　そんなこと、俺もまっぴらごめんだ！ あんなこと、二度としたくない！ よし、ここは風になって、逃げよう。

パパゲーノ　その通り、風になって逃げよう。三十六計、逃げるが勝ち。

三人の侍女が登場する。

三人の侍女　タミーノ、パパゲーノ（声をそろえて！ 咎める感じ）。

第一の侍女『魔笛』は、はじまったばかりよ。逃げるの。

第二の侍女　ちゃんと笛も、鈴もあるから大丈夫よ（諭す感じ）。

第三の侍女　あなたたち、結婚したくないの？（誘惑する感じ）

三人の侍女　戻りなさい。タミーノ、パパゲーノ（怒った感じ）。

パパゲーノ　逃げよう！

タミーノ　魔笛なんか、いらない！（逃げながら）

パパゲーノ　魔法の鈴なら、くれてやるよ！（逃げながら）

パパゲーノ・タミーノ　三十六計、逃げるが勝ち（たがいの目を見て、声を合わせて）

『魔笛』序曲が鳴り出す（ここは、逃走をイメージした、スピード感で）。タミーノとパパゲーノが逃げ去り、客席へ走り出す。

三人の侍女たちは、客席へタミーノとパパゲーノを追いかけ、見失う演出を現在考えていますが、おまかせします。

暗転。

この暗転の間に、舞台に書家が大書きした万葉歌が三首掲げられる。

序曲が鳴っている間に、舞台に子どもたちが入場。『魔笛』の序曲が終わる。

ここから舞台は、子どもたちによる、風の歌メドレー。間がもつように、お手玉などで遊ばせるのもよい。ただし、子どもたちの先生役は二名くらい必要か。長さも選曲もおまかせ。

メドレーの終わりに、息を切らせて、タミーノとパパゲーノが、舞台にやって来る。

パパゲーノ　よかったあ。

タミーノ　よかったなあー。ほんとうに、よかった。逃げられて。

パパゲーノ　ここはいいたい、どこなんだあー。

タミーノ　俺にもよく、わからん。しかし、いちおう、俺たちは風になって逃げたんだから、目的地を決めてはいけない

衣装は、『万葉集』の時代のものだぞ。

パパゲーノ　上野誠先生の台本だからなあー。やっぱり、『万葉集』かあー。

タミーノ　あたり前だろう。この劇場は、奈良一〇〇年会館だぞ。ここは、奈良県御所市の、風の森ということになっているんだ。

子どもA　じゃあ、あなたたちは、誰？
パパゲーノ　パパゲーノに（タミーノを指さす）。

タミーノ　タミーノだ。

子どもA　どこから来たの。

パパゲーノ　じつは、あのモーツァルトの名作『魔笛』という台本から、抜け出して、ここに来たんだ。

タミーノ　そのまま、『魔笛』に出ていると、こわくって、つらくって、ひもじくって、もう、それはそれは……大変なことになった。そんなこと、まっぴらごめんさあ。もう、付き合いきれないよお（肩を落とす感じで）。

舞台のソデから司会者登場。

タミーノとパパゲーノは、驚きながら見ている。

司会者 風だ。風だ。ここは大和の風の森。今宵は年に一度の風のお祭り。大宴会。さあ、さあ……。はじまるぞー。はじまるぞー（とにかく、楽しそうに）。

風の明日香風、春日風、生駒風、泊瀬風が登場。続いて、合唱隊入場。合唱隊は、私服か。ないし、天平衣装。

子どもたちは、風の明日香風、春日風、生駒風、泊瀬風の登場を拍手で迎える。

明日香風・春日風・生駒風・泊瀬風のアリア

明日香風 我こそは、我こそは、采女の袖吹き返す明日香風。

（観客席から「日本一」と声がかかる）

春日風 我こそは、我こそは、奈良の都の春日風。

（観客席から「待ってました」と声がかかる）

生駒風 我こそは、我こそは、生駒の風。

（観客席から「よつ、生駒風」と声がかかる）

泊瀬風 忘れられてはたまらない。我こそは、我こそは、泊瀬風。

（観客席から「色男」と声がかかる）

ここからは、入り乱れた感じで。合唱隊も合わせて。合唱隊は、明日香風、春日風、生駒風、泊瀬風の応援隊風にふるまう。

明日香風とその応援隊 明日香風、明日香風

春日風とその応援隊 春日風、春日風
生駒風とその応援隊 生駒風、生駒風
泊瀬風とその応援隊 泊瀬風、泊瀬風

全員合唱 我こそは大和の風の王者！
我こそは……。

（互いに力を見せ付けるように演出。繰り返して。リフレイン等はおまかせ）

互いに風たちが競い合うように自らの名前を連呼。声は重なり、右に左に動きつつ風たちが競い合う姿を演出。布で風を演

出してもよい。ここは、乱舞のイメージで。

春日風のアリア

天の原 振り仰ぐ山は 御蓋山——。
春日の風は、春日の風は
みやび風 みやび風——。
天の原 振り仰ぐ山は……

（と歌ったところで、もういちど、「天の原振り仰ぐ山は」と繰り返そうとするが、声が出なくなる。失速するイメージ。本人は、恥しがる感じで）

一同は、あわてた様子。そこに、明日香風が、春日風の肩を打って登場する（勝ち誇った微笑）。

明日香風のアリア

我こそは風の王者
我こそは大和の覇者
いざ競わん
我こそは風の王者
我こそは大和の覇者

いざ競わん
いざ競わん——

全員合唱

さあ、風の戦だ、風の合戦、風の戦い——

今、今はじまる。

王者は誰ぞ！ 王者は誰ぞ！

我こそは、我こそは——。

生駒風 我こそは、我こそは、難波から吹く風ぞ。生駒風。生駒風。

全員合唱 我こそは、我こそは——。

泊瀬風 我こそは、我こそは、三輪の社を吹く風ぞ。泊瀬風。泊瀬風。

全員合唱 こそは、我こそは——。

春日風 何をいう、何をいう。万葉の風は、みやび風。春日の風こそ、みやび風。

全員合唱

我こそは、我こそは……。

我こそは、我こそは……。

王者、王者、風の王者。

王者は誰ぞ！

我こそは、我こそは……。

我こそは、我こそは……。

王者、王者、風の王者。

リフレインなど、おまかせ。

全員 王者は誰ぞ！

（ここは、全員そろったセリフで決めます。真空状態つくる）

再び音楽がはじまる。「我こそは風の王者、大和の覇者」と風たちが叫び競いつつ、明日香風、春日風、生駒風、泊瀬風と合唱隊は、舞台からハケてゆく。

司会者

さあ、さあ、お次は、恋の歌合戦！

はじまり、はじまり。

声自慢の風の女神たちの登場だ。

まずは、人の心をときめかす恋の風。

と、思ったが……子どもたちには、まだ聞かせられない恋の話だ。

子どもは、帰った、帰った。

子どもたちへえー、聴きたい。へえー、聴きたいよー。

司会者 だめだ、だめだ。

子どもたちは、不満げに舞台からハケてゆく。

タミーノとパペゲーノは、互いの驚きを確認するように、相手を見たりしながら、なりゆきを好奇心の目で見える。

司会者 さあ、お待たせ。

ときめき風さん、ご登場——
（ここは強調して）

ときめき風の登場。ときめき風のおとりまきも、いっしょに登場。複数。

ときめき風 恋はときめき

風で、うつとりさせて下さい）
恋はときめく（決めゼリフ

ときめき風のアリア（美声活かす若い女の恋）

あなたを待つて
あなたを待つて
待ちくたびれたその時に

簾が動いた

——ああ、あなたた……

……でも、それは風

ただ風が吹いているだけ

ただ風が吹いているだけ

——それが私の恋

ときめき風のARIAを聴いていたおとり
まきたちが、互いに「彼女こそ風の女王」
「彼女こそ風の女王」と呼びながら、左右
にはけてゆく。

ときめき風も、ともにはける。

舞台ソデから声がかかる。

「恋はときめきだけじゃない。うらむ恋
もある」

司会者 それじゃあ、うらみ風さんにも
登場してもらいましょう（アドリブ入れ
て）。

うらみ風の登場。うらみ風のおとりまき
も登場。複数

うらみ風のARIA

（演歌のイメージ。難しければ、演者・演
出家相談の上、別案可。妖艶な女）

「恋はときめき」なんて子供の恋さ

恋はなやみ、時にうらむ！

ええ、ままよ

ええ、ままよ

しかたない、しかたない

あんな男に惚れたのだから

しかたない、しかたない

あんな男に惚れたのだから

でもね（セリフ調がよい）

秋風が寒く吹く夜だけは

あなたのことを……

あなたのことを……

思い出す——

……それが私の恋 それこそ私の恋

うらみ風のARIAを聴いていたおとりま
きたちが、互いに「かわいそう、かわい
そう、彼女こそ風の女王」と呼ぶ。

舞台ソデから声がかかる。「今年の女王は、

うらみ風に決定。うらみ風が女王だ！」
すると、うらみ風と、おとりまきが、ガッ
ツポーズ。

司会者 これで、本日の歌合戦は、終了
です。みなさま、お気をつけてお帰り下
さい（アドリブ入れてよい）。

うらみ風たちが帰ろうとするが、そこへ、
風の老婆の登場。ここは、杖をついて、た
だ一人で登場。しわがれ声で。皆は、驚
きの表情。

風の老婆 勝負はまだだ。決めるのは早
い。こんな婆々でも恋はできる。「うら
む恋」。そんな恋は小娘の恋さ。大人の
恋はこんな恋。

風の老婆のARIA（歌い出すと、老婆は、
ピンと立ち、杖を棄てる。シャンソン風、
越路吹雪のように）

しかたないわよ、

私はボロギレ、私は古着

しかたないわよ、

ときめき風と並び立つ（ここはかつこよ
く朗読。ここも朗読者の感性が大切）。

うらみ風

よしゑやし

恋ひじとすれど

秋風の

寒く吹く夜は

君をしそ思ふ

秋風の

寒く吹く夜は

君をしそ思ふ

風の老婆が登場する。舞台中心に、ときめ
き風とうらみ風と並び立つ（ここは、さ
らにかつこよく朗読。朗読者の感性を大
切にして）。

風の老婆

古衣

打棄つる人は

秋風の

立ち来る時に

物思ふものぞ

秋風の

風の老婆のARIAにさそわれて、ときめ
き風とおとりまきたちも、舞台の左右か
ら登場。

互いに「そんな男は、呪われろ、そんな
男は呪われろ」と呼びながら、ときめき風、

うらみ風、おとりまきたちは左右にはけ
る。

風の老婆もともにはける。暗転。

*

ときめき風が登場する。舞台中央に立つ
（ここはかつこよく朗読。読み方は、朗読
者の感性で）。

ときめき風

君待つと

我が恋ひ居れば

我が屋戸の

簾動かし

秋の風吹く

我が屋戸の

簾動かし

秋の風吹く

続いて、うらみ風が登場する。舞台中心に、

立ち来る時に
物思ふものぞ

三人の朗読に感動した、風の森のすべての人びとが、感激を体全身で表しながら、三人のもとに集まってくる。そして、整列してゆく。

この間の大団円までのつなぎは、間奏を入れるなどして、うまくつないで下さい。そして大団円。全員、合唱。

明日香風 風を感じて大和に生きる。明日香風は、明日香に吹く風。

春日風 春日風は、春日に吹く風。

生駒風 生駒風は、生駒に吹く風。

泊瀬風 泊瀬風は、泊瀬に吹く風。

ときめき風 風は恋する、恋はときめき。

うらみ風 風も恋する、恋になやむ。

風の老婆 風も恋する、風も恋する。

全員合唱

風になれー。風になれー。

かけぬけよー。かけぬけよー。

走り出せー。走り出せー。

今日のことは、今日の風が、明日のことは、明日の風が、決めるー。

風になれー。風になれー。

かけぬけよー。かけぬけよー。

走り出せー。走り出せー。

今日のことは、今日の風が、明日のことは、明日の風が、決めるー。

決めるー。

高らかにフィナーレ。そこに秘書Aがあらわて、駆け込んでくる。合唱の人に、問いかける感じで。

秘書A ここに、下野教授は来ませんでしたか。十四時三十分から、三〇一教室で、最終講義なのに、どこにもいないんです。誰か、誰か知りませんかあー。知りませんかあー（少し、アドリブを入れて、客席を沸かせてください）。

続いて、秘書Bがまた息を切らせて駆け

込んでくる。

秘書B けっ、研究室に、こんな置き手紙が……。

秘書A おきてがみ——

秘書Bが、手紙を取り出す。手紙を、よく見えるように。「風のたより」と書いてある。

秘書AB 置き手紙には、「風のたより」と書いてあります。

秘書B（ゆっくり、「風のたより」を読み上げる）

「今日の最終講義は、中止です。これから、風に髪を靡かせる女子大学生と失踪します。第二の人生は、浜畑賢吉のような、立派な俳優になります。下野誠」（ここは、タメを作って）

暗転（オチがあつて、すぐに暗転。と同時にチャイムが鳴る）。

ピンポンパンポン。本日の最終講義は、無期延期となりました。開催日時は、風任せだそうです。ピンポンパンポン（ここで会場から、「よおっ！ まぼろしの最終講義！」と声が掛かる。歌舞伎風）

明かりがついて、カーテンコール！（演出で、『魔笛』序曲か、フィナーレを少しやってもよい。演出はおまかせ）

（初演 二〇一四年二月二十二日、二十三日）

謝辞となるあとがき

あたりまえのことだけれど、人は死ぬ。

取るに足りない自らの文業など一書にして残す必要もないと思うが、私は文を書くことで、職を得、世の中を渡ってきた。死んで残るものは、その取るに足りない文だけなのだ。それに、家族をはじめとする多くの人びとに迷惑をかけながら、文を草してきたのも、いつわらざる事実である。

年の祝いや、年忌に配布する記念本のことを人呼んで「饅頭本」という。つまり、式典の土産に参会者に配る本のことなのだ。本書は、まごうことなき「饅頭本」で、上梓の翌日に死んでもかまわない、とさえ思っている（もちろん、長生きはしたいが）。

コロナ禍がなければ、格調高い最終講義を行ない、豚汁とぜんざいの盛宴を行なって、「饅頭本」を配る予定であった。コロナ禍のために最終講義も盛宴も、まぼろしに終わってしまったが、今、西日本新聞社の末崎光裕さんの手によって、ここに饅頭本だけが出版されようとしているのである。残念だが、ありがたいことだ。

著作目録と年譜については、「上野誠先生の還暦を祝う会」なる秘密結社が結成せられて、そ

の奇妙な会員諸氏が作成してくれた。はじめ私は、文献目録稿と年譜稿を見て、これを抜粋しようと思ったが、一つ一つの文章は、その時々自分の分身のごときもので、苦々しくもなつかしくなってしまうたのである。どうしても捨てられないのだ。ために、そのすべてを収載したいと思うようになった。

もちろん、遺漏はある。論文は百パーセントの収載率であるけれど、寄稿は約七割、放送関係は約三割でしかない、と思量される。しかし、このあたりが、今となつては限界点であろう。よくやってくれた。祝う会の諸君には、貴重な人生の時間を使わせてしまった、と思う。ありがとう。その上、一部の文献調査については、図書館学の嶋田学先生のお力を借りている。そうした人びとの真心がなければ、文献目録は出来なかった。ずばらな私には、到底できなかったことだ。奈良大学の卒業生に感謝、多謝、深謝。

明日からは、心を入れ替えて、勉学に励み、『万葉集』二十巻の注釈書を書きたいと考えているが、はて、どうしたものか――。

令和三年（二〇二二）三月末日

東京への荷造りをしつつ 上野誠記す

まぼろしの最終講義

発行日

二〇二二年三月吉日

著者

上野 誠

編者

上野誠先生の還暦を祝う会

上野誠ゼミナールまぼろば会

発行者

上野誠先生の還暦を祝う会

上野誠ゼミナールまぼろば会

造本設計

末崎光裕

本書の無断転写、転載、複写、データ配信は、
著作権法上の例外を除き禁じられています。

©Makoto Ueno 2021, Printed in Japan

